

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第206集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第37集

黒熊八幡遺跡

〈本文編〉

1996

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第206集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第37集

黒熊八幡遺跡

〈本文編〉

1996

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団



出土硯
(12・22・59・118住、遺構外)



遺構外 (第350図15)



36号住居跡 (第336図36住18)



遺構外 (第337図外108)



12号住居跡



15号住居跡



17号住居跡



23号住居跡



59号住居跡



114号住居跡



117号住居跡



118号住居跡



121号住居跡



29号住居跡 (第335图29住5-7)



44号住居跡 (第336图44住15)



148号土坑 (第337图148土4)



101号住居跡 (第338图101住11)



2号土坑 (第343图 2土1)



1号民家 (第339图 2·3)
1号溝 (第345图 1)



2号民家 (第341图 1-6)

序

西毛の鍋川流域は武蔵国から信濃国への交通の要路として早くから開けてきました。その要路に高速道の上信越自動車道が建設され、平成5年3月に藤岡市から長野県佐久市までが開通しました。この上信越自動車道の建設に伴い、数多くの埋蔵文化財が発掘調査され、記録保存されました。

高速道が通過する多野郡吉井町黒熊の八幡地区も、埋蔵文化財調査の対象となりました。当地区は、上毛三山を始め上信越国境の山々が一望できる景観の良き丘陵地であります。この八幡地区の東西に隣する中西・栗崎地区も埋蔵文化財調査が行われ、既に「黒熊中西遺跡(1)」「黒熊栗崎遺跡」の報告書3冊が刊行されております。黒熊中西遺跡では、平安時代の寺院跡・集落跡が、黒熊栗崎遺跡でも集落跡を中心とした内容で、両遺跡とも、丘陵上に展開する古代集落や寺院跡の様相を具体化させる良好な資料群を報告しています。

黒熊八幡遺跡も両遺跡に並び、丘陵上の古代集落跡を中心に、旧石器時代・縄文時代中期・近世～近代の民家跡等を調査いたしました。特に古代集落跡は、黒熊地区でも他を凌駕するほどの規模を誇り、貴重な遺物も豊富に出土しております。この度、これらの遺構・遺物の整理作業が終了したので、ここに「黒熊八幡遺跡」の報告書を刊行する運びになりました。本書をもって、上信越道黒熊地区の調査報告書は完了となります。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、日本道路公団東京第2建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、吉井町教育委員会、地元関係者等より種々のご援助、ご指導、ご協力を賜りました。ここに深甚なる感謝の意を表し、本報告書が本県の歴史を解明する資料として広く活用される事を願い序とします。

平成8年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

1. 本書は、関越自動車道上越線建設工事に伴い事前調査した、事業名称「栗崎八幡遺跡」の発掘調査報告書である。栗崎八幡遺跡は中西区・八幡区・栗崎区に分けられ、本書はそのうち八幡区を扱い、「黒熊八幡区」と呼称した。
2. 遺跡所在地 群馬県多野郡吉井町大字黒熊八幡・徳山
3. 事業主体 日本道路公団
4. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 平成元年7月1日～平成3年3月31日
6. 調査組織 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
事務担当 邊見長雄 松本浩一 田口紀雄 神保侑史 住谷 進 岩丸大作 笠原秀樹 小林昌嗣
須田朋子 吉田有光 柳岡善宏
関越自動車道上越線調査事務所
高橋一夫 片桐光一 大澤友治 徳江 紀 鬼形芳夫 宮川初太郎 国定 均
調査担当 平成元年度 須田 茂 山口逸弘 小林 徹
平成2年 須田 茂 鹿沼栄輔 小林 徹
平成2年度別班 右島和夫 田口正美 石守 晃 山口逸弘 小島達夫 井上昌美
7. 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
8. 整理期間 平成6年4月1日～平成7年3月31日
9. 整理組織財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
事務担当 中村英人 近藤 均 蜂巣 実 神保侑史 岸田治雄 斎藤俊一 国定 均 笠原秀樹
須田朋子 吉田有光 柳岡良安 高橋定義 大澤友治
整理担当 山口逸弘 高橋フジ子 長岡美和子 鈴木紀子 茂木良子 萩原由美子 加藤和子
阿久沢明子 猪熊洋子 中橋たみ子
機械実測 長沼久美子 伊藤淳子 岩瀬節子 千代谷和子 萩原光枝 立川千栄子
遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 邦一 土橋まり子 小村浩一 小沼恵子
10. 本書の編集は山口があたり、本文執筆は山口が行っている。
11. 本書使用の遺物実測図の一部は有限会社前橋文化財研究所に委託した。
12. 本書使用の遺構・遺物図面の一部のトレースは株式会社測研に委託した。
13. 調査資料は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
14. 発掘調査に際して吉井町教育委員会、及び地元関係者の多大なるご支援をいただいた。ここに感謝の意を表す次第である。

凡 例

1. 挿入図中使用した方位は真北である。

2. 遺構実測図は下記の縮尺で掲載した。それぞれ図中のスケールを参照されたい。



住居	1/60	配石遺構	1/60
住居のカマド	1/30	磁石建物	1/60
土坑	1/40	溝	1/100 1/60 1/40
墓塚	1/60	水田	1/300
掘立柱建物跡	1/20 1/40	民家	1/60 1/80 1/30

3. 遺物実測図は下記の縮尺率を基本に図示した。それぞれ図中に付記したスケールを参照されたい。

高、実測図で残存率1/2未満の個体については、口縁線の中心線右脇を離すこととし、さらに1/4未満の個体については両脇を離すことで標記した。

旧石器	4/5	砥石・こもあみ石等	1/4
縄文土器	1/3	瓦	1/6
縄文土器	1/1 1/3 1/4	金属器	1/3
奈良・平安時代土器	1/4	陶磁器	1/4
紡錘車・土錘	1/2	古銭	1/2

網がけの標記は下図の通りである。

灰釉陶器  (52) 油埋  (320)

4. 本書で使用した地図は以下の通りである。

国土地理院発行 1/50,000地形図「高崎」「富岡」(平成2年3・11月)

国土地理院発行 1/25,000地形図「高崎」「藤岡」(平成元年7・12月)

5. 遺物写真図版は、基本的に実測図の掲載順に整理し、実測図と対照出来るように図版右下に番号を記した。

6. 土器の色調の断定は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修「新版標準土色帖」1987年版を使用した。

7. 遺物の計測に際し、口径・底径・高さ・長さ・幅・厚は小数点第2位を四捨五入しcm単位で、重量は電磁式ばかり(EY-2000A)を使用し、小数点第2位までg単位で表示した。

8. 石器計測置表の「器種」の欄の略号は次のことを示す。

微 剝：微細刺痕のある剝片	尖：尖頭器
搔：搔器	打 斧：打製石斧
磨 斧：磨製石斧	加 剝：加工痕のある剝片
使 剝：使用痕のある剝片	

9. 石器計測置表の「石材」の欄の略号は次のことを示す。

変 安：変質安山岩	細 安：細安山岩
粗 安：粗粒安山岩	凝 砂：凝灰質砂岩
輝綠凝：輝綠凝灰岩	

目 次

口 絵
序 言
凡 例
抄 録

第 I 章	発掘調査の経過と調査方法	1
第 1 節	調査にいたる経過	1
第 2 節	発掘調査の経過	2
第 3 節	調査の方法	3
第 II 章	環 境	4
第 1 節	地理的環境	4
第 2 節	歴史的環境	6
第 III 章	検出された遺構と遺物	13
第 1 節	概 要	13
第 2 節	基本土層	18
第 3 節	旧石器時代	19
第 4 節	縄文時代	25
第 5 節	奈良・平安時代の住居跡	74
第 6 節	土 坑	425
第 7 節	掘立柱建物跡	464
第 8 節	配石遺構	470
第 9 節	磁石建物	477
第 10 節	溝	479
第 11 節	水 田 址	486
第 12 節	出土古瓦	488
第 13 節	出土金属器	504
第 14 節	近世～近代	511
第 15 節	遺構外出土遺物	527

写真図版

挿 図 目 次

第 1 図 路線図	1	第 41 図 1 号住居跡出土遺物	75
第 2 図 周辺の地形区分	5	第 42 図 2 号住居跡	76
第 3 図 周辺の移籍分布図	8	第 43 図 2 号住居跡出土遺物	76
第 4 図 黒熊八幡遺跡全体図	14	第 44 図 3 号住居跡	78
第 5 図 A・B・C 区遺構配置図	15	第 45 図 4 号住居跡	80
第 6 図 C・D 区遺構配置図	16	第 46 図 4 号住居跡出土遺物	80
第 7 図 C・D 区遺構配置図	17	第 47 図 5 号住居跡	81
第 8 図 基本土層	18	第 48 図 6 号住居跡	83
第 9 図 旧石器試掘坑配置図	20	第 49 図 7 号住居跡	85
第 10 図 旧石器西斜面調査区	21	第 50 図 7 号住居跡出土遺物	86
第 11 図 旧石器Ds-35Gr 周辺遺物出土位置	22	第 51 図 8 号住居跡	88
第 12 図 旧石器Ds-36Gr 遺物出土位置	23	第 52 図 8 号住居跡出土遺物	88
第 13 図 旧石器出土遺物	24	第 53 図 9 号住居跡	89
第 14 図 80 号住居跡	26	第 54 図 10 号住居跡	91
第 15 図 80 号住居跡出土遺物	27	第 55 図 11 号住居跡	92
第 16 図 81 号住居跡	29	第 56 図 11 号住居跡出土遺物	92
第 17 図 81 号住居跡出土遺物	29	第 57 図 12 号住居跡 (1)	94
第 18 図 82 号住居跡	30	第 58 図 12 号住居跡 (2)	95
第 19 図 82 号住居跡出土遺物 (1)	31	第 59 図 12 号住居跡出土遺物 (1)	96
第 20 図 82 号住居跡出土遺物 (2)	32	第 60 図 12 号住居跡出土遺物 (2)	97
第 21 図 83 号住居跡	35	第 61 図 12 号住居跡出土遺物 (3)	98
第 22 図 83 号住居跡出土遺物	36	第 62 図 13-29 号住居跡 (1)	103
第 23 図 84 号住居跡	39	第 63 図 13-29 号住居跡 (2)	104
第 24 図 84 号住居跡出土遺物 (1)	40	第 64 図 13-29 号住居跡 (3)	105
第 25 図 84 号住居跡出土遺物 (2)	41	第 65 図 13 号住居跡出土遺物 (1)	106
第 26 図 土坑出土遺物 (1)	45	第 66 図 13 号住居跡出土遺物 (2)	107
第 27 図 土坑出土遺物 (2)	46	第 67 図 29 号住居跡出土遺物	107
第 28 図 土坑出土遺物 (3)	47	第 68 図 14 号住居跡	111
第 29 図 埋設土器	53	第 69 図 15 号住居跡 (1)	113
第 30 図 埋設土器出土遺物	53	第 70 図 15 号住居跡 (2)	114
第 31 図 遺構外出土遺物 (1)	55	第 71 図 15 号住居跡出土遺物 (1)	115
第 32 図 遺構外出土遺物 (2)	56	第 72 図 15 号住居跡出土遺物 (2)	116
第 33 図 遺構外出土遺物 (3)	57	第 73 図 15 号住居跡出土遺物 (3)	117
第 34 図 遺構外出土遺物 (4)	58	第 74 図 17 号住居跡 (1)	121
第 35 図 遺構外出土遺物 (5)	59	第 75 図 17 号住居跡 (2)	122
第 36 図 遺構外出土遺物 (6)	60	第 76 図 17 号住居跡出土遺物 (1)	123
第 37 図 遺構外出土遺物 (7)	61	第 77 図 17 号住居跡出土遺物 (2)	124
第 38 図 遺構外出土遺物 (8)	62	第 78 図 17 号住居跡出土遺物 (3)	125
第 39 図 遺構外出土遺物 (9)	63	第 79 図 18 号住居跡	130
第 40 図 1 号住居跡	75	第 80 図 19 号住居跡 (1)	132

第81图	19号住居跡(2)	133	第124图	38号住居跡出土遺物	196
第82图	19号住居跡出土遺物(1)	134	第125图	40号住居跡(1)	198
第83图	19号住居跡出土遺物(2)	135	第126图	40号住居跡(2)	199
第84图	20号住居跡	138	第127图	40号住居跡出土遺物(1)	200
第85图	20号住居跡出土遺物	138	第128图	40号住居跡出土遺物(2)	201
第86图	21号住居跡(1)	140	第129图	41号住居跡	203
第87图	21号住居跡(2)	141	第130图	42号住居跡	204
第88图	21号住居跡出土遺物(1)	141	第131图	42号住居跡出土遺物	205
第89图	21号住居跡出土遺物(2)	142	第132图	43号住居跡	206
第90图	22号住居跡(1)	146	第133图	44号住居跡	207
第91图	22号住居跡(2)	147	第134图	44号住居跡出土遺物	207
第92图	22号住居跡出土遺物(1)	147	第135图	45号住居跡	210
第93图	22号住居跡出土遺物(2)	148	第136图	45号住居跡出土遺物(1)	211
第94图	23-33号住居跡(1)	151	第137图	45号住居跡出土遺物(2)	212
第95图	23-33号住居跡(2)	153	第138图	46号住居跡	215
第96图	23-33号住居跡(3)	154	第139图	46号住居跡出土遺物	216
第97图	23号住居跡出土遺物(1)	154	第140图	47号住居跡	218
第98图	23号住居跡出土遺物(2)	155	第141图	47号住居跡出土遺物	218
第99图	23号住居跡出土遺物(3)	156	第142图	4864号住居跡	221
第100图	23号住居跡出土遺物(4)	157	第143图	48号住居跡出土遺物	222
第101图	23号住居跡出土遺物(5)	158	第144图	50号住居跡	224
第102图	33号住居跡出土遺物	158	第145图	50号住居跡出土遺物	224
第103图	24号住居跡(1)	166	第146图	51号住居跡	226
第104图	24号住居跡(2)	167	第147图	52号住居跡	228
第105图	24号住居跡出土遺物	168	第148图	52号住居跡出土遺物	228
第106图	25号住居跡	171	第149图	53号住居跡	229
第107图	25号住居跡出土遺物	171	第150图	54号住居跡	230
第108图	26号住居跡	173	第151图	54号住居跡出土遺物	231
第109图	26号住居跡出土遺物	173	第152图	55号住居跡	232
第110图	27号住居跡	175	第153图	55号住居跡出土遺物	233
第111图	30号住居跡(1)	177	第154图	56号住居跡	235
第112图	30号住居跡(2)	178	第155图	56号住居跡出土遺物	236
第113图	30号住居跡出土遺物	178	第156图	58号住居跡	239
第114图	31号住居跡	181	第157图	59号住居跡(1)	241
第115图	31号住居跡出土遺物(1)	182	第158图	59号住居跡(2)	242
第116图	31号住居跡出土遺物(2)	183	第159图	59号住居跡出土遺物(1)	242
第117图	32-39号住居跡	187	第160图	59号住居跡出土遺物(2)	243
第118图	34-65号住居跡	188	第161图	60号住居跡(1)	246
第119图	35号住居跡	190	第162图	60号住居跡(2)	247
第120图	36号住居跡(1)	191	第163图	60号住居跡出土遺物	247
第121图	36号住居跡(2)	192	第164图	61号住居跡(1)	249
第122图	36号住居跡出土遺物	193	第165图	61号住居跡(2)	250
第123图	38号住居跡	196	第166图	62号住居跡	252

第167园	63号住居跡	253	第211园	97号住居跡	314
第168园	66号住居跡(1)	255	第212园	97号住居跡出土遺物	315
第169园	66号住居跡(2)	256	第213园	98号住居跡	316
第170园	66号住居跡出土遺物	256	第214园	98号住居跡出土遺物	317
第171园	67号住居跡	258	第215园	99号住居跡	319
第172园	67号住居跡出土遺物	259	第216园	99号住居跡出土遺物	320
第173园	69号住居跡(1)	261	第217园	100号住居跡	321
第174园	69号住居跡(2)	262	第218园	100号住居跡出土遺物	322
第175园	69号住居跡出土遺物	263	第219园	101号住居跡	324
第176园	70号住居跡	265	第220园	101号住居跡	325
第177园	72号住居跡(1)	266	第221园	101号住居跡出土遺物	326
第179园	72号住居跡(2)	267	第222园	102号住居跡	328
第180园	72号住居跡出土遺物	270	第223园	102号住居跡出土遺物	328
第181园	73号住居跡(1)	271	第224园	103号住居跡	330
第182园	73号住居跡(2)	272	第225园	104号住居跡	331
第183园	74号住居跡	276	第226园	104号住居跡出土遺物	332
第184园	74号住居跡出土遺物	277	第227园	105号住居跡	334
第185园	76号住居跡	278	第228园	105号住居跡出土遺物	334
第186园	77号住居跡	280	第229园	106号住居跡	336
第187园	77号住居跡出土遺物	281	第230园	107号住居跡	338
第188园	78·79号住居跡	283	第231园	107号住居跡出土遺物	339
第189园	79号住居跡	284	第232园	108号住居跡	342
第190园	78号住居跡出土遺物	284	第233园	108号住居跡出土遺物	342
第191园	79号住居跡出土遺物	284	第234园	109号住居跡	344
第192园	87号住居跡	286	第235园	109号住居跡出土遺物	344
第193园	88号住居跡	288	第236园	110号住居跡	346
第194园	88号住居跡出土遺物	289	第237园	110号住居跡出土遺物(1)	347
第195园	89号住居跡	292	第238园	110号住居跡出土遺物(2)	348
第196园	89号住居跡出土遺物	293	第239园	112号住居跡	351
第197园	90号住居跡	295	第240园	112号住居跡出土遺物	351
第198园	90号住居跡出土遺物	296	第241园	111·113·114·115·116号住居跡	354
第199园	91号住居跡	298	第242园	113号住居跡	355
第200园	91号住居跡出土遺物	298	第243园	114号住居跡(1)	357
第201园	92号住居跡(1)	300	第244园	114号住居跡(2)	358
第202园	92号住居跡(2)	301	第245园	114号住居跡出土遺物(1)	359
第203园	92号住居跡出土遺物	302	第246园	114号住居跡出土遺物(2)	360
第204园	93号住居跡	304	第247园	114号住居跡出土遺物(3)	361
第205园	93号住居跡出土遺物	305	第248园	114号住居跡出土遺物(4)	362
第206园	94号住居跡	307	第249园	114号住居跡出土遺物(5)	363
第207园	95号住居跡	308	第250园	115号住居跡	371
第208园	95号住居跡出土遺物	309	第251园	116号住居跡	373
第209园	96号住居跡	312	第252园	116号住居跡出土遺物	373
第210园	96号住居跡出土遺物	313	第253园	117号住居跡(1)	376

第254图	117号住居跡(2)	377	第297图	土坑(15)	444
第255图	117号住居跡(3)	378	第298图	土坑(16)	446
第256图	117号住居跡出土遺物	379	第299图	土坑(17)	447
第257图	118号住居跡	383	第300图	土坑出土遺物(1)	457
第258图	118号住居跡出土遺物(1)	384	第301图	土坑出土遺物(2)	458
第259图	118号住居跡出土遺物(2)	385	第302图	土坑出土遺物(3)	459
第260图	119号住居跡(1)	389	第303图	1号堀立柱建物跡	465
第261图	119号住居跡(2)	390	第304图	2号堀立柱建物跡	467
第262图	120号住居跡	393	第305图	2号堀立柱建物跡出土遺物	468
第263图	120号住居跡出土遺物	394	第306图	3号堀立柱建物跡	469
第264图	121号住居跡	397	第307图	1・2号配石遺構	471
第265图	121号住居跡出土遺物(1)	398	第308图	1号配石遺構	472
第266图	121号住居跡出土遺物(2)	399	第309图	1号配石遺構出土遺物(1)	472
第267图	121号住居跡出土遺物(3)	400	第310图	1号配石遺構出土遺物(2)	473
第268图	122号住居跡	406	第311图	2号配石遺構	475
第269图	122号住居跡出土遺物(1)	407	第312图	2号配石遺構出土遺物	475
第270图	122号住居跡出土遺物(2)	408	第313图	1号磁石建物	477
第271图	123号住居跡	411	第314图	1号磁石建物出土遺物	478
第272图	124号住居跡	412	第315图	2号溝	480
第273图	125126号住居跡	414	第316图	2号溝出土遺物	481
第274图	125号住居跡出土遺物	415	第317图	3号溝	482
第275图	126号住居跡出土遺物	415	第318图	3号溝出土遺物	483
第276图	127号住居跡	419	第319图	4号溝	484
第277图	127号住居跡出土遺物	419	第320图	5号溝	485
第278图	129号住居跡	420	第321图	5号溝出土遺物	485
第279图	130号住居跡	421	第322图	A区As-B下水田土層柱状园	486
第280图	131・132号住居跡	422	第323图	A区As-B下水田	487
第281图	131号住居跡出土遺物	422	第324图	出土古瓦(1)	489
第282图	132号住居跡出土遺物	422	第325图	出土古瓦(2)	490
第283图	土坑(1)	426	第326图	出土古瓦(3)	491
第284图	土坑(2)	427	第327图	出土古瓦(4)	492
第285图	土坑(3)	428	第328图	出土古瓦(5)	493
第286图	土坑(4)	430	第329图	出土古瓦(6)	494
第287图	土坑(5)	431	第330图	出土古瓦(7)	495
第288图	土坑(6)	432	第331图	出土古瓦(8)	496
第289图	土坑(7)	434	第332图	出土古瓦(9)	497
第290图	土坑(8)	435	第333图	出土古瓦(10)	498
第291图	土坑(9)	436	第334图	出土古瓦(11)	499
第292图	土坑(10)	438	第335图	出土金屬器(1)	505
第293图	土坑(11)	439	第336图	出土金屬器(2)	506
第294图	土坑(12)	440	第337图	出土金屬器(3)	507
第295图	土坑(13)	442	第338图	1号民家	514
第296图	土坑(14)	443	第339图	1号民家出土遺物	515

第340回	2号民家	516
第341回	2号民家出土遺物	517
第342回	3号民家	520
第343回	近世土坑出土遺物	521
第344回	1号溝	522
第345回	1号溝出土遺物	523
第346回	6号溝	524
第347回	6号溝出土遺物	525
第348回	出土古銭(1)	526
第349回	出土古銭(2)	527
第350回	遺構外出土遺物(1)	530
第351回	遺構外出土遺物(2)	531
第352回	遺構外出土遺物(3)	532
第353回	遺構外出土遺物(4)	533
第354回	遺構外出土遺物(5)	534

表 目 次

第 1 表	周辺遺跡一覧表	9	第 41 表	4 号住居跡遺物観察表	80
第 2 表	80 号住居跡計測表	26	第 42 表	5 号住居跡計測表	82
第 3 表	80 号住居跡遺物観察表	28	第 43 表	5 号住居跡遺物観察表	82
第 4 表	81 号住居跡計測表	29	第 44 表	6 号住居跡計測表	84
第 5 表	81 号住居跡遺物観察表	29	第 45 表	6 号住居跡遺物観察表	84
第 6 表	82 号住居跡計測表	30	第 46 表	7 号住居跡計測表	85
第 7 表	82 号住居跡遺物観察表	33	第 47 表	7 号住居跡遺物観察表	86
第 8 表	83 号住居跡計測表	35	第 48 表	8 号住居跡計測表	88
第 9 表	83 号住居跡遺物観察表	37	第 49 表	8 号住居跡遺物観察表	88
第 10 表	84 号住居跡計測表	39	第 50 表	9 号住居跡計測表	89
第 11 表	84 号住居跡遺物観察表	42	第 51 表	9 号住居跡遺物観察表	89
第 12 表	46 号土坑遺物観察表	48	第 52 表	10 号住居跡計測表	91
第 13 表	66 号土坑遺物観察表	48	第 53 表	10 号住居跡遺物観察表	91
第 14 表	68 号土坑遺物観察表	48	第 54 表	11 号住居跡計測表	92
第 15 表	70 号土坑遺物観察表	48	第 55 表	11 号住居跡遺物観察表	93
第 16 表	71 号土坑遺物観察表	49	第 56 表	12 号住居跡計測表	95
第 17 表	72 号土坑遺物観察表	49	第 57 表	12 号住居跡遺物観察表	99
第 18 表	78 号土坑遺物観察表	49	第 58 表	13 号住居跡計測表	104
第 19 表	80 号土坑遺物観察表	50	第 59 表	29 号住居跡計測表	104
第 20 表	82 号土坑遺物観察表	50	第 60 表	13 号住居跡遺物観察表	108
第 21 表	83 号土坑遺物観察表	51	第 61 表	29 号住居跡遺物観察表	110
第 22 表	84 号土坑遺物観察表	51	第 62 表	14 号住居跡計測表	112
第 23 表	85 号土坑遺物観察表	51	第 63 表	14 号住居跡遺物観察表	112
第 24 表	86 号土坑遺物観察表	52	第 64 表	15 号住居跡計測表	113
第 25 表	89 号土坑遺物観察表	52	第 65 表	15 号住居跡遺物観察表	118
第 26 表	92 号土坑遺物観察表	52	第 66 表	17 号住居跡計測表	121
第 27 表	99 号土坑遺物観察表	52	第 67 表	17 号住居跡遺物観察表	126
第 28 表	110 号土坑遺物観察表	52	第 68 表	18 号住居跡計測表	131
第 29 表	121 号土坑遺物観察表	52	第 69 表	18 号住居跡遺物観察表	131
第 30 表	埋設土器遺物観察表	53	第 70 表	19 号住居跡計測表	132
第 31 表	遺構外出土縄文土器遺物観察表	64	第 71 表	19 号住居跡遺物観察表	136
第 32 表	旧石器遺物計測表	72	第 72 表	20 号住居跡計測表	138
第 33 表	縄文石器遺物計測表	72	第 73 表	20 号住居跡遺物観察表	139
第 34 表	1 号住居跡計測表	75	第 74 表	21 号住居跡計測表	141
第 35 表	1 号住居跡遺物観察表	75	第 75 表	21 号住居跡遺物観察表	143
第 36 表	2 号住居跡計測表	76	第 76 表	22 号住居跡計測表	147
第 37 表	2 号住居跡遺物観察表	77	第 77 表	22 号住居跡遺物観察表	149
第 38 表	3 号住居跡計測表	78	第 78 表	23 号住居跡計測表	152
第 39 表	3 号住居跡遺物観察表	79	第 79 表	33 号住居跡計測表	152
第 40 表	4 号住居跡計測表	80	第 80 表	23 号住居跡遺物観察表	159

第 81 表	33 号住居跡遺物觀察表	165	第 124 表	50 号住居跡計測表	224
第 82 表	24 号住居跡計測表	167	第 125 表	50 号住居跡遺物觀察表	224
第 83 表	24 号住居跡遺物觀察表	169	第 126 表	51 号住居跡計測表	227
第 84 表	25 号住居跡計測表	171	第 127 表	51 号住居跡遺物觀察表	227
第 85 表	25 号住居跡遺物觀察表	172	第 128 表	52 号住居跡計測表	228
第 86 表	26 号住居跡計測表	173	第 129 表	52 号住居跡遺物觀察表	228
第 87 表	26 号住居跡遺物觀察表	174	第 130 表	53 号住居跡計測表	229
第 88 表	27 号住居跡計測表	175	第 131 表	54 号住居跡計測表	230
第 89 表	27 号住居跡遺物觀察表	176	第 132 表	54 号住居跡遺物觀察表	230
第 90 表	30 号住居跡計測表	179	第 133 表	55 号住居跡計測表	233
第 91 表	30 号住居跡遺物觀察表	183	第 134 表	55 号住居跡遺物觀察表	234
第 92 表	31 号住居跡計測表	184	第 135 表	56 号住居跡計測表	236
第 93 表	31 号住居跡遺物觀察表	187	第 136 表	56 号住居跡遺物觀察表	238
第 94 表	32 号住居跡計測表	187	第 137 表	58 号住居跡計測表	239
第 95 表	39 号住居跡計測表	187	第 138 表	59 号住居跡計測表	241
第 96 表	32 号住居跡遺物觀察表	187	第 139 表	59 号住居跡遺物觀察表	244
第 97 表	34 号住居跡計測表	188	第 140 表	60 号住居跡計測表	247
第 98 表	65 号住居跡計測表	188	第 141 表	60 号住居跡遺物觀察表	248
第 99 表	35 号住居跡計測表	190	第 142 表	61 号住居跡計測表	250
第 100 表	35 号住居跡遺物觀察表	190	第 143 表	61 号住居跡遺物觀察表	251
第 101 表	36 号住居跡計測表	191	第 144 表	62 号住居跡計測表	252
第 102 表	36 号住居跡遺物觀察表	194	第 145 表	63 号住居跡計測表	253
第 103 表	38 号住居跡計測表	196	第 146 表	66 号住居跡遺物觀察表	256
第 104 表	38 号住居跡遺物觀察表	197	第 147 表	66 号住居跡計測表	257
第 105 表	40 号住居跡計測表	199	第 148 表	67 号住居跡遺物觀察表	258
第 106 表	40 号住居跡遺物觀察表	201	第 149 表	67 号住居跡計測表	260
第 107 表	41 号住居跡計測表	203	第 150 表	69 号住居跡計測表	261
第 108 表	42 号住居跡計測表	204	第 151 表	69 号住居跡遺物觀察表	264
第 109 表	42 号住居跡遺物觀察表	205	第 152 表	70 号住居跡計測表	265
第 110 表	43 号住居跡計測表	206	第 153 表	72 号住居跡計測表	266
第 111 表	43 号住居跡遺物觀察表	206	第 154 表	72 号住居跡遺物觀察表	269
第 112 表	44 A 号住居跡計測表	208	第 155 表	73 号住居跡計測表	270
第 113 表	44 B 号住居跡計測表	208	第 156 表	73 号住居跡遺物觀察表	273
第 114 表	44 号住居跡遺物觀察表	208	第 157 表	74 号住居跡計測表	277
第 115 表	45 号住居跡計測表	211	第 158 表	74 号住居跡遺物觀察表	277
第 116 表	45 号住居跡遺物觀察表	213	第 159 表	76 号住居跡計測表	278
第 117 表	46 号住居跡計測表	215	第 160 表	76 号住居跡遺物觀察表	279
第 118 表	46 号住居跡遺物觀察表	217	第 161 表	77 号住居跡計測表	281
第 119 表	47 号住居跡計測表	219	第 162 表	77 号住居跡遺物觀察表	281
第 120 表	47 号住居跡遺物觀察表	219	第 163 表	78 号住居跡計測表	284
第 121 表	48 号住居跡計測表	222	第 164 表	79 号住居跡計測表	285
第 122 表	64 号住居跡計測表	222	第 165 表	78 号住居跡遺物觀察表	285
第 123 表	48 号住居跡遺物觀察表	223	第 166 表	79 号住居跡遺物觀察表	285

第167表	87号住居跡計測表	286	第210表	108号住居跡計測表	342
第168表	87号住居跡遺物観察表	287	第211表	108号住居跡遺物観察表	343
第169表	88号住居跡計測表	288	第212表	109号住居跡計測表	344
第170表	88号住居跡遺物観察表	290	第213表	109号住居跡遺物観察表	345
第171表	89号住居跡計測表	293	第214表	110号住居跡計測表	348
第172表	89号住居跡遺物観察表	294	第215表	110号住居跡遺物観察表	348
第173表	90号住居跡計測表	295	第216表	112号住居跡計測表	351
第174表	90号住居跡遺物観察表	296	第217表	112号住居跡遺物観察表	352
第175表	91号住居跡計測表	298	第218表	113号住居跡計測表	355
第176表	91号住居跡遺物観察表	299	第219表	113号住居跡遺物観察表	355
第177表	92A号住居跡計測表	300	第220表	114号住居跡計測表	357
第178表	92B号住居跡計測表	301	第221表	114号住居跡遺物観察表	364
第179表	92C号住居跡計測表	301	第222表	115号住居跡計測表	372
第180表	92号住居跡遺物観察表	303	第223表	115号住居跡遺物観察表	372
第181表	93号住居跡計測表	304	第224表	116号住居跡計測表	373
第182表	93号住居跡遺物観察表	305	第225表	116号住居跡遺物観察表	374
第183表	94号住居跡計測表	307	第226表	117号住居跡計測表	376
第184表	94号住居跡遺物観察表	307	第227表	117号住居跡遺物観察表	380
第185表	95号住居跡計測表	308	第228表	118号住居跡計測表	384
第186表	95号住居跡遺物観察表	310	第229表	118号住居跡遺物観察表	386
第187表	96号住居跡計測表	312	第230表	119号住居跡計測表	391
第188表	96号住居跡遺物観察表	313	第231表	119号住居跡遺物観察表	391
第189表	97号住居跡計測表	314	第232表	120号住居跡計測表	393
第190表	97号住居跡遺物観察表	315	第233表	120号住居跡遺物観察表	395
第191表	98号住居跡計測表	316	第234表	121号PIT計測表	397
第192表	98号住居跡遺物観察表	317	第235表	121号住居跡計測表	398
第193表	99号住居跡計測表	319	第236表	121号住居跡遺物観察表	401
第194表	99号住居跡遺物観察表	320	第237表	122号住居跡計測表	407
第195表	100号住居跡計測表	321	第238表	122号住居跡遺物観察表	409
第196表	100号住居跡遺物観察表	322	第239表	123号住居跡計測表	411
第197表	101号住居跡計測表	324	第240表	124号住居跡計測表	413
第198表	101号住居跡遺物観察表	327	第241表	124号住居跡遺物観察表	413
第199表	102号住居跡計測表	328	第242表	125号住居跡計測表	416
第200表	102号住居跡遺物観察表	329	第243表	126号住居跡計測表	416
第201表	103号住居跡計測表	330	第244表	125号住居跡遺物観察表	416
第202表	104号住居跡計測表	331	第245表	126号住居跡遺物観察表	417
第203表	104号住居跡遺物観察表	332	第246表	127号住居跡計測表	419
第204表	105号住居跡計測表	334	第247表	127号住居跡遺物観察表	419
第205表	105号住居跡遺物観察表	335	第248表	129号住居跡計測表	420
第206表	106号住居跡計測表	336	第249表	129号住居跡遺物観察表	420
第207表	106号住居跡遺物観察表	337	第250表	130号住居跡計測表	421
第208表	107号住居跡計測表	338	第251表	130号住居跡遺物観察表	421
第209表	107号住居跡遺物観察表	340	第252表	131号住居跡計測表	423

第253表	132号住居跡計測表	423
第254表	131号住居跡遺物觀察表	423
第255表	132号住居跡遺物觀察表	424
第256表	土坑計測表	448
第257表	30号土坑遺物觀察表	459
第258表	37号土坑遺物觀察表	460
第259表	43号土坑遺物觀察表	460
第260表	47号土坑遺物觀察表	460
第261表	51号土坑遺物觀察表	460
第262表	61号土坑遺物觀察表	461
第263表	63号土坑遺物觀察表	461
第264表	93号土坑遺物觀察表	461
第265表	101号土坑遺物觀察表	461
第266表	104号土坑遺物觀察表	461
第267表	114号土坑遺物觀察表	462
第268表	130号土坑遺物觀察表	462
第269表	131号土坑遺物觀察表	462
第270表	148号土坑遺物觀察表	462
第271表	149号土坑遺物觀察表	463
第272表	160号土坑遺物觀察表	463
第273表	171号土坑遺物觀察表	463
第274表	173号土坑遺物觀察表	464
第275表	2号竪立柱建物跡遺物觀察表	468
第276表	1号配石遺構遺物觀察表	474
第277表	2号配石遺構遺物觀察表	476
第278表	1号礎石建物遺物觀察表	478
第279表	2号溝遺物觀察表	481
第280表	3号溝遺物觀察表	483
第281表	5号溝遺物觀察表	485
第282表	出土古瓦觀察表	500
第283表	出土金屬器觀察表	508
第284表	1号民家觀察表	515
第285表	2号民家觀察表	518
第286表	2号土坑遺物觀察表	521
第287表	12号土坑遺物觀察表	521
第288表	122号土坑遺物觀察表	521
第289表	1号溝遺物觀察表	523
第290表	6号溝遺物觀察表	525
第291表	出土古銭計測表	527
第292表	遺構外遺物觀察表	535

図 版 目 次

- | | |
|---|---|
| <p>図版 1 遺跡遠景 (東より)
遺跡遠景 (南より)</p> <p>図版 2 旧石器西斜面遠景 (西より)
旧石器遺物出土状況 (Ds-36Gr)
旧石器遺物出土状況 (Ds-36Gr)
旧石器土層 作業風景 (西より)</p> <p>図版 3 83・84号住居跡 80号住居跡全景
81号住居跡全景 82号住居跡全景
81号住居跡床下 82号住居跡全景
83号住居跡床下 84号住居跡遺物出土状況</p> <p>図版 4 1号住居跡全景 1号住居跡竈
2号住居跡全景 3号住居跡全景
3号住居跡床下 4号住居跡全景
5号住居跡竈 5号住居跡遺物出土状況</p> <p>図版 5 6号住居跡全景 6号住居跡竈
6号住居跡全景 7号住居跡全景
7号住居跡遺物出土状況 8号住居跡全景
8号住居跡床下 9号住居跡全景</p> <p>図版 6 10号住居跡全景 11号住居跡全景
11号住居跡床下 12号住居跡全景
12号住居跡竈 12号住居跡遺物出土状況
12号住居跡床下 13号住居跡全景</p> <p>図版 7 14号住居跡全景 15号住居跡全景
15号住居跡遺物出土状況
15号住居跡遺物出土状況
15号住居跡遺物出土状況
15号住居跡遺物出土状況
17号住居跡全景 17号住居跡遺物出土状況</p> <p>図版 8 19号住居跡全景 19号住居跡竈
21号住居跡全景 21号住居跡竈
21号住居跡遺物出土状況 22号住居跡全景
22号住居跡竈 22号住居跡遺物出土状況</p> <p>図版 9 23号住居跡全景 23号住居跡竈
23号住居跡竈 23号住居跡床下
24号住居跡全景 24号住居跡竈
24号住居跡遺物出土状況 25号住居跡全景</p> <p>図版 10 26号住居跡全景 26号住居跡遺物出土状況
27号住居跡全景 27号住居跡竈
29号住居跡全景 29号住居跡床下
30号住居跡全景 30号住居跡竈</p> | <p>図版 11 31号住居跡全景 31号住居跡竈
31号住居跡遺物出土状況 31号住居跡床下
35号住居跡全景 36号住居跡全景
36号住居跡竈 36号住居跡遺物出土状況</p> <p>図版 12 40号住居跡全景 40号住居跡竈
40号住居跡遺物出土状況
44号住居跡遺物出土状況 (金環)
45号住居跡全景 45号住居跡遺物出土状況
46号住居跡全景 46号住居跡床下</p> <p>図版 13 47号住居跡全景 48号住居跡全景
50号住居跡全景 50号住居跡床下
51号住居跡床下 52号住居跡全景
53号住居跡全景 53号住居跡床下</p> <p>図版 14 55号住居跡全景 55号住居跡竈
55号住居跡床下 56号住居跡全景
56号住居跡竈 56号住居跡床下
73号住居跡全景 73号住居跡竈</p> <p>図版 15 58号住居跡全景 58号住居跡床下
59号住居跡全景 59号住居跡竈
59号住居跡竈 60号住居跡全景
60号住居跡竈 60号住居跡床下</p> <p>図版 16 61号住居跡全景 61号住居跡竈
61号住居跡床下 62号住居跡全景
63号住居跡全景 63号住居跡床下
66号住居跡全景 66号住居跡床下</p> <p>図版 17 67号住居跡床下 69号住居跡全景 (小戴治)
69号住居跡部分 70号住居跡全景
72号住居跡床下 72号住居跡遺物出土状況
73号住居跡全景 73号住居跡床下</p> <p>図版 18 74号住居跡全景 74号住居跡床下
76号住居跡全景 76号住居跡床下
76・89号住居跡全景 77号住居跡全景
77号住居跡遺物出土状況
77・78号住居跡全景</p> <p>図版 19 87号住居跡全景 87号住居跡床下
88号住居跡全景 88号住居跡床下
89号住居跡全景 89号住居跡竈
90号住居跡全景 90号住居跡竈</p> |
|---|---|

- 図版 20 91号住居跡全景 91号住居跡竈
92号住居跡全景 92号住居跡竈
92号住居跡全景 93号住居跡竈
93号住居跡遺物出土状況 94号住居跡全景
- 図版 21 95号住居跡全景 95号住居跡竈
96号住居跡全景 96号住居跡竈
97号住居跡全景 98号住居跡全景
98号住居跡竈 98号住居跡竈掘り方
- 図版 22 99号住居跡全景 99号住居跡竈
100号住居跡全景 101号住居跡全景
101号住居跡竈 101号住居跡竈
101号住居跡遺物出土状況
104号住居跡全景
- 図版 23 105号住居跡全景 105号住居跡床下
106号住居跡全景 107号住居跡全景
107号住居跡竈
107号住居跡遺物出土状況
108号住居跡全景
108号住居跡遺物出土状況
- 図版 24 109号住居跡全景 109号住居跡竈
110号住居跡全景 111・115号住居跡全景
112号住居跡全景 112号住居跡床下
113号住居跡全景 113号住居跡竈
- 図版 25 114・116住居跡全景
111・113・114・115・116号住居跡全景
116号住居跡全景
117号住居跡遺物出土状況
120号住居跡全景 121号住居跡全景
121号住居跡竈 122号住居跡全景
- 図版 26 123号住居跡全景 129号住居跡全景
131号住居跡全景
131号住居跡遺物出土状況
- 図版 27 1号民家全景 2号土坑全景
6号土坑全景 25号土坑全景
26・27・28・29号土坑全景 30号土坑全景
- 図版 28 61号土坑全景 61号土坑遺物出土状況
65号土坑全景 66号土坑全景
67号土坑全景 68号土坑全景
69号土坑全景 70号土坑全景
72号土坑全景 74号土坑全景
- 図版 29 75号土坑全景 76号土坑全景
77号土坑全景 79号土坑全景
81号土坑全景 82号土坑全景
- 83号土坑全景 84号土坑全景
- 図版 30 85号土坑全景 86号土坑全景
87号土坑全景 88号土坑全景
100号土坑全景 101号土坑全景
105号土坑全景 106号土坑全景
- 図版 31 123号土坑全景 125号土坑全景
126号土坑全景 40号住内土坑全景
墓地跡1号土坑 152号土坑全景
墓地跡4号土坑 埋設土器全景
- 図版 32 1号溝(部分)
2号溝(部分)
1号礫石建物全景
- 図版 33 2号掘立柱建物跡全景
3号民家全景
- 図版 34 2号民家全景
2号民家竈
- 図版 35 製鉄遺構(69号住居跡)全景
製鉄遺構(69号住居跡)
製鉄遺構(69号住居跡)遺物出土状況
製鉄遺構(69号住居跡)
As-B下水田(南東より)
As-B下水田(南より)
- 図版 36 As-B下水田(南西より)
- 図版 37 1・2号配石遺構
Df-2223Gr集石 Ck-24Grトレンチ
- 図版 38 作業風景(東より)
作業風景(北より)
- 図版 39 旧石器 80-81・82号住居跡出土遺物
- 図版 40 82-83号住居跡出土遺物
- 図版 41 83-84号住居跡出土遺物
- 図版 42 84号住居跡 46-66-68号土坑出土遺物
- 図版 43 70-71-72-78-80-82-83-84-85-86-89-92
99-110土坑出土遺物
- 図版 44 121-70-72-83-110号土坑 埋設土器
- 図版 45 遺構外出土遺物
- 図版 46 遺構外出土遺物
- 図版 47 遺構外出土遺物
- 図版 48 遺構外出土遺物
- 図版 49 遺構外出土遺物
- 図版 50 遺構外出土遺物
- 図版 51 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10号
住居跡出土遺物

- 图版 52 11·12号住居跡出土遺物
 图版 53 12号住居跡出土遺物
 图版 54 13号住居跡出土遺物
 图版 55 13·29·14·15号住居跡出土遺物
 图版 56 15号住居跡出土遺物
 图版 57 15·17号住居跡出土遺物
 图版 58 17号住居跡出土遺物
 图版 59 18·19号住居跡出土遺物
 图版 60 19·20·21号住居跡出土遺物
 图版 61 21·22号住居跡出土遺物
 图版 62 22·23号住居跡出土遺物
 图版 63 23号住居跡出土遺物
 图版 64 22·23号住居跡出土遺物
 图版 65 23号住居跡出土遺物
 图版 66 27·30·31号住居跡出土遺物
 图版 67 27·30·31号住居跡出土遺物
 图版 68 31号住居跡出土遺物
 图版 69 31·32·35号住居跡出土遺物
 图版 70 36·38·40号住居跡出土遺物
 图版 71 40·42·43·44·45号住居跡出土遺物
 图版 72 45·46号住居跡出土遺物
 图版 73 46·47·48号住居跡出土遺物
 图版 74 48·50·51·52·54·55号住居跡出土遺物
 图版 75 56·59号住居跡出土遺物
 图版 76 59·60·61·66号住居跡出土遺物
 图版 77 66·67·69·72号住居跡出土遺物
 图版 78 72·73号住居跡出土遺物
 图版 79 73·74·76·77·78号住居跡出土遺物
 图版 80 79·87·88号住居跡出土遺物
 图版 81 88·89号住居跡出土遺物
 图版 82 90·91·92号住居跡出土遺物
 图版 83 93·94·95号住居跡出土遺物
 图版 84 96·97·98·99·100号住居跡出土遺物
 图版 85 100·101·102·104号住居跡出土遺物
 图版 86 104·105·106·107号住居跡出土遺物
 图版 87 107·108·109·110号住居跡出土遺物
 图版 88 110·112·113·114号住居跡出土遺物
 图版 89 114号住居跡出土遺物
 图版 90 114号住居跡出土遺物
 图版 91 114号住居跡出土遺物
 图版 92 115·116·117号住居跡出土遺物
 图版 93 117·118号住居跡出土遺物
 图版 94 118号住居跡出土遺物
 图版 95 118·119·120号住居跡出土遺物
 图版 96 120·121号住居跡出土遺物
 图版 97 121号住居跡出土遺物
 图版 98 121·122号住居跡出土遺物
 图版 99 122·124号住居跡出土遺物
 图版 100 124·125·126·127号住居跡出土遺物
 图版 101 127·129·130·131·132号住居跡出土遺物
 图版 102 30·37·43·47·51·61·63·93·101·104·114
 130·131号住居跡出土遺物
 图版 103 148·149·160·171·173土坑
 2号掘立柱建物跡 1号配石遺構出土遺物
 图版 104 2号配石遺構 1号磁石建物
 2·10·12号溝 1·2号民家出土遺物
 图版 105 2号民家 2·12·122号土坑
 1·11号溝 調査区域外 遺構外出土遺物
 图版 106 遺構外出土遺物
 图版 107 遺構外出土遺物
 图版 108 遺構外出土遺物
 图版 109 出土瓦
 图版 110 出土瓦
 图版 111 出土瓦
 图版 112 出土瓦
 图版 113 出土瓦
 图版 114 出土金屬器
 图版 115 出土金屬器
 图版 116 出土金屬器
 图版 117 出土金屬器
 图版 118 石
 图版 119 石
 图版 120 石
 图版 121 石

発掘調査報告書抄録

フリガナ	クロクマハチマンイセキ
書名	黒熊八幡遺跡
副書名	関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第37集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第206集
編著者名	山口逸弘
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年月日	西暦 1996年3月25日

フリガナ 書取遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査 面積㎡	調査原因
クマハチマンイセキ 黒熊八幡遺跡	マツノコウジマキ 多野郡吉井町 ハチマツ 八幡・徳山	10363	36°14'25"	139°1'15"	19890701～ 19910331		道路建設

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒熊八幡遺跡	居住	竪穴住居跡 121軒	縄文土器 石器 土師器 須恵器 灰軸陶器	
		土坑 154基	石瓦 金属器 硯	
	掘立柱建物跡	6条	縄文土器・石器 土師器 須恵器 石瓦	
		3棟	金属器 陶磁器 古銭	
	礎石建物	1棟	土師器 須恵器 瓦 陶磁器 砥石 古銭	
		2軒	須恵器 砥石 金属器 古銭	
	生産	小鍛冶遺構 1軒	須恵器 羽口 金属器	
		水田 1枚		
	祭祀	墓壇 3基	須恵器 灰軸陶器	
		配石遺構 2基	須恵器 土師器 瓦	



黑熊八幡遺跡

第I章 発掘調査の経過と調査方法

第1節 調査にいたる経過

本道跡の発掘調査は、関越自動車道上信越線（以下上信越線）の建設に伴い、平成元年7月に着手された。上信越線は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道として、日本道路公団が事業主体者となり建設された。東京都練馬に起点を置き、新潟県上越市までの総延長280kmが予定路線であり、既に平成5年3月27日藤岡～佐久インター間69kmが共用開始となっている。藤岡～佐久インター間の基本計画は、昭和47年に策定され、同54年に建設大臣により日本道路公団が施工命令を受けている。同56年、この藤岡～佐久間の路線が発表された。

昭和47年の基本計画策定後、群馬県教育委員会（以下県教委）は路線内及び周辺の埋蔵文化財の扱いについて、以下のように対応した。

昭和49年度 県教委は上信越線路線の藤岡～下仁田間に存在する埋蔵文化財について、県企画部幹線交通課に対し、文化財保護法の遵守、指定文化財の回避、関係事項の県教委文化財保護課との協議等の考え方を示した。

昭和55年度 文化財保護課は路線周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を行った。その結果は、同年3月藤岡～松井田間、同年11月松井田～下仁田間について「関越自動車道上信越線国道公共事業調査報告書」として報告されている。

昭和59年度 建設工事が具体化し、道路公団の調査依頼を県教委が受け、文化財保護課による包蔵地の詳細分布調査が行われた。

昭和60年度 県教育委員会は、分布調査の結果を踏まえ、要調査面積を約100万㎡、55遺跡と想定し、埋蔵文化財発掘調査にかかる基本方針を策定した。以下主な事項である。

1. 発掘調査終了年度を昭和66年度末（平成2年度末）とする。
2. 調査は（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下事業団）を中核機関とし、対応できない部分に調査会方式を導入、関係市町村には進捗状況を考慮しながら協力を求める。機関別の対応面積は、

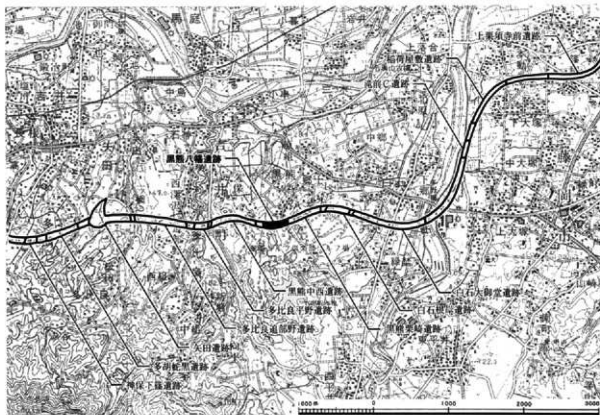
事業団 約76万㎡（富岡市以南）
調査会 約22万㎡（妙義町・下仁田町・松井田町）である。尚、面積は変動の可能性があるとされた。

3. 事業団出張所（上越線調査事務所）を開設し、整理作業も併行する。

4. 日本道路公団東京第二建設局が県教委に調査依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。県教委はそれを受け、事業団及び各遺跡調査会等に再委託のかわり委託契約を締結し、調査を実施する。

昭和61年度 上越線調査事務所開設。4班15人体制。

昭和62年度 6班24人体制。昭和63年度 9班36人。平成元・2年度12班45人体制で各遺跡が調査され、平成2年度に一部を残し発掘調査は終了した。整理作業は昭和63年度より併行し、3年度より本格化している。



第1図 路線図

第2節 発掘調査の経過

黒熊八幡遺跡は、事業名称栗崎八幡遺跡として、調査が行われている。栗崎八幡遺跡には、黒熊栗崎遺跡・黒熊中西遺跡・黒熊八幡遺跡が含まれており、黒熊栗崎遺跡が昭和62年4月～9月、黒熊八幡遺跡が平成元年6月～平成3年3月、黒熊中西遺跡が平成元年12月～平成3年3月に調査されている。

本遺跡は、対象面積が約16,000㎡と広く、鍋川右岸の上位段丘の丘陵性地形に占地する集落遺跡である。

試掘調査は、昭和63年度に行われ、台地を東西に走る試掘坑を数箇所設定して、遺構の有無を確認した。その結果、丘陵性台地には、奈良・平安時代の住居跡の濃密な存在が予想され、さらに、台地の東側に存在する水田部分にも、浅間B軽石下の水田耕土が確認されたことから、丘陵性台地と東側低地部分を要調査地と判断した。

また、既調査の黒熊栗崎遺跡の調査結果と及び本遺跡西側の台地である黒熊中西遺跡の試掘資料から、本遺跡周辺は、奈良・平安時代の集落のみならず古代寺院址が占地する地域と考えられた。

本調査は前にも述べたとおり、平成元年7月に着手され、平成3年3月に終了した。

初年度は、北側の工事用道路部分を先行着手し、一部台地鞍部においては拡張調査が行われた。住居跡が検出される台地部分C～D区の殆どが、急斜面を形成する地形であり、作業員の安全確保を留意して調査が進められた。遺構の密度は濃く、特に東斜面～鞍部の平坦部にかけて、重複住居跡が群在する様相が把握された。この住居群の多くが奈良・平安時代の所産であるが、縄文時代前期後半～中期初頭の遺構・遺物も少量ながら調査された。

A区と呼称した水田部分については全面調査が行われた。周辺の水田水利に影響が無い湯水期を選んで11月に着手し、浅間B軽石下の水田量を検出した。

湯水期といえども湧水量は多く、排水作業を併用した調査である。

C～D区に戻るが、初年度後半で、台地頂部の高橋高部分の一部も調査の手が及んだ。これは墓地移転に伴うもので、狭い範囲の対称面積ながら、縄文時代中期初頭の住居跡・奈良・平安時代の住居跡・土坑等が調査され、本遺跡の集落分布範囲が、南側の調査区域外にまで広がる予測がし得た。

なお、当年度の1～3月期は黒熊中西遺跡の工事用道路部分も併せて調査が行われた。

平成2年度も、西隣する黒熊中西遺跡の調査と併行して行った。黒熊中西遺跡の調査では、礎石建物を付帯する、良好な古代寺院跡が検出されており、かなりの時間を有する調査が予想された。このため、黒熊中西遺跡調査班の調査の主力を大幅に充てる調査方針をとったため、本遺跡の調査は急遽、別班の調査班が充てられることとなった。

調査は、平成2年12月より再着手され、本線部分を中心に、奈良・平安時代の集落を検出した。年度末にかかり、調査期間の迫る中、厳冬の凍土や霜柱に悩まされ、急斜面地形も相俟って困難を極めた調査だった。また、調査区中央台地鞍部の上空6m程に、高圧電線が架けられており、当地点での重機使用が不可能だった。そのため、一部手作業による表土掘削を行っている。

平成3年に入ると、道路建設工事工程の都合上、大量の土取りが必要となり、本遺跡の西側斜面を調査終了後ただちに削平する方針となった。このため、本線部分調査における、遺構面における全景写真や航空写真を断念し、直ちに旧石器試掘調査を行った経緯がある。本来ならば、黒熊中西遺跡全体が該当する土取り箇所ではあったのだが、前述のように、良好な古代寺院跡調査の優先があり、本遺跡の比較的遺構密度の希薄な西側斜面がその対象地となった。

以上のように、本遺跡の調査は、上越線調査最終年度の極めて忙しい時期の調査にかかり、多くの労力を割いた調査であった。

第3節 調査の方法

本遺跡の調査は、過去の上越線調査の経験を生かし、例えば急斜面を有す丘陵地形上の調査方法や排土方法、更に安全対策に万全の配慮をし調査を進めた。以下は調査に伴った主な留意点である。

(グリッド設定方法) 遺構・遺物の記録方法として、グリッド設定による調査方法を基本とした。グリッドは、国家座標軸を基準とし、遺跡全域に4m方眼を組んだ。グリッドは、100m単位の大グリッドを設定し、調査対象地域の東からA区を呼称し、西端はE区に及んだ。さらに大グリッド内を前述の4m方眼を元に小グリッドを設定した。小グリッド呼称方法は、X軸をアルファベット小文字で、Y軸を算用数字で表し、各種測量・平面図作成・遺構外出土遺物の取り上げ等を行った。尚、呼称は北東隅の番号をもってグリッドを表した。

(調査手順) 前年度の試掘資料を元に、遺構確認面である、ローム漸移層上層の鈍褐色土まで、重機を使用して表土を掘削した。

遺構確認面は、軟質ローム層上面に堆積する鈍褐色土層下面の漸移層である。しかしながら、漸移層と遺構覆土の色調差が極めて乏しいため、輪郭の判然としない遺構に関しては、やや掘り下げて軟質ローム上面で平面形を確認した。

住居跡の調査は、土層軸を交差させ堆積状態を図化した。住居跡の床面上の状態及び床下の状態は、各々記録し、構築の様相も明らかにするように努めた。竈の土層観察は十字軸を基本としたが、必要な場合は、短長軸とも軸を追加して詳細な観察をした。

重複住居跡は、新住居跡を先に調査する方針を立てたが、平面形による新旧確認が困難な場合が多く、重複状態で検出した住居が多い。その際には、住居間の新旧は土層で確認している。

土坑の土層軸は単軸を基本としたが、大型のものや遺物等の遺存が良好なものは交差軸で観察した。単軸のものは、半割調査で行っている。溝等は特徴的な箇所を選び土層軸を設定した。

上記の遺構調査後、旧石器調査の試掘を行った。

調査深度は、暗色帯下を限度とした黒黒栗崎遺跡の反省を経て、暗色帯下を集中的に精査した。結果的に数点の旧石器遺物を得たが、出土の見られない地点においても、試掘坑各地点で土層図を作成した。

(実測方法) 記録面類は住居跡1/20・竈1/10を基準とした。土坑・溝等も、1/20で記録したが、完形土器の出土した土坑等は1/10で対応した。

全体測量も1/100と1/40平面図を作成した。全体感を把握するため1/200で測量した箇所もある。一部の住居跡床下平面図と全体測量は、業者に委託した。

平面図は、簡易遺り方実測と平板実測を併用した。断面図も1/20・1/10で対応し、水糸レベルを標高で表すようにした。

(遺物の取り上げ) 出土遺物は、全点の出土地点(レベル含む)の記録化を基準としたが、微細片は出土遺構・出土層位を明記し取りあげた。

取り上げは、遺構を重視し遺構内で収束するように番号を付した。遺構外出土遺物はグリッド毎で、番号を付した。

(写真撮影) 写真は、各遺構に対して撮影した。住居跡も遺物出土状態、遺物取り上げ後の床面上の状態(使用面)、床下の状態を各々撮影し、更にカマドも燃焼面と燃焼面下状態、特徴的な遺物の出土状態や土層に際しても、接写を行った。

使用した主な機材として、カメラはブローニー版(120)一眼レフ6×7(ペンタックス)、ライカ版(135)一眼レフ35mm(ニコンFM2)。フィルムはモノクロームネオパンSS及びリバーサルコダクローム64である。尚、通常の写真はブローニー版はモノクローム写真のみを扱った。

また、写真撮影に伴う安全対策の必要上モニタリングカメラを使用し、その際はカメラがキャノンEOS、フィルムがトライXに変更された経緯がある。

(基本整理) 調査途中より、出土遺物の水洗、図面整理を行い、整理作業段階の省力化を図った。

第II章 環 境

本遺跡は、既報告の黒熊中西遺跡(1)・(2)、黒熊架崎遺跡報告書における、周辺の地理的・歴史的環境とはほぼ同環境にあり、本章は、一部の改編はあるが、前掲報告書より再掲載の形態を取る。

第1節 地理的環境

黒熊八幡遺跡は、群馬県多野郡吉井町黒熊に所在する。鍋川右岸の段丘上に占地し、吉井町と藤岡市の行政境に接する。

鍋川は、南牧村南牧川と下仁田町西牧川を合わせ、群馬県西部を東流し、藤岡市鮎川と合流した後、高崎市阿久津町で烏川と流れを重ねる。鍋川は、鮎川と合流するまでの間、兩岸に河岸段丘を発達させて、これら各段丘面及び沖積地は、当地域の居住・生産・文化・交通の要所となっている。

さて、この鍋川が形成した段丘は右岸において特に顕著であり、吉井層を基盤とした低位・中位・高位と三面の段丘が位置付けられている。また、南側の最上位には、丘陵性の山地地形が展開し、「多野山地」に延長する。ただし本遺跡の南側の丘陵性の山地は鮎川扇状地と土合川沖積地によって挟まれた恰好となり、独立した様相を呈す。

鍋川右岸に横列する河岸段丘は、鮎川によって収束するが、特に高位段丘と丘陵性山地地形は本遺跡周辺が最も東端に位置するといえよう。鮎川以東は、鮎川及び神流川の氾濫等によって形成された藤岡台地が面し、関東平野へと更に広がる。換言すれば、本遺跡周辺は丘陵性地形(山地形)と平坦地形(平野)との接点ともいえるのである。

鍋川右岸段丘では中位段丘面が広い面積を誇る。洪積台地であり、給排水・日照なども利便な要素が内在し、現在も集落・畑といった土地利用が頻繁で、低位段丘とともに人間活動の拠点ともなっている。本遺跡も、この中位段丘と高位段丘との境界に接し、中位段丘上集落と高位のそれとの比較検討課題は多い。高位段丘と中位段丘との接点は、比較的明確

な地形変換線で見られている。高位段丘は丘陵性の地形を主とするが、中位段丘は平坦地形を保証した形態となる。そのため、集落遺跡は中位段丘上に濃密な分布状態を呈しており、この延長から高位段丘の裾部へと集落が広がる様相を呈している。本遺跡の奈良・平安時代集落はこの中位と高位段丘の集落分布を具現化しており、中位段丘集落の高位段丘への進出をも示唆している。

この中位段丘上の地形は、北側へ緩やかな傾斜を呈す平坦地形が主だが、樹枝状に伸びた沖積地が各小河川を中心に台地を刻む。特に本遺跡北側では鮎川下流域へ伸びる沖積地が複雑に台地を分割しており、この沖積地の土地利用と画された台地の集落分布が集落の性格の側面を表していると考えられる。

本遺跡は、第2図にもあるように中位段丘と高位段丘の変換線にあたり、および周辺を沖積地が囲む形態をとっている。中位段丘と高位段丘及び丘陵性山地、更に沖積地を近距離に持つ地理的条件は、鍋川右岸河岸段丘上の遺跡群の中でも本遺跡及び周辺は特筆する要素を示している。

次に低位段丘を概観すると、中位段丘との変換線を崖線で画す場合が多く、地形成因は大きく異なる。沖積地とは緩傾斜を連続し平坦地形が保証されているため、中位段丘とともに積極的な土地利用・開発が集中し、吉井町の中心部分ともなっている。集落遺跡・郡衙・寺院跡等多くの包蔵地も予想されており、当地域の低位段丘への進出が、古代より積極性を持って果たされていた動態が理解されよう。

沖積地は前述の土合川・矢田川更に鍋川流域で確認され、水田等の土地利用がなされている。前述した本遺跡周辺の沖積地は、本遺跡背後の丘陵性山地中の湧水より小谷が発達し、樹枝状に段丘を刻む。これら小谷は本遺跡の北側で一一致し、狭小ながらも連続して鮎川へと北流する。現状も水田地帯としての利用が果たされており、周辺地域の水田耕作を考える際には重要な地形と位置付けられよう。尚、小谷の谷頭は湧水利用の貯水池が設けられている。



第2図 周辺の地形区分
 国土地理院2万5千分の1「高崎」「富岡」「群馬」「上野吉井」使用

第2節 歴史的環境

本節では、周辺の遺跡を概観するが、既に当該地域では一連の上信越線調査に伴う報告書により、歴史的環境が詳細に述べられている。各報告書も併せて参照していただきたい。

(旧石器時代) 藤岡市教委が積極的に調査をしている。古くは竹沼遺跡(37d)が著名である。報告書では、表採・住居跡覆土出土資料にもかかわらず、両面加工石器・播器・石核が報告され出土層位も軟質ロームと想定している。当時の群馬県内の旧石器時代調査レベルを勘案するに画期的な報告といえよう(小島1978 文献25)。その後、藤岡市教委は藤岡北山遺跡・山間遺跡・緑埜上郷遺跡(38h)等の旧石器時代調査を重ね、また、緑埜島遺跡(38k)や三ッ木東原遺跡(10a)・白石中郷遺跡(18)の表採品を資料化している。A T前後の石器としては、緑埜上郷遺跡(38h)出土の剥片や緑埜島遺跡(38k)のナイフ形石器が知られる。また、三ッ木東原遺跡(10a)・白石中郷遺跡(18)では軟質ロームに層位比定される槍先形尖頭器が出土している。

吉井町内では、一連の上信越線調査による例が充実する。出土層位はA T下に集中する。多比良追部野遺跡(19)では石器ユニットが6箇所、矢田遺跡では、1箇所が確認され、本遺跡(22)でもA T下より数点の石器が出土している。吉井町教委調査においては、新堀城跡(34)において尖頭器が表採されている(文献2)。

(縄文時代) 上位・中位段丘上に多くの遺跡が分布する。傾向としては前期遺跡が比較的多いが、調査例を重ねるに従い、他の時期も様相が明らかになるだろう。また、当地域の縄文時代遺跡分布は鬼形方夫・内木真琴の作業に詳しい(鬼形・内木1988)同様に参照していただきたい(文献35)。

草創期・早期:本遺跡に近接する黒熊遺跡群(14)で槍先形尖頭器が出土している。その他では、竹沼遺跡(37)・白石北原遺跡(10d)で有舌尖頭器や尖頭器の出土が報じられ、東原DI遺跡(10b)、入

野遺跡(13)では押型文の出土が見られる。

前期:前半の関山式・黒浜式期はやや劣勢である。多比良追部野遺跡では住居跡1軒が検出されている。後半の諸磯式期は遺構・遺物とも各段丘上で確認されている。特に従来b式からc式の遺跡の動態は上位の段丘に集中する傾向が指摘されているが、近年の調査により、低位段丘の遺跡例えば藤岡市滝下遺跡等の存在が知られている。中位・高位段丘の遺跡としては入野遺跡(13)・黒熊第5遺跡(14)・白石根岸遺跡(25)が挙げられ、数軒の住居跡が確認されている。

中期:前半段階の遺跡は少ないが、遺物の出土は多く見られるため、おそらく集落遺跡も中位段丘を中心に存在すると思われる。初頭期の遺跡としては、藤岡北山遺跡や本遺跡で五ヶ台式土器を出土した住居跡が、薬師原遺跡(27)では土坑が調査されており注目したい。

中業段階でも目立った遺跡は無いが、吉井町誌(文献2)等で個人所蔵の阿玉台式土器等が紹介されており、出土地点からも遺跡は中位段丘に占地するものと思われる。

後半の加曾利E式期になると調査例は多い。中位段丘に限らず、小串塚原遺跡(9)のように低位段丘にも分布が見られる。加曾利E1式あるいは出現期の竹沼遺跡(37)、数軒住居跡を検出した白石大御堂遺跡(26)は著名である。その他では薬師原遺跡(27)や藤岡平地区遺跡群(48)・白石北原遺跡(10)等で住居跡や土坑が検出されている。

後・晩期:低位段丘上や鮎川沖積地・原状地上の遺跡が知られる。特に藤岡市の一連の調査では、良好な遺跡群を確認している。例えば、緑埜地区遺跡群(38)内の鍛冶谷戸遺跡(38d)では堀之内式土器や加曾利B式土器の出土が見られ、さらに安行3b式・大洞B-C式が出土する土坑を検出している。薬師原遺跡(27)では称名寺式を伴う土坑が調査された。吉井町内では小串塚原遺跡(9)や黒熊栗崎遺跡(23)等で後期~晩期の土器片が出土しているがやや希薄な存在である。その他、第4図範囲

外だが藤岡市谷地遺跡・山間遺跡・薬師裏遺跡・神明北が当該期の遺跡として著名な存在である。

(弥生時代) 遺跡数は多くはない。中期初頭期に比定される藤岡市沖Ⅱ遺跡は沖積地に進出した該期遺跡として北関東地域屈指の評価を得ている。第4区内では白石大御堂遺跡(26)で遠賀川式系の壺形土器や岩櫃山式系の甕形土器が出土している。緑地遺跡群緑地郷遺跡(38h)でも破片の出土を見る。

その他の中期の遺跡では第4区範囲外で神保富士塚遺跡や神保植松遺跡・長根羽田倉遺跡が上信越自動車道関連の調査で良好な資料を提供している。

後期になると、鍋川中位段丘を中心に遺跡数は増加する。入野遺跡(13)・黒熊遺跡群(14)・多比良追部野遺跡(19)等で集落跡が検出されている。これら後期集落は大型の台地上に営まれる傾向が窺われ、人口の増大及び労働力の結集等の必要性が背後に存在し、大型化へと発展していったのであろう。大型集落は周辺地域との接触も頻繁であり、出土する土器からもその交換と融合の様相が看取されよう。

(古墳時代) 当地域の古墳は、県下においても濃密な分布を誇る。しかし本遺跡は、該期の遺構、特に古墳そのものが検出されておらず、本節では、周辺の集落遺跡を概観するに止どめたい。

前期の集落跡としては、前述の多比良追部野遺跡(19)や入野遺跡(13)が鍋川右岸中位段丘上に営まれる。鮎川流域では竹沼遺跡(37)で弥生終末～初頭期の住居跡が確認されている。

中期は緑地地区遺跡群(38)や薬師原遺跡(27)に顕著な住居跡が確認されている。

後期は中位段丘に色濃く分布する。おそらく、各中位段丘に分布するといえよう。入野遺跡(13)・黒熊遺跡群(14)・多比良追部野遺跡(19)・白石大御堂遺跡(26)・東沢遺跡(28)・竹沼遺跡(37)・緑地遺跡群等(38)は大型集落跡の一部であろう。段丘面としては高位及び低位段丘に集落跡が少ない。水田跡等の生産遺構の検出も無く、特に低位段丘における該期集落跡・生産跡の検出が望まれよう。

(奈良・平安時代) 集落跡は古墳時代後期と継

続して中位段丘に分布する。ただ高位段丘への進出が著しく、黒熊崎崎遺跡(23)・本遺跡・黒熊中西遺跡(21)等の急傾斜地形への住居跡立地も目立つ。おそらく低位段丘へも積極的に居住が行われており、鍋川左岸の包蔵地(1~7)や右岸低位段丘の遺跡(8・9)や土合川流域の低位段丘上の多比良平野遺跡(20)が相当しよう。多胡碑もこの低位段丘上に位置し、馬庭東遺跡(5)のように官衙・寺院跡等の存在も予想されている遺跡も多い。

さらに、高位段丘にも該期の寺院跡が占地する。礎石建物数棟を調査した黒熊中西遺跡がその代表だが、本遺跡の南側にも塔・峰庵寺(24)が存在し、本遺跡でも瓦の出土が見られ、周辺に寺院跡の存在を予測しておきたい。

高位段丘の南側には丘陵性山地が控え、瓦・須恵器を対象とした窯跡群が存在する。滝の前窯跡(35)産出の瓦は国分寺補修期のもものとされ平安時代以降の瓦窯といわれる(須田1989 文献19)。下五反田窯跡(36)は国士館大学が調査し、9世紀末～10世紀の所産と位置付けている。その他では金山窯跡は国分寺創建期の瓦窯とされ、末沢窯跡は8世紀中頃と比定されている。また、藤岡・吉井窯跡群(44)は近年藤岡市教委が下日野・金井窯跡群(44d・e・f)として、16基の窯跡を調査した。また、その他に製鉄が4基も併せて検出している。

該期のその他の生産遺構としては、鮎川沖積地の緑地地区遺跡群で水田・畠と溜井が調査され、白石根岸遺跡と黒熊八幡遺跡で沖積地の谷頭部分のAs-B下水田跡が確認されている。また、鍋川左岸低位段丘や沖積地では、現状で調査例が見られないが、存在は確定的で、今後の調査蓄積に期待が集まる。

(中・近世) 中世の遺構としては白石大御堂遺跡(26)で、寺院跡に伴う園池・土塁・掘立柱建物跡等が特筆されよう。また、各遺跡とも中世火葬墓・井戸・掘立柱建物跡等の遺構を確認されている。また新堀城跡(34)・中ノ原城跡(42)・飛石の砦(48d)・平井城等城跡跡も山地部分に多く分布している。



第3図 周辺の遺跡分布図 (国土地理院2万5千分の1「高崎」「藤岡」使用)

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名所	旧	縄	弥	古	奈良	瓦	室	中	近	遺跡の概要	参考文献
1						○					鍋川左岸の低位段丘面に位置する。	
2							○				鍋川左岸の低位段丘面に位置する。	
3	下山遺跡									○	富岡丘陵の南、鍋川左岸の低位段丘。As-A埋没の堀・溝跡。	1
4			○		○	○	○				鍋川左岸の低位段丘面に位置する。	
5	馬庭東遺跡		○			○	○				鍋川左岸の低位段丘面。寺院跡（禪定多胡寺）といわれる。軒平瓦・軒丸瓦採集。	2
6			○			○					鍋川左岸の低位段丘面に位置する。	
7							○				鍋川左岸の低位段丘面に位置する。	
8			○				○	○			鍋川右岸の低位段丘面に位置する。	
9	小串塚原遺跡		○	○		○				○	鍋川右岸の低位段丘面の微高地。縄文中～晩期・弥生時代包含層、平安時代住居、中世遺物。	3
10	東原遺跡		○			○					粘川左岸の中位段丘面に位置する。	
a	三ツ木東原遺跡	○									緒先形実須器の表採資料。	4
b	東原遺跡 (D ₁)		○	○	○						縄文時代早・前・中期の土器、古墳2基、平安住居1軒、他。	
c	東原Ⅱ遺跡 (D ₂)		○		○					○	縄文中期土器、奈良～平安住居9軒、中世土塚1基、他。	
d	白石北原遺跡		○			○				○	縄文時代中～後期住居・草創期石器・前期土器、平安時代柱穴、中世溝、近世建物跡・溝。	5
11	祝神遺跡		○								鍋川右岸の中位段丘面に位置する。95片の表採資料。	6
12	千保原遺跡		○		○	○					鍋川右岸の中位段丘面に位置する。	
13	入野遺跡		○	○	○					○	鍋川右岸の中位段丘面に位置する。縄文前期・弥生後期・古墳前後期の集落、中世の墓塚。	2・7 8・9 10
14	黒熊遺跡群		○	○	○	○	○				鍋川右岸の中位段丘面に位置する。縄文～平安時代の集落、方形周溝墓。	3・11 12
15	三ツ木横向遺跡										鍋川右岸の中位段丘面。時期不明の溝を検出。昭和58年調査。	
16						○	○				鍋川右岸の中位段丘面に位置する。	
17			○								鍋川右岸の中位段丘面に位置する。	
18	白石中郷遺跡	○									粘川支流の猿田川左岸、河岸段丘面に位置する。緒先形実須器の表採資料。	4
19	多比良追部野遺跡	○	○	○	○	○	○			○	鍋川右岸の中位段丘面に位置する。旧石器～奈良・平安時代の集落遺跡、中近世の墓・墓塚・遺、近世溜池。	13・14 15
20	多比良平野遺跡					○					中西丘陵と多比良台地に挟まれた土合川右岸の河岸段丘面に位置する。平安時代の住居跡。	16

第Ⅱ章 環 境

番号	遺 跡 名 所	旧	縄	弥	古	会 平	瓦	窯	中	近	遺 跡 の 概 要	参 考 文 献
21	黒旗中西遺跡		○		○	○				○	鍋川右岸の高位段丘面に位置する。古墳～平安時代の住居・礎石建物・井戸・土坑、他、寺院跡。	17・18
22	黒旗八幡遺跡	○	○		○	○				○	本報告の遺跡。鍋川右岸の高位段丘面に位置する。縄文～平安時代の住居跡。	
23	黒旗栗崎遺跡	○	○		○	○				○	鍋川右岸の中心・高位段丘面に位置する。	19
24	帯之峰遺跡						○	○			鍋川右岸の高位段丘面。寺院跡といわれる。瓦・土器等表採。	2・20
25	白石根岸遺跡	○				○					鍋川左岸の中心位段丘面東部。縄文前期住居、奈良・平安住居、他。	16
26	白石大御堂遺跡	○		○	○	○				○	鮎川左岸の沖積低地～ローム台地上部に位置する。縄文時代中期住居、中世寺院跡。	4・21
27	薬師原遺跡 (F ₁)	○		○						○	鮎川左岸の東と西の沖積低地に挟まれた南北にのびる台地上。縄文・古墳時代住居、中世ビット列、他。	4・22
28	東沢遺跡		○	○	○	○					鍋川右岸の中心位段丘面に位置する。古墳～平安時代の住居跡。	23
29			○		○	○					鍋川右岸の高位段丘面に位置する。	
30			○		○	○					鍋川右岸の高位段丘面に位置する。	
31			○								鍋川右岸の高位段丘面に位置する。	
32			○		○	○					鍋川右岸の高位段丘面に位置する。	
33								○	○		鍋川右岸の高位段丘面に位置する。	
34	新堀城跡	○	○							○	土合川に解析された高位段丘面に位置。旧石器・縄文表採。	2・24
35	滝の前遺跡									○	土合川を南に遡った谷あい。窪跡あるいは灰原の一部と思われる部分が露出。	19
36	下五反田遺跡									○	土合川右岸の山裾斜面。昭和51年地下式無階無段登窯2基と灰接場を調査。	10・25
37	竹沼遺跡 (F ₁)										鮎川左岸、多野山地に続く丘陵上に位置する。	
a						○					昭和48年度調査古墳時代後期の住居1、溝3。	4・10
b						○					昭和50年度調査古墳時代後期の住居。	12・26
c						○	○				昭和51年度調査古墳～平安時代の集落。	
d		○	○	○	○	○					昭和52年度調査旧石器・縄文～平安時代の包蔵地、集落。	
e	西平井島遺跡					○	○			○	古墳～平安時代の住居、中世型穴・墓塚、他。(F ₁₃)	4・27
f	西平井天持遺跡									○	中世の石組み井戸 (F ₁₃)	
g	西平井八幡遺跡					○	○		○		古墳～平安時代の住居・窯跡・溝、他(F ₁₃)	

番号	遺跡名所	旧	縄	弥	古	奈 平	瓦	中	近	遺跡の概要	参考文献
38	緑地地区遺跡群									(F ₁)	
a	緑地遺跡群	○	○	○				○	○	鮎川左岸。台地の竹沼・緑地土層地区、低地の緑地地区を調査。	15
b	緑地地区水田遺跡			○						鮎川左岸の沖積地。平安時代の水田・灌井・畠。	4・28
	大御堂遺跡	○						○	○	鮎川左岸の沖積微高地。縄文時代後期土器、中世掘立柱建物。	
c	緑地押出し遺跡	○		○						鮎川左岸の微高地。縄文時代後期土器、奈良・平安時代集落。	4・29
d	緑地鍛冶谷戸遺跡	○								鮎川左岸の小規模な段丘上。縄文時代後期配石墓、土坑群。	4
e	緑地シモ田遺跡	○								鮎川左岸の沖積地。縄文時代後期土器 1基。	4
f	緑地水押遺跡	○	○							鮎川左岸の沖積地。縄文中期、古墳時代集落。	4・29
g	緑地中郷遺跡	○								鮎川左岸の洪積台地。縄文時代中期。	
h	緑地上郷遺跡	○	○	○	○				○	鮎川左岸の洪積台地上。旧石器出土。古墳時代集落、近世屋敷。	4・29
i	中里遺跡				○			○	○	鮎川左岸の洪積台地上。奈良時代集落、中・近世の土坑・井戸。	4・29
j	大工ヶ谷戸遺跡	○		○						鮎川左岸の洪積台地上。縄文前期～中期、奈良・平安時代集落。	4・29
k	緑地鳥遺跡	○	○	○						鮎川左岸の洪積台地上。旧石器出土。古墳時代集落。	4・29
l	五領遺跡	○								鮎川左岸。縄文時代前期。	
39		○					○				
40		○					○				
41		○					○				
42	中ノ原城跡	○	○	○	○			○		多野丘陵の土合川に侵食された台地上。縄文土器、古墳 2基。	2・30
43	不動沢遺跡						○				2
44	藤岡・吉井遺跡群									多野・藤岡丘陵。	
a	山ノ神A							○		須恵器散布。	19
b	山ノ神B							○		瓦散布。	
c	山ノ神C							○		須恵器散布。	
d	下日野・金井 _f							○		竪穴 2基発掘。	4
e	下日野・金井 _h							○		竪穴 1基発掘。	
f	下日野・金井 _a							○		竪穴 4基発掘。	
45								○			
46	上ノ場遺跡						○			寺院跡小。軒丸瓦・軒平瓦・土器出土。	20

第Ⅱ章 環 境

番号	遺跡名所	旧	縄	弥	古	奈	瓦	中	近	遺跡の概要	参考文献
47	西平井久保田代遺跡		○	○	○		○		○	船川左岸台地上。縄文前期住居・中期土坑、古墳—平安時代の住居、竈跡。近世遺状遺構。	31・32
48	藤岡平地区遺跡群									船川右岸、藤岡台地上の扇状地地形の扇頂部に位置する。	
a	飛石A (F _a)		○	○						縄文時代中期土坑・配石状遺構、古墳3基。	4
b	飛石B		○							縄文時代中期。	
c	F ₁₆		○		○			○	○	縄文時代中期住居・集石、古墳9基、平安時代住居、他。	33
d	東平井塚遺跡		○	○				○	○	縄文時代後期土坑、古墳周堀、飛石の啓。近世遺状遺構。	14・31 34
e	東平井官前遺跡					○		○	○	奈良—平安時代の住居、中世井戸、近世倉・溝。	15・31
f	F ₁₂		○	○	○				○	縄文時代中—後期の住居・配石等、古墳—平安時代の住居・水田、中世井戸、他。	27・35

参考文献

- 1 茂木由行「下山遺跡」1990 吉井町教育委員会
- 2 吉井町誌編さん委員会「吉井町誌」1974
- 3 矢島伸「東京遺跡思想第1遺跡発掘調査報告書」1983 吉井町教育委員会
- 4 藤岡市史編さん委員会「藤岡市資料編原始・古代・中世」1993 藤岡市
- 5 田野倉武男・志村賢「市内遺跡1」1993 藤岡市教育委員会
- 6 外山和夫「群馬県吉井町祝神の発生土器」『信濃34巻4号』1982 信濃史学会
- 7 尾崎喜左雄「入野遺跡」1962 吉井町教育委員会
- 8 茂木由行・矢島伸「入野遺跡」1985 吉井町教育委員会
- 9 茂木由行「入野遺跡Ⅱ」1986 吉井町教育委員会
- 10 群馬県史編さん委員会「群馬県史資料編2原始古代2」1986 群馬県
- 11 茂木由行「黒熊遺跡群発掘調査報告書(1)～(5)」1981～1985 吉井町教育委員会
- 12 群馬県史編さん委員会「群馬県史資料編1原始古代1」1988 群馬県
- 13 「年報8」1989 群馬県歴史文化財調査事業団(以下群馬文)
- 14 「年報9」1990 群馬文
- 15 「年報10」1991 群馬文
- 16 斎藤利昭「多比良平野遺跡白石根印遺跡」1994 群馬文
- 17 須田茂「黒熊中西遺跡1」1992 群馬文
- 18 山口逸弘「黒熊中西遺跡2」1994 群馬文
- 19 山口「黒熊架崎」1995
- 20 須田茂「吉井町・滝ノ原遺跡の採集遺物とその性格」『群馬文化誌220号』群馬県地域文化研究協議会
- 21 鎌賀親次郎「白石大御堂遺跡」1991 群馬文
- 22 古郡正志「F₉東郷原遺跡」1985 藤岡市教育委員会
- 23 茂木由行「東沢遺跡折茂東遺跡」1987 吉井町教育委員会
- 24 茂木由行「新堀城跡」1991 吉井町教育委員会
- 25 戸田有二他「群馬県吉井町下五反田・未沢遺跡他」『考古学研究室発掘調査報告書』1984 国士館大学文学部考古学研究室
- 26 前原豊他「F₁竹沼遺跡」1978 藤岡市教育委員会
- 27 茂木伸「年報7」1992 藤岡市教育委員会
- 28 田野倉武男他「F₂緑整地区遺跡群Ⅱ」1987 藤岡市教育委員会
- 29 古郡正志・田野倉武男「F₂緑整地区遺跡群Ⅰ」1982～1985 藤岡市教育委員会
- 30 茂木由行「中ノ原城跡」1989 吉井町教育委員会
- 31 石守晃「飛石管跡東平井塚周・官正前・土井下遺跡西平井久保田代遺跡」1994 群馬文
- 32 「年報12」1993 群馬文
- 33 寺内敏郎「F₁₅藤岡平地区遺跡群Ⅲ」1992 藤岡市教育委員会
- 34 「年報11」1992 群馬文
- 35 古郡正志「F₁₅藤岡平地区遺跡群Ⅰ」1990 藤岡市教育委員会
- 36 鬼形芳夫・内木真琴「鍋川右岸下流域段丘上における縄文時代遺跡分布調査」『群馬の考古学』1988 群馬文
- 37 川原嘉久治「西上野における古瓦敷布地の様相」『研究紀要-10-』1992 群馬文

第三章 検出された遺構と遺物

第1節 概要

黒熊八幡遺跡の発掘調査では、旧石器時代・縄文時代・奈良・平安時代・近世～現代に至る集落跡を中心とした遺構・遺物を検出した。この様相は、周辺の遺跡と大きな差はなく、鍋川右岸中段段丘～高位段丘の丘陵性台地でも、集落遺跡は存在しており、生活に伴う活動領域の拡大が、丘陵に及んだ例として把握できよう。本遺跡や一連の上越線調査は、横列する丘陵性台地を東西に横断する形態となり、各台地の諸様相が明らかになった。

特に、本遺跡では西斜面部の旧石器時代調査において、少量ながら暗色帯中より石器が出土している。周辺遺跡～特に吉井町内では、多比良追辺野遺跡で同時期の石器が出土しており、本遺跡を含めた、当地域の旧石器時代様相が徐々にではあるが判明するものと期待される。

次に、縄文時代の調査では、前期後半～中期前葉の住居跡5軒(80号～84号住居跡)や土坑を検出した。住居跡は台地高標高部と東斜面裾部下位の谷頭部の2箇所確認されており、散漫な分布状況を示す。2箇所とも調査区域外に延長する傾向を見せるが、集落規模は小規模と捉えられよう。出土遺物は若干貧弱で、各遺構の詳細な性格を提示するには至らなかった。

しかしながら、出土した遺物の主体は、中期前葉の資料であり、当地域のみならず希少な例であり、貴重な遺物群と捉えている。

また、一連の上越線調査で黒熊地区では、本遺跡のみが縄文時代の住居跡を検出しており、一応の結果を得ている。

本遺跡では、弥生時代・古墳時代の遺構・遺物は客体的な存在である。弥生時代のそれは全く痕跡も見いだせず、僅かに古墳時代後期に比定される7号住家が7世紀後半の所産と捉えられている。この段階では、高位段丘への開発進出は果たされなかったのであろうか。

奈良・平安時代になると、積極的な居住痕跡が認められる。検出された住居跡は、台地全域にわたり、高標高部分から斜面裾部にいるまで満遍無く確認されている。時間的には、8世紀前半より10世紀前半にいたるまで、比較的長期間の居住が認められている。重複住居跡も多く、東側の斜面部においても、緩やかな平坦地形に近い傾斜地で群をなして検出された。概ね幾つかの一群を形成するが、C～D区北側にあたる、東斜面部の住居群が濃密な重複・近接状況を呈している。

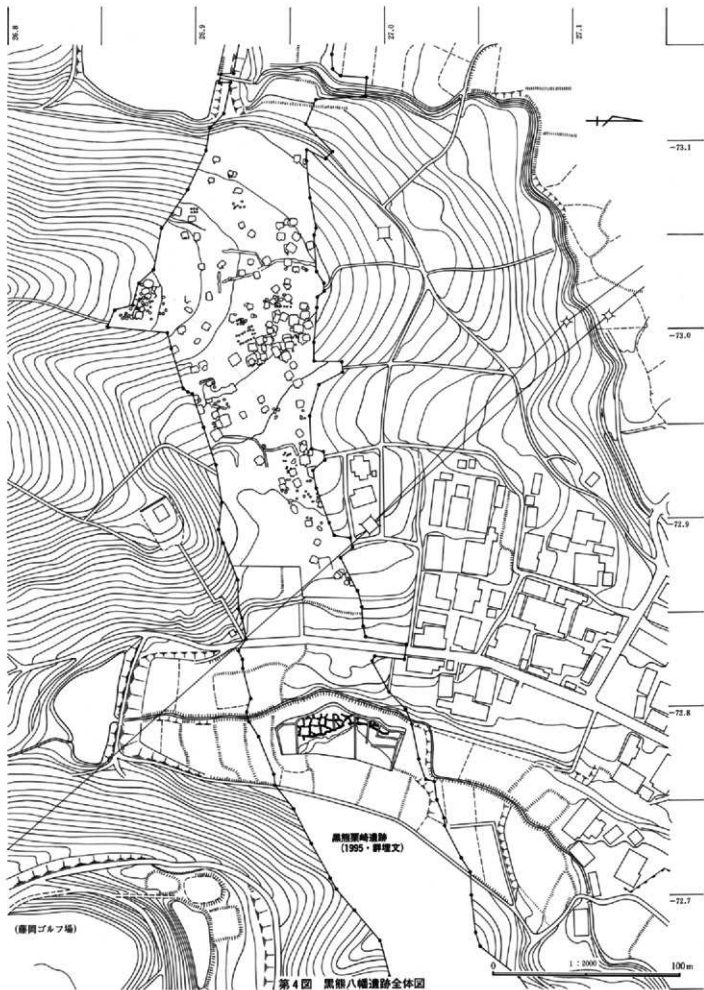
さらに、南側の高標高部や西側の急斜面地形においても住居跡は、集中はしないが、ある程度の分布は見られ、居住に適さない地点にも占地する傾向は看取された。この背景には、南側調査区域外の山地部分にその存在が予想される寺院跡あるいは関連施設が影響するものと考えられ、黒熊中西遺跡で指摘された寺院併設型集落の一端と捉えられる。この南側の高標高部分や急傾斜地形には、1号・3号掘立柱建物跡や礎石建物跡や配石遺構が検出されており、これらは、寺院跡関連施設の一部の可能性が高い。

一方、北側のC～D区東斜面部住居群には、礎石建物や複数の掘立柱建物は伴わず、溝持ち掘立柱建物である2号掘立柱建物跡が検出されたのみである。北側緩傾斜地形を念頭におくと、寺院跡のような特定施設よりも積極的な居住域への関与が妥当と思われる。

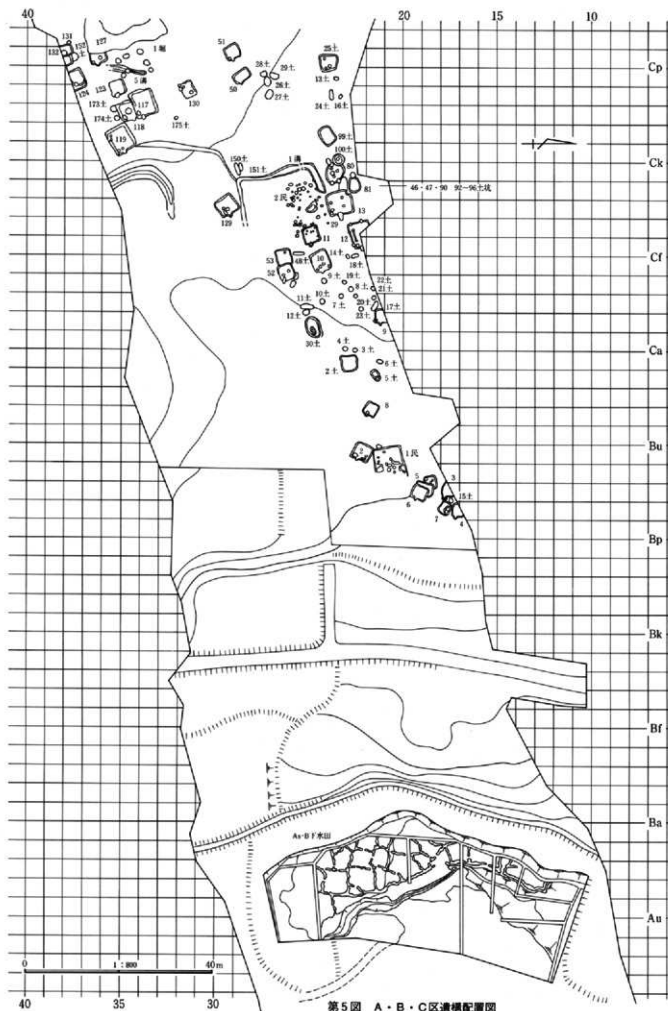
東側のA区低地部分には、浅間B軽石下(A5～B下)の水田跡が確認された。遺存状態は不良で、花粉分析・プラントオパール分析においても、濃密な資料は得られていないが、該期当地域の低湿地開発の一端が把握された。

その他の奈良・平安時代の遺構としては、多数の土坑が検出されたが、墓塚と思われる土坑数基が確認された。完形の埴・椀類が出土している。

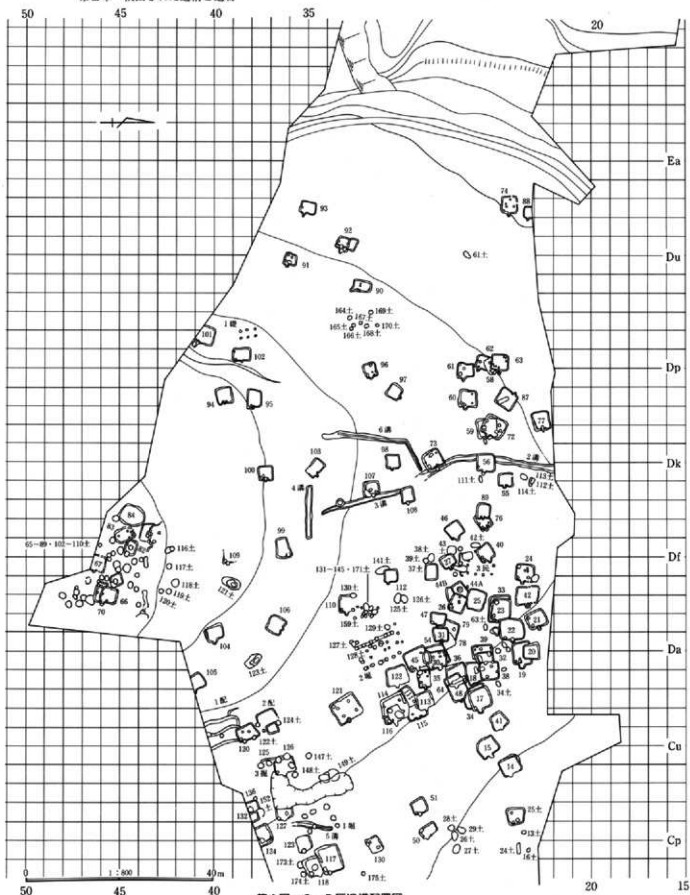
近世～近代では、東側斜面部で1号～3号の民家跡が把握された。あるいは、1号民家は墓塚として位置付けられよう。2号・3号民家は上層が存在していたものと考えられる。



第4図 黒瀬八幡遺跡全体図

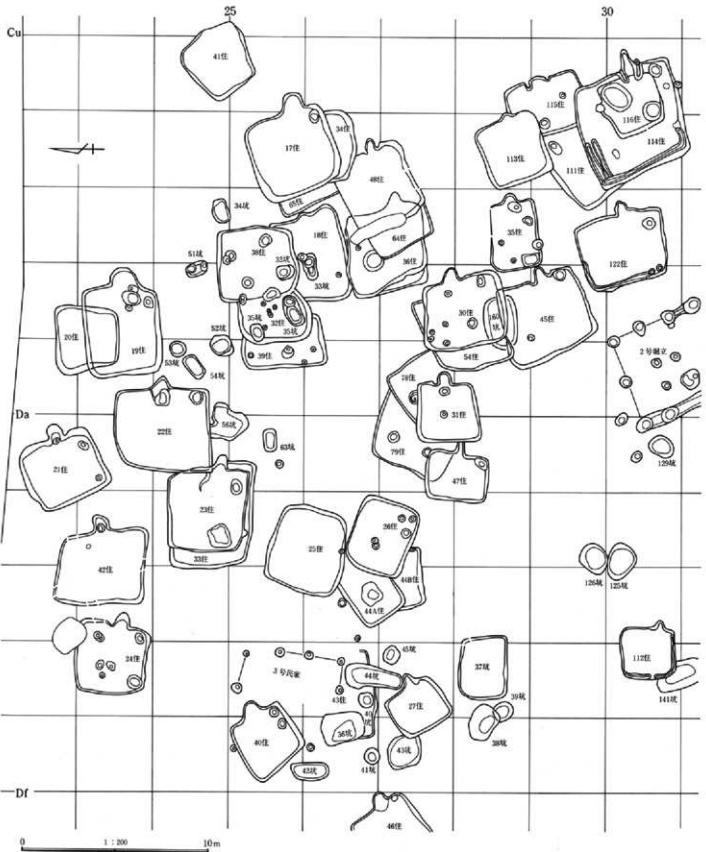


第5图 A·B·C区遗址配置图



第6図 C・D区遺構配置図

第1節 概要



第7図 C・D区遺構配置図

以上のように、本遺跡で検出された遺構・遺物の主体となる資料は、奈良・平安時代の堅穴住居跡を中核に据えた集落跡であり、鍋川右岸丘陵性台地に展開する該期集落の一部である。これらの集落跡の性格付けは、今後の資料蓄積を待ちたいが、周辺には黒熊中西遺跡・黒熊栗崎遺跡といった、同時期の集落が群在する様相を見せており、古代集落の拡散状況が把握されよう。黒熊地区の丘陵性台地は居住には必ずしも適しているとは言えず、急激な斜面地形などは、住居設営には積極的に選定する箇所ではない。また、日照面や水利面もやや不適といえ、安定的に長期間の居住が果たされる地形ではない。

にもかかわらず、本遺跡の住居跡群の様相は、長期的な居住を指向した痕跡が多々見られる。このことから、本遺跡のような、丘陵性台地に居住する集落の背後関係を明らかにする作業が求められ、今後の当該地域の該期集落研究の一要素となろう。

先に報告した、黒熊中西遺跡と黒熊栗崎遺跡では、南側の山地地形に、古代寺院跡の存在が指摘されており、この両遺跡に挟まれた丘陵性台地に位置する本遺跡でも、南側に古代寺院跡の存在を予想している。ただし、明確な寺院跡遺構としては検出されておらず推定の域は出ていない。しかしながら、その可能性は高く、本遺跡で検出された住居跡群の一部はいわゆる寺院併設集落としての性格付けが果たせられよう。このことは、遺構分布のみならず、出土古瓦の分布にも散漫ながら偏りが見られ、南側に瓦葺き建物の存在が予測されている。先に述べた、礎石建物や1号・3号掘立柱建物跡にも関連性が求められよう。

このように、本遺跡の古代集落跡は、丘陵性台地にまで居住域を延ばした、当時の集落景観を具体化する。本書では、南側の山地地形に予想される寺院跡に関連を求めているが、今後の検証をさらに重ねるべきであろう。

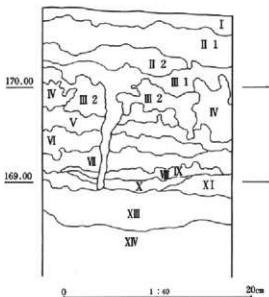
第2節 基本土層

本遺跡の基本土層の概要を述べる。

本遺跡は鍋川右岸中段丘と高位段丘の境に位置し、丘陵性の起伏に富んだ地形を呈する。調査では各地点の層位を記録化したが、本書では最も遺存度の高い土層を選び、基本土層とした。周辺遺跡の基本土層との比較の際に参考にしていただきたい。

以下各層の説明を述べる。

- I 層 表土層
- II-1層 暗褐色土浅間A軽石 (As-A) 混土層。地点によっては堆積の見られない箇所もある。
- II-2層 純褐色土層地点によってはAs-Bが見られる。奈良・平安時代の遺物包含。下面遺構確認。
- III-1層 ローム層移層ローム質だが粘性弱く軟質。縄文前-中期の遺物包含。
- III-2層 黄褐色ローム層軟質ローム層。下面に不連続面
- IV 層 黄褐色ローム層硬質ローム層
- V 層 黄褐色ローム層硬質。浅間板敷褐色軽石 (As-BP) を粒状に含む
- VI 層 黄褐色ローム層硬質。浅間板敷褐色軽石 (As-BP) を塊状に含む
- VII 層 明褐色ローム層軟質。浅間田軽石 (As-MP) を粒状に含む
- VIII 層 明褐色ローム層軟質。浅間田軽石 (As-MP) を塊状に含む
- IX 層 明褐色ローム層軟質。浅間田軽石 (As-MP) を主体とする。下位に深い白色化する
- X 層 黄褐色軽石層軟質。浅間田軽石 (As-MP) を主体とする。
- XI 層 褐色ローム層硬質。やや暗い色調を呈す。暗色帯上面
- XII 層 灰褐色ローム層著しく硬質。暗い色調を呈す。暗色帯相当層。上面AT極大値
- XIII 層 灰褐色ローム層著しく硬質。やや明るい色調を呈す。小礫を混入する。



第8図 基本土層

第3節 旧石器時代

黒熊八幡遺跡では、旧石器時代に比定される石器4点が出土している。

出土地点は、D区西斜面部にあたり、出土層位は第V層の暗色帯相当層である。

本遺跡の地形は、前々節で述べたように、丘陵性の台地における南北の鞍部を中心に比較的勾配の強い東及び西斜面地形で占められており、平坦地形を呈する箇所は極めて少ない。調査区域外においても、斜面地形は連続し、特に南側は急激な山地状の斜面が展開する。北側は、緩やかな東・北側への斜面であり、縄文～奈良・平安時代の集落の中心部も北側の調査区域外に延びるものと考えられている。

このことから、本遺跡が占地する丘陵性台地は、水利・日照という条件下の元では、居住にはやや適さない立地条件であり、生業等の制約が無い限りは、北側の低位標高部分に居住が集中する傾向が見られる。無論、この傾向は縄文時代にも顕著で、高標高部分に検出された中期初頭期の遺構以外は、低位標高部に遺構が集中する傾向がみられ、表面採集による土器の散布も北側に偏る。

旧石器時代の遺跡立地環境は、当地域では明らかにはなっていないが、水利・日照を優先的な立地条件とした場合、本遺跡の条件は必ずしも該当せず、丘陵性台地の高位標高部分では、遺構・遺物の検出は稀薄なものと考えられた。しかしながら、本遺跡の基盤となるローム層は非常に遺存状態もよく、急斜面地形とはいえ、旧石器時代の遺物の出土は充分予想され、調査着手時より、試掘調査の必要性は認識されていた。

また、本遺跡周辺一帯に黒熊地域の旧石器時代調査は、上越線建設に伴う一連の調査が著書である。黒熊栗崎遺跡より東側の藤岡市周辺では、旧石器時代を射程に入れた調査方針が常に執られており、同一の地形である黒熊地区に関しても、同様の調査指針が望まれた。

さらに、上越線関連の他の遺跡調査では、白倉下原遺跡、多比良追迫野遺跡等で旧石器時代の遺物が

検出されており、鏡川右岸の横列する台地に該期遺跡の存在が明らかになってきていた。

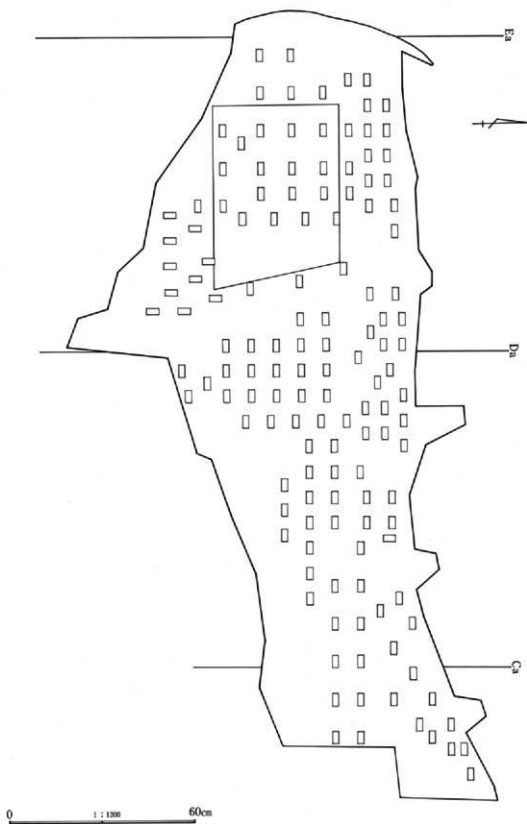
ただし、上越線関連の調査当初の旧石器時代調査及び試掘は、層位に対する認識に乏しく、暗色帯相当の褐灰色粘土層に調査の手は及ばなかった。編者の調査した藤岡市白石根岸遺跡においても、旧石器時代試掘調査は、暗色帯上面までにしかならず、暗色帯を把握した試掘坑は少量であった。この背景には、当地域の暗色帯相当層の土質は、非常に硬質で、基盤層と誤認され、通常の掘削方法では、掘り下げが困難だったためである。

黒熊地区では、本遺跡以外に、黒熊栗崎遺跡、黒熊中西遺跡が調査されており、両者ともローム台地に乗る奈良・平安時代の遺跡として資料化が果たされている。しかし、旧石器時代の調査に関しては、黒熊栗崎遺跡では、南北のトレンチを主体とした調査で、暗色帯中にまでは及んでいない。また、黒熊中西遺跡については、槍先型尖頭器の出土が見られるものの、積極的なローム中の試掘は行われておらず、調査に反省を残す結果となっている。

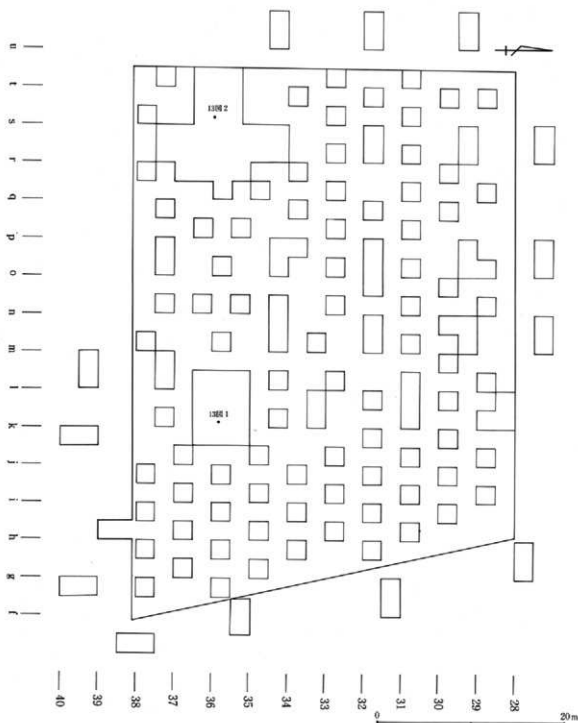
以上のような反省点を元に、黒熊八幡遺跡の旧石器時代調査は、北側側道部分の調査においても、縄文時代～奈良・平安時代に帰属する遺構・遺物の調査を終了次第、2×4mの試掘坑を8m間隔で設定し、勾配の緩やかな箇所については、4m間隔に再設定し調査を行った。この方法は本線部分においても同様で、ローム層が確認された箇所には、高い比率で試掘をした。しかし北側側道部分の調査は、先にも述べたように、試掘深度は暗色帯上面までが殆どであり、これも反省点として記しておきたい。

また、本線部分の調査では、時間的な制約もあり、重機による暗色帯直上層までの掘り下げも一部の試掘坑で試験的に取り入れた。

この試掘調査で、西斜面部にあたるD区s-35グリッドにおいて、1点ではあるが石器の出土を見た。この時点で既に、本遺跡の西斜面部の工事着手時期が迫っており、早急な調査が望まれた。軟質黄褐色ローム層～板鼻褐色軽土層の間を重機を使用して掘

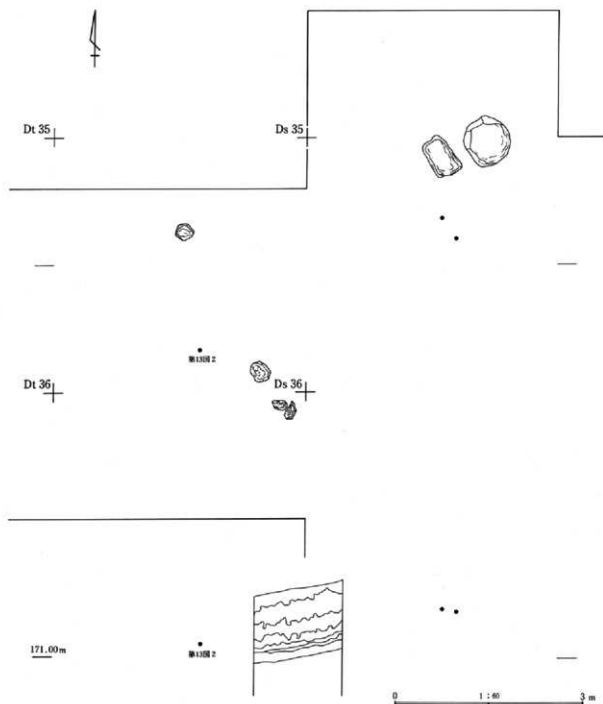


第9図 旧石器試掘坑配置図

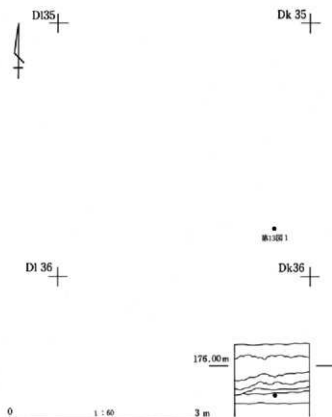


第10図 旧石器西斜面調査区

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第11図 旧石器 Ds-35 Gr 周辺遺物出土位置



第12図 旧石器 Dk-36 Gr遺物出土位置

削し、多くの作業員を充てることによって、断うこととし、石器が出土した西斜面部南半部を本調査対象とし、重機による暗色帯上層の浅間板鼻褐色軽石層までの拡張・掘削を行った。その後、褐色軽石層面で、新たに2m四方の試験坑を設定し、石器集中箇所の検出に努めた。その結果、D区s-35グリッド周辺は剥片2点が追加され、新たにD区k-36グリッドで石刃1点が出土した。

D区s-35グリッド周辺は、台地西斜面下位にあたる。石器出土面では、大型の自然石が伴出しており、石器3点は暗色帯上面で出土した。

自然石は、基盤層に含まれる大型礫と思われる、さらに火熱を受けた痕跡等は見られなかった。人為的な所産とは捉えられないが、出土層位である暗色帯下位では、恒常的に見られる現象ではないので、敢えて図示した。あるいは、斜面地形に影響された転石の可能性はある。

出土した石器は、1点が黒曜石で他2点はガラス

質安山岩の破片である。安山岩の破片は、微小であり図示に至らなかった。近距離の出土ではあるが接合関係も認められなかった。

D区k-36は、台地西斜面中位にあたる。出土した石器は1点のみである。暗色帯上面出土であり、広がりを見せない。

上越線関連の旧石器調査では、暗色帯中の石器出土状況は、大型のユニットを形成する例が多く、本遺跡も同様な例を期待したが、以上のように少量の出土が確認されたのみである。

しかしながら、本遺跡の旧石器資料は、黒熊地区においては初めての暗色帯中よりの石器出土であり、資料の価値は極めて高い。おそらく、調査区域外の北側低位標高部分に、該期石器群の広がりが見られるのではないだろうか。先に述べたように、検出された他時期の遺構も北側へ延びる傾向が看取されており、居住・生業活動の中心

と位置付けられている。

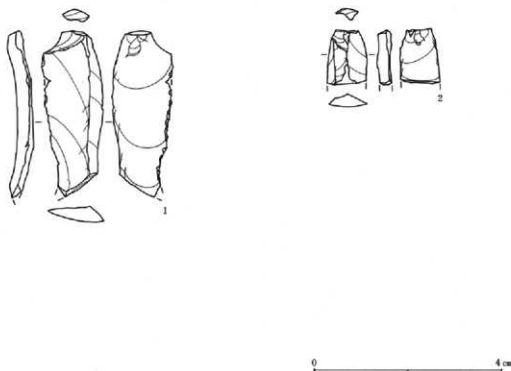
この例から、本遺跡で出土した旧石器時代遺物は、西斜面に散在する石器群と考えられる。石器製作址に代表される、ユニットに見られる群をなさない例としても位置付けられ、少量の製品あるいは半製品のまとまりを呈す出土状態として捉えられよう。

出土した石器のうち、D区k-36グリッド出土の使用痕のある剥片石器(第13図1)とD区s-36グリッドで得た黒曜石製の石刃(第13図2)2点を図示した。

1は、硬質泥岩製で縦長剥片を素材とする。両側縁に刃部を設け、左側縁に歯こぼれ状の使用痕が顕著に看取される。基部は切断面を持ち、先端も比較的先鋭である。

2は、黒曜石製で幅狭で小型の縦長剥片を素材とする。両側縁に刃部を設けており微細な使用痕が認められる。基部に切断面を持つ。

以上のように、本遺跡で出土した旧石器時代資料



第13図 旧石器出土遺物

は、貧弱であり多くを語ることはできない。しかしながら、黒熊地区における該期石器群の存在を確実なものとした資料である。今後、周辺遺跡の調査の際には、ローム下の調査を意識しなければならないだろう。

本遺跡の資料は、散在する分布状況を呈しているが、おそらく、調査区域外である北側緩斜面に中心が予想されるのではないだろうか。詳細は2点のみの石器では控えねばならないが、縦長剥片を多用する製品を作出する製作址等が予測されよう。

図示した2点の石器の出土層位は暗色帯上層であり、A T極大値下の所産と捉えられよう。

群馬県内とりわけ鍋川流域の旧石器遺跡の調査は、未だ蓄積に乏しく、特に暗色帯層中以外の資料

は極めて少ない。要因としては、該期遺跡の分布等に偏りがみられ、そのため暗色帯中の資料のみが調査されるものと考えているが、調査体制としても、調査指針や調査方法にも検討が必要になってきている。既に、県内の旧石器調査はローム中より石器を検出するという当り前の調査指針から、重層的な文化層の把握へ段階を昇華する転換期に入っているのではないだろうか。

良好なローム台地では、暗色帯中の石器群は、かなり高い確率で存在する。本遺跡の該期資料もこの例を補填した。しかしながら、本遺跡の該期調査は、必ずしも万全とはいええず、多くの反省・課題を残した。試掘方法も例に漏れず、重機を併用した試掘は、文化層の把握にかなり困難をきたし、問題点が多い。さらなる検討が必要であらう。

第4節 縄文時代

概要

黒熊八幡遺跡で検出された、縄文時代の遺構は、住居跡5軒、土坑43基である。このうち住居跡2軒はC区東斜面裾部の谷頭周辺で確認され、残りの3軒はD区台地高標高部分にまとまって検出された。土坑も多くが住居跡周辺に群在しており、住居跡と密接な関連が想起された。

縄文時代の遺構調査は、原則的には、奈良・平安時代の住居跡等の遺構調査後に縄文時代の包含層であるⅢ層を掘り下げ、遺構の検出に努めた。しかしながら、縄文時代遺物包含層の層厚は極めて薄く、このため奈良・平安時代の住居跡等の調査中に、縄文時代の遺構が検出され、同時に調査が併行した経緯がある。中には、先後関係を誤認して調査され、遺物が混在してしまった遺構もある。反省点として明記しておきたい。

検出された遺構の主な時期は、前期後半～終末と中期前葉にまとまる。ただし、中期初頭期に比定される五領ヶ台1式段階の遺構・遺物は確認されなかった。断続時期が存在するのであろうか。

出土遺物も、遺構とほぼ同様の傾向を示す。このうち、前期後半の遺物は、C区東斜面裾部谷頭周辺とD区台地高標高部分の2箇所に集中し、中期前葉の遺物はD区台地高標高部分の1箇所にまとまる。住居跡の分布も同様の傾向を示しており、時期毎の居住域の占地動向が飄気ながら把握された。

本節では、住居跡・土坑・埋設土器・遺構外出土遺物を述べるが、編集の都合上、土坑は出土遺物の掲載にとどめ遺構図は第6節に別載した。

尚、遺構番号特に住居跡番号は、発掘調査時の番号に倣って掲載したため、80号住～84号住を先に報告する編集となった。

80号住居跡

調査区東-C区東斜面部の裾部下位で検出された。C区ij-24・25に位置する。周辺の傾斜の勾配は緩く、ほぼ平坦地形ともいえる東緩斜面地形である。また、当地点より北側は低地特有の黒褐色土が発達しており、谷に面した地点と言えよう。

故に、遺構基盤層も黄褐色軟質ロームを基準とするが、一部暗褐色土も混在している。

遺構密度は高く、縄文時代では81号住居跡が北東に近接する。また、土坑群も群在し92号坑・94号～96号坑・100号坑が本住居跡に重複する。新旧関係は、100号坑のみ本住居跡を切る土層を確認したが、他は不明である。

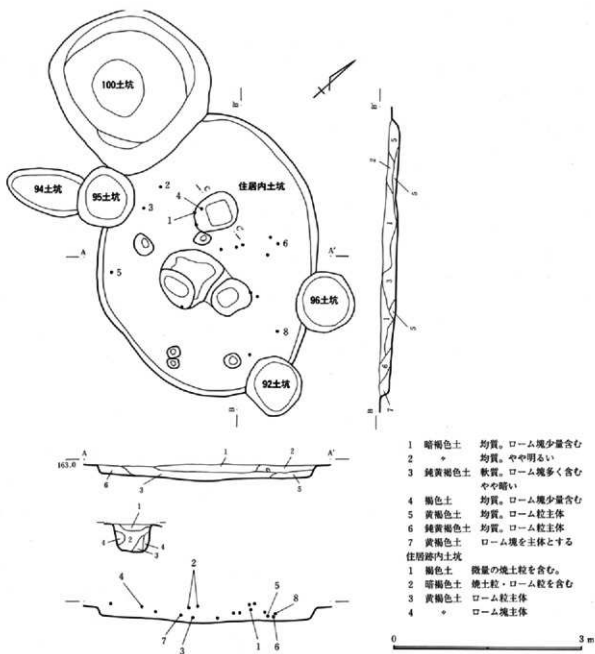
平面形は、約4.4×3.5mのやや大型の不整楕円形を呈し、長軸方位を北西-南東に向ける。壁は南側に緩やかな彎曲を見せており、そのため不整の印象を得る。

深さは、約20cm前後と浅く、壁の立ち上がりも緩やかである。ただ、北壁を除く他の壁は、概ね掘り込みも明瞭であり、平面形確定は容易であった。北壁周辺は、谷地形の影響であろうか、不明瞭な要素が見られた。遺存状態は、土坑との重複を勘案して不良と言えよう。

床面は、北半が暗褐色土、南半が黄褐色硬質ロームを基調とした地床である。ほぼ平坦面が意識された構築を示すが、全体に僅かな起伏が見られる。硬化面は顕著ではないが、中央部分が狭い範囲ながら比較的硬く締まる。

柱穴は特定できない。柱穴規模に相当する小ピットは床面上に5基確認されているが、浅く、配置も不規則である。北西～北～東側にかけての柱穴の検出に努めたが、確認できなかった。南東側～南側のピットは対応する配置と考えられるが、中央部の1基は、柱穴としては疑問が残る。

炉は、調査当初、床面中央やや北西寄りで見出された土坑を充てていた。焼土粒が少量ながら散布するため妥当性は高いが、掘り込みが深く土坑状となる。本書では、住居内の土坑と位置付けたが、焼土



第14図 80号住居跡

第2表 80号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cij-24・25	楕円形	442×355×24	N54°W	住居内土坑	深鉢 打製石斧	92-95-96-100 坑

の散布を重視して、炉址としての可能性も指摘しておきたい。

その他の施設としては、床面中央部に浅い不整形状の土坑敷基を重複状態で確認した。当初は他の時期の遺構重複の可能性も考えたが、周辺の土坑と平面形差が著しく、また、土層でも本住居跡との新旧は確認されなかったため、重複とは捉えられず、本住居跡に伴う掘り込みと考えた。住居構築時の掘削であろうか。

遺物は、少量が出土している。土器は細片が多く完形個体は図示し得なかった。土器片5点と打製石斧1点・敲石1点を図示した。平面的にも集中する傾向は見られず、散漫な出土状況である。出土層位も覆土中のものが多く、床直の出土は無かった。

出土土器は諸磯b式期と考える。



第15図 80号住居跡出土遺物

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第3表 80号住居跡遺物観察表

棟号番号 図版番号	器種 部位	①粘土 ②地成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第15図 図版 39	深鉢 体部	①細白色粒 ②良好 ③明褐色 ④破片	覆土	多数竹管による横位施文。器身の横位C字状竹管文を1 並列し、上下施文域には横位平行沈線を充填する。	諸磯b式
第15図 図版 39	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③明褐色 ④破片	覆土	緩やかに外反する口縁部。口唇部は尖り気味。LR縄文 の横位施文	諸磯b式
第15図 図版 39	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③純褐色 ④破片	覆土	直線状に固く口縁部。口唇部は丸みを帯びる。LR縄文 の横位施文。器厚薄手	諸磯b式
第15図 図版 39	深鉢 体部	①細砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	LR縄文横位施文。下端に結束部が看取される。器厚薄 手	諸磯b式
第15図 図版 39	深鉢 体部	①細白色粒・砂粒 ②良好 ③褐色 ④ 破片	覆土	LR縄文横位施文。比較的丹念な施文。上位に結束部も 施される。器厚薄手。	諸磯b式

81号住居跡

80号住と同様、調査区東-C区東側斜面部の裾部下位で検出された。C区ij-23・24グリッドに位置する。傾斜の勾配は緩く、ほぼ平坦地形ともいえる東緩斜面地形である。また、当地点より北側は低地特有の黒褐色土が発達しており、谷に面した地点と言えよう。故に、遺構基盤層も黄褐色軟質ロームを基準とするが、一部暗褐色土も混在している。

周辺の遺構としては、80号住が南西約2mに近接し、本住居跡南壁には90号坑、西壁には93号坑が接する。奈良・平安時代の住居跡としては、13・29号住が南東に近接するように遺構密度は高い。尚、本住居跡には重複する遺構は無い。

平面形は、小型の不整形円形を呈す。南西隅と南東隅が方形に整う傾向があり、隅丸方形が意識された平面形である。規模は約3.1×2.5mを測り、きわめて小型の住居跡として位置付けられる。

深さは約30cmを測り、壁の掘り込み・立ち上がりもやや緩やかながらしっかりしている。遺存度は良好といえよう。

床面は、若干西側へ傾斜し僅かな凹凸が見られるが、ほぼ平坦面を構築する。黄褐色ローム層を基盤

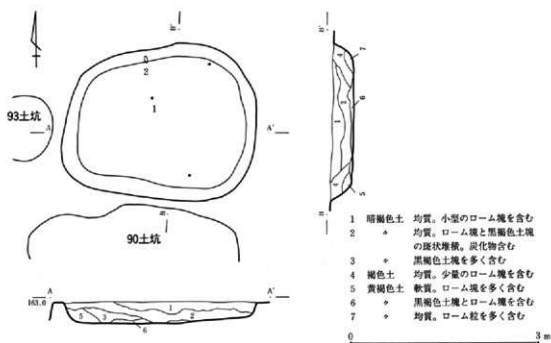
とした地床であるが、北側の一部及び北壁は暗褐色土を基調としていた。硬化面は見られず、全体に軟弱な印象を得た。

柱穴・炉等の床面上の施設は検出に努めたが、確認されなかった。

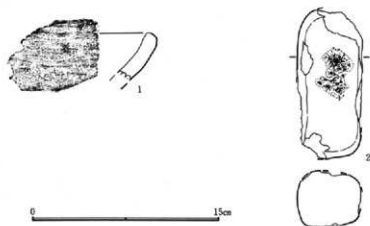
遺物も極めて貧弱な出土量で、埋土中より数点の細片を得たのみである。完形個体は無く、土器片1点、凹石1点を図示し得た。1は鉢口縁部破片で無文のため時期の特定はできないが、前期後半の所産と捉えた。

以上のように、本住居跡は小型で、床面として平坦面も顕著ながら、硬化面は確認されず、柱穴・炉等の居住に伴う施設が検出されていない。遺物も少量の出土であり、遺構の性格は特定できない。

あるいは、住居跡ではなく、小堅穴遺構としての帰属も可能性が大きいだろう。



第16図 81号住居跡



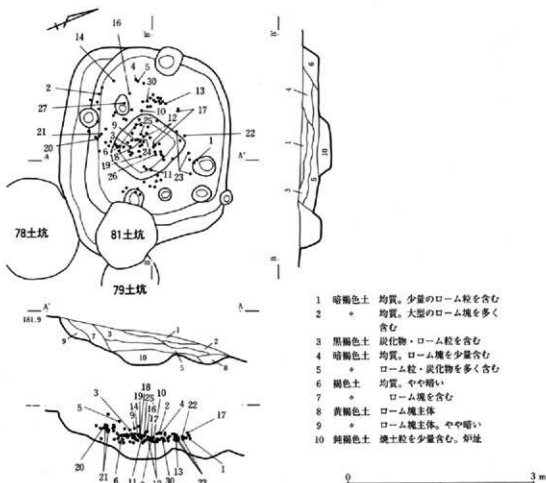
第17図 81号住居跡出土遺物

第4表 80号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cj-23・24	隅丸長方形	308×249×34	N88°E		鉢・凹石	

第5表 81号住居跡遺物観察表

検出番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第17図 図版 39	浅鉢	①緻密 白色粒 ② 黒紙	覆土	やや内野気味に開く口縁部。口唇部は厚く丸みを帯びる。体部は無文で横位の撫でが入念に施される。赤彩は不明瞭。	前期後半



第18図 82号住居跡

82号住居跡

調査区南端部の高標高部分の台地頂部で検出された。D区 ef-44・45グリッドに位置する。周辺の地形は北側への斜面地形が見られるが、勾配は他の斜面部に比して緩やかであり、全体感では平坦部の印象を得る。

遺構密度も高く、83号住居跡・84号住居跡が近接する。また、縄文時代に比定される土坑が群在しており、本住居跡には、71号坑や78号坑が重複する。奈良・平安時代の住居跡としては、号住居跡や小竪治遺構の号住居跡が近接する。

平面形は不整形長方形を呈する。規模は約3.2×2.7mと小型である。北壁～西・南壁は概ね整いを見せるが東壁周辺は乱れがあり、不整形である。

深さは、約30cmを測る。遺存状態は概ね良好だが、

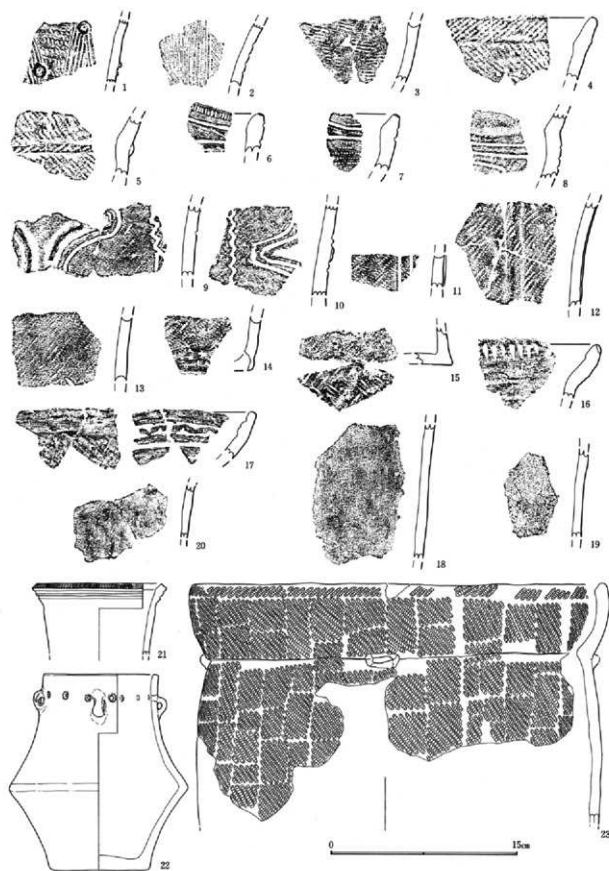
北壁周辺の立ち上がりやや緩やかである。

床面は、傾斜地形の影響か北側へ傾く。凹凸も見られ、安定した状態では無く、硬化面も顕著ではない。黄褐色ローム層を基盤とする地床である。床面の不安定さの要因は後述したい。

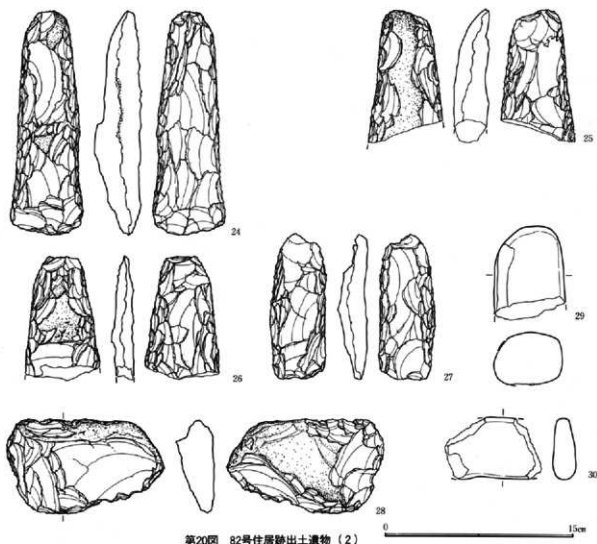
床面上の5基の小ピットと東・南・北西隅の壁にかかる小ピット3基を検出した。いずれも柱穴として位置付けたい。

炉址は、床面中央で検出された不整形の土坑を充て、地床炉と捉えたい。上面に少量ながら焼土粒が散布しており、以下鈍褐色土を主体とした埋土を見せる。

本住居跡の特徴としては、南壁及び東壁に段を有する形態である。本書では、これを拡張と捉えたい。土層観察では明瞭に把握できなかったが、5層下面



第19図 82号住居跡出土遺物(1)



第20図 82号住居跡出土遺物（2）

が拡張後の住居床面と考えられる。故に前述した柱穴及び炉址は拡張前の施設として位置付けられよう。

遺物の出土状態も、5層より上面に集中しており、最下面は5層下面で広がりを見せる。5層下面を床面とする要素である。

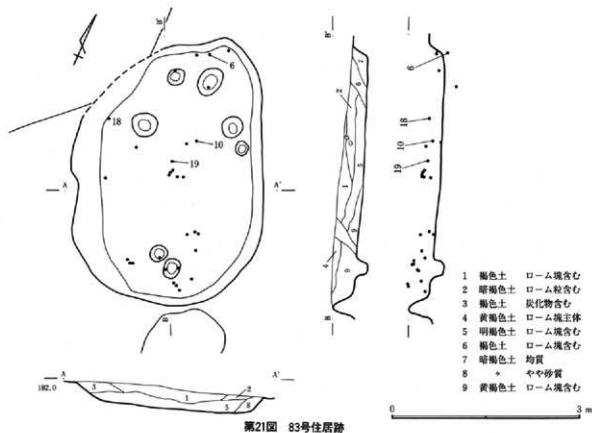
遺物は、中央部分に集中して比較的多く出土した。21～23は5層下位の出土ながら、前述のとおり、拡張後の床面出土と捉えられよう。出土土器の多くは、中期初頭段階に比定され、住居跡に帰属も当該階に充てたい。

第7表 R2号住居跡遺物調査表

神田番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②施成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第19図 図版 39	深鉢 体部	①縹砂粒 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	覆土	小型のボタン状胎付文。集合平行沈線による斜位施文。空白部には地文の縄文L Rが残る。	講義C式
第19図 図版 39	深鉢 体部	①縹砂粒 ②良好 ③明黄褐色 ④破片	覆土	集合平行沈線による斜位施文。懸垂文構成か。	講義C式
第19図 図版 39	深鉢 体部	①縹白色粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	覆土	縹縄文L Rの斜位施文。取付幅は短い	前期後半
第19図 図版 39	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	覆土	口唇部下に僅かな段を有し、折返し状の効果を見せる。内縁も顕著。縄文が施文され、口縁部R L、以下L Rの羽状構成を呈す。器厚やや厚手	五領ケ台2式
第19図 図版 39	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	覆土	体部中位の緩やかな彎曲部に深線を巡らし、体部全面に縄文R Lを縦位施文する。隆線上には横位R Lを施し、体部縄文と差を設ける	五領ケ台2式
第19図 図版 39	深鉢 口縁部	①縹砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	波状口縁か。口唇部に刻み、口縁部に沿って沈線が施され、以下横位沈線が口縁部文様帯を画す。地文は縹縄文L R。器厚厚手	五領ケ台2式
第19図 図版 39	深鉢 口縁部	①縹砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	6と同一個体か。波状口縁で口唇部に刻みを施す。口縁部に沿って沈線が施され、以下横位沈線で幅状の口縁部文様帯を画す。地文は縹縄文L R斜位施文。器厚厚手	五領ケ台2式
第19図 図版 39	深鉢 頸部	①縹砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	体部上半の屈曲部。緩やかな内彎を呈す。横位沈線が2条平行し、以下懸垂する沈線が看取される。地文縄文はR L縦位施文	五領ケ台2式
第19図 図版 39	深鉢 体部	①縹白色粒・砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	覆土	波状隆線が垂下する懸垂文構成か。隆線外縁を沈線が沿い、縦位波状沈線も施される。地文縄文はR L縦位施文	五領ケ台2式
第19図 図版 39	深鉢 体部	①縹白色粒・砂粒 ②良好 ③オリーブ 褐色 ④破片	覆土	9と同一個体か。波状隆線先端部と縦位波状沈線による懸垂文構成であろう。地文縄文はR L縦位施文	五領ケ台2式
第19図 図版 39	深鉢 体部	①縹白色粒・砂粒 ②良好 ③オリーブ 褐色 ④破片	覆土	9・10と同一個体か。垂下隆線と側縁沈線による懸垂文構成か。地文縄文はR L縦位施文	五領ケ台2式
第19図 図版 39	深鉢 体部	①粗砂粒 ②やや軟 ③褐色 ④破片	覆土	垂下隆線による懸垂文構成。縄文はR L縦位施文で隆線上にまで見及ぶ	五領ケ台2式
第19図 図版 39	深鉢 体部	①縹砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	覆土	破片下端に沈線端部を看取するが判然としな。縄文はR L縦位施文	五領ケ台式
第19図 図版 40	深鉢 底部	①縹砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	覆土	緩やかに凹く底部形態。端部は丸みを帯びる。体部は縄文施文でR L縦位施文	五領ケ台式

第三章 検出された遺構と遺物

神田番号 図版番号	器種 部位	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第19回 図版 15 40	深鉢 底部	①粗砂礫 ②良好 ③明褐色 ④破片	覆土	張り出し底を呈す。底部は比較的鋭く突出する。体部縄文はRし縦位施文。底面に割代痕	五頸ケ台式 後段階か
第19回 図版 16 40	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②やや軟 ③明赤褐色 ④破片	覆土	緩やかに内彎気味に開く口縁部。口唇部には深い割みを施す。以下無文で横位施文を施す	五頸ケ台式直 後段階か
第19回 図版 17 40	浅鉢 口縁部	①細砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	覆土	僅かに内彎するが、強く開く口縁部形態。外面無文。口縁部内面に施文。2条の沈線を巡らし、沈線間に交互斜突を施し連続「コ」地文を印刷する。外面体部は斜位の無文	五頸ケ台式直 後段階か
第19回 図版 18 40	深鉢 体部	①細砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	無文の深鉢体部破片。小径でおそらく小型器種と思われる。外面は丁寧な撫でを施す。	中期前葉
第19回 図版 19 40	深鉢 体部	①細砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	無文の深鉢体部破片。18と同一個体か。外面丁寧な撫で	中期前葉
第19回 図版 20 40	体部	①緻密 ②良好 ③ 鈍赤褐色 ④破片	覆土	無文の体部破片。あるいは21と同一個体か。外面丁寧な撫で	五頸ケ台式直 後段階か
第19回 図版 21 40	口縁部	①緻密 ②良好 ③ 鈍赤褐色 ④口縁部 約1/2	覆土下位	口径約10cm程度の小型深鉢。口縁部は強く開き、体部は直線状を呈す。口唇部内屈し細かな割みを施す。口縁部に2条の沈線を巡らし、以下体部は無文。口縁部内縁が顕著	五頸ケ台式直 後段階か
第19回 図版 22 40	小型深鉢 口-底部	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③鈍褐色 ④口-底部約2/5	覆土下位	口径：9.3、底径：8.0、器高：15.7。口縁-体部中位一体化して反る。体部中位で屈曲し下半は外反する。口縁部に小型の櫛状把手を付し小孔を穿つ。把手は4単位。器厚は薄手。有孔調付土器に近似する器形	五頸ケ台式直 後段階
第19回 図版 23 40	深鉢 口-体部	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③明赤褐色 ④口縁部約1/3	覆土下位	口径約34cmの大型深鉢。口縁部内彎し頸部で屈曲する。体部は緩やかな彎曲を呈す。口唇部の縄文は横位しR、以下口縁部-体部は縦位しRが覆う。頸部屈曲部に櫛状の小突起を付す	五頸ケ台式直 後段階



第21図 83号住居跡

83号住居跡

調査区南端部の高標高部分の台地頂部で検出された。D区ef-45・46グリッドに位置する。周辺の地形は北側への斜面地形が見られるが、勾配は他の斜面部に比して緩やかであり、全体感では平坦部の印象を得る。また、本住居跡南側は調査区域外となるが、比較的緩やかな斜面地形が連続するため、該期の遺構が延長する可能性は高い。

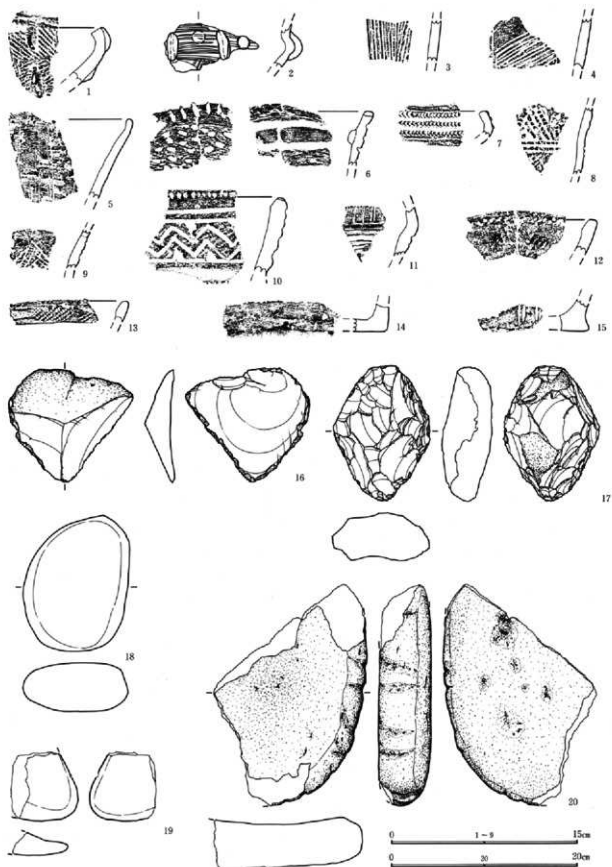
周辺の遺構密度も高く、82号住が東に、84号住居跡が北西に接する。縄文時代に比定される土坑群は東側に群在し、本住居跡東壁には、89号坑が接する。奈良・平安時代の住居跡としては、67号住や小鍛冶遺構の69号住が近接する。

平面形は、長軸を北西に向け、不整長円形を呈する。北壁周辺及び西壁に乱れが見られ、全体感の整いを失う。平面規模は約4.3×3.0m、深さは約40cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、北東壁や南西壁は掘り込みも弱い。遺存度は、西壁の一部が逸失するものの、概ね良好と言えよう。

床面は、黄褐色ロームを基盤とする地床である。僅かな凹凸が見られ、北東へ若干傾斜するが、ほぼ平坦面が意識されて築かれる。硬化面は特に顕著ではないが、中央部に締りが見られた。

炉は、床面上の精査を重ね、検出に努めたが確認できなかった。ただし、中央部に幅広い範囲で微量の焼土粒が床面より浮いた状態で確認されており、

第三章 検出された遺構と遺物



第22回 83号住居跡出土遺物

第9表 83号住居跡遺跡観察表

採回番号 図版番号	器種 部位	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第22図 図版 40	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③明褐色 ④破片	覆土	内彎する口縁部に瘤状の貼付文。地文は集合沈線による横位羽状沈線文が施される	溝磯c式
第22図 図版 40	深鉢 肩部	①粗砂粒 ②良好 ③明褐色 ④破片	覆土	強く屈曲する口縁部下破片。屈曲部に瘤状貼付文とボタン状貼付文を付す。地文は横位集合沈線が屈曲部及び上位に施され、以下斜位施文となる	溝磯c式
第22図 図版 40	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	覆土	平行沈線による集合沈線文。斜位懸垂構成を呈す	溝磯c式
第22図 図版 40	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	覆土	縦位沈線による懸垂構成か。空白部は斜位沈線を埋めるが区画意匠も看取される	溝磯s式
第22図 図版 40	深鉢 口縁部	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③明褐色 ④破片	覆土	口唇部僅かに内彎する。以下口縁部は強く開く。口縁部に疎らな縦位平行沈線を施す。	十三善提式
第22図 図版 40	口縁部	①粗砂粒 ②やや軟 ③鈍褐色 ④破片	覆土	口縁部小成状突起か。口唇部に割みを連続し、外面槽状工具による割突文、内面横位隆線を付し沈線を側縁とする	興津式系
第22図 図版 41	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	覆土	強く内彎する口縁部。2条の細隆線を付し、結節浮線紋を施す	十三善提式
第22図 図版 41	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②やや軟 ③鈍褐色 ④破片	覆土	沈線を主とする結節浮線文を横位・交互斜位に配す。空白部は輪凸印刷三角印刻文を充てる	十三善提式
第22図 図版 41	深鉢 体部	①粗砂粒 ②やや軟 ③鈍褐色 ④破片	覆土	平行沈線による縦位矢羽状構成。やや雑な施文	前期終末か
第22図 図版 41	深鉢 口縁部	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	覆土	平縁か。口唇部に割みを連続する。口縁部は2条の横位沈線で囲まれ、横位流状沈線文を充填する。地文は縦位LR	五領ヶ台直後段階か
第22図 図版 41	深鉢 肩部	①粗砂粒 ②堅緻 ③褐色 ④破片	覆土	内彎する口縁部下の破片。口縁部は縦位沈線を疎らに施し、以下数条の横位沈線が連続する	五領ヶ台直後段階か
第22図 図版 41	口縁部	①粗砂粒 ②やや軟 ③明褐色 ④破片	覆土	角頭状口唇部を呈し、強く開く口縁部形態。口唇部には浅い割みを施し、地文縄文は縦位RL	五領ヶ台直後段階か
第22図 図版 41	口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③明褐色 ④破片	覆土	強く開く口縁部形態。口縁部は横位LRを施す。貼付文剥落痕跡有り	中期前葉か
第22図 図版 41	深鉢 底部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍赤褐色 ④破片	覆土	直立する底部形態。体部外面は丁寧な撫でを施す。	中期前葉か

第三章 検出された遺構と遺物

採回番号 図版番号	器種 部位	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第22回 図版 41	深鉢 底部	①粗砂織 ②良好 ③橙色 ④破片	覆土	底部強く突出する張り出し底。体部下端に2条1組の縦位沈線が看取される。壺垂文構成	中期前葉か

炉相当の施設等が存在していた可能性はあり、調査では確認できなかったが、掘り込み・火床を有さない例も考えなければならぬだろう。

柱穴は、東壁際及び北東壁際、西壁際に検出された3基が規模・配置から妥当性が高い。他のピットは、掘り込みも浅く、柱穴としても補助穴の機能を優先したい。

遺物は、少量が出土した。殆どが、覆土中の出土であり、居住に伴う出土状態ではない。さらに、特定の層位に集中する傾向も看取されず、廃棄行為も特定できない。また、出土土器すべてが破片状態で、個体となる接合関係も認められず、個体図示し得る土器は無かった。

図示した土器片の時期は、前期後半～中期前葉期に捉えられ、時期幅は広い。中期前葉期の土器片に関しては、隣接する82号住との関係―流入も念頭に置いておきたい。

石器はスクレイパー状の加工痕のある剥片石器2、磨石2、石皿片1を図示した。

住居跡帰属時期は、出土土器から、中期前葉段階に求められるが、前述したように流入の可能性もあるため、判断としない。

84号住居跡

調査区南端部の高標高部分の台地頂部で検出された。D区 f R-44～46グリッドに位置する。

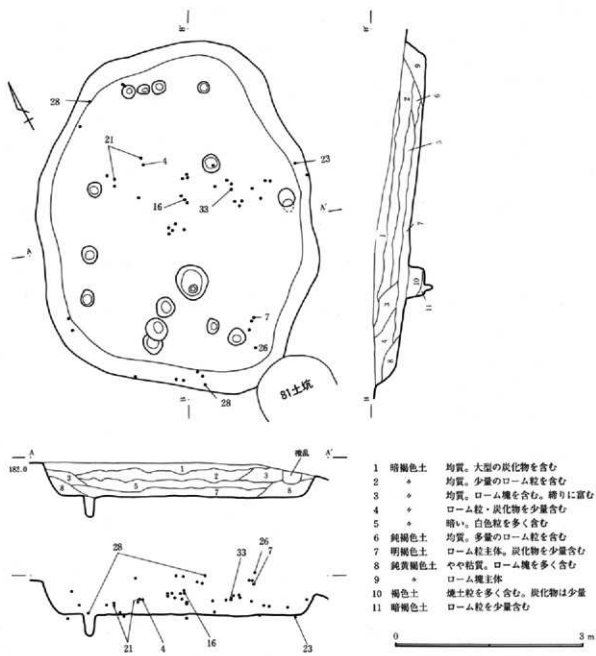
周辺地形は、北側及び西側への斜面地形が見られるが、勾配は他の斜面部に比して緩やかであり、全体感では平坦部の印象を得る地点である。ただし、本住居跡北及び西側は斜面地形が徐々に発達し、遺構も稀薄になる。平坦部と斜面地形の変換部にあたる。当地点の遺構密度は高く、82号住・83号住が東に近接する。土坑は東南壁に81号土坑が僅かに重なるが、新旧は不明である。

当地点の縄文時代の住居跡は3軒の検出例にとどまるが、住居跡分布は南側にも延びる傾向もみられ、住居跡群の北西端に位置する住居としても、捉えられよう。尚、近接する奈良・平安時代の住居跡としては、小鍛冶遺構である59号住が北に接する。

平面形は、やや大型の不整形円形を呈する。各壁は緩やかながら彎曲を持ち、全体感では不整の印象が強い。長軸方位は北東を向き、平面規模は、約5.6×4.4m、深さは約60cmを測る。壁の立ち上がりは、やや緩やかながら、掘り込みもしっかりしており、遺存状態は概ね良好といえよう。

床面は、北東側へ緩やかな傾斜を見せ、僅かな凹凸が認められるものの、ほぼ平坦面が意識されて築かれる。貼床ではなく、黄褐色ローム層を基盤とする地床である。硬化面は認められず、全体に軟弱な床面だった。

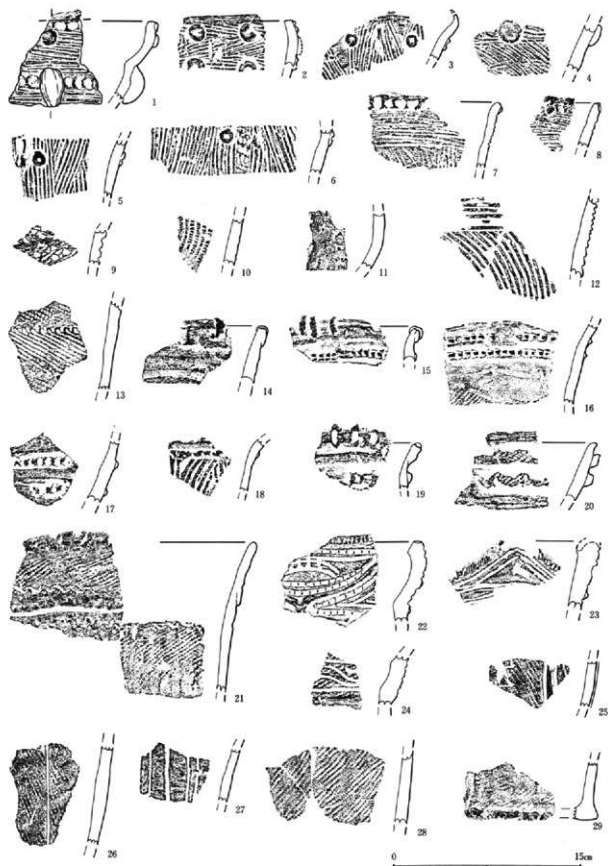
炉は、床面中央やや南寄り検出された。土坑状に掘り込まれ、上層に焼土粒は比較的多く散布していた。壁の立ち上がりはしっかりしており、直立状を呈す。坑底面には小ピットが検出されたが、炉址に伴う施設か判断としない。



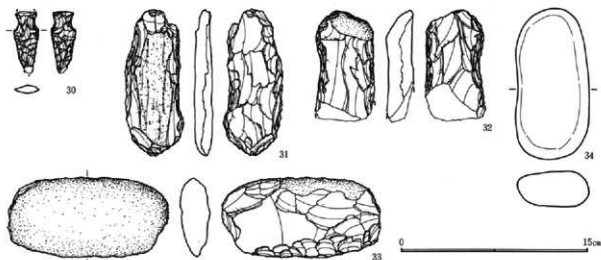
第23図 84号住居跡

第10表 84号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模 (cm) 長軸×短軸×高さ	住居方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dfg-44~46	楕円形	558×444×56	N18°E		深鉢 石匙 打製石斧 刮石	81土坑 礫石



第24図 84号住居跡出土遺物 (1)



第25図 84号住居跡出土遺物(2)

柱穴は、各壁際に小ピットを検出した。全てを柱穴としては確定できない。P1-P7が配置・深さに妥当性があり、他のピットは積極的に柱穴とは判断し難い。P1-P7は概ね六角形状に配置されており、配置も良好である。尚、柱痕は看取できなかった。

遺物は、比較的多く出土した。覆土上層より床面に至るまで見られたが、中層に集中する傾向が見られる。平面分布では、中央部と南側に僅かながら偏りが見られた。

出土土器片は、すべて破片状態で、完形に復元できる資料はなく、破片資料29点を図示し得た。前期後半～中期前葉期の段階で時期幅を持った出土状況である。層位的にも、時期毎の遍在は見られず、混在した状況である。このことから、少なくとも覆土上層～中層にかけての出土遺物は、流入として位置づけられよう。また、下層出土遺物に関しても、上層出土遺物との接合関係が認められることから、出土状態は、居住に伴う所産ではなく、流入あるいは廃棄行為を念頭においておきたい。

出土石器は、石匙1・打製石斧2・サイドスクレイパー1・磨石1を図示した。

本住居跡の帰属し得る時期は、前述のように出土土器に時間幅が存在するため判然としない。本書では、中期前葉期に段階を求めるが、今後の検討を要するだろう。

以上のように、本遺跡で検出された縄文時代の住居跡は5軒であり、前期後半～中期前葉期の時間幅に収まる様相である。

周辺の遺跡では、該期の遺構としては、黒熊第5遺跡が著名であり、諸磯C式段階の住居跡を検出している。また十三菩提式の報告もあり、当地域の前期末葉の資料は既に周知されている。ここに、本遺跡の資料を加え、中期前葉段階の住居跡も丘陵性台地に占地する傾向が把握された。

従来、中期前葉期の住居跡は当地域では、藤岡市北山遺跡や保美野遺跡群に知られる程度であり、吉井町黒熊地区に分布域を延ばす様相が、今回の調査で判明した。

しかしながら、本遺跡で検出された該期住居跡は、住居平面形・炉址・柱穴に統一性を保っておらず、また出土遺物の状況も安定した例とはいい難い。さらに、台地高標高部分と低地部分に分かれた占地状況は、集落全体を窺うことはできず、一部の様相を提示したに過ぎない。

将来的に、調査区域外の発掘調査が行われた際には、集落の全体像、個々の住居跡の傾向を詳細に調査する必要がある。今回の調査は、奈良・平安時代の遺構・遺物に主力が置かれたため、今日的な縄文時代研究に即した調査を行っていない。反省を含めて今後の課題としたい。

第三章 検出された遺構と遺物

第11表 84号住居跡遺物観察表

母図番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第24図 図版 41	深鉢 口縁部	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	覆土	口縁部内彎し下位で屈曲する。口唇部及び屈曲部に押圧状の刻みを施し、ボタン状貼付文と垂状貼付文を付す。地文は横位集合沈線	諸磯c式
第24図 図版 41	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	覆土	緩やかに内彎する口縁部形態。ボタン状貼付文を比較的整然と付し、地文に横位矢羽状集合沈線を施す	諸磯c式
第24図 図版 41	深鉢 胴部	①細砂粒 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	覆土	内彎する口縁下の頸部破片。内彎部に横位平行沈線を施し、以下集合沈線による縦位矢羽状構成が連続し、ボタン状貼付文を付す	諸磯c式
第24図 図版 41	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③明褐色 ④破片	覆土	比較的大型のボタン状貼付文を付す。地文は横位集合沈線以下斜位集合沈線が施される	諸磯c式
第24図 図版 41	深鉢 体部	①細砂粒 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	覆土	縦状貼付文とボタン状貼付文を付す。地文は集合沈線による縦位矢羽状構成を呈す。	諸磯c式
第24図 図版 41	深鉢 体部	①細砂粒 ②良好 ③淡黄色 ④破片	覆土	ボタン状貼付文を付す。地文に縦位集合沈線を施し、空白部には縄文R Lを充てる	諸磯c式
第24図 図版 41	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	覆土	外反する口縁部形態。口唇部に押圧状の刻みを施し、以下横位集合沈線と縦位集合沈線が地文として施される	諸磯c式
第24図 図版 41	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②やや軟 ③淡黄色 ④破片	覆土	直線的に開く口縁部形態。口縁下に小型のボタン状貼付文を付し、地文に横位集合沈線を施す	諸磯c式
第24図 図版 41	体部	①細砂質 ②やや軟 ③褐色 ④破片	覆土	ベン先工具による刺突文を深く施す。地文は細縄文R Lか	興津式
第24図 図版 41	深鉢 体部	①細砂粒 ②良好 ③明黄褐色 ④破片	覆土	幅狭の結節浮線文による連続状意匠文	十三書提式
第24図 図版 41	深鉢 体部	①細砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	幅狭の結節浮線文による小型の本の葉状意匠文が配される	十三書提式併行
第24図 図版 41	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	横位平行沈線の重複施文による横位沈線群以下弧状沈線群が配される	中期初頭か
第24図 図版 41	深鉢 体部	①細砂粒・石英 ② 良好 ③鈍黄褐色 ④破片	覆土	結束第1種縄文L R・R Lの羽状構成	前期末葉
第24図 図版 41	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②やや軟 ③明褐色 ④破片	覆土	緩やかに開く口縁部形態。口唇部に棒状小貼付文を付し、以下輪積み状ヒダ状文が多次に連続する。	前期終末

第4節 縄文時代

持国番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第24図 図版 41	深鉢 口縁部	①縹白色粒・砂粒 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	覆土	口縁部僅かに外反し肥厚する。口唇部に棒状小貼付文を付し、以下横位結節浮線文を施す	前期終末
第24図 図版 41	深鉢 口縁部	①縹白色粒・砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	強く固く頸部形態か。2条の結節浮線文が横位に平行し、以下横位LR縄文を施す。15と同一個体か	前期終末
第24図 図版 42	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	覆土	2条の横位隆線に押圧状の刻みを施す。	前期終末か
第24図 図版 42	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	覆土	横位細隆線に浅い刻みを施す。以下斜位沈線・弧状沈線で懸垂状区画を配す。空白部は三角状印刷文を刻む	中期前葉
第24図 図版 42	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	覆土	口縁部強く外反し折返し状に肥厚する。口唇部に深い刻みを施し、頸部に小突起を付す。	中期前葉
第24図 図版 42	深鉢 口縁部	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	平縁。口唇部は僅かに外反し尖る。口縁部に2状の蛇行隆線を横位に付し、横位LR縄文を施す。	中期前葉
第24図 図版 42	深鉢 口縁部	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	平縁。緩やかに固く口縁部形態。口縁部は折返し状に僅かに肥厚し特に下位に顕著。施文は縄文主体で、横位LR結節縄文を施す。	五領ヶ台直後 段階
第24図 図版 42	深鉢 口縁部	①粗雲母・砂礫 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	口縁部内彎し頸部で屈曲する。口唇部に刻みを施し、口縁部文様帯は隆線によって半円及び三角形区画され交互配列する構成を呈す。口縁・隆線には結節線が沿い、区画内は弧状意匠を充てる。地文縄文LR	五領ヶ台直後 段階
第24図 図版 42	深鉢 口縁部	①粗雲母・砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	波状口縁波頂部。横位隆線で口縁部文様帯を画す。口唇部に刻みを施し、口唇部・隆線に沿って2条の沈線が沿う。	五領ヶ台直後 段階
第24図 図版 42	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③明褐色 ④破片	覆土	平行する横位沈線で画された幅狭の施文帯内を、蛇行沈線が施される。地文縄文は横位LR	五領ヶ台2式
第24図 図版 42	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	覆土	隆線による懸垂文構成。隆線間隙には沈線が施され、縄文は縦位LRが充填される	五領ヶ台2式
第24図 図版 42	深鉢 体部	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	覆土	縦位沈線による懸垂文構成か。縄文は縦位LR充填施文	五領ヶ台2式
第24図 図版 42	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	覆土	縦位沈線による懸垂文構成か。沈線は一本抜き太い沈線と平行沈線の細い沈線の2種がある	五領ヶ台2式
第24図 図版 42	深鉢 体部	①粗砂礫 ②やや軟 ③明褐色 ④破片	覆土	体部全面縄文施文か。縦位LR施文	中期前葉
第24図 図版 42	深鉢 底部	①粗砂礫 ②良好 ③明褐色 ④破片	覆土	破片右端に垂下隆線の痕跡。懸垂文構成か。底部端部は僅かに突出する張り出し底。縄文は横位LRが施される	中期前葉

土坑出土遺物

ここでは、本遺跡で検出された土坑のうち、縄文時代に比定された土坑より出土した遺物の概略を述べたい。土坑個々の遺構図は、本書編集の都合上、後述する第6節で奈良・平安時代や近代の土坑と併せて掲載している。

縄文時代に比定される土坑としては、36号・46号・47号・53号・65-92号・95号・96号・99号・100号・103号・116-119号・121号・123号・141号土坑が該当する。多少の差はあるが、住居跡の分布と近似する状況であり、居住に伴う施設として、位置づけられる。

尚、土坑の時期比定の根拠としては、出土遺物が縄文時代のみであること、埋土が他時期遺構の埋土と比して、著しく均質で色調差も認められるものとして分別した。

遺物が出土した土坑は、46号・66号・68号・70号・71号・72号・78号・80号・82号・83号・84号・85号・86号・89号・92号・99号・110号・121号坑であるが、完形土器や大型破片の出土もなく、土器片を主体とするため、土坑の詳細な時期や性格を判断する材料ではない。ここでは、各土坑の出土遺物の概略的な時期を述べるが、上記のように確証性に乏しい出土状況であり、土坑用途に伴う出土状態を呈していなかった。

46号坑出土土器は、諸磯C式古段階を主体としている。3点とも同一個体の可能性は高い。66号坑は中期前業段階と捉えた。側面圧痕を施す3は東関東系の要素を兼ねるか。68号坑は底部片。前期後半～末業段階と思われる。70号坑1～3は中期前業段階。4は不明。2は浅鉢で口縁部内面施文を特徴とする。3は底部片で縦位集合文線様の2条に数環を施す。また、打製石斧5(28図)も出土している。71号坑は中期前業段階の破片1・2と中期後半段階加曾利EⅢ式3・4が混在する。重複する79号坑の影響であろうか。72号坑は前期末業段階と思われる。また、剥片石器2(28図)の出土も見られる。78号坑1・2は前期末業と考えたが、3・4は中期前業段階であらう。

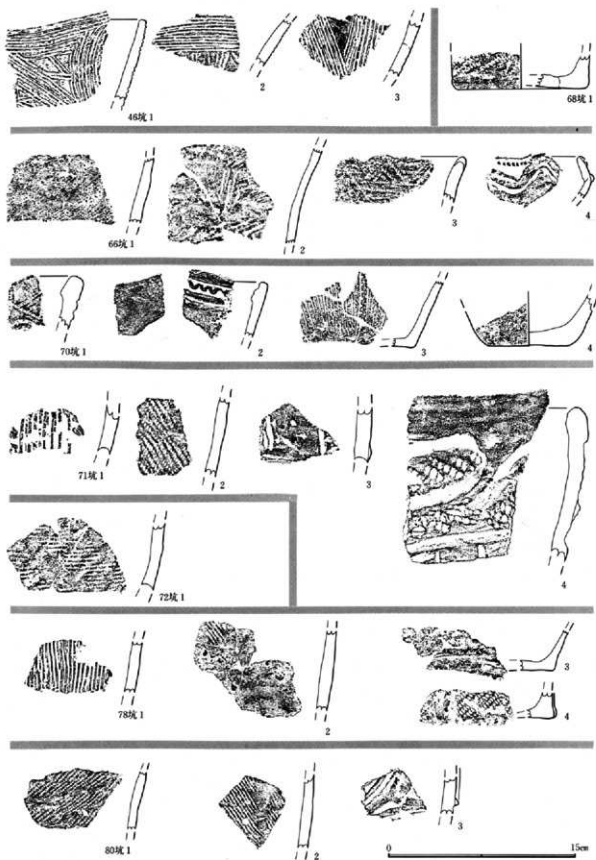
80号坑1・2は前期末業、3は中期前業段階と捉えた。82号坑1は諸磯C式、2～7は中期前業、8・9は中期中業に比定されるように、各段階の破片が混在している。83号坑は諸磯C式。剥片石器と台石片の出土を見る。84号～86号坑は中期前業段階とした。89号坑1は前期末業、他は中期前業段階であらう。92号坑は諸磯B式。99号坑は中期前業の椀状深鉢か。110号坑は中期前業段階と思われる。打製石斧1点も出土している。121号坑は諸磯C式1と中期前業期2の混在が見られる。

以上のように、土坑出土遺物は、小破片を主とする出土状態であり、多時期の混在が見られる例が多い。これは、土坑内への遺物流入を背景としており、人為的かつ意図的な土器埋置行為等を伴わないと考えられよう。

概して、土坑内出土遺物の一括性は住居跡遺物に比して高いものではあるが、本遺跡土坑出土遺物の場合、極めて一括性に乏しい様相を呈しており、詳細な時期特定は困難である。やはり完形土器あるいは半完形土器同士の共存・伴出関係を重視しなければならぬだろう。小破片出土の例からいたずらな時期特定は、できれば避けなければならないだろう。

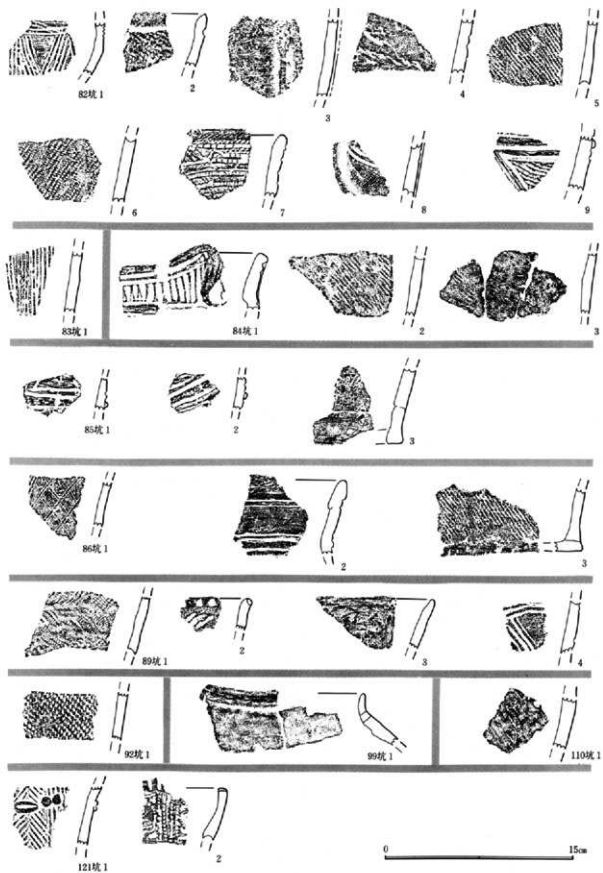
しかしながら、土坑が廃棄あるいは構築された時期は、加曾利EⅢ式を出土した71号坑を除き、概ね、前期後半・末業～中期前業段階の所産と捉えられ、これは、本遺跡で検出された住居跡の帰属する時期に比較的近く、住居と土坑が同時共存していた可能性は高い。出土土器の全体の様相からは、中期前業とした段階は、五領ケ台2式末～直後段階と考えられよう。石器に関しては、打製石斧・加工痕・使用痕ある剥片石器・台石片等が出土しているが、特徴ある製品は見られず、該期組成を良好には現わしていない。また、出土状況も意図的な埋置とも捉えられなかった。土器片と同様流入による所産としたい。

尚、加曾利EⅢ式を出土した71号坑は、台地頂部の高標高部分に位置している。周辺の中期前業期の土坑に混在する立地だが、南側の調査区域外には、

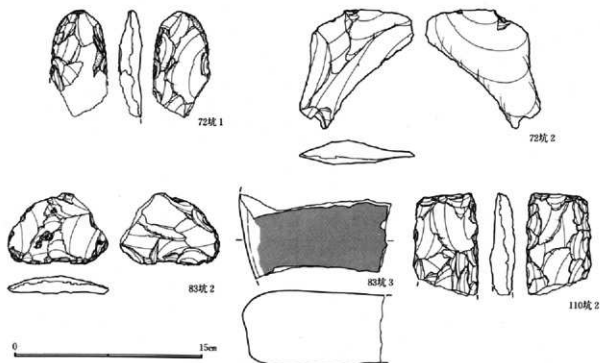


第26圖 土坑出土遺物 (1)

第四章 検出された遺構と遺物



第27図 土坑出土遺物(2)



第28図 土坑出土遺物(3)

該期の土器片を表する箇所がある。居住域が隣接する可能性がある。

さて、土坑の性格についてだが、前述のように、乏しい出土遺物からは判断が難しい。居住域に設定された立地条件からは、貯蔵穴等の食料備蓄・生産施設としての位置付けも可能だが、居住空間に目的に設けられる墓壇も、該期では普遍性が高く、本書では、貯蔵穴と墓壇の両面を考えて置きたい。

本遺跡の縄文時代土坑調査は、奈良・平安時代の住居跡の調査中に、殆ど同時に調査された土坑が多い。故に、発掘調査時の層位的な検証や出土遺物の詳細な記録化が果たせず、土坑の性格や時期の特定に障害となってしまった。整理作業において、これらの難点を解消しようと努めたが、発掘調査時の所見を超える分析は果たし得なかった。調査・整理と関わった筆者として、反省を尽くしたい。

本書では、土坑の帰属し得る時期を、概略的ではあるが、前前後半～中期前葉段階に求めた。しかし、この段階の中でも継続性を保ってはならず、空白の

期間が存在しているようだ。また、土坑の配置も住居跡に比較的近い距離を保っており、時期も住居跡時期と近接するようだ。住居跡は著しい重複様相は見せておらず、集落規模としては小規模な例と考えられよう。土坑も居住に伴う貯蔵穴あるいは墓壇として考えた場合、小規模なかつ断続的な施設設置形態として捉えられよう。

第三章 検出された遺構と遺物

第12表 46号土坑遺物観察表

検出番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第26図 図版 42	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②良好 ③黄褐色 ④破片	覆土	波状口縁か。多軌竹管による集合沈線による施文。波の下に弧状の意匠。斜位集合沈線を施し、空白部に横位V字状の小意匠を充てる	溝襷b式
第26図 図版 42	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③橙色 ④破片	覆土	多軌竹管による横位集合沈線を巡らし、以下同沈線による斜位施文が連続する	溝襷b式
第26図 図版 42	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③明黄褐色 ④破片	覆土	多軌竹管による集合沈線を相向かう斜位に配し斜位懸垂状構成を呈すか	溝襷b式

第13表 66号土坑遺物観察表

検出番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第26図 図版 42	深鉢 体部	①粗砂礫・白色粒 ②やや軟 ③黒褐色 ④破片	覆土	体部器面全面縄文施文か。LR縄文を横位に施す	中期前葉か
第26図 図版 42	深鉢 体部	①粗砂礫・白色粒 ②やや軟 ③明褐色 ④破片	覆土	体部器面全面縄文施文か。LR縄文を横位に施すが僅かな施文	中期前葉か
第26図 図版 42	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②やや軟 ③褐色 ④破片	覆土	縦やかに外反する口縁部。小型の反状口縁か。口縁部には熱赤無面任痕による横位波状文が連続する	中期前葉か
第26図 図版 42	口縁部	①粗砂礫 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	覆土	内屈する口縁部。口唇部に浮線状の刻みを付す縁線が沿い、口縁部はやや幅広い縁線が蛇行文を描く。底縁下縁には沈線が沿う	中期前葉か

第14表 68号土坑遺物観察表

検出番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第26図 図版 42	深鉢 底部	①粗砂礫 ②やや軟 ③明赤褐色 ④破片	覆土	直立する底部形態。縄文施文のみで横位LRを施す	

第15表 70号土坑遺物観察表

検出番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第26図 図版 43	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	覆土	口唇部肥厚する。縦やかな波状口縁か。口縁部文様は熱赤無面任痕による意匠文が配される	中期前葉か
第26図 図版 42	深鉢 口縁部	①縦帯 ②良好 ③ 赤褐色 ④破片	覆土	波状口縁を呈する外面無文の浅鉢か。内面口縁部に平行沈線が沿い、沈線間を交互刺突し連続「コ」字文を刻む	五領ケ台直後段階
第26図 図版 43	深鉢 底部	①粗砂礫 ②良好 ③明黄褐色 ④破片	覆土	縦やかに固く底部形態。縦位主沈線が懸垂し、斜帯として縦帯状に刺突を施す沈線が沿う。空白部は縦位平行沈線を充てる	五領ケ台直後段階

採回番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第26回 図版 43	深鉢 底部	①粗砂礫 ②軟 ③鈍黄褐色 ④破片	覆土	縦やかに丸みを帯びて深く底部形態。外面は無文で平滑に仕上げられる	中期前葉

第16表 71号土坑遺物観察表

採回番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第26回 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③明黄褐色 ④破片	覆土	多岐竹管による縦位平行比線群。比線の一部に数痕状の刻みを施す。懸垂文構成か	中期前葉
第26回 図版 43	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	体部縄文施文。L R縦位施文	
第26回 図版 43	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③成黄色 ④破片	覆土	縦位沈線による懸垂文構成か。沈線には短沈線も加わる	中期中葉
第26回 図版 43	深鉢 口縁部	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③明黄褐色 ④破片	覆土	縦やかに内彎する口縁部。隆帯による口縁部椅円状区画文配列。体部は縦位隆帯で画され、以下沈線による懸垂文構成。縄文はR L	加曾科EⅡ式

第17表 72号土坑遺物観察表

採回番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第26回 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	覆土	体部縄文施文。L R細縄文の斜位施文	中期前葉か

第18表 78号土坑遺物観察表

採回番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第26回 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	覆土	多岐竹管による縦位平行比線群。半割状の沈線で重現施文は明らか。懸垂文構成か	中期前葉
第26回 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫・石英 ② 良好 ③鈍赤褐色 ④破片	覆土	体部下平か。縄文施文を主とし、無筋rの横位施文。下半は無文で無てを施す	中期前葉
第26回 図版 43	深鉢 底部	①粗砂礫 ②やや軟 ③明赤褐色 ④破片	覆土	縦やかに深く底部形態。無文	中期前葉
第26回 図版 43	深鉢 底部	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	覆土	底部端部は僅かに突出する張り出し度。隆帯が垂下する懸垂文構成で、縄文L Rを横位に施す	五領ケ台式直後段階

第三章 検出された遺構と遺物

第19表 80号土坑遺物観察表

検出番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第26図 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫・石英 ② 良好 ③鈍黄褐色 ④破片	覆土	体部縄文施文。横位LR縄文を多段に施文する	前期末葉か
第26図 図版 43	深鉢 体部	①細砂粒 ②やや軟 ③鈍黄褐色 ④破片	覆土	細縄文LRの縦位施文が体部を覆う。施文は間隔施文状に整う	中期前葉か
第26図 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③赤褐色 ④破片	覆土	隆縁で面された小三角形状区画か。隆縁側縁として沈線が沿う	五領ケ台式直後段階

第20表 82号土坑遺物観察表

検出番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第27図 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	覆土	内彎する体部上半。多岐竹管による集合沈線群による施文。横位沈線群以下斜位沈線群の交互配列	諸磯C式
第27図 図版 43	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②良好 ③黄褐色 ④破片	覆土	緩やかに開く口縁部。口唇部僅かに肥厚する。口縁部に横位沈線が高り以下縦位LR縄文が施される	中期前葉か
第27図 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③赤褐色 ④破片	覆土	縦位隆縁による懸垂文構成。他は無文	中期前葉か
第27図 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	懸垂側面任直文を横位・斜位に施す	中期前葉か
第27図 図版 43	深鉢 体部	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	覆土	体部縄文施文。LR縦位施文	中期前葉か
第27図 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③明褐色 ④破片	覆土	体部縄文施文。LR縦位施文で整った間隔施文を呈す	中期前葉か
第27図 図版 43	深鉢 口縁部	①粗雲母・砂礫 ② 良好 ③明赤褐色 ④破片	覆土	直線状に開く口縁部。口唇部に横位LRを施し、口縁部文様帯は結節線による多段の文様構成か。	五領ケ台式直後段階
第27図 図版 43	深鉢 体部	①細砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	覆土	弧状隆縁の連繫か。側縁として沈線が沿う。地文縄文は縦位LR	五領ケ台式直後段階
第27図 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	覆土	横位隆縁に2条の沈線が沿い、以下斜位沈線が配される。あるいは区画文構成か。地文縄文は横位LR	中期前葉か

第21表 83号土坑遺物観察表

採回番号 図版番号	器種 部位	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第27回 図版 43	深鉢 底部	①粗砂礫 ②良好 ③赤褐色 ④破片	覆土	多岐竹管による縦位平行沈線群。懸垂文構成か	中期前葉か

第22表 84号土坑遺物観察表

採回番号 図版番号	器種 部位	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第27回 図版 43	深鉢 口縁部	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	覆土	小波状突起を付す口縁部。横位隆線で割られ、突起より 派生する弧状隆線で区画する。区画内は1・2条の沈線 が沿い、縦位端沈線を充填する	五領ケ台直段 段階
第27回 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③純褐色 ④破片	覆土	体部全面縄文施文か。LR縦位施文	中期前葉
第27回 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③明褐色 ④破片	覆土	体部全面縄文施文か。LR縦位施文。間隔施文が顕著	中期前葉

第23表 85号土坑遺物観察表

採回番号 図版番号	器種 部位	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第27回 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③赤褐色 ④破片	覆土	横位隆線に2条の沈線が沿い、斜位沈線が派生する。ある いは三角形の区画か	中期前葉か
第27回 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③赤褐色 ④破片	覆土	1と同一個体か。斜位隆線に沈線が沿う	中期前葉か
第27回 図版 43	深鉢 底部	①粗砂礫 ②軟 ③ 褐色 ④破片	覆土	緩やかな外反気味の底部形態。外面無文。比較的複雑な 作りを呈す	中期前葉か

第24表 86号土坑遺物観察表

採回番号 図版番号	器種 部位	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第27回 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③褐色 ④ 破片	覆土	平行沈線による小区画内を縦沈線による格子目文が充填 される。器厚やや薄手	五領ケ台2式
第27回 図版 43	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②やや軟 ③褐色 ④破片	覆土	口唇部肥厚し、基部で緩やかな彎曲を呈す。肥厚下には 2条の横位沈線が走り、屈曲部には細隆線と沈線が走る。 横位文様構成か	五領ケ台2式
第27回 図版 43	深鉢 底部	①粗砂礫・石英 ② 良好 ③明赤褐色 ④破片	覆土	底部端部が僅かに突出する張り出し底。体部は全面縄文 が施される。LR縦位間隔施文	中期前葉か

第三章 検出された遺構と遺物

第25表 89号土坑遺物観察表

拝因番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第27因 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫・石夾 ②良好 ③暗灰黄色 ④破片	覆土	横位LR・RLによる羽状縄文。草体幅は短く多段の文様構成を呈す	前期末葉
第27因 図版 43	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②やや軟 ③橙色 ④破片	覆土	口唇部僅かに外反し深い刻みを施す。以下無筋縄文しを横位に施文する	中期前葉か
第27因 図版 43	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②良好 ③橙色 ④破片	覆土	口唇部は尖り、比較的強く開く口縁部形態。口唇部には横位沈線以下縦位沈線が施されるが、施文は浅く判然としない	中期前葉か
第27因 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	覆土	3・4条の沈線による意匠。横位沈線が高り斜位沈線が派生する。三角形の区画文か	中期前葉

第26表 92号土坑遺物観察表

拝因番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第27因 図版 43	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	覆土	体部縄文施文。横位RL	踏碁b式

第27表 99号土坑遺物観察表

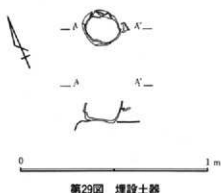
拝因番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第27因 図版 43	口縁部	①粗砂粒 ②やや軟 ③明赤褐色 ④破片	覆土	有孔の浅鉢であろうか。口縁部は内傾し、恐らく下半で強く屈曲するか。無文で赤彩の痕跡は認められない	踏碁b式

第28表 110号土坑遺物観察表

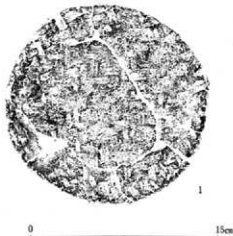
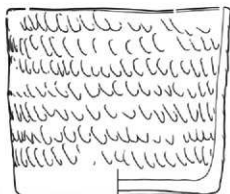
拝因番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第27因 図版 43	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	覆土	体部縄文しR縦位施文。間隔施文か	中期前葉

第29表 121号土坑遺物観察表

拝因番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第27因 図版 44	深鉢 体部	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	覆土	横位座状貼付文とボタン状貼付文を付す。施文は縦位集合沈線と縦位矢羽状沈線の懸垂構成からなる	踏碁c式
第27因 図版 44	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②良好 ③橙色 ④破片	覆土	僅かに内彎する口縁部形態。口唇部に刻みを施し、口縁部文様帯は縦位結節縞で画される。区画内は、地文縄文横位LRが施され、結節縞が縁取る。	五葉ヶ台式直 後段階



第29図 埋設土器



第30図 埋設土器出土遺物

埋設土器

調査区南西側のD区西斜面で検出された。Ds-28グリッドに位置する。周辺は、西側への急傾斜地形であり、遺構密度は極めて稀薄であり、近接する遺構は無く、奈良・平安時代の74号・88号住居跡や、61号土坑や164～170号土坑が散在するのみである。本遺構に伴う縄文時代の遺構は皆無である。

本遺構は、D区西斜面における北側側道調査時に検出された。検出面は、Ⅲ層上の縄文時代包含層である。この面で74号住等の調査を行った後、既に上端が露出していた本遺構の調査を行った。

本遺構は単独の埋設土器である。土器は正位に出土しており、若干東側へ傾く。鉢形の土器で口縁部に僅かな欠損部が認められるものは定形の出土といえよう。周辺の施設や、埋設土器に伴う掘り込みの検出に努めたが、周辺には同時期の土坑・ピットは見られず、また、埋設土器周辺にも、焼土・炭化物の散布も確認されなかった。

このように、本遺構は周辺に施設を伴わず、単体の土器出土が見られるのみであり、焼土・炭化物も見られないことから、住居内の埋裏や炉址としての可能性は無い。また、同様の遺構も調査区内では認められず、本遺構に土坑が伴わないことから、墓あるいは墓塚ではなく、埋設行為も認められない。埋設土器とした遺構名にも疑問が挟まれるだろう。

出土層位である縄文時代の包含層を重視すると、斜面における包含層内出土個体と位置付けられるが、周辺の縄文時代出土遺物はすべて小破片であり、完形・半完形の個体の出土を他に見ない。

本遺構は取り敢えず埋設土器として報告されるが、性格不明の単独出土の土器としたい。

縄文時代遺構外出土遺物

ここでは、縄文時代の遺構出土遺物以外の土器・石器を掲載する。遺構外出土遺物として一括して扱うが、縄文時代遺構以外の例えば奈良・平安時代の遺構出土の縄文遺物も併せて掲載している。そのため、いわゆる厳密な包含層出土遺物とは違った性格であり、層位的な時期差や時期別の平面分布は詳細には提示できないが、本遺跡及び周辺地域の該期傾向の一端は把握できる資料である。本書では、その一部を図化・掲載するが、掲載基準は遺存度を重視し、出土位置や出土層位は優先しなかった。尚、奈良・平安時代の遺構出土の縄文遺物も帰属するグリッド名に置き換えて一覽した。

本遺跡の縄文遺物包含層は、Ⅲ層上面に比定されるが、全体的に散漫な出土状態であり、際だった集中箇所はなかった。また層位そのものも20cm程度の層厚で、時期差が明瞭に判断できる状態ではない。

また、縄文時代前～中期集落跡には、傾斜地や谷を利用した「土器捨て場」が形成されるが、本遺跡も傾斜地形で、東西斜面に谷を有している。しかしながら、東西の谷部分の試掘ではその存在は確認できなかった。

実際に、本遺跡で検出された縄文時代前期～中期住居跡は5軒のみで、その出土遺物も概ね少量である。「捨て場」を形成し得なかった集落の可能性もある。ただし、本遺跡北側の緩傾斜面に、該期集落が存在していた場合は、北側の谷あるいはC区北東部の谷頭周辺に「捨て場」が形成される可能性がある。今後の調査に注意を要したい。

さて、遺構外遺物の概略的な分布だが、全体に散漫な出土状態とはいえ、平面的には数箇所の集中が見られる。最も濃密に出土した地点は、D区台地高標高部分であり、82号～84号住や65号～89号坑等が占地する箇所である。次に目立つ集中箇所は、C区北東部にあたる東斜面裾部谷頭周辺に見られる。遺構は80号・81号住、90号～100号坑等が占地している。このように比較的遺物が集中する地点は、縄文時代の遺構が占地する箇所であり、当時の居住およ

び遺構埋没過程によって、若干ながらも遺物が集中する傾向が見られるのであろう。調査区域内では、その他には集中箇所は無く、東・西斜面地に散在する程度である。

また、出土遺物の時期的な偏りは、極端な例は無い。ただし、D区台地高標高部分では、前期後半と中期前葉の土器片が集中し、C区東斜面裾部谷頭周辺では前期前半と後半の破片を主体とする。

C区谷頭周辺には中期前葉の破片は分布しておらず、このことから、当地点は、前期を主体とした居住形態と捉えられよう。今回の調査では、前期前半の遺物を出土した遺構は確認されなかったが、谷頭周辺北側の調査区域外にその存在も予想されよう。

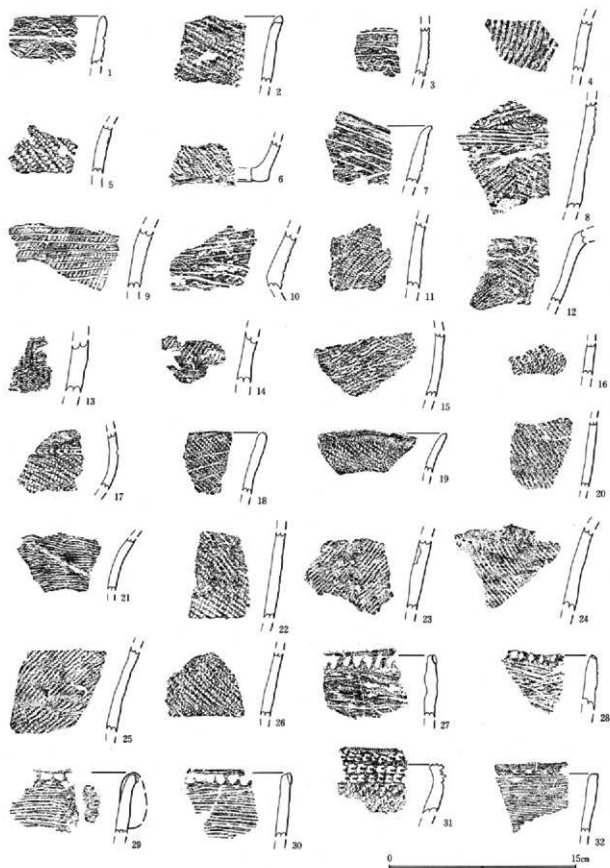
反面、D区高標高部分は前期後半と中期前葉の土器片がまとまるが、前期前半や後期後半の破片も出土しており、居住域として安定した地点と考えられる。緩傾斜地形を避地する傾向であろうか。

その他の時期としては、中期後半の破片は少量ながら、偏りを見せず台地全域より出土する。また、後期前葉の破片は、D区西斜面部で数片がまとまりを見せた。

出土土器片の様相としては、前期前半とした第31図1～15は胎土に繊維を含む。有尾式系土器群や黒浜式に比定されよう。第31図16～第32図56は前期後半に含まれる。16～26は諸磯a式・b式である。27～32は興津式及び影響下の例と考える。33～56は諸磯c式である。41・42は興津式の要素を含む。第33図59～68は十三菩提式及び前期終末段階に比定されよう。前期の土器片では諸磯c式が占める割合が比較的安定しているようだ。

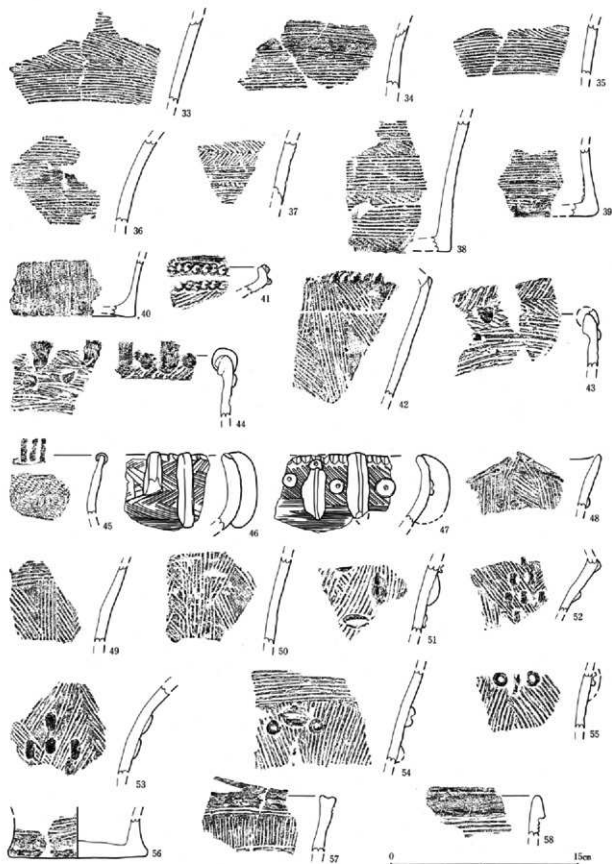
中期前葉の資料は第32図57・58、第33図69～第34図110に集めた。殆どが前述のように、D区台地高標高部分に集中し、量的にも多い。五領ケ台2式～直後段階にまとまるが、概して該期の資料は当地域で稀少であり、遺構出土資料と併せて良好な例と位置付けられよう。

中期後半～後期前葉の破片は第35図にまとめた。遺構は検出されなかったが、周辺地域に同時期の集

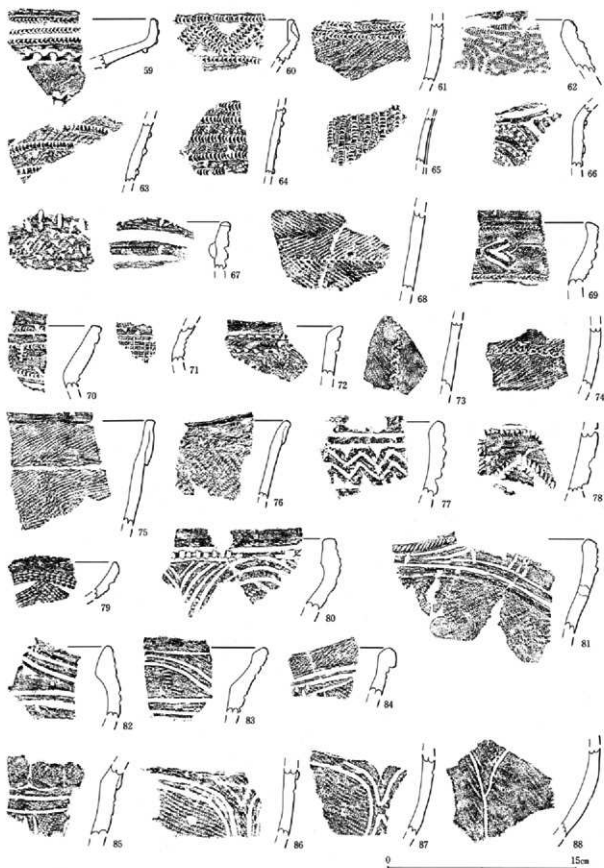


第31回 遺構外出土遺物 (1)

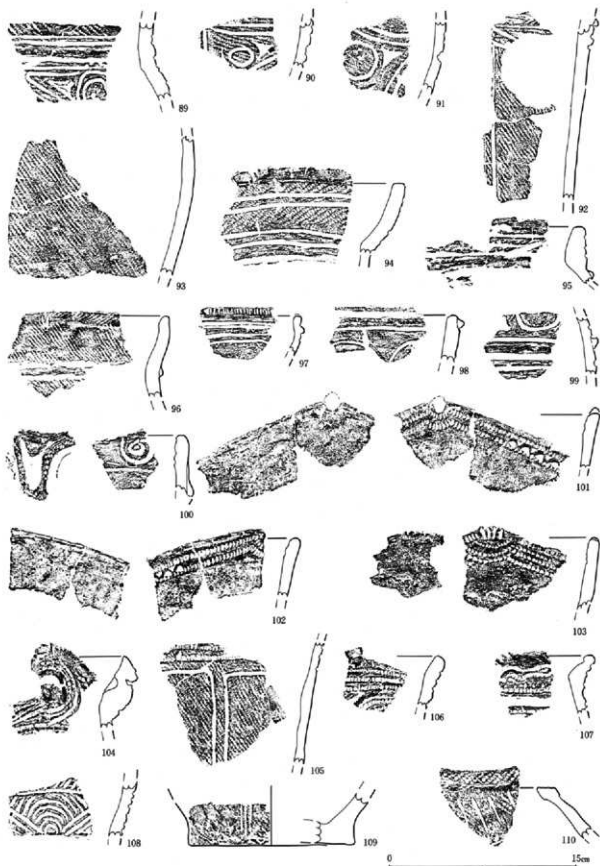
第三章 検出された遺構と遺物



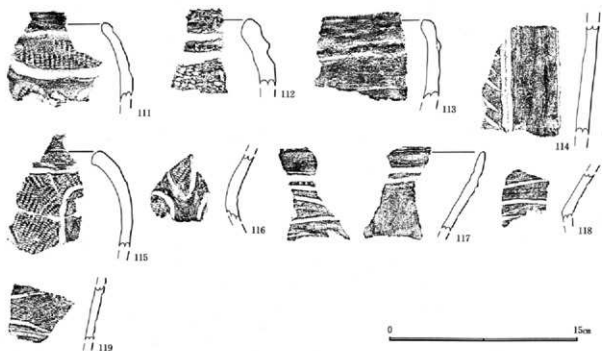
第32図 遺構外出土遺物(2)



第33圖 遺構外出土遺物 (3)



第34図 遺構外出土遺物(4)



第36図 遺構外出土遺物(5)

落の存在が予想されよう。

次に、遺構外出土の石器を概観すると、遺構外出土土器とはほぼ同様の分布状況を呈す。出土土器の时期的な特定はできないが、出土土器の傾向からは、前期後半～中期前葉に比定されるものと考えられる。

組成としては、石鏃・打製石斧・削器（スクレイパー）が多く、石錐・石匙・磨製石斧の出土量がやや少ない傾向を見せる。磨石・石皿も見られるが、中期後半のような圧倒的な比率ではない。

第36図1は尖頭器あるいは搔器と思われる。硬質泥岩製で先端部を欠損する。未製品の可能性もある。

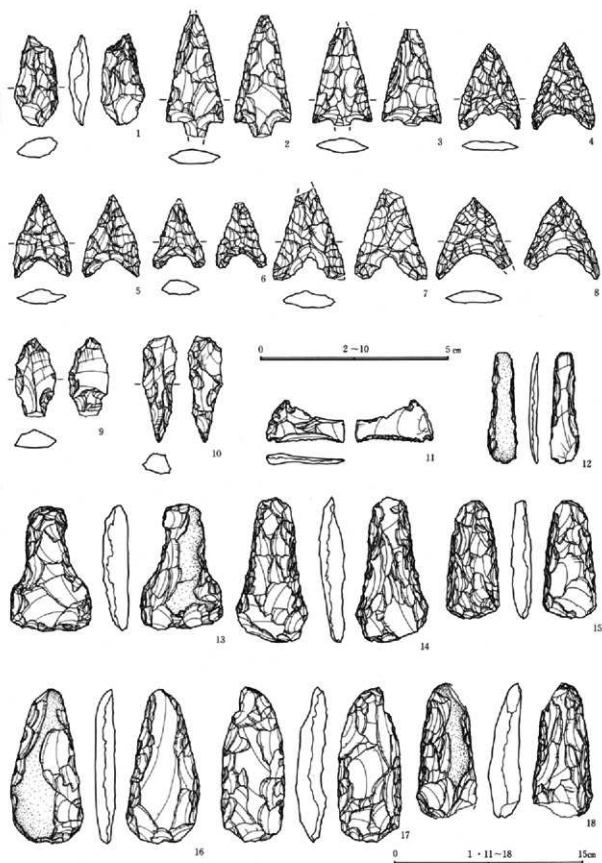
石鏃（2～9）では、2・3が有茎、9が未製品である。他は凹基鏃で黒曜石・チャート製である。石錐（10）は黒曜石製で小型の横長剃片を素材とする。

11は硬質泥岩製の石匙である。粗雑な作りで刃部のみに調整が集中する。12は細身の縦長剃片を素材とした打製石斧であろうか。側縁に調整を施す。13～27は打製石斧。13・14は撥形、15～25は短冊形、26・27は分銅形であろう。磨製石斧（28）は1点の

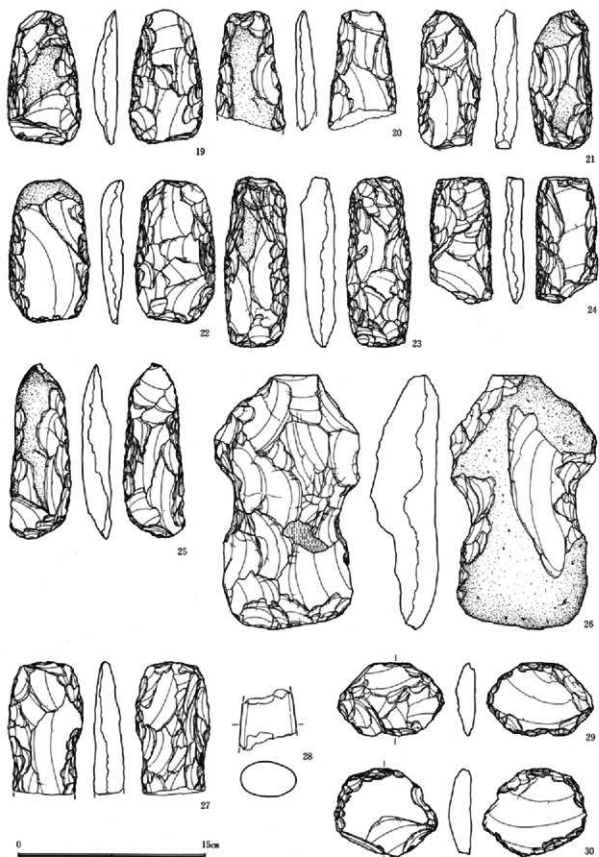
みの出土で、刃部・頭部を欠損する。スクレイパーは8点を図示した（29～36）。29・30は硬質泥岩製で、横長剃片の周縁を丁寧に調整する。31～33は硬質頁岩・頁岩製の縦長剃片を素材とし、調整はおもに両側縁に及ぶ。34～36は横長剃片を素材としており、刃部に調整が集中する。34は硬質頁岩製、35は粗粒安山岩製、36は硬質泥岩製である。37は加工痕のある剃片石器とした。硬質泥岩製の横長剃片を素材し、刃部及び側縁に調整を施す。凹石（38）は変輝緑岩製で両面凹み・使用痕を有す。39は磨石と思われるが研磨状の擦痕が認められ、あるいは砥石の機能を持つか。40・41は磨石。41の縁辺は一部調整を施す。

石皿は1点のみ出土した（42）。緑色片岩製で完形である。底面に凹みを有する。白石は2点を図示した。縁辺の一部に調整が見られ、平坦面には微小の擦痕が認められる。

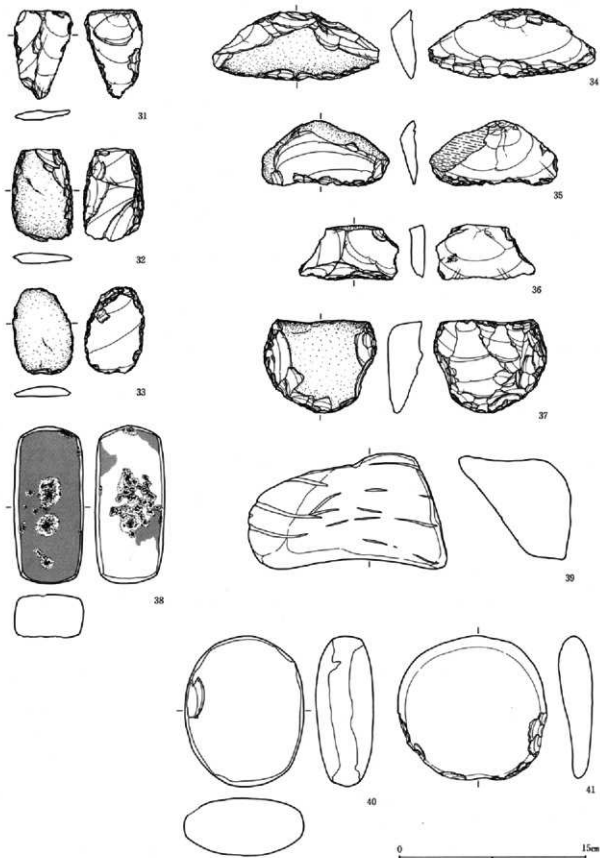
第三章 検出された遺構と遺物



第36図 遺構外出土遺物 (6)



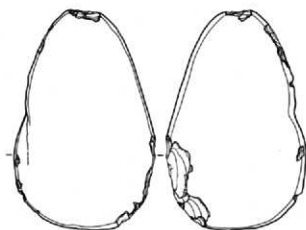
第37図 遺構外出土遺物 (7)



第38図 遺構外出土遺物(8)



42



43



44



第39図 遺構外出土遺物(9)

第3章 検出された遺構と遺物

第31表 遺構外縄文土器遺物観察表

博覧番号 図版番号	器種 部位	①粘土 ②徳成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第31回 図版 44	深鉢 口縁部	①繊維・砂粒 ②良好 ③純褐色 ④破片	Dk-36Gr	直立気味に開く口縁部形態。口縁部下に1条の沈線が走り、以下斜位比線尾交互配列による波状文を配す。	黒浜式か
第31回 図版 44	深鉢 口縁部	①繊維・砂粒 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	Dk-23Gr	緩やかに外反する口縁部形態。小波状口縁か。横位LR縄文が覆う	黒浜式
第31回 図版 44	深鉢 体部	①繊維 ②良好 ③純褐色 ④破片	Dde-28Gr	横位平行沈線が数条走り、以下コンパス文が施される	黒浜式
第31回 図版 44	深鉢 体部	①繊維・砂粒 ②良好 ③暗灰褐色 ④破片	De-44Gr	かたい風体。無節Rの横位施文	黒浜式
第31回 図版 44	深鉢 体	①繊維・砂粒 ②良好 ③純赤褐色 ④破片	Ci-24Gr周辺	附加条R L縄文の横位施文	黒浜式
第31回 図版 44	深鉢 底部	①繊維・砂粒 ②やや軟 ③純黄褐色 ④破片	Ci-24Gr	底部直立し、体部下半大きく開く。体部縄文は無節Rの横位施文	黒浜式
第31回 図版 44	深鉢 口縁部	①繊維・砂粒 ②良好 ③純褐色 ④破片	Du-25Gr	口唇部外反する。口縁部には平行沈線を主とした大型菱形状意匠を配す	有尾式系
第31回 図版 44	深鉢 体部	①繊維・砂粒 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	De-45Gr	横位平行沈線で上位と下位の文様帯を囲す。上位は斜位沈線文に刺突文が沿う菱形状の意匠か。下位はLR・RLの羽状構成	有尾式系
第31回 図版 44	深鉢 体部	①繊維・砂粒 ②やや軟 ③褐色 ④破片	Ci-24Gr	地文縄文LR横位施文に横位平行沈線を施す	黒浜式併行
第31回 図版 44	深鉢 頸部	①繊維・砂粒 ②良好 ③純褐色 ④破片	Da-27Gr	屈曲する頸部破片か。平行沈線を主とする横長の菱形状構成	有尾式系
第31回 図版 44	深鉢 体部	①繊維・砂粒 ②良好 ③明黄褐色 ④破片	De-44Gr	0段多条のLR・RLによる羽状構成	有尾式系
第31回 図版 44	深鉢 頸部	①繊維・砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	Ck-23Gr	屈曲する頸部下の破片。LR・RLによる羽状構成	有尾式系
第31回 図版 44	深鉢 体部	①繊維 ②軟 ③明黄褐色 ④破片	Bt-28Gr	縄文施文。LR横位施文	黒浜式併行
第31回 図版 44	深鉢 体部	①繊維・砂粒 ②良好 ③純褐色 ④破片	Ci-24Gr周辺	体部縄文施文。LR横位施文	黒浜式併行

押印番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第31図 図版 44	深鉢 体部	①織羅・砂羅 ②良好 ③明黄褐色 ④ 破片	Cj-24Gr	体部縄文施文。L R 横位施文	黒浜式併行
第31図 図版 44	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	Ci-22Gr	地文縄文 R L 横位施文。円形刺突文を施す	諸磯 a 式
第31図 図版 44	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③明褐色 ④破片	Br-19Gr	微量の織羅含む。平行沈線による横位 c 字状爪形文が盛り、以下横位 R L が施される	諸磯 a 式
第31図 図版 44	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	表探	丸みを帯びる口唇部。器面全面縄文 R L 横位施文か	諸磯 a 式
第31図 図版 44	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	Ci-24Gr	口縁部緩やかに外反する。器面全面縄文 R L 横位施文か	諸磯 a 式
第31図 図版 44	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	Ci-24Gr	内彎する体部形態。器面全面縄文 R L 横位施文か	諸磯 a 式
第31図 図版 44	深鉢 体部	①粗砂質 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	Db-44Gr	外反する体部。無筋縄文 r の横位施文	諸磯 a 式併行
第31図 図版 44	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	De-44Gr	体部縄文施文が響う。R L 横位施文	諸磯 b 式か
第31図 図版 44	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	Db-44Gr	体部縄文施文。R L 縦位施文	前期後半か
第31図 図版 44	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	Dd-45Gr	体部縄文施文。R L 横位施文	諸磯 b 式
第31図 図版 45	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	De-45Gr	体部全面縄文施文か。L R 横位施文。原体幅は短い	前期終末か
第31図 図版 45	深鉢 体部	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③褐色 ④ 破片	Ck-23Gr	体部縄文施文。R L 横位施文	前期後半
第31図 図版 47	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	Dd-46Gr	直立気味の口縁部。口唇部に刻みを施し、以下横位撫でを施す	興津式か
第31図 図版 45	深鉢 口縁部	①粗砂質 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	Ci-24Gr	直立気味の口縁部。口唇部に刻みを施し、以下斜位沈線を充實する	興津式か
第31図 図版 45	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③暗灰黄色 ④破片	表探	口唇部外反する。口唇部に押圧状の刻みを施し、以下横位集合沈線を充實する。	諸磯 c 式併行

第三章 検出された遺構と遺物

神田番号 図版番号	器種 部位	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第31図 図版 45	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	Df-36Gr	直立気味の口縁部形態。口唇部に押圧状の刻みを施し、 抬高するが貼付文が付される。以下横位集合沈線を光輝 する	諸織c式并行
第31図 図版 45	深鉢 口縁部	①細砂質 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	Db-45Gr	緩やかに内彎する口縁部形態。口縁部に横位の連続刺突 文を施す。以下L形横文を横位に施す	両洋式か
第31図 図版 45	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②良好 ③明黄褐色 ④破片	Da-24Gr	直立気味の口縁部形態。口縁部より横位集合沈線が施文 される	諸織c式并行
第31図 図版 45	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③明黄褐色 ④破片	Dg-26・27Gr	多載竹管による集合沈線群を主とした横帯文構成。横位 集合沈線群で分帯され、上位には集合沈線による横位対 置状の意匠を配す。	諸織c式
第32図 図版 45	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	Da-25・26Gr 表採	多載竹管による横位集合沈線群を多段に施した横帯文 構成	諸織c式
第32図 図版 45	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③明黄褐色 ④破片	Dkl-26・27Gr Dlm-24・26Gr	多載竹管による集合沈線群の横帯文構成。横位集合沈線 群で分帯され、上位には弧状の意匠が配される	諸織c式
第32図 図版 45	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③褐色 ④破片	Da-25Gr	多載竹管による横位集合沈線群を多段に施した横帯文 構成	諸織c式
第32図 図版 45	深鉢 体部	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	De-45Gr	多載竹管による集合沈線群を多段に施した横帯文構成。 横位集合沈線群間に横位刺突列を施し、上位には横位矢 羽状文を配す	諸織c式
第32図 図版 45	深鉢 底部	①粗砂礫 ②良好 ③純褐色 ④破片	Ds-26Gr	緩やかに外反する体部下半・底部形態。多載竹管による 横位集合沈線群を多段に配した横帯文構成。空白部には 施文横位横位Rしが施され、低部にも及ぶ	諸織b式
第32図 図版 45	深鉢 底部	①粗砂礫 ②良好 ③明黄褐色 ④破片	Df-43Gr	底部端部僅かに突出する張り出し底。多載竹管による平 行沈線群による横帯文構成。底部端部にまで横位沈線が 施文される。	諸織c式
第32図 図版 45	深鉢 底部	①細砂粒 ②やや軟 ③明黄褐色 ④破片	Dc-46Gr	底部端部僅かに突出する。体部下半は外反気味に開く。 条線状の平行沈線群が垂下する懸垂文構成か	諸織c式
第32図 図版 41	口縁部	①細砂粒 ②良好 ③明黄褐色 ④破片	Dlm-27Gr	内彎する口縁部。口縁部に2条の浮線を巡らし連続刺突 文を施す。以下斜位の集合沈線を配す	諸織c式
第32図 図版 45	深鉢 胴一体部	①粗砂礫 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	Dbe-44・45Gr	頸部屈曲部下の体部上半。屈曲部には押圧状の刻みを連 続し、体部には多載竹管による集合沈線を主とした斜位 沈線文を配す	諸織c式
第32図 図版 45	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	表採 Cトレンチ	口縁部にボタン状と傘状の貼付文を付し、口唇部内面 には多載竹管による横位矢羽状文、口縁部外面には横位沈 線文を施す	諸織c式
第32図 図版 45	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	Db-44Gr	口唇端部に傘状の貼付文と円形貼付文を連続する。口唇 部には平行沈線による斜位沈線が施され、口縁部は横位 を基調とした斜な集合沈線文を施す	諸織c式

採回番号 図版番号	器種 部位	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第32図 図版 45	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	Dd-43Gr	口唇部に3条の瘤状貼付文を付す。以下横位LRを施す	諸磯c式併行
第32図 図版 45	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③明黄褐色 ④破片	Cj-26Gr	内彎する口縁部に棒状貼付文を付す。口唇部には押圧状の刻みを連続し、口縁部は横位矢羽状集合沈線を施す	諸磯c式
第32図 図版 45	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	C区表採	内彎する口縁部に棒状貼付文とボタン状貼付文を付す。口唇部には押圧状の刻みを連続し、口縁部には斜位集合沈線文を以下横位集合沈線文を施す	諸磯c式
第32図 図版 45	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③淡黄色 ④破片	Ck-24Gr	小波状口縁か。小型のボタン状貼付文を付し、縦位集合沈線を主とする懸垂文構成か。波頂下には斜位沈線が配される	諸磯c式
第32図 図版 45	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③明黄褐色 ④破片	De-45Gr	多載竹管による集合沈線群を施文の主とする。横位沈線群以下縦位沈線と斜位沈線が配される	諸磯c式
第32図 図版 45	深鉢 体部	①粗砂粒 ②やや軟 ③淡黄褐色 ④破片	D区表採	多載竹管による集合沈線群を施文の主とする。縦位沈線による器面分割及び縦位矢羽状沈線と縦位菱形状彫文を配す	諸磯c式
第32図 図版 45	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	Db-45Gr	横位・縦位の紡錘状貼付文を付し、多載竹管による集合沈線を弧状・斜位に施す	諸磯c式
第32図 図版 45	深鉢 肩部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	Db-43Gr	頸部屈曲部下に小型の瘤状貼付文を集中する。多載竹管による集合沈線を斜位に施す	諸磯c式
第32図 図版 45	深鉢 体部	①粗砂粒 ②やや軟 ③赤褐色 ④破片	表採	瘤状貼付文を集中し、多載竹管による集合沈線を相向かう斜位に配し縦位矢羽状構成を呈す	諸磯c式
第32図 図版 45	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	Df-44Gr	多載竹管による横位集合沈線が走り、直下に横位紡錘状貼付文とボタン状貼付文をみす。貼付文は対称性を保つ。横位沈線以下は相向かう斜位沈線を充てる	諸磯c式
第32図 図版 45	深鉢 体部	①粗砂粒 ②やや軟 ③鈍黄褐色 ④破片	Dg-23Gr	対称性を保つ紡錘状貼付文とボタン状貼付文。54と同様に相向かう斜位沈線文を施す	諸磯c式
第32図 図版 45	深鉢 底部	①粗砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	Dde-46-47Gr	底径：10.8 底部端部僅かに突出する張り出し底。体部下半は外は気味に開く。多載竹管の横位集合沈線を施す。多段の横帯文構成か	諸磯c式
第32図 図版 45	深鉢 口縁部	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③褐色 ④破片	Dbe-46-47Gr	小波状口縁か。波頂部に三叉状の印刷文を刻み、以下横位沈線に面された幅状の施文域に縦位短沈線を充満する破片	五領ヶ台式直後段階
第32図 図版 45	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③暗黄褐色 ④破片	Def-44Gr	折返し状の口縁部。口縁部は無文で、以下横位平行沈線が走る	五領ヶ台直後段階
第33図 図版 45	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	Dd-44Gr	口縁部直立し頸部は強く開く。口縁部文様帯は横位の紡錘形横文を3条返らす。以下頸部は押圧条の刻みを付す横位沈線を設ける	前期末葉

第三章 検出された遺構と遺物

押込番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第33図 図版 45	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②良好 ③灰黄褐色 ④破片	De-44Gr	口縁部直立し頸部は狭く開く。口縁部文様帯は3条1組の結節浮線文を横位扇面状に巡らし、空白部は三角形に印刷する。	十三菩提式
第33図 図版 46	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③明黄褐色	Dd-44Gr	連続刺突文を施す横位結節浮線を巡らし、以下横位LR縄文を施す	十三菩提式
第33図 図版 46	深鉢 口縁部	①細砂粒・白色粒 ②良好 ③灰褐色 ④破片	De-46Gr	内傾する口縁部形態。刻みを施す横位結節浮線が斜位・弧状に付される。あるいは円環状の意匠か	十三菩提式
第33図 図版 46	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	表採	連続刺突文を施す横位結節浮線文が数条体部を巡る。地文は横位LR縄文を施す	十三菩提式
第33図 図版 46	深鉢 体部	①粗砂礫 ②やや軟 ③褐色 ④破片	Cトレンチ	幅広の連続刺突文を施す横位結節浮線文が多条に体部を巡る。地文は横位LR縄文を施す	十三菩提式
第33図 図版 46	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③灰黄褐色 ④破片	Dd-46Gr	連続刺突文を施す横位結節浮線文を比較的需要に付す。地文にLR縄文を施す	十三菩提式
第33図 図版 46	深鉢 体部	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	De-44Gr	頸部屈曲部か。屈曲部下に横位隆線が回り、以下弧状隆線も付される。弧状隆線には凹形刺突文が沿い、空白部は短沈線状に削まれる	中期前葉か
第33図 図版 46	口縁部	①細砂質 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	Df-44Gr	緩やかな波状口縁。口唇部に刻みを施し、口縁部には三角形の深い刺突文を刻む。内面は隆帯が沿う	前期末葉か
第33図 図版 46	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	Df-44Gr	LR・RL結節縄文による横位羽状構成。原体幅はやや長い	前期末葉
第33図 図版 46	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②良好 ③浅黄褐色 ④破片	Da-37Gr	緩やかに内傾する口縁部。頸部で屈曲する。口唇部及び頸部に横位連続刺突文を施し、横位V字状貼付文を意匠する	中期前葉
第33図 図版 46	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	De-45Gr	口縁部外傾し頸部で屈曲する。口唇部に沿って低隆帯が付され、側縁として沈線と数度状刻み目が施される。沈線は意匠状に突出する	中期前葉
第33図 図版 46	深鉢 体部	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	Dd-43Gr	縦沈線で画された小区面文。区面内は縦沈線による格子目文を充填する。区面縁には三角刺突文を施す	五領ケ台2式
第33図 図版 46	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②やや軟 ③鈍褐色 ④破片	De-44Gr	口唇部尖る。口縁部に沿って、深い刺突文が疎らに施される。地文は無節?	中期前葉
第33図 図版 46	深鉢 体部	①細砂粒 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	Cy-28Gr	結束第1種RL縄文の縦位施文	五領ケ台2式
第33図 図版 46	深鉢 体部	①細砂粒 ②良好 ③明褐色 ④破片	Db-44Gr	結束第1種RL縄文の横位施文	五領ケ台2式

縄文番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第33回 図版 75 46	深鉢 口縁部	①粗砂礫・白色粒 ②良好 ③赤褐色 ④破片	注記なし	口縁部折返し状に肥厚する。口唇部は無文だが以下横位 R L縄文が覆う	五領ケ台2式
第33回 図版 76 46	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	D6-44Gr	口縁部折返し状に肥厚する。波状口縁か。折返し部以下 は横位L R・R L縄文による羽状構成	前期未業か
第33回 図版 77 46	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②やや軟 ③褐色 ④破片	D6-45Gr	平縁。口縁下に2条の横位沈線を巡らし、おそらく頸部 沈線で口縁部文様帯を画す。口縁部文様帯は2条の沈線 で弧面状文を横位に施し、三角印刻を刻む	五領ケ台直後 段階
第33回 図版 78 46	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③純褐色 ④破片	Dj-28Gr	小矢羽状の連続刺突文による方形状区画と山形状意匠	中期前業
第33回 図版 79 46	深鉢 口縁部	①細砂質 ②良好 ③純褐色 ④破片	表採	大きく開く口縁部形態。駒歯状工具による横位・斜位連 続刺突文が光潤され、空白部は三角形印刻文を充てる	前期未業か
第33回 図版 80 46	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	D6c-45・46	平縁。口縁部に沿って1条の沈線が巡る。口縁部文様帯 は、弧状沈線による半楕円状意匠を連続する。地文は横 位L R縄文	五領ケ台2式
第33回 図版 81 46	深鉢 口縁部	①細雲母・砂粒 ② 良好 ③灰褐色 ④ 破片	D6-43Gr	波状口縁か。頸部隆縁で画される口縁部文様帯。口唇部 には削みが連続し、隆縁・口縁部に沿って2条の沈線が 施される。沈線には各所に短沈線が割まれる。地文縄文 は横位L R	五領ケ台2式
第33回 図版 82 46	深鉢 口縁部	①細雲母・砂礫 ② 良好 ③褐色 ④破 片	De-45Gr	波状口縁か。口縁部及び頸部に2条の沈線が沿い、口縁 部文様帯を画す。波頂部下には三角形の印刻が対に割 まれる	五領ケ台2式
第33回 図版 83 46	深鉢 口縁部	①粗砂礫 ②良好 ③純赤褐色 ④破片	De-45Gr	平縁か。口縁部・頸部に横位沈線が1条巡り口縁部文様 帯を画す。文様帯内は弧状沈線による半楕円状意匠が配 される。地文縄文は横位L R	五領ケ台2式
第33回 図版 84 46	深鉢 口縁部	①粗雲母・砂礫 ② 良好 ③純黄褐色 ④破片	De-43Gr	波状口縁。口唇部折返し状に肥厚する。肥厚部下に3条 の沈線が沿う。地文縄文は口唇部横位L R、以下縦位L Rも施される	五領ケ台2式
第33回 図版 85 46	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③純褐色 ④破片	De-44Gr	口唇部欠損。肥厚する折返し状口縁部小。口縁部下に2 条の沈線が施され、以下体部懸垂する縦位沈線も看取さ れる。地文は横位L R縄文	五領ケ台2式
第33回 図版 86 46	深鉢 体部	①粗砂礫 ②良好 ③純黄褐色 ④破片	D6-46Gr	頸部破片。頸部の横位隆縁より派生する「Y」字状懸垂 文。2条の沈線が沿う。縄文は縦位L Rで隆縁上にも施 文される	五領ケ台2式
第33回 図版 87 46	深鉢 体部	①細雲母・砂粒 ② 良好 ③褐色 ④破 片	Di-47Gr	弧状沈線による「V」字状・逆「V」字状意匠が縦位に 連続する。空白部には三角形の印刻か。地文は縦位L R縄文を施す	五領ケ台2式
第33回 図版 88 46	深鉢 体部	①細砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	D6-48Gr	縦沈線が縦位・弧状に懸垂する。不定形な意匠。地文は 縦位L R縄文を施す	五領ケ台2式
第34回 図版 89 46	深鉢 体部	①細雲母・砂粒 ② 良好 ③明赤褐色 ④破片	表採	頸部縮や小に屈曲する。低隆帯が巡り2条の沈線が沿う。 以下沈線による円文や三角文を充てる。円文上位の平行 沈線には交互刺突文を施す。隆帯上位には縦位L R縄文 が施される	五領ケ台2式

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

神田番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第34図 図版 46	深鉢 体部	①細雲母・砂粒 ② 良好 ③純黄褐色 ④破片	Cj-40Gr	沈線による小三角形状意匠。意匠内には沈線の円文と三 又文を充てる。地文縄文は縦位LR施文	五領ケ台2式
第34図 図版 46	深鉢 体部	①細雲母・砂粒 ② 良好 ③純黄褐色 ④破片	Dc-46Gr	2条1組の弧状沈線が施され、空白部には沈線円文と三 又文を充てる。地文縄文は縦位LR施文	五領ケ台2式
第34図 図版 46	深鉢 体部	①細雲母・砂粒 ② 良好 ③明褐色 ④ 破片	Ds-26Gr	横位粗降線が巡り沈線が沿う。以下2条の沈線が重下す る壺形文様成か。地文縄文はLR縦位施文	五領ケ台2式
第34図 図版 46	深鉢 体部	①粗雲母・砂粒 ② 良好 ③明赤褐色 ④破片	Df-43Gr	体部縄文はLR縦位施文。間隔状の施文箇所もある	五領ケ台2式
第34図 図版 46	深鉢 口縁部	①粗雲母・砂粒 ② 良好 ③明赤褐色 ④破片	Dh-45Gr	内彎する口縁部形態。平縁か。口縁部と頸部に2条の沈 線を巡らし口縁部文様帯を画す。地文縄文はLR横位施 文	五領ケ台2式
第34図 図版 46	深鉢 口縁部	①粗雲母・砂粒 ② 良好 ③明赤褐色 ④破片	Dg-35Gr Gi-36Gr	口縁部は短く、頸部緩やかな屈曲を呈す。平縁の口縁部 に数条の横位沈線が沿う。頸部は隆線が巡る	五領ケ台2式
第34図 図版 47	深鉢 口縁部	①細雲母・砂粒 ② 良好 ③純褐色 ④ 破片	Df-44Gr	口縁部内彎し、頸部緩やかに屈曲する。頸部に横位隆線 を巡らす。縄文は口唇部横位LR、他は縦位LRを施し、 頸部隆線上にまで及ぶ。	五領ケ台2式
第34図 図版 47	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②良好 ③ 純黄褐色 ④破片	Dc-44Gr	緩やかな内彎を呈す口縁部。口唇部に刻みを連続し、直 下に隆線を巡らす。以下横位沈線が沿うが、最下端の沈 線は垂下する傾向を見せる	五領ケ台2式
第34図 図版 47	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③ 純赤褐色 ④破片	Dc-44Gr	口唇部に沿って隆線を付し、側縁沈線を施す。以下弧状 沈線が横位に連続する	五領ケ台2式
第34図 図版 47	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③ 褐色 ④破片	Dc-45Gr	頸部破片か。横位隆線を巡らし、上位は弧状沈線、下位 は横位沈線を施す。地文縄文は横位LRが看取される	五領ケ台2式
第34図 図版 100	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②良好 ③ 明褐色 ④破片	C区トレンチ	緩やかな波状突起か。蛇行状隆帯を付し、隆帯上には縄 文が施される。内面も沈線による垂円状意匠が施される	五領ケ台式直 後段階
第34図 図版 47	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②良好 ③ 純褐色 ④破片	Dh-46Gr	波頂部小波状の波状口縁を呈す浅鉢。外面は無文で、内 面口縁部に複列の連続判突文が沿う。複列判突文間には 円形判突文が疎らに施される。	五領ケ台式直 後段階
第34図 図版 47	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②良好 ③ 純褐色 ④破片	Dc-44Gr	101と同一個体か。波状口縁を呈し、内面口縁部に複列 の連続判突文が施される	五領ケ台式直 後段階
第34図 図版 47	深鉢 口縁部	①細砂粒 ②良好 ③ 純黄褐色 ④破片	表標	波状口縁を呈する浅鉢。内面施文。波頂部に大型の刻み を付し、口唇部には小型の刻みを連続する。口縁部に沿 って複列の連続判突文を施す	五領ケ台式直 後段階
第34図 図版 47	深鉢 口縁部	①粗雲母・砂粒 ② 良好 ③純褐色 ④ 破片	Dde-46-47Gr	逆「C」字状突起。突起及び口縁部に沿って複列の結節 線が施される。結節線は単弦施文	五領ケ台式直 後段階

標本番号 図版番号	器種 部位	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	出土位置	器形・文様の特徴	備考
第34図 図版 106 47	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色 ④破片	Dde-45-47Gr	頸部破片か。2条の連続刺突文を横位に巡らし、以下1条の沈線を相向ウケラック状に懸垂させる。地文縄文は縦位LR	五領ケ台式直後段階
第34図 図版 106 47	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③赤褐色 ④破片	Dde-46-47Gr	口縁部に沿って3条の連続刺突文が施され、以下弧状沈線が配される。隆線には連続刺突文が沿う	五領ケ台式直後段階
第34図 図版 107 47	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②やや軟 ③鈍黄褐色 ④破片	Df-48Gr	口唇部丸みを帯びる。口唇部下に総行細隆線を付し、連続刺突文を頸縁とする。以下横位連続刺突文・幅広の沈線が巡る	五領ケ台式直後段階
第34図 図版 108 47	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	注記なし	横位沈線による分帯か。斜位沈線と弧状沈線による意匠文を配す	五領ケ台式直後段階
第34図 図版 109 47	深鉢 底部	①粗砂粒 ②やや軟 ③褐色 ④破片	Dbe-47Gr	底部直立気味。体部下半は、3条の垂下沈線による懸垂文構成。地文縄文はLR縦位施文	五領ケ台式か
第34図 図版 110 47	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③褐色 ④破片	De-44Gr	口縁部内傾する。あるいは放状口縁か。口唇端部に横位LR縄文が施され、体部は縦位LRを地文とし斜位沈線文が腹らに施される	五領ケ台式直後段階か
第35図 図版 111 47	深鉢 口縁部	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③浅黄色 ④破片	Dhi-29-31Gr	内彎する口縁部形態。低胎土と沈線による口縁部精円状区画文か。区画内は斜位LR充塞施文	加曾利EⅡ式
第35図 図版 112 47	深鉢 口縁部	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	Ck-24Gr	口縁部下に隆線を付し、凹線を頸縁とする精円状区画文か。区画内は横位LR縄文を充塞する	加曾利EⅡ式
第35図 図版 113 47	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍黄色 ④破片	Dwx-24-25Gr	緩やかに内彎する口縁部形態。口唇部内面やや肥厚する。口縁部下に横位隆線を巡らす。他は無文	加曾利EⅣ式
第35図 図版 114 47	深鉢 体部	①粗砂粒・白色粒 ②良好 ③鈍黄色 ④破片	De-47Gr	垂下沈線による意匠部と施文部配列。懸垂文構成。施文部は斜位沈線を充塞する	加曾利EⅡ式
第35図 図版 115 47	深鉢 口縁部	①細白色粒 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	Cl-24Gr	内彎する口縁部形態。口縁部下に細沈線を1条巡らし、以下逆「U」字状意匠による施文部と磨消す部の交互配列。施文部縄文は上位横位RL・下位縦位RL充塞施文	称名寺式
第35図 図版 116 47	深鉢 体部	①細白色粒 ②良好 ③鈍褐色 ④破片	Cl-24Gr	外反する体部中位破片。沈線による「U」・逆「U」字状意匠を上下に配す。「U」字内縁は縦位RL充塞施文	称名寺式
第35図 図版 117 47	深鉢 口縁部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	Da-32-33Gr	強く内彎する口縁部形態。口唇部は尖る。口唇部下に横位沈線を巡らし、以下斜位沈線を配す。内面も2条の横位沈線が施される。内面研磨	堀之内2式
第35図 図版 118 47	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③鈍黄褐色 ④破片	Da-32・33Gr	体部中位の屈曲部か。横位・斜位の沈線文を配す。沈線間は条線状と研磨部に分かれる	堀之内2式
第35図 図版 119 47	深鉢 体部	①粗砂粒 ②良好 ③黄褐色 ④破片	Da-32・33Gr	117・118と同一個体か。斜位沈線が施される。内面研磨	堀之内2式

第三章 検出された遺構と遺物

第32表 旧石器遺物計測表

検出番号	出土位置	器種	長 (cm)	幅 (cm)	重 (g)	石 材
第13図1 2	Dh-38	微削	(5.5)	2.1	6.05	硬質泥岩
	Dh-36	石刃	(1.8)	1.3	1.07	黒曜石

第33表 縄文石器遺物計測表

検出番号	出土位置	器種	長 (cm)	幅 (cm)	重 (g)	石 材	
80号住居跡 第15図6	7	打斧	10.1	5.9	89.75	珪質頁岩	
	8	打斧	11.3	6.0	72.04	珪質頁岩	
	8	敲石	14.8	11.1	134.80	榿安	
81号住居跡 第17図2		凹石	(11.7)	(5.2)	282.30	牛伏砂岩	
	82号住居跡 第20図24						
25	打斧	17.6	5.7	324.50	砂岩		
26	打斧	(10.4)	(5.9)	182.89	硬質泥岩		
27	打斧	(9.3)	(5.9)	190.45	榿安		
28	打斧	11.4	4.4	116.12	硬質泥岩		
29	磨石	7.5	12.5	298.20	榿安		
30	磨石	(7.4)	(5.5)	246.40	榿安		
30	磨石	(4.9)	(7.6)	82.18	牛伏砂岩		
83号住居跡 第22図16	17	覆土	加削	8.9	9.9	131.90	硬質泥岩
	18		磨石	10.6	7.7	333.00	硬質泥岩
	19		磨石	10.7	8.5	519.80	榿安
	20		磨石	(5.5)	(5.4)	52.26	凝砂
	20		石皿	(23.5)	(16.3)	2280.00	榿安
84号住居跡 第25図30	31	覆土	石匙	(4.9)	2.0	6.77	珪質頁岩
	32		打斧	11.5	4.6	111.97	緑色片岩
	33		打斧	(8.8)	(4.8)	116.16	珪質頁岩
	34		磨石	6.4	12.7	210.30	牛伏砂岩
	34		磨石	11.9	5.9	329.40	榿安
70号土坑 第28図5	覆土	打斧	(8.4)	(4.6)	58.06	砂石	
72号土坑 第28図2	覆土	微削	9.4	9.2	87.21	硬質泥岩	
83号土坑 第28図2	覆土	加削	5.6	(7.9)	53.27	硬質泥岩	
		台石	(6.6)	(11.4)	902.00	安輝緑岩	
110号土坑 第28図2	覆土	打斧	(8.0)	(5.2)	89.90	砂岩	
遺跡出土品 第36図1	台地西表	尖or 環	7.2	3.5	39.71	硬質泥岩	
		Cxy-24-25 石匙	(3.2)	1.5	1.72	黒色頁岩	

検出番号	出土位置	器種	長 (cm)	幅 (cm)	重 (g)	石 材	
3	Df-44	石皿	(2.6)	1.6	1.29	硬質泥岩	
	4	C区表土	石皿	2.3	1.5	0.80	黒曜石
	5	Dh-44	石皿	2.2	1.6	0.77	黒曜石
	6	Cj-22	石皿	(2.2)	1.4	0.75	チャート
	7	Cl-23	石皿	(2.4)	1.9	1.65	チャート
	8	C区表土	石皿	2.2	(2.1)	0.89	チャート
	9	Dh-44	石皿	(2.1)	1.1	0.92	黒曜石
	10	Dh-25	石皿	2.8	0.9	1.20	黒曜石
	11	Dj-22	石匙	3.3	6.2	12.15	硬質泥岩
	12	Dh-45		8.8	2.4	13.90	輝緑凝
	第36図13	Dh-46	打斧	9.8	6.5	120.10	硬質泥岩
		Dh-44	打斧	11.4	5.7	108.21	硬質泥岩
15		C区表土	打斧	9.2	4.2	67.06	硬質泥岩
16		Dh-44	打斧	12.1	5.8	133.72	輝緑凝
17		Dh-46	打斧	12.2	5.0	153.47	榿安
18		Df-44	打斧	(10.6)	4.8	125.44	榿安
第37図19	De-47	打斧	10.6	5.9	126.29	榿安	
	De-46	打斧	(9.4)	(5.5)	85.70	砂岩	
	21	覆土	打斧	11.9	5.0	123.67	榿安
	22	裏面Cトレンチ	打斧	11.3	6.4	163.15	硬質泥岩
	23	Dh-44	打斧	13.4	5.2	227.90	硬質泥岩
	24	Dh-46	打斧	10.0	5.0	98.96	榿安
	25	Cl-35-35	打斧	13.8	4.8	160.90	硬質泥岩
	26	覆土	打斧	20.1	11.6	1258.80	榿安
	27	Dh-45	打斧	(10.5)	5.9	169.82	珪質頁岩
	28	Dh-44	磨石	(4.8)	(4.5)	82.89	安支武岩
	29	Dim-24-26	磨石	5.8	8.5	89.68	硬質泥岩
	30	西頂部表土	磨石	6.9	8.2	112.35	硬質泥岩
第38図31	Cl-24	磨石	6.9	4.7	28.43	黒色片岩	
	Cj-22	磨石	7.3	4.8	40.23	頁岩	
	Dh-44	磨石	6.8	4.8	34.86	頁岩	
	Dh-26	磨石	5.4	13.2	133.18	硬質頁岩	
	Dh-46-47	磨石	5.1	10.1	67.28	榿安	
	Cl-22	磨石	4.3	7.9	41.88	硬質泥岩	
	Cw-26-27	加削	7.4	8.9	214.20	硬質泥岩	
	Dh-45	凹石	12.4	5.5	501.40	安輝緑岩	
	覆土	凹石	9.1	15.8	1330.90	榿安	
	Ob-22	磨石	11.9	9.5	799.50	ひん岩	
41	Cu-28	磨石	11.4	11.8	533.40	安支武岩	
第38図42	Br-18	石皿	32.1	22.2	8740.00	緑色片岩	
	Ca-38	台石	23.4	14.9	2300.00	安支武岩	
	Cl-23	台石	16.9	16.5	1483.90	榿安	

小 結

以上のように第4節では、縄文時代の遺構遺物を扱った。黒熊八幡遺跡では、奈良・平安時代の集落跡が主となる調査であり、縄文時代の遺構は少数に過ぎない。事実、奈良・平安時代の遺構調査中に縄文時代の遺構あるいは遺物が検出されるという手順であって、縄文時代を主眼とした調査ではなかった反省が残る。無論、奈良・平安時代の集落調査後、縄文時代の遺構遺物の検出に努めたが、居住条件を満たす箇所は、両時代とも近似しており、緩やかな斜面地形を選んだ占地傾向が把握された。

住居跡は、2箇所に分布する。C区東斜面掘部の谷頭周辺と、D区台地高標高部分に分かれる。土坑もこの2箇所に集中する傾向が見られる。谷頭部分は主に前期後半の住居跡が、D区台地高標高部分では、中期前葉の住居跡・土坑が検出されたように、时期的な居住域の占地動向が看取された。

また、2地点とも調査区域外に遺構分布を延ばす傾向にあり、集落の規模はやや広がるものと考えられる。ただし、環状集落や大規模集落といった、大型の遺構群を形成せず、小規模な住居群・土坑群が散在するものと捉えられよう。また、奈良・平安時代の集落跡が濃密な分布を呈すため、縄文時代の遺構は、良好な遺存度は望めないだろう。

土坑は、住居跡に近接する例が殆どである。貯蔵穴・墓塚といった機能が想起されるが、出土遺物も貧弱であり、特定の性格は確定できない。土坑の配置も、住居跡に近接する傾向のみで、いわゆる中央土坑群等のまとまりは看取できない。群在する土坑として位置付けておく。

遺構出土遺物では、82号住が比較的良好な出土状態を呈す。少量の諸磯C式も見られるが、中期前葉の五領ケ台2式及び直後段階の資料が主体を占める。第19図21-23は、共伴性に富むものと捉えられ、五領ケ台式直後段階の良好な様相を提示するものと考えている。また、特に22は、有孔罎付土器の前駆形態と評価できよう。

このように、本遺跡の縄文時代遺構・遺物は、集落の一部の調査のため、量的にも少なく、調査そのものも詳細な調査を果たし得なかったため、不明瞭な部分や問題点が多く残った。

しかしながら、出土した遺物は縄文時代中期前葉の資料を含み、当該地域の空白期間を埋める良好な資料と自負する。上越線調査以前の吉井町内の中期資料は、中葉段階から知られており、本遺跡をはじめ神保橋松遺跡で前葉段階の資料が出土した例は評価に値しよう。また、上越線黒熊地区の調査に於いても縄文時代の遺構を検出し得た遺跡は本遺跡のみであり、丘陵性台地に縄文遺跡の存在を示した貴重な例として位置付けたい。

第5節 奈良・平安時代の住居跡

黒熊八幡遺跡は、鯖川右岸の丘陵性台地に占地する奈良・平安時代を主体とする集落遺跡である。該期の堅穴住居跡116軒を検出し、台地上に営まれる、古代集落跡の調査である。ただし、集落全域は把握されておらず、特に北側の調査区域外に広く延びる様相が看取された。おそらく、丘陵性台地の全域に集落は広がるものと捉えられよう。本遺跡は、該期集落跡の南側の一部として捉えられよう。周辺の遺跡に目を転ずると、東西に隣接する黒熊采崎遺跡と黒熊中西遺跡でも、該期集落が検出されており、古代集落遺跡群として貴重な例を提示している。

住居跡の分布は、調査区北側のC・D区に集中する。特に、C～D区東斜面部に濃密な分布が見られ、重複する住居跡も多く検出されている。次に、東斜面裾部～B区平坦面にかけても住居跡が群在する。裾部は著しい重複はないが、B区平坦面の住居跡の重複は著しい。おそらくB区北側には大規模な集落が展開するものと考えられよう。さらに、東側のA区には、A₃～B下水田跡が検出されていることから、集落の生業も農耕を主体とした性格と思われる。出土遺物も、平野部や周辺遺跡との差はなく、鉄製刀子や紡錘車が混在している。

D区西斜面部の住居跡は多くはなく、散在する程度だが、2号溝周辺はやや集中する。C～D区住居群の延長とも捉え得る。

調査区南側の住居跡群の分布は薄いながらも、特徴的な様相を呈す。10世紀前後の時期にまとまり、瓦の出土を見る。この様相は、西隣する黒熊中西遺跡の古代寺院跡と周辺集落の様相に近似しており、本遺跡南側で検出された住居跡群も、あるいは古代寺院跡周辺で営まれる住居群として、寺院併設型集落の一部として位置付けられよう。

尚、本節では発掘調査時に付された住居跡番号順に説明を加えるが、所謂堅穴遺構や小鍛冶跡も住居跡として扱っている。

1号住居跡

調査区東側B区で検出された。B区は緩やかな東斜面が主であり、特に本住居跡周辺は比高差も少なく平坦地形といえる箇所である。住居跡の密度も比較的高く、3～7号住居跡が重複状態で群在している。1号住居も南側は5号住居の上に乗り、北側には3号住居が近接している。

平面形は西辺と南辺がやや短い不整形正方形を呈し、遺存状態の良い西側では壁高約40cmを測る。ただし、南側の土坑との重複、さらに東側への斜面地形のため、東壁高は僅か数cmしかなく、全体に遺存状態は良くないといえよう。

床面は、平坦面を意識するが斜面地形のためか、東側へ僅かに傾斜する。

壁周溝は西壁下で確認された。掘り込みは浅く緩やかである。

貯蔵穴は西南隅に約50×75cm程度の楕円形状の土坑を充てたい。掘り込みも床面より約40cmを掘りしつかりしている。

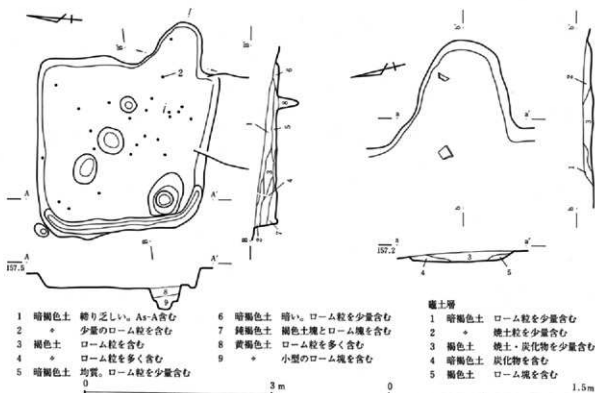
柱穴は特定できないが、床面中央やや東寄りの小ピットに可能性が求められる。また北東隅壁外に小ピットが検出されており、このピットも柱穴として考えておきたい。

竈は東壁南東隅寄りに設けられる。斜面地形のため流失しており遺存状態は極めて悪く、煙道も、壁外へ大きく突出するが、明瞭な掘り込みではなく、焼土粒の散布を優先した結果である。袖等の構築物も検出されず、焚口部に炭化物・焼土塊の散布を見るのみである。

その他では床面中央に不整形の浅い小土坑が確認されたが、埋土の特徴もなく、性格不明の落ち込みとした。また、床下遺構は検出されなかった。

遺物は少なく、覆土下層より土器細片が十数点出土した。図化し得た資料は2個体であり、土師器甕底部破片(1)と須恵器甕体部破片(2)で、居住に伴う資料ではなからう。

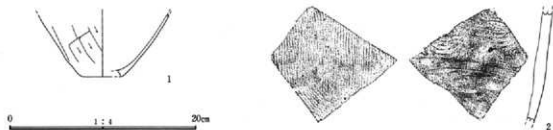
第5節 奈良・平安時代の住居跡



第40図 1号住居跡

第34表 1号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	窟方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Brx-19・20	不整正方形	290×288×35	N91°E	N104°E	壁周溝	甕2	

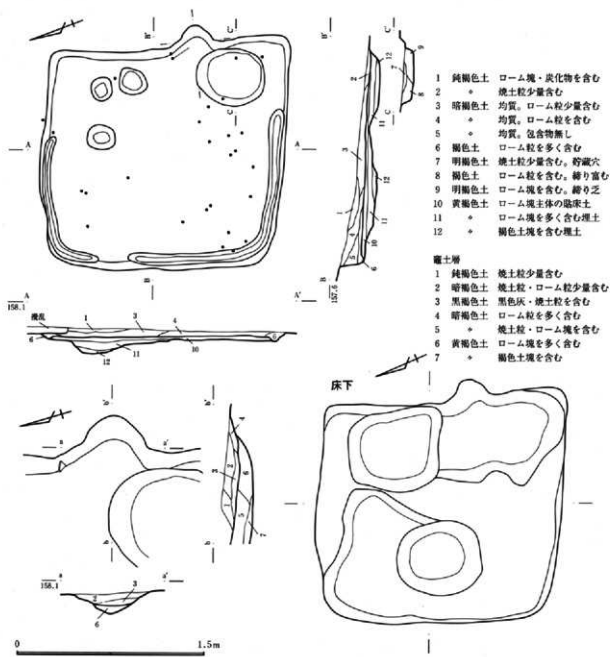


第41図 1号住居跡出土遺物

第35表 1号住居跡物観察表

図番号	法量 (cm) () 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第41図 器種 1 甕 51 図版	口: - 高さ: - 底: (4.2)	底部約1/3 覆土下層	①細片岩 ②酸化鉄 ③明褐色 ④土師器	強く圓く器形。外面斜位・縦位の幾割り。内面横位の狭で。器厚薄く、器壁剥落著しい。
第41図 器種 2 甕 51 図版	口: - 高さ: - 底: -	体部破片 覆土下層	①粗白色・黒色粒 ②還元焰 ③黒褐色 ④須恵器	外面平行叩き目が明瞭に残る。内面環状当て目後横位施でを施す。外面全体に自然輪磨かる。

第三章 検出された遺構と遺物



第42図 2号住居跡

第36表 2号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Bty-22・23	不整形正方形	384×365×40	N115°E	N106°E	貯蔵穴 壁間溝 床下土坑	台付甕1	



第43図 2号住居跡出土遺物

0 20cm

第37表 2号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②地成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第43図 土付甕 4版 51	口: - 台付壁 高: - 底: 10.0	脚部約2/3 残土	①粗片岩 ②酸化焙 ③暗赤褐色 ④土師器	脚部短く強く開く。外面接合部の指頭痕顕著。脚部内外面横位施で。底部内面貫当て目及び施施で。

2号住居跡

調査区東側B区で検出された。周辺は平坦地形が保証された地点であり、積極的な居住が想起されるが、本住居跡単独の確認となった。この平坦地形は、近接する1号民家（近世）とその周辺の削平によるものと思われ、本住居跡居住時は、東側への斜面地形と推察される。近接する住居跡は見られず、西に8号住居跡が距離において主軸を同一にして検出されている。

平面形は3.8×3.6mの不整形を呈し、南辺にやや不整合が見られる。深さは遺存の良好な西側で約40cmを測るが、東側は緩やかな斜面地形のため浅い。1号民家周辺の削平のため全体に浅い掘り込みといえよう。

床面は、凹凸が見られるがほぼ平面を築き、黄褐色土を基調とした貼り床がなされている。

壁周溝は、西壁中央より南壁と北西隅より北壁中央にかけて検出された。

貯蔵穴としては、南東隅のやや竈寄りに不整形の土坑が妥当性がある。

その他では、床面北東に三基の小ピットを検出したが柱穴としての可能性は低い。

竈は東壁やや南よりに設けられる。遺存状態は悪く、構築材等は確認できず、僅かに焼土粒の散布が焚口部に見られた。

床下遺構としては、竈周辺と中央西よりに大型の土坑が確認された。特に中央西よりの土坑は、掘り込みも明瞭な円形を呈し、床下土坑として位置づけられよう。

遺物は覆土中より数点の出土が見られたのみである。土師器台付き甕脚部1点(1)が図示し得た。

3号住居跡

調査区東側B区北端で検出された。本住居跡の北側は調査区域外で、南側半分の調査にとどまっている。B区住居跡群の一隅にあり、東に4号住居跡、南に1号住居が近接する。また、15号土坑が東壁に近接する。後述する4号住居も調査区域外に北側が延びることからも、B区住居跡群は北側へ濃密な分布を示す傾向が判断できよう。

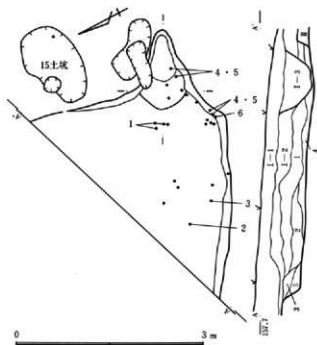
南側半分の調査のため、平面形は判然としないが、おそらく不整形を呈すものと考えられる。深さは確認面から約30cm程度で、調査区北壁の観察においても、耕作が確認面にまで及ぶため、良好な断面は得られなかった。また北東方向の傾斜が見られ、そのため東壁の一部は逸失している。遺存状態は不良といえよう。

床面は、黄色褐色ロームを基盤とした地床である。周溝・貯蔵穴・柱穴は確認されなかった。床下遺構に相当する掘り込みも無い。

竈は、東壁南東隅寄りに設けられる。攪乱坑が北側に接し一部竈北壁に重なる。煙道を壁外に大きく突出し、焚口部には緩やかな凹みを持つ。凹みには僅かながら焼土粒・炭化物が認められた。袖は顕著なものは認められないが、南側壁が緩やかな彎曲を見せ、袖相当の機能も想起されよう。構築材の崩落土は検出されなかった。

遺物は覆度下層一床面より十数点が出土した。特に竈周辺には濃密な出土が見られ土師器甕(4~6)が散らばる。土師器坏(1)、須恵器坏(2)は床直上より出土した。

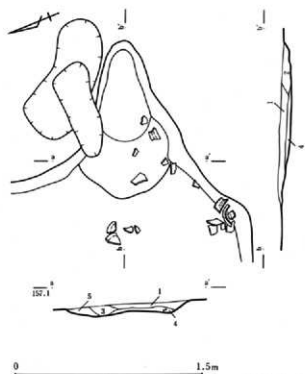
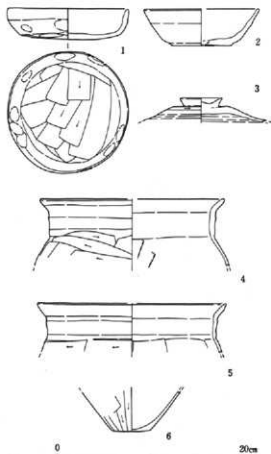
第三章 検出された遺構と遺物



- I-1 表土 (盛り土)
 I-2 旧表土
 I-3 近-現代土坑埋土
 1 暗褐色土 少量のローム粒を含む
 2 * やや砂質。ローム粒を含む
 3 * ローム粒を多量に含む
 4 * ローム塊を多量に含む
 5 * 均質 やや暗い。

竈土層

- 1 暗褐色土 小型の焼土化したローム塊を含む
 2 * 小型のローム塊を含む
 3 * 小型のローム塊を少量含む
 4 黒褐色土 黒色灰・焼土粒を主体とする
 5 暗褐色土 大型のローム塊主体



第44図 3号住居跡

第38表 3号住居跡計測表

位置 (市東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Brs-18・19	—	—×—×27	N112°E	N114°E		環2 壺1 壺3	

第39表 3号住居跡遺物観察表

国 器 種	法量 (m) () 推定値	残 存 率 出 土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第44国 器版 51	口： 12.6 坏 高： 10.6 底： 3.4	ほぼ完形 床直上	①細 雲母 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部直立し底部は扁平。全体に至む。口縁部横位撫でにより浅い外縁を作る。体部は指撫で、底部の境目りは一方に傾斜する。内面は横撫でを施す。
第44国 器版 51	口： (12.0) 高： (6.2) 底： 3.9	約1/4 床直上	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口唇部極僅小に外反。体部は直線的に開き、下半の丸みを経て底部は僅かに突出する。右回転軸線整形後底部回転糸切り無調整。体部下半に撫でが及ぶ。
第44国 器版 51	口： - 蓋 高： - 高： - 底： 2.6	約2/3 覆土下層	①粗 石英・片岩 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部平坦で環状筋を付す。横中央は凹む。体部器厚は薄く強く固く。左回転軸線整形天井部糸切り後横貼付。体部上半回転整形。
第44国 器版 51	口： (19.3) 高： - 底： -	口縁部 約1/3 覆土	①細 雲母白色粒 ②酸化焰 ③赤褐色 ④土師器	コ字口縁変。口縁部開き頸部は直立し肩部が張る。口縁部と頸部に強い横撫で、中間は弱い撫で。肩部は横位・斜位境目りが施される。内面口縁-頸部は横撫で、肩部は横撫で。
第44国 器版 51	口： (20.0) 高： - 底： -	口縁部破片 覆土	①細 雲母白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	コ字口縁変。口縁部開き頸部は直立し肩部が張る。口縁部器厚や厚手。口縁部と頸部に凹線状の強い横撫で、中間は弱い撫で。肩部は横位境目り。内面は口縁部-頸部横撫で、肩部は横撫で。器壁剥落。
第44国 器版 51	口： - 蓋 高： - 高： - 底： 4.0	底部約1/2 覆土	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	底部は小径で強く固く体部。底部端部・底面にまで縦位境目りが及ぶ。内面は入念な撫でによって平滑。

4号住居跡

調査区東側B区北端で検出された。7号住居跡とともに、B区住居跡群東端にある。前述の3号住と同様、北側が調査区域外にあるため南側の調査のみになった。3号住は南西に、7号住は南に近接する。周辺の地形は、緩やかな東側への傾斜地形であるが、本住居跡東約10m程からは急激な崖状の段差が南北に走る。下段は沖積地となる。

平面形は、北側が未調査のため詳細は不明だが、おそらく、辺長4m程度の正方形を呈するものと考えられる。深さは、遺存状態の良い西側で約50cmを測るが、東側は浅く10cm弱である。重複遺構は顕著なものはないが、断面の観察では現代の攪乱杭数基が、床面直上にまで達している。

床面は、ローム土の地床で、北東への僅かな傾斜が見られるがほぼ平坦といえよう。柱穴・貯蔵穴・壁周溝は見られない。

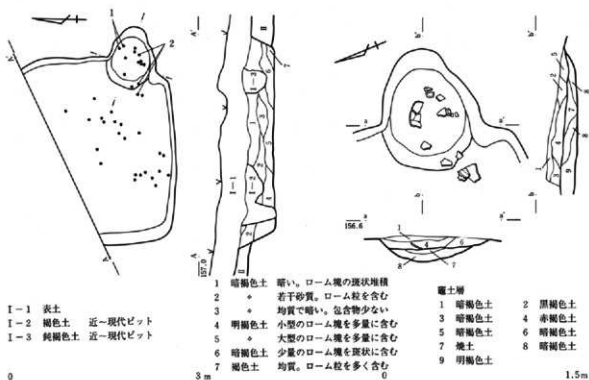
竈は東壁の南東隅寄りに設けられる。楕円状の煙道を突出し、浅い凹みを燃焼部とする。焚口部-燃

焼部に土器が散乱するが、構築材の一部の可能性もあろう。その他の粘土等の構築材は検出されなかった。燃焼部には少量の焼土・炭化物が認められた。

床面下の調査を行ったが、明瞭な床下遺構・貼り床は確認されなかった。

遺物は、覆土-床面にかけて数十点の土器片が出土した。前述の竈周辺と中央やや南寄りに集中して見られたが、細片が多く、図示し得たのは、竈周辺より出土した羽釜2点のみである。1の羽釜鈿には貫孔がなされており、特殊な用途が想起されよう。

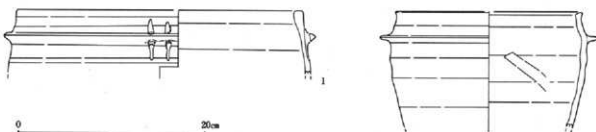
第3章 検出された遺構と遺物



第45図 4号住居跡

第40表 4号住居跡計測表

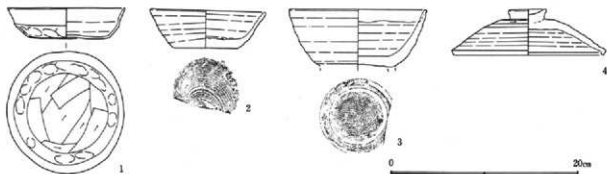
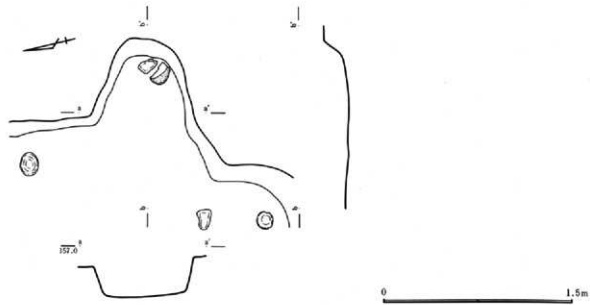
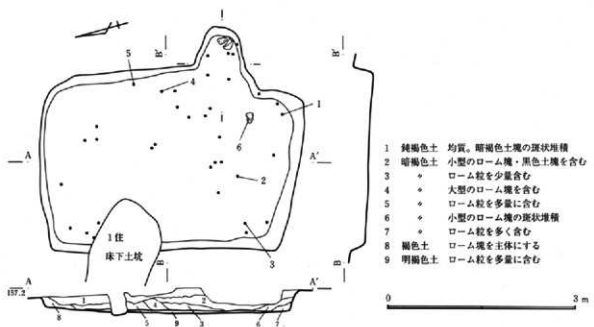
位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	扉方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Bq-18	正方形	396×—×50	N90°E	N103°E		羽釜2	



第46図 4号住居跡出土遺物

第41表 4号住居跡遺物観察表

図番号 器種	質量(cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴(形態・手法等)
第46図 1 羽釜 図版 51	口: (30.0) 高: — 底: —	口縁部破片	①粗 白色粒 ②酸化焰欠味 ③黄褐色 ④須恵器	口縁部内傾し脚は短い。体部器厚は比較的薄手。脚に2箇1対の小孔が上下に貫孔される。轆轤整形後脚貼付、内外面横位施でが施される。
第46図 2 羽釜 図版 51	口: (19.6) 高: — 底: —	口縁部— 体部の1/5	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰欠味 ③褐色 ④須恵器	口縁部外反し脚は長く水平に貼付される。体部上半に膨らみを持たせ、下半は小径か。轆轤整形後脚貼付横位施で。内面に斜位の施でが看取される。



第47図 5号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物

第42表 5号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	電方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Brs-19・20	長方形	415×290×40	N106°E	N104°E		坏2 埴1 蓋1 金属器1	1・6住

第43表 5号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ()推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第47図 1 坏 高: 8.6 底: 3.3 図版 51	□: 12.4 高: 8.6 底: 3.3	完形 床直	①細 雲母 ②微化胎 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部強く外傾し底面平底。口縁部は強い推でより面され外傾状となる。体部は弱い推で及び指痕が残る。底面は彫削りが施される。内面は平滑な無で。内外面の一部に煤が付着する。
第47図 2 坏 高: 7.0 底: 4.0 図版 51	□: (12.1) 高: 7.0 底: 4.0	約3/5 床直	①細 白色粒 ②還元胎 ③暗灰色 ④須恵器	口唇部僅かに内彎し体部中位～下半に緩やかな丸み。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。底部器厚が顕著で量感に富む。
第47図 3 埴 高: - 底: - 図版 51	□: 14.5 高: - 底: -	約3/4 高台部欠損 覆土下層	①細 白色粒 ②還元胎 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部一体化し緩やかな丸みを持つ。高台は削落し糸切り痕が看取される。口縁部内面に輪積み痕状の不定凹線が走る。右回転轆轤整形。回転糸切り後高台貼付。底部器厚が顕著で量感に富む。
第47図 4 蓋 高: 4.9 横: 3.8 図版 51	□: 15.8 高: 4.9 横: 3.8	ほぼ完形 床直	①粗 多量の石英 ②還元胎 ③暗灰色 ④須恵器	天井部高く環状溝が付される。溝中央凹む。体部は緩やかな彎曲を呈し、内面かえりは丸みを持ち内傾する。右回転轆轤整形。天井部回転彫削り後横貼付。

5号住居跡

調査区東側B区北端で検出された。B区住居跡群西側にあたり、平坦地形に立地する。1号住の南東隅に重複し、6号住居跡を切る新旧関係で検出されている。土層観察から得た新旧関係は、(古)6号住→5号住→1号住と捉えられた。周辺には3・4・7号住が近接する。

平面形は、長軸を南北に設け、南辺にやや乱れが見られる不整形長方形を呈し、平面規模は約4.1×2.9mを測る。遺存は重複住居ながら比較的良好で、深さ約40cmで掘り込みもしっかりしていた。西壁の北側で擾乱坑に切られる。

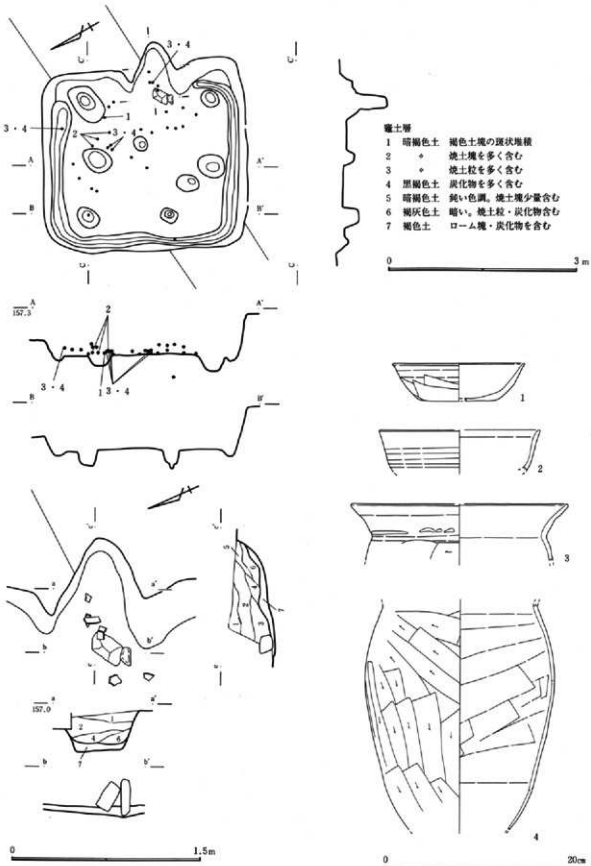
床面は、比較的平坦で僅かに東側へ傾斜する。黄褐色ローム土を基調とした貼り床だが、薄く中央部分に限られていた。

竈は、東壁南よりに設けられる。住居跡調査着手時に少量の焼土の堆積が認められたが、すでに、6号住との重複のため、土層の把握に至らなかった。煙道部馬蹄状を呈し、燃焼部は若干凹むものの、掘

り込みは認められない。構築物は煙道部奥で自然石が出土しているが、芯材としては積極性を持たない。粘土等も確認できなかった。

柱穴・貯蔵穴・周溝は検出されなかった。床下調査においても明瞭な床下遺構は確認されなかった。

遺物は、覆土中より住居跡全体に少量散布する状態で出土した。床直・床直上出土のものは少ないが、甕焼部周辺に、少量ながら完形個体が見られ、4個体を図示し得た。また、東壁際より鉄器1点が出土している。



第48図 6号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物

第44表 6号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竪方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Br-19・20	正方形	325×300×65	N119°E	N121°E	壁周溝 穴	坏1 埴1 甕2	5住

第45表 6号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(m) ()推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第48図 1 坏 図版 51	口:(14.0) 高:(8.2) 底:(4.0)	約1/4 束直	①粗 砂礫・雲母 ②燻化焰 ③褐色 ④土師器	口唇部僅かな丸みを持ち口縁部は外反する。体部は緩やかな彎曲を呈し底部平底。口縁部は横位撫で、体部は横位・斜位の荒削り、底面も荒削りが及ぶ。内面は撫で。
第48図 2 埴 図版 51	口:(16.8) 高:— 底:—	約1/5 束直	①細 白色粒・石英 ②燻化焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反する。体部下半に緩やかな彎曲を見せる。右回転横撫整形。口縁部内面に横位撫でによる弱い変換線。
第48図 3 甕 図版 51	口:(22.3) 高:— 底:—	口縁部破片 束直	①細 雲母・白色粒・黒色粒 ②燻化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部は外反し頸部強く屈曲する。肩部はなだらかな張り。口縁部横撫で後胴部荒削り。指滑痕及び甕当て目が口縁部に残る。内面横撫で。
第48図 4 甕 図版 51	口:— 高:— 底:—	胴部約1/3 束直	①細 雲母・白色粒・黒色粒 ②燻化焰 ③明赤褐色 ④土師器	3とは胴部。頸部の屈曲部以下体部上半に影らみを持たせる。胴部横撫で後体部上半斜位荒削り下半縦位荒削りを施す。内面は横位・斜位の荒撫で。

6号住居跡

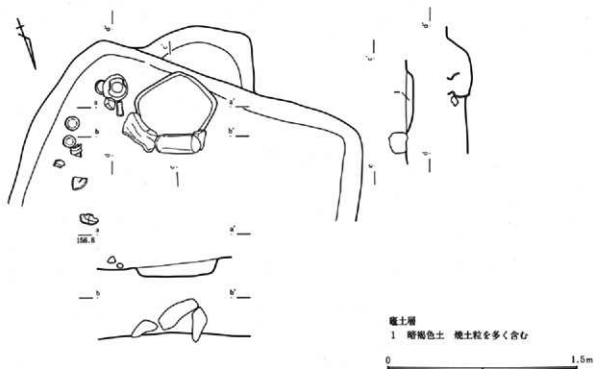
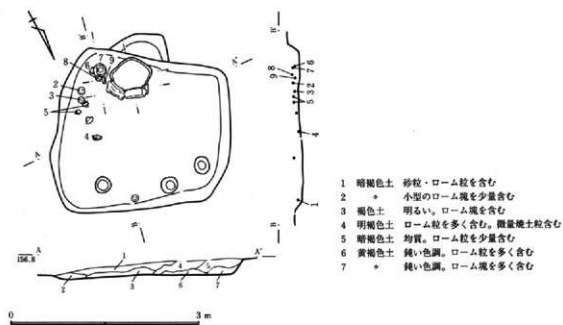
調査区東側B区北端で検出された。B区住居跡群南側にあたり、平坦地形に立地する。前述の5号住と重複して検出され、北東に7号住居跡が近接する。B区住居跡群では南端の可能性がある。

平面形は辺長約3m前後の整った正方形を呈し、掘り込みも深く、壁高約60cmを測る。5号住との重複があるが、遺存状態は良好で、住居跡全容の把握は容易である。他に試掘時の確認坑が東西に走り、極一部を破壊しているが、確認面との大きな差は無かった。ただ、5号住重複や試掘坑の存在から、土層軸は主軸に沿っておらず、土層の掲載は見合わせていただいた。

床面は、ほぼ平坦面を築き、黄褐色硬質ロームによる地床である。

柱穴は、北壁と南壁際に相対する配置で検出された(A-A')。また、北東隅の大型のピットも深く、床面中央の小ピットも比較的良好な深さである。さらに、西壁際にも規模・深さも妥当なピットが確

認されており(B-B')、補助柱穴やその他の施設の柱穴の可能性が高い。

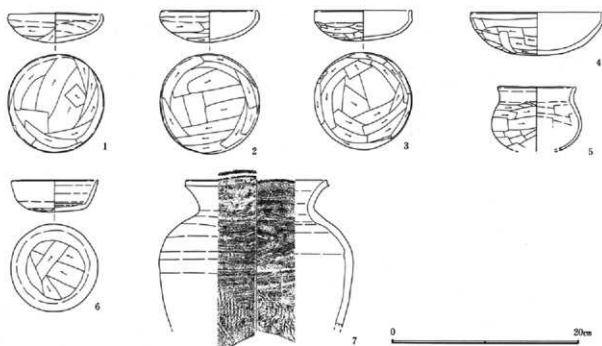


第49図 7号住居跡

第46表 7号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Bqr-18・19	不整形	280×250×23	N145°W	N164°W		坏5 小形壺1 罍1	

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第50図 7号住居跡出土遺物

第47表 7号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) () 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第50図 1 碗 図版 51	口： 9.8 高： 3.2	ほぼ完形 床直	①細 雲母・白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土脚器	小径で、口縁部は短く内傾。底部は丸底。口縁部横撫で後底部剝削り。内面斜位撫で顕著。
第50図 2 碗 図版 51	口： 10.0 高： 3.4	完形 床直	①細 雲母・白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土脚器	小径で、口縁部は短く内傾。底部は丸底。口縁部横撫で後底部剝削り。内外面器壁剥落。
第50図 3 碗 図版 51	口： 10.0 高： 3.2	ほぼ完形 床直	①細 雲母・白色粒 ②酸化焰 ③鈍黄褐色 ④土脚器	小径で、口縁部はやや短く直立気味。底部は丸底。口縁部横撫で後底部剝削り。口縁部横撫ではやや強く底部境が強い外縁状を呈す。
第50図 4 碗 図版 51	口： 14.0 高： 4.6	約1/2 床直	①細 雲母・白色粒 ②酸化焰 ③鈍黄褐色 ④土脚器	口径は大きい。口縁部は短くやや内傾する。底部は丸底。口縁部横撫で後底部剝削り。内面平滑な撫で。
第50図 5 小形甕 図版 51	口： 8.1 高： 6.7 底： -	約1/2 床直	①細 白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土脚器	口縁部は直立気味に外反し、体部中位に膨らみを持たせる。口縁部横撫で、体部横位剝削りが施される。内面体部は横位剝削り。
第50図 6 碗 図版 51	口： 9.0 高： 3.4 底： 7.7	ほぼ完形 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③鈍褐色 ④須恵器	小径で口縁部一体部一体化する。底部は緩やかな丸底。右回転縦撫整形後体部下半に不定撫で底面は剝削りを施す。器厚薄く矯正なつくり。
第50図 7 甕 図版 51	口： 15.0 高： - 底： -	口縁部一 体部約2/3 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	小型の甕。口唇部は短く内傾し口縁部は外反する。頸部は強く屈曲し、なだらかな唇部を経て体部上半に膨らみを持たせる。横位整形で、体部外面には平行叩き目、内面には青海波状当て目が残る。

7号住居跡

調査区東側に位置するB区住居跡群東端にあたる。北側に4号住居跡が近接する。東側は斜面地形が徐々に発達し、住居跡・土坑は検出されなかった。おそらく、本住居跡をもって、本遺跡に占地する住居跡の東限と考えられよう。

南辺と北辺の差が見られ、そのため不整形を呈する平面形となる。規模は軸長2.5m前後で小型といえよう。深さは比較的浅く約20cmを測り、南側と東側にかけて、遺存は不良となる。

床面は僅かな凹凸が見られるものの、ほぼ平坦面で、黄褐色ローム層土による地床を築く。硬化面は顕著ではないが、床面中央から南側にかけて若干硬く締まる箇所が点在していた。

壁周溝・貯蔵穴は見られず、床面上には北辺～東辺にかけて、3基の小ピットを数えるのみである。小ピットは深さ約10～20cmと浅く、柱穴として確証はないものの、重複等ではなく、北壁際の何等かの施設と考えておきたい。

本住居跡の特筆する施設は、竈であろう。南側隅に検出された浅い土坑と周囲の石組を竈として認めただが、従来の竈とは様相を異にしており、煙道や袖等の竈本来の施設は見られなかった。焼土を散布する土坑を主体とする燃焼部と周囲に配された自然石の様相は「炉」としての機能も想起されようが、自然石が鳥居状に懸架されていたことから、土坑上に燃焼施設が設けられていた可能性が強いため、竈と同等の燃焼施設として位置づけた。西壁には、浅い土坑が見られるため、あるいは煙道に相当する落込みかもしれない。

さらに、遺物の出土状況を注意すると、7の須恵器壺が竈東側で正位で出土している。須恵器壺の体部下半は打ち欠かれており、下部には土師器坏(3)が壺を支える様に置かれていたことから、須恵器壺は竈に付随する「置き台」としての用途が考えられよう。

このような状況から、本住居跡の竈は従来の竈としての用途・機能ではなく、特殊な煮沸・焼成行為

を伴う施設として捉えておきたい。

出土遺物は少ないものの完形・半完形の出土が目立った。前述の須恵器壺(7)と土師器坏(3)が竈東側から、さらに北側にかけて土師器坏(2・4)、土師器小型壺(5)、須恵器坏(6)が床直で、土師器坏(1)が北壁際で出土している。

小型の平面形で特殊な燃焼施設を持ち、須恵器壺による置き台、さらに完形土器を主体とする遺物出土状況は明らかに他の住居跡とは性格を異にする。台地東端に位置する占地状況からも、居住の中心から外れる要因が興味を引く。本住居跡は、集落内で居住以外の用途を持つ施設として位置づけられ、本来ならば、住居としての性格付けよりも、小聖穴遺構・住居遺構としての分類が妥当と思われたが、B区住居跡群内に包括される状況から、住居跡として報告した。

8号住居跡

調査区東側のB区で検出された。しかしながら、1・3～7号住とは距離を保っており、これらB区住居跡群と10m以上西側に位置する。

周辺は、比較的緩やかな東南方向への傾斜地形でありながら、本住居跡は単独の検出であり、重複や近接する住居跡は無い。大型の方形を平面形とする2号土坑がさらに西に位置するが、両者の関係性は極めて薄い。

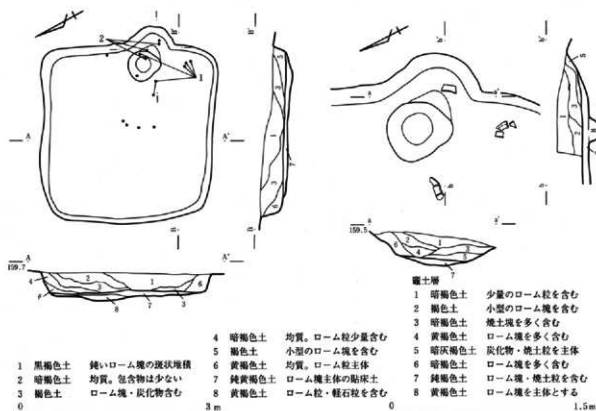
平面形は、辺長2.8m前後の正方形を呈すが、南辺中位が緩やかに彎曲する特徴を見せる。壁高は40cmと遺存は良好である。

床面は、ほぼ平坦で黄褐色ロームと褐色土による貼床がなされていた。尚、壁周溝・柱穴・貯蔵穴・床下遺構は見られなかった。

竈は東壁中央やや南寄りに設けられる。東壁に弱く突出する煙道を持ち、燃焼部から焚口部にかけて土坑状の掘込みを持つ。

遺物は少なく竈周辺より出土した土師器壺2点を図示し得た。

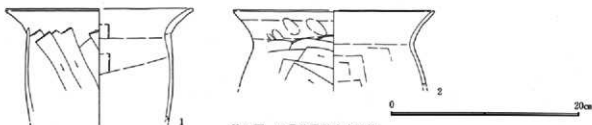
第三章 検出された遺構と遺物



第51図 8号住居跡

第48表 8号住居跡計画表

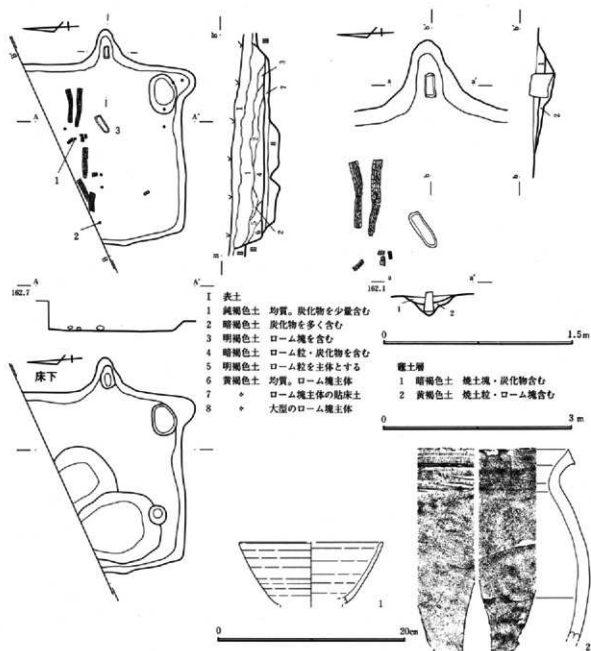
位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Bw-22・23	正方形	283×280×40	N121°E	N129°E		壺2	



第52図 8号住居跡出土遺物

第49表 8号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(m) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第52図 1 壺 51 図版	口: (19.7) 高: - 底: -	口縁部 約2/5	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焙 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部は大きく開き、緩やかな頸部弧面を経て直立気味の体部を呈す。口縁部は強い横撫で後頸部一帯部上半に斜位の施刷りを施す。内面は口縁部横撫で、頸部以下横位施撫でが施される。
第52図 2 壺 51 図版	口: (21.2) 高: - 底: -	口縁部破片	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焙 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部は大きく開き、頸部は強く屈曲する。肩部は比較的張る。口縁部横撫ではやや弱く指頭痕が残る。頸部一帯部上半は横位・斜位施刷りが施される。体部内面は横位施撫で。



第53図 9号住居跡

第51表 9号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) () 推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第53図 1 坑 51	口：(15.1) 高：— 底：—	破片	①細 白色粒・石英 ②透光岩 ③灰色 ④須磨器	口縁部は僅かに肥厚するがほぼ体部と一体化する。右回転軸線整形。強い縦線目が下半に集中する。
第53図 2 釜 51	口：(38.0) 高：— 底：—	口縁部破片	①粗 白色粒・石英 ②透光岩 ③灰色 ④須磨器	口唇部内傾し口縁部は短く外反する。頸部は緩やかに彎曲し体部上半に膨らみを持たせる。経作り後縦線整形印し整形。体部内面に円環状当て目残る。体部外面は斜位の撫でが顯著。

9号住居跡

調査区東-C区東斜面部の裾部下に位置する。北側1/3を調査区域外に伸ばし未調査である。周辺は緩やかな東-北方向の斜面地形ながら、住居跡は群をせず単独の検出となった。近接する遺構群としては土坑が挙げられ、2-6号土坑が東側に、17・20-23号土坑等が西側に近接する。

本住居跡は焼失住居であるが、西約20mに同様の焼失住居である12号住居跡が検出されており、両者の関係も注意しなければならないだろう。

本住居跡の平面形は、主軸長約2.8m程度の小型の方形と考えられる。深さは、遺存の良好な西壁付近で約40cmを測る。

床面は、ほぼ平坦面を築き、鈍褐色土による貼床がなされていた。硬化面は床面中央より竈・貯蔵穴周辺にかけて顕著に認められた。

壁周溝・柱穴は認められなかったが、東南隅に貯蔵穴が検出された。東西に長軸を持つ楕円形状の平面形で、約25cm程度の深さを見る。住居本体の東南隅も強く突出しており、貯蔵穴に連動した平面形と捉え得る。貯蔵穴内部には、少量の炭化物が認められたのみである。

竈は東壁中央付近に設けられる。煙道・焼焼部を壁外に突出し、焼焼部中央に大型の自然石による支脚が立つ。袖・天井材等の構築材は認められず、焼焼部が浅く凹む程度であった。

床下調査により、床下土坑を確認した。中央より西側にかけて、若干大型の不整形の土坑が2基検出された。いずれもローム塊を主体とした鈍黄褐色土を基調とした埋土である。

炭化材は、床面中央北側に主軸に沿った形状で出土した。量的には少なく、柱材や壁材を想起させる出土状態は認められない。おそらく、焼失後に南側の炭化材を除去したものと考えられる。

出土遺物は貧弱で、数点の土器片が見られたのみである。覆土中より出土した、須恵器輪・須恵器壺の破片から2個体を図示した。

10号住居跡

調査区東-C区東斜面部の裾部下に位置する。周辺はほぼ平坦地形ともいえる東緩斜面地形ながら本住居跡東より若干傾斜が強くなる。

近接する住居跡としては11号・12号・52号・53号住居跡が見られるが本住居跡とは重複せず、単独の検出となった。また、土坑群も群在し7-12号土坑や14号・18号土坑が北側から東側にかけて一群をなす。本住居跡より西側は平坦地形と東斜面が構成されるが、前述の11号住や29号住が一群をなす。C区東緩斜面住居跡群と呼称したい。

本住居跡の平面形は、約4.3×3.8程度の主軸を長軸とする隅丸長方形を呈す。深さは約10cm弱と浅く、遺存状態は良くなく、プラン確認時には既に床面の一部が露出していた。

床面は平坦面を築くものの、僅かに東側へ傾斜が認められた。ローム層土による地床で、硬化面が床中央に広い範囲で確認された。

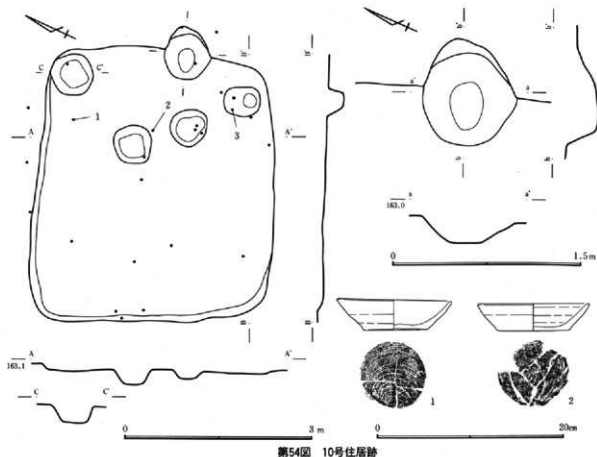
壁周溝は見られず、柱穴も妥当な配置を見せるピットはなかった。中央東寄りに小型の土坑状の落込み2基を得たが、柱穴としての特定には疑問が残る。

貯蔵穴は2箇所を確認された。通常の東南隅の小土坑と、北東隅の土坑である。何れも約30cm前後の深さで良好な掘り込みを呈していた。

竈は、東壁中央やや南寄りに設けられている。床下調査で得られた、焼焼部下の土坑は、竈使用時の施設ではなく、構築時の所産と捉えられる。東斜面のため、土層の観察は果たし得なかったが、少量の焼土粒が散布していた。

出土遺物は少量認められた。住居跡全域より出土しており、特定の集中は見られなかった。遺物の遺存も細片が多く、図示し得た個体は須恵器壺2個体であった。2個体とも、床直上の出土であり、本住居跡廃棄時に沿う遺物と考えられるが、居住に伴うセットではない。

第5節 奈良・平安時代の住居跡



第54図 10号住居跡

第50表 9号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cbc-22	—	280×—×40	N92°E	N91°E	貯蔵穴	埴1 壺1	

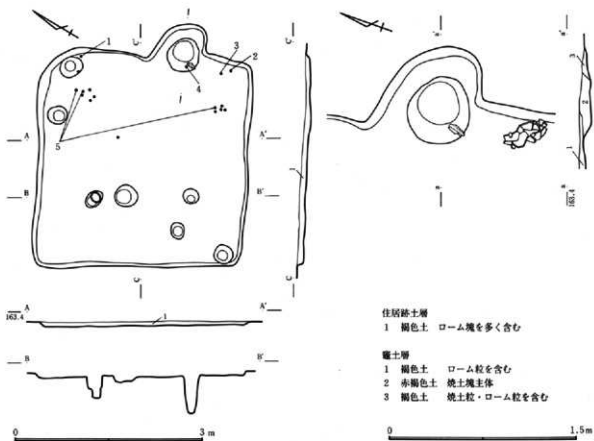
第52表 10号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cef-25・26	隅丸長方形	432×385×8	N68°E	N67°E	貯蔵穴	埴2	

第53表 10号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(m) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴(形態・手法等)
第54図 1 図版 51	口：12.0 坯高：3.2 底：6.6	ほぼ完形 床直上	①細 雲母・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須患部	底径やや広く、体部中位に高い段を持ち下半は緩やかに彎曲する。右回 転軸輪整形。底部回転糸切り後無調整。器厚厚手。器面風化。
第54図 2 図版 51	口：(11.5) 坯高：2.9 底：(7.6)	約3/5 床直上	①細 石英・白色粒 ②酸化焰気味 ③淡黄色 ④須患部	底径やや広く、体部下半に緩やかな彎曲を持たせる。右回転軸輪整形後 物で調整。腹では底面にも及ぶ。口縁一帯器厚底部に比して厚い。器 面風化。

第三章 検出された遺構と遺物



住居跡土層

1 褐色土 ローム塊を多く含む

竈土層

1 褐色土 ローム粒を含む

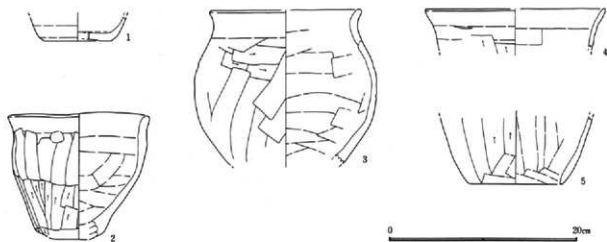
2 赤褐色土 焼土塊主体

3 褐色土 焼土粒・ローム粒を含む

第55図 11号住居跡

第54表 11号住居跡計測表

位置 (西東線)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Clg-25・26	正方形	343×340×8	N70°E	N83°E			



第56図 11号住居跡出土遺物

第55表 11号住居跡物観察表

図番号 器種	法量 (m) () 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第56図 1 小型 甕 52 図版	口: 高: 底:(7.0)	破片 覆土上層	①細 白色粒 ②還元焰 ③黄灰色 ④須恵器	器厚薄く、体部下半に丸みを持たせる。右回転軸調整形。底部回転糸切り後無調整。混入か。
第56図 2 小型 甕 52 図版	口:14.5 高:— 底:—	底部欠損 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③純黄褐色 ④土師器	口縁部は短く外反する。体部中位に膨らみを持たせ、底部は小径で不安定。口縁部横撫で、体部に強い縦位磨削り。さらに上半に雑な撫でが加わる。内面は口縁部横撫で、体部は横位磨削で施し平滑な器面。
第56図 3 甕 52 図版	口:(15.5) 高:— 底:—	約1/5 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③純黄褐色 ④土師器	口縁部は外反し体部中位に最大径を持たせる。所謂球胴状の器形。口縁部横撫で、体部上半は横位磨削り、下半は縦位・斜位の磨削りが施される。体部内面は横位磨削でも主体とする。
第56図 4 甕? 52 図版	口:(19.0) 高:— 底:—	口縁部破片 床直	①粗 片岩・砂礫 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	口縁部僅かに外反するがほぼ体部と一体化した器形。口縁部横撫で後体部上半に縦位磨削り。内面は横位磨削で。器厚薄い。
第56図 5 甕 52 図版	口:— 高:— 底:9.8	底部破片 床直上	①粗 片岩・砂礫 ②還元焰 ③純褐色 ④土師器	底径比較的広い。僅かな彎曲を呈し立ち上がる。外面縦位磨削り、下端は磨削で。内面縦位磨削で、下端は斜位磨削りが施される。4と同一個体の可能性もある。

11号住居跡

調査区東-C区東斜面部の裾部下位に位置する。周辺は、ほぼ平坦地形ともいえる東緩斜面地形でありながら、近世～現代にかけての耕作により、全体に遺存状態は悪く、本住居跡も、表土下で、既に床面が確認された状態で検出された。

本住居跡はC区東緩斜面住居跡群に含まれ、住居群のほぼ中央にあたる。東側には前述の10号住が近接し北側には12号住居跡・29号住居跡が見られる。

周辺地形は比較的平坦地形ながら、前述の現代耕作のため、遺存は悪く本住居跡も10cm以下の深さを測る。しかし住居全域に壁は確認され、平面形は辺長約3.4m前後の正方形を呈する。北東隅の形状は、他に比して隅丸形状が著しい特徴を持つ。

遺存度は前述のように不良ながら、平面形の把握は果たし得ており、中型の正方形住居跡と捉えた。

床面は、僅かな凹凸がみられるものの、ほぼ平坦面を保つ地床である。硬化面は、竈突口部周辺に顕著に認められた。

柱穴は、床面やや西よりの小ピット2基が妥当性を帯びる(B-B)。さらに、南西隅及び北壁東寄りのピットも可能性は高い。

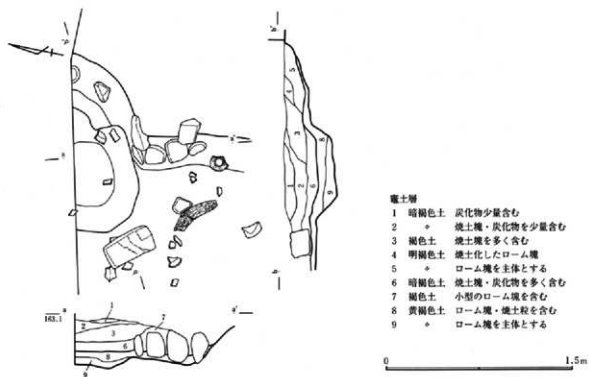
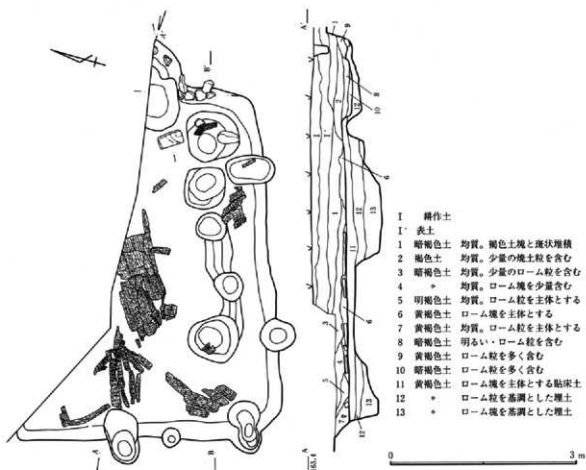
貯蔵穴は、北東隅の小ピットを充てたい。約30cmの深さで、破片ながら土師器甕の出土を見る。

竈は東壁南寄りにつけられる。北側と南側の壁に差が見られるが、北側の壁は袖相当の機能を有していたものとする。煙道は馬蹄状に突出し、燃焼部に浅い掘り込みを持つ。小型の自然石が横位に出土しているが、支脚としては疑問が残る。

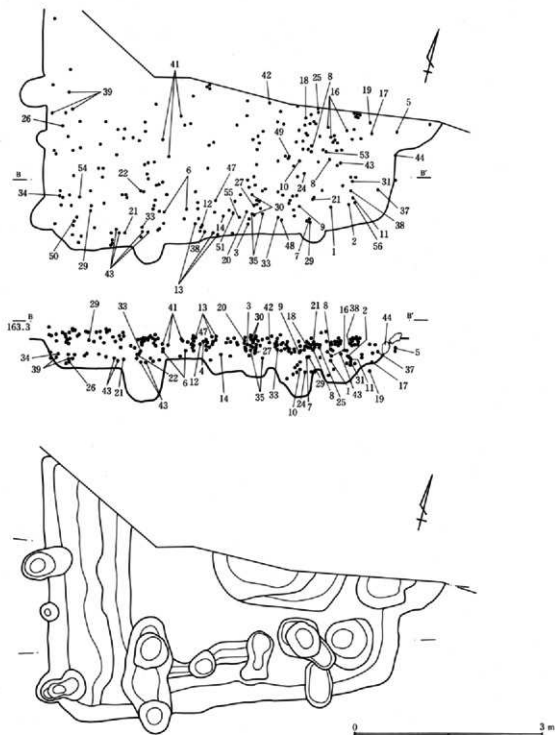
床下遺構は見られなかった。

遺物は、少量ながら南東隅と北東隅に集中する。竈内も少量の細片が出土していた。ほぼ床直出土であり、土師器甕(2・3)、土師器甕(4・5)など煮沸具を主体としている。

南東隅の遺物の集中から、貯蔵穴の存在も考えられ、精査を重ねたが、掘り込みは見られなかった。



第57図 12号住居跡(1)

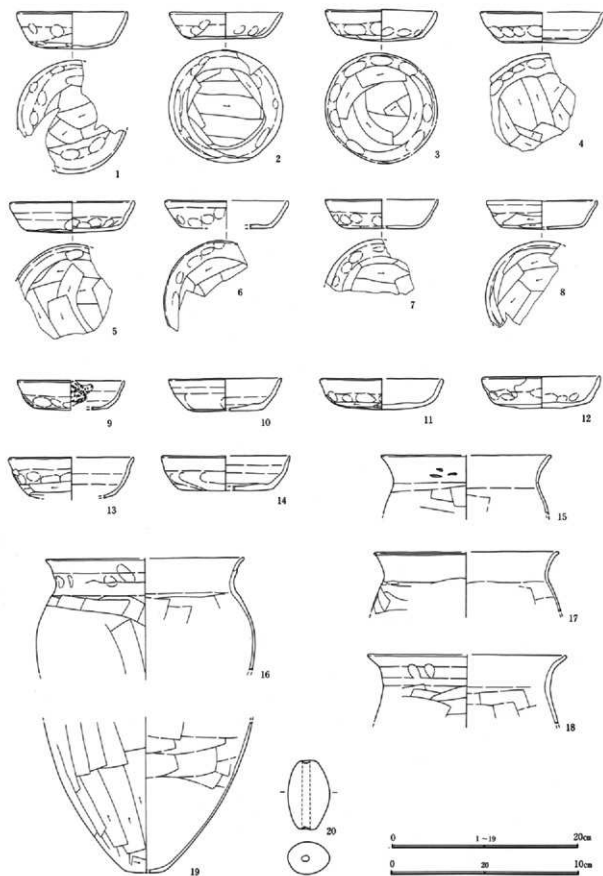


第58図 12号住居跡(2)

第56表 12号住居跡計測表

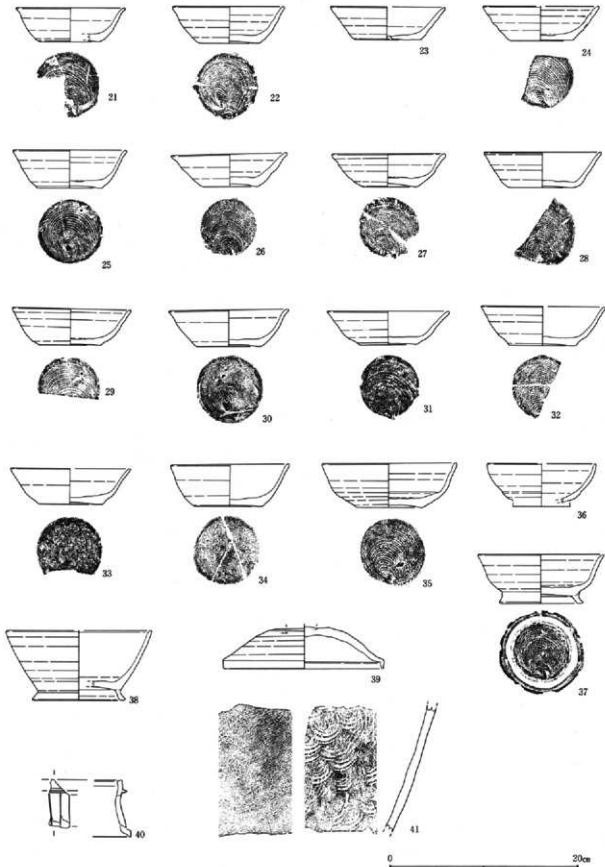
位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竪方位	主な施設	主な遺物	重積遺構
Cfg-23・24	隅丸長方形	555×—×45	N73°E	—	貯蔵穴 壁柱穴	坏29 埴3 葺1 門面硯1 壘8 土鉢1 硯石1 瓦1 金属器1	

第三章 検出された遺構と遺物

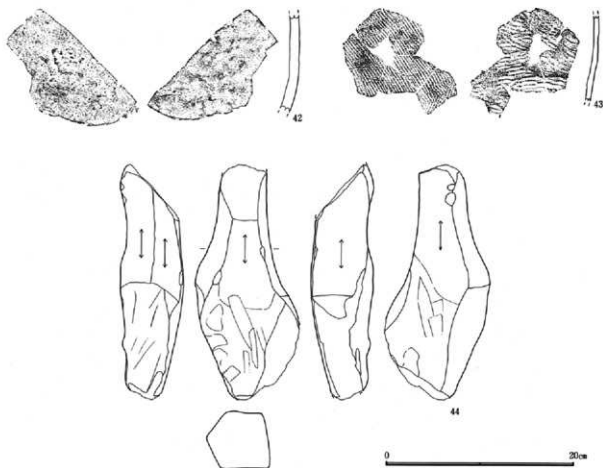


第59図 12号住居跡出土遺物 (1)

第5節 奈良・平安時代の住居跡



第60図 12号住居跡出土遺物(2)



第61図 12号住居跡出土遺物(3)

12号住居跡

調査区東-C区東斜面部の裾部下位に位置する。周辺は、ほぼ平坦地形ともいえる東緩斜面地形であり、遺構密度は高い。前述の10号住・11号住は南に、13・29号住居跡が西に近接し、C区東緩斜面住居跡群を形成する。

本住居跡は、北側が調査区域外に伸び、未調査となっている。焼失住居跡であり、先に述べた焼失住居の9号住となんらかの関連も想起されよう。

平面形は、長軸の長さで約5.5mで、僅かに確認された北西隅から、短軸は概ね4.2m前後と思われる。このことから、やや大型の縦長長方形の平面形を呈すると思われ、住居群内に存在する大型住居の一例とも捉えられる。

深さは、約40cmを測り、重複遺構も無いことから比較的良好的な遺存状態といえよう。

床面は、ほぼ平坦面を築き、ローム塊を主体とした貼床がなされていた。硬化面として、特に集中した顕著な箇所は見あたらなかったが、全体に締まった床面である。

柱穴・貯蔵穴は、調査の都合上、遺物・炭化材除去後、床下調査で確認された。

柱穴は、床面上に2箇、西壁と南壁に各々2箇が確認された。床面上の柱穴は、主柱穴に相応する平面規模・深さで、配置も妥当な位置である。2穴間を溝が連結し小ビットが2箇配されている。この小ビットも、柱穴に準じる施設の痕跡であろう。壁柱穴は、壁に重なるように開く。西壁の2穴間に小ビットを見るが、これも壁柱穴の可能性はある。

貯蔵穴は、東南隅で確認した。径約80cm程度の不整形円形を呈し、深さは約35cmを測る。暗褐色土を基調とした埋土とするが、上層は炭化物の散布が見ら

第5節 奈良・平安時代の住居跡

第57表 12号住居跡遺物観察表

図 番号 器 種	法量 (m) () 測定値	残 存 率 出土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第59図 図版 52	1 口：11.6 高：3.9	約1/2 床直	①細 雲母・黒色粒・白 色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部僅かに内彎し体部丸みを帯びる。やや身深。底部平底。口縁部横 撫で、体部弱い撫で指頭痕残る。底面は篋削りを施す。内面撫で。
第59図 図版 52	2 口：12.0 高：2.8 底：8.0	ほぼ定形 床直	①細 雲母・黒色粒・白 色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口唇部鋭く口縁一体部一体化する。底部平底。口縁部横撫で、体部は弱 い撫で指頭痕残る。底面は篋削りを施す。内面撫で、黒蓋あり。
第59図 図版 52	3 口：11.7 高：3.6 底：9.2	ほぼ定形 覆土	①細 雲母・黒色粒・白 色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部僅かに内彎し体部と一体化する。底部は僅かな丸底。口縁部横撫 で、体部に指頭痕強く残る。底面は篋削り。内面撫で。
第59図 図版 52	4 口：(13.0) 高：3.2 底：(8.3)	約1/3 覆土	①細 雲母・黒色粒・白 色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部僅かに内彎し体部と一体化する。底部は平底。口縁部横撫で、体 部に指頭痕残る。底面は篋削りを施す。内面撫で。
第59図 図版 52	5 口：(13.0) 高：3.1 底：(9.8)	約1/4 壺内	①細 雲母・黒色粒・白 色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部僅かに内彎し体部と一体化する。底部は平底。口縁部横撫で、体 部の指頭痕やや不明瞭。底面は篋削りを施す。内面撫で。
第59図 図版 52	6 口：(13.0) 高：(3.0) 底：(9.8)	約1/4 覆土	①細 雲母・黒色粒・白 色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部僅かに内彎し体部と一体化する。底部は平底。口縁部横撫で幅短 く、体部に指頭痕残る。底面は篋削りを施す。内面撫で。
第59図 図版 52	7 口：(12.0) 高：(3.0) 底：(8.2)	約1/4 床直上	①細 雲母・黒色粒・白 色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部僅かに外反し体部丸みを帯びる。底部は平底。口縁部横撫で、 体部指頭痕やや不明瞭。底面は篋削りを施す。内面撫で。
第59図 図版 52	8 口：(11.5) 高：3.0 底：(9.0)	約1/3 覆土	①細 雲母・黒色粒・白 色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部強く内彎し内面口唇部玉縁状を呈す。体部は直線状で底部は平底。 口縁部横撫で、体部は横位篋削り後撫でを加える。指頭痕不明瞭。底面 は篋削り。内面撫で。
第59図 図版 52	9 口：(11.3) 高：(3.1) 底：(7.9)	約1/4 床直	①細 雲母・黒色粒・白 色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部僅かに外反し体部丸みを帯びる。底部は平底。口縁部横撫で、 体部指頭痕残る。底面は篋削り。内面撫で、内面に扉付着。
第59図 図版 52	10 口：(12.0) 高：(3.4) 底：(8.0)	約1/2 床直	①細 雲母・黒色粒・白 色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	やや身深。口唇部鋭く口縁部僅かに内彎する。体部丸みを帯び底部は 平底。口縁部横撫で体部指頭痕やや不明瞭。底面は篋削り。内面撫で。 色調は赤く、軟質な感があり風化も著しい。器厚も厚手。
第59図 図版 52	11 口：(12.7) 高：3.3	約1/3 床直上	①細 雲母・黒色粒・白 色粒 ②酸化焰 ③橙色 ④土師器	口縁部僅かに外反し体部丸みを帯びる。底部はやや丸底気味。口縁部 横撫で、体部指頭痕やや不明瞭。底面は篋削り。内面撫で。
第59図 図版 52	12 口：(12.5) 高：3.3 底：(9.6)	約1/2 床直	①細 雲母・黒色粒・白 色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口縁部僅かに内彎し体部丸みを帯びる。底面は平底が意識されながら 凹凸がある。内面底部の凹凸も顕著。口縁部横撫で体部弱い撫で。底面 篋削り。内面撫で。外面口縁部に扉付着する。
第59図 図版 52	13 口：(13.1) 高：—	約1/3 覆土	①細 雲母・黒色粒・白 色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部外反し体部丸みを帯びる。底部も丸底であろう。口縁一体部境に 1条の浅い沈線が横位に高り段状の効果を見せる。口縁部横撫で、体部 指頭痕残るが下半から底面に横位篋削りを施す。内面撫で。
第59図 図版 52	14 口：(13.5) 高：(3.7) 底：(6.8)	約1/4 床直	①細 雲母・黒色粒・白 色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部僅かに内彎し体部直線状に落ちる。底部平底。口縁部横撫で体部 は斜位の撫で痕を明瞭に残す。底部篋削り。内面丁寧な撫でで体部中位 に弱い段を持つ。軟質な色調は赤く、風化も著しい。器厚も厚手。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

図番号	法量 (cm)	残存率	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第59図 器種 52	口：(17.8) 高さ： - 底： -	口縁部 約1/4 床直	①縹 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③明赤褐色 ④土師器	口唇部丸みを持ち玉縁状を呈す。口縁部外反し、頸部は緩やかな彎曲。肩部の張りも弱い。口縁部の横撫で強く、肩部は横位鋭削り。内部内面は横位鋭撫でを施す。
第59図 器種 52	口：(20.8) 高さ： - 底： -	口縁部 約1/4 床直	① 壺雲母・黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	コ字口縁裏。口縁部上位は開き、下位は直立気味。肩部は比較的張り、体部上半に膨らみを持つ。口縁部横撫では上位と下位で強く、中位は指痕が残る。肩部は横位鋭削りが施される。内面体部は横位鋭撫で。
第59図 器種 52	口：(19.0) 高さ： - 底： -	口縁部 約1/3 床直	①縹 黒色粒・石英 ②還元焰 ③赤褐色 ④土師器	口唇部丸みを持ち玉縁状を呈す。口縁部外反し、頸部は緩やかな彎曲。肩部やや張り。口縁部強い横撫でを施し頸部に稜をなす。肩部は横位・斜位鋭削り。内面体部は横位鋭撫で。
第59図 器種 52	口：(21.0) 高さ： - 底： -	口縁部破片 床直	①縹 黒色粒・石英 ②還元焰 ③明褐色 ④土師器	口縁部外反し、頸部一肩部は緩やかな彎曲で一体化。口縁部横撫で後右回転軸整形。底部回転鋭削り後無調整。体部下手に撫でが加わる。
第59図 器種 52	口： - 高さ： - 底：(4.0)	体部一 底部約1/3 床直	①縹 黒色粒・石英 ②還元焰 ③明赤褐色 ④土師器	底部小径体部下段で緩やかな彎曲を呈す。外面は縦位鋭削りが入念に施され底面にも及ぶ。内面は横位鋭撫でによる平滑な器面。外面採行着。
第59図 土師 器種 52	長さ： 3.7 径： 2.2 重： 14.30g	完形 覆土	①縹 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径の、ややずんぐりした紡錘状の形態。外面は長軸方向の撫でを主に施す。
第60図 器種 52	口：(11.3) 高さ： 3.6 底： 6.1	約2/5 覆土	①縹 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部丸みを帯びる。底部はやや上げ底。右回転軸整形。底部回転鋭削り後無調整。体部下手に撫でが加わる。
第60図 器種 53	口：(11.7) 高さ： 3.9 底： 6.7	約3/4 覆土	①縹 石英・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部も若干の彎曲。底部はやや上げ底。右回転軸整形。底部回転鋭削り後無調整。体部下手に撫でが加わる。
第60図 器種 53	口：(12.0) 高さ：(3.5) 底：(7.2)	約1/4 覆土	①縹 砂礫・石英 ②還元焰 ③明赤褐色 ④須恵器	口縁部僅かに内彎するが体部とはば一体化。全体に開き気味の器形。右回転軸整形。底部回転鋭削り後無調整。
第60図 器種 53	口：(12.0) 高さ： 3.7 底：(6.7)	約1/5 床直	①縹 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁一体部とはば一体化。右回転軸整形。底部回転鋭削り後無調整。体部下手に弱い撫でが加わる。
第60図 器種 53	口：(11.8) 高さ： 4.0 底： 6.8	約3/5 床直上	①縹 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部下手に彎曲を持たせる。底部はやや上げ底。右回転軸整形。底部回転鋭削り後無調整。体部下手に撫でが加わる。
第60図 器種 53	口：12.2 高さ： 3.5 底： 6.0	完形 床直	①縹 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反するが体部とはば一体化。底部はやや上げ底。右回転軸整形。底部回転鋭削り後無調整。器厚厚く量感に富む。重い。
第60図 器種 53	口：11.9 高さ： 3.5 底： 5.7	ほぼ完形 床直	①縹 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部中位に彎曲を持たせる。底部はやや上げ底。右回転軸整形。底部回転鋭削り後無調整。
第60図 器種 53	口：(12.2) 高さ： 3.8 底： 6.6	約1/4 覆土	①縹 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部一器部とはば一体化し、体部下端に彎曲を持たせる。底部僅かな上げ底。右回転軸整形。底部回転鋭削り後無調整。周縁厚減。
第60図 器種 53	口：(12.4) 高さ： 3.9 底： 6.6	約1/2 覆土	①縹 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部中位に緩やかな彎曲を持たせる。底部僅かな上げ底。右回転軸整形。底部回転鋭削り後無調整。体部下手に弱い撫でが加わる。

第5節 奈良・平安時代の住居跡

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第60図 30 回版 53	口: 12.5 坯高: 3.9 底: 6.9	約3/4 覆土	①粗 石英・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し、体部中に彎曲を持たせる。底部やや上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。内外器面厚成。
第60図 31 回版 53	口: 12.8 坯高: 3.6 底: 6.1	約3/4 床直	①粗 石英・雲母 ②酸化焰気味 ③灰白色 ④須臾器	口縁～体部上半一体化し、体部下半に彎曲を持たせる。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部下半に撫でが加わる。内外器面厚成。
第60図 32 回版 53	口: (12.9) 坯高: 4.2 底: 7.0	約1/4 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁～体部上半一体化する。体部下半に彎曲を持たせ、底部突出の印象を得る。底部やや上げ底。右回転糸切り後無調整。底部回転糸切り後無調整。体部下半に撫でが加わる。
第60図 33 回版 53	口: (12.4) 坯高: 3.8 底: 6.8	約2/5 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁～体部上半一体化する。体部下半に彎曲を持たせ、底部突出の印象を得る。底部やや上げ底。右回転糸切り後無調整。底部回転糸切り後無調整。体部下半に撫でが加わる。内外器面厚成。
第60図 34 回版 53	口: 12.3 坯高: 4.5 底: 7.0	ほぼ完形 床直	①細 白色粒 ②酸化焰気味 ③灰白色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部に緩やかな彎曲を持たせる。底部はやや上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部に弱い撫でが加わる。
第60図 35 回版 53	口: 14.2 坯高: 4.7 底: 7.0	約4/5 床直	①粗 石英・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口徑広い。口縁部～体部上半一体化し、中位で強く彎曲する。底部はやや上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後面い撫でを加え、周縁調整。体部にも弱い撫でが及ぶ。
第60図 36 回版 53	口: (11.4) 坯高: - 底: -	破片 覆土	①嫩薄 白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄帯色 ④軟質土器	軟質で轆轤整形黒色土器。口縁～体部内彎し高台が貼付されるものであろう。口中体部下半の段表現は高台貼付時の所産とした。内外面入念な研磨を施し内面黒色処理される。
第60図 37 回版 53	口: (13.2) 坯高: 5.2 底: 8.6	約3/4 覆土	①粗 石英・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し、体部下半に強い彎曲を持たせる。高台は閉き気味に付され安定感ある器形を呈す。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付周縁撫で。内底面に滑沢面を持つ。外面の一部に自然輪付着。
第60図 38 回版 53	口: (15.2) 坯高: 7.4 底: (9.6)	約1/6 覆土	①粗 石英・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁～体部一体化する。高台は閉き気味に貼付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付周縁撫で。
第60図 39 回版 53	口: 16.8 蓋高: - 柄高: - 底: -	柄部欠損 床直	①粗 石英・砂雜 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	柄割落。天井部高く口徑も広い大型の蓋。体部は緩やかな彎曲を呈し、内面かえりは九みを持ち直立気味に内縁する。右回転轆轤整形。天井部回転寛削り後輪貼付。
第60図 40 回版 53	口: - 柄高: - 底: -	柄部破片 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	小破片のため判然としない。細い帯帯が回り、口縁部極僅かに残る。柄部の透かし孔間隔は短く、中間に縦位波線を1条施す。透かし孔形状はおそらく方形であろう。轆轤整形。回転方向不詳。
第60図 41 回版 53	口: - 蓋高: - 底: -	体部破片 覆土	①粗 石英・白色粒 ②還元焰 ③黄灰色 ④須臾器	大甕体部。若干の歪みがある。外面平行叩き目。内面青濁状当て目縁。内面は撫でも加わる。
第61図 42 回版 53	口: - 蓋高: - 底: -	体部破片 覆土	①粗 石英・砂雜 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	大甕肩部。若干の歪みがある。内外面撫で。
第61図 43 回版 53	口: - 蓋高: - 底: -	体部破片 床直	①粗 石英・白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須臾器	大甕体部。器厚薄手。軟質な印象を得る。外面平行叩き。内面青濁波状当て目。
第61図 44 回版 53	長: 24.9 幅: 11.2 厚: 6.8	一部欠損 甕内	①砂岩 ④114.0 K	大型の磁石。四面を長軸方向に使用している。

れた。

竈は、東壁中央やや南寄りに設けられる。北側は調査区域外のため全容は判然としませんが、煙道は馬蹄状に突出し、燃焼部～笑口部に浅い掘り込みを持つ。煙道の立ち上がりは比較的緩やかで、微量の炭化物が認められた。立ち上がりの壁には自然石が認められたが、補強材の一部と考えた。袖材は、明瞭な痕跡が認められなかったが、南側の壁にかけて、自然石を立て、補強がなされていた。壁の僅かな突出を利用して袖と思われる。また、笑口部南で方形に切り石された砂岩が出土しており、天井材などの構築材の散乱と捉えられよう。床面に密着しており、住居廃棄時の構築材破壊と考える。

床下遺構は、住居跡中央に大型の床下土坑が検出されている。径2m程の土坑で、ローム塊を埋土としていた。また、床西側では、壁に向かって2段の段差が設けられており、西側が低くなる。これは、南側の柱穴・溝と相俟って、住居跡中央部が高くなる。換言すれば、住居構築時に、周囲を先行して掘削する手法として位置づけられよう。

さて前述のように、本住居跡は焼失住居である。炭化材の量は多く、床面中央から西壁にかけて集中していた。特に中央付近は、まとまって住居主軸方向に走行していた。また、西壁にかかる北側壁柱穴および南側壁柱穴に関連する一群、南壁にかかる東側壁柱穴と関連する一群がまとまりを見せている。このように、炭化した壁柱のみが遺存しており、主柱穴に相応する床面上のピットに関連する炭化材は見られなかった。あるいは、床面上のピットは住居構築時のみ支柱として使用され、居住時には外されていた可能性がある。

さらに、この炭化材上には薄い堆積ながら、焼土が確認されている。土層根の痕跡と捉え得るが、確証的ではない。

遺物は多量に出土し、44点を図示した。炭化材との関連から調査には手間がかかり、そのため床面上での施設確認が果たし得なかった経緯がある。覆土上層より床直に至るまで、完形の坏類を中心にした

豊富な土器類が出土している。平面的にも、住居跡全域に散布していることから、住居跡焼失後の一括廃棄行為が想起できよう。高、44の砥石は竈補強材に使用されていた。

13・29号住居跡

調査区東-C区東斜面部の裾部下位で検出された。ほぼ平坦地形ともいえる東緩斜面地形にあり、遺構密度は高く10～12号住が近接し、C区東緩斜面住居跡群西端に位置する。

本住居跡は2軒の重複住居である。おそらく建て替えの可能性を持つ大型住居として捉えた。

建て替えは第64図下に示すように、約5.2×4.1m程度のやや縦長方形の平面形を呈す13号住から、約4.2×5.1mの横長方形の29号住に建て替えがなされたものとする。床面の差は無く、竈・柱穴・貯蔵穴の配置からも、両者は上記の施設を共有する住居であり、建て替えの際、竈等施設の位置は変更しなかったものと考えた。

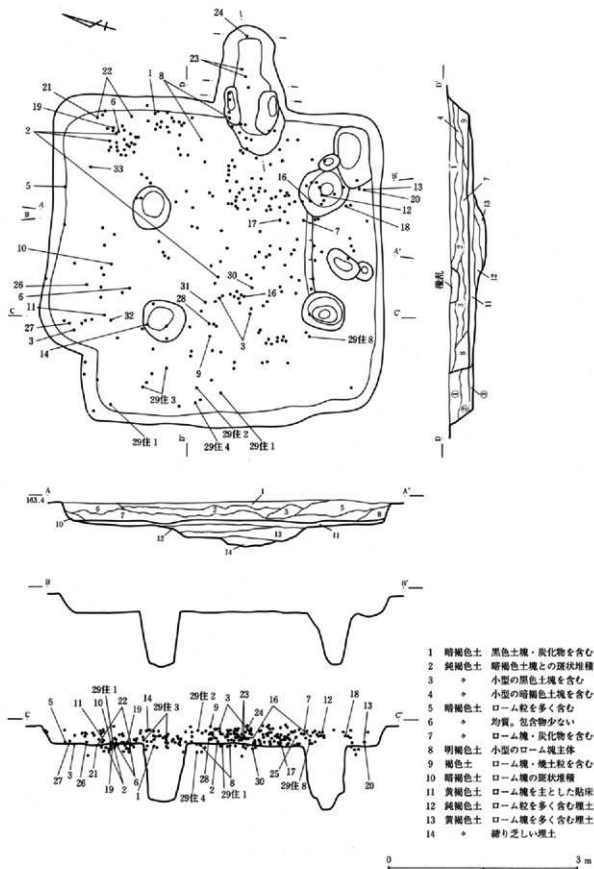
床面は、ほぼ平坦面を築き鈍黄褐色土を基調としたローム塊で貼床がなされていた。硬化面は、中央より竈周辺にかけて顕著に見られた。

柱穴は4本の主柱穴を確認した。平面規模・深さとも妥当であり、配置も良好である。また南壁際に小ピットが確認されたが、梯子穴等の昇降施設も考えられよう。

貯蔵穴は、東南隅に接した楕円状の土坑を充てた。浅く、顕著な遺物の出土も見られないが、配置から判断した。

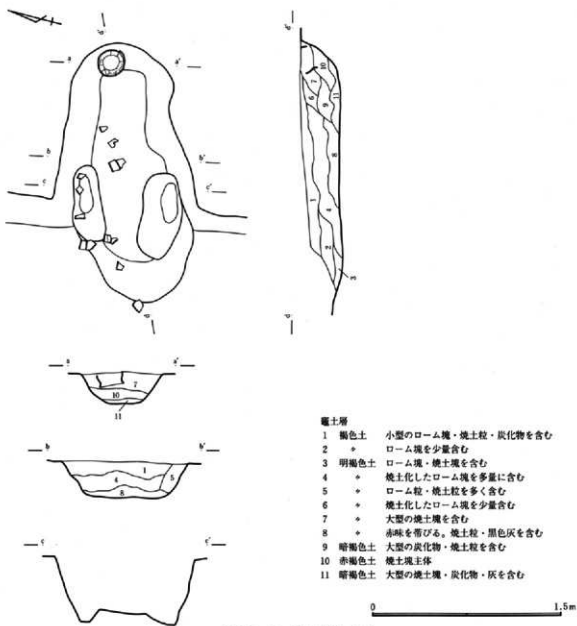
竈は、東壁やや南寄りに設けられる。煙道部を壁外に強く突出した大型の竈である。燃焼部～笑口部にかけて浅く凹み、燃焼部両壁には、袖石の抜取り穴が検出された。また、煙道部東端には、土器器臺が逆位で出土しており、掘出しとしての用途が想起されよう。

床下遺構は、床面中央に大型の不整形を呈す床下土坑が確認された。黄褐色ローム塊を主体にした埋土である。



第62図 13・29号住居跡(1)

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



磁土層

- 1 褐色土 小型のローム塊・焼土粒・炭化物を含む
- 2 + ローム塊を少量含む
- 3 明褐色土 ローム塊・焼土塊を含む
- 4 + 焼土化したローム塊を多量に含む
- 5 + ローム粒・焼土粒を多く含む
- 6 + 焼土化したローム塊を少量含む
- 7 + 大型の焼土塊を含む
- 8 + 赤味を帯びる。焼土粒・黒色灰を含む
- 9 暗褐色土 大型の炭化物・焼土粒を含む
- 10 赤褐色土 焼土塊主体
- 11 暗褐色土 大型の焼土塊・炭化物・灰を含む

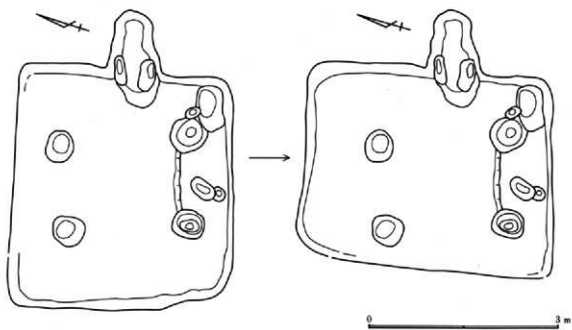
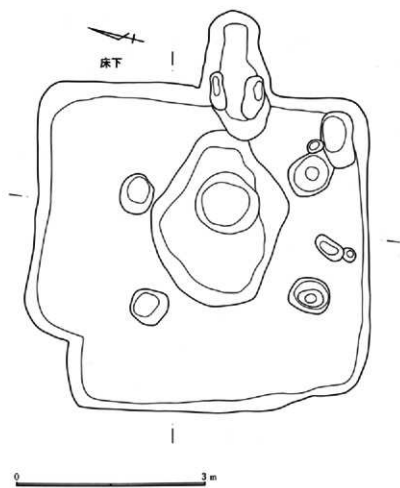
第63図 13・29号住居跡(2)

第58表 13号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Chl-23・24	不整形	526×412×42	N77°E	N74°E	貯蔵穴 四本柱穴 床下土坑	坏9 埴4 釜5 甕1 甕5 砥石 1土埴4 紡錘車1	29住

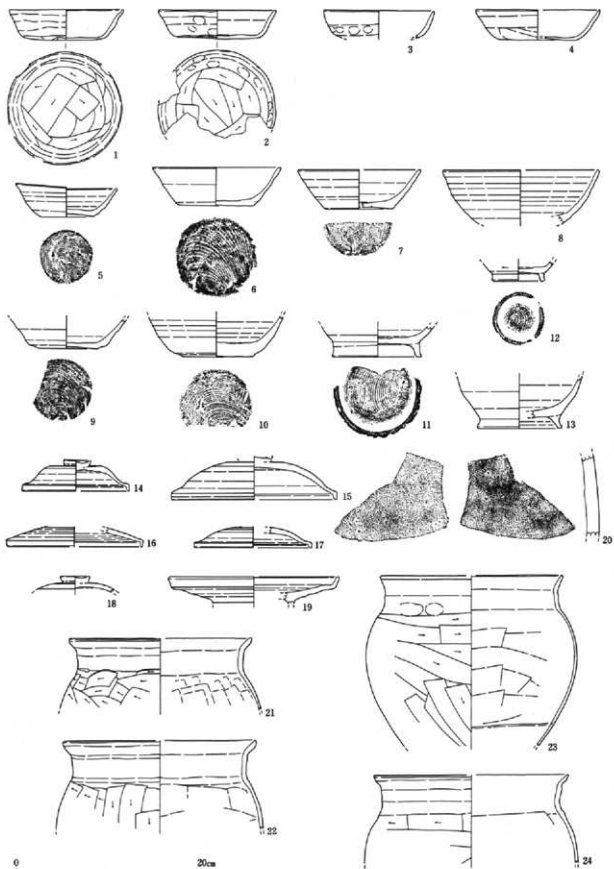
第59表 29号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cg-i-24・25	—	—×—×38	—	—	—	坏2 甕1 土埴1 金属 器(馬具)3	13住 90坑

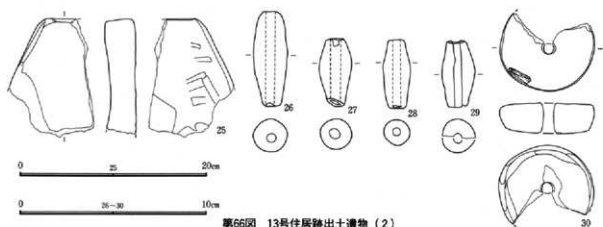


第64図 13・29号住居跡(3)

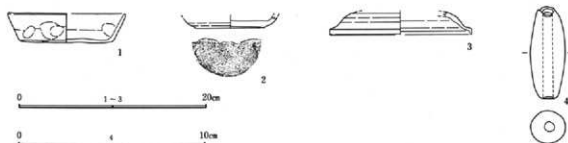
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第65図 13号住居跡出土遺物(1)



第66図 13号住居跡出土遺物(2)



第67図 29号住居跡出土遺物

その他に、南側の2箇の柱穴間に浅い段差が認められた。調査当初は、これを北壁に対応する南壁と捉え、重複状況を考えたが、土層に明瞭な立ち上がりは無く、壁とは捉えられない。間仕切り等の痕跡として位置づけたい。

遺物は比較的多いものの、29号住との分別が困難であり、平面分布から両者を分けて図示したが、互いの流入・混入も存在するようだ。

土器類以外には砥石・土錘・紡錘車さらに鉄製品等が出土している。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第60表 13号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) () 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第65図 1 口版 54	口：11.9 坏高：3.2 底：8.8	ほぼ完形 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	口縁部端部内彎し口縁部種やかに外反する。体部は僅かに彎曲し底部は平底。口縁部横撫で、体部は弱い撫で。底面は彫削りが施される。内面撫で。
第65図 2 口版 54	口：12.3 坏高：3.5 底：8.8	約3/5 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	口縁部僅かに内彎し体部とほぼ一体化する。底面は平底。口縁部横撫で、体部は弱い撫で指頭痕を残す。底面は彫削り。内面にて、体部外面に型肌状の皺が看取できる。
第65図 3 口版 54	口：(11.5) 坏高：3.5 底：8.8	約1/2 床直上	①細 白色粒 ②還元焰。やや軟質 ③褐色 ④土師器	先鋭な口唇部で口縁部内彎する。体部も彎曲を持たせ底部も丸底に近い。口縁部横撫では強く体部境に外縁を設ける。体部は弱い撫で指頭痕残る。底面は彫削り後撫で。内面撫で。型肌状の皺も看取できる。
第65図 4 口版 54	口：(13.0) 坏高：— 底：—	約1/3 覆土	①細 片岩粒 ②還元焰 ③鈍黄褐色 ④土師器	先鋭な口唇部で口縁部上位内彎、口縁部下位は外反する。体部は彎曲を持たせるが、底部は平底に近い。口縁部横撫で、体部弱い斜位の撫で。底面は彫削り後撫でが及ぶ。
第65図 5 口版 54	口：10.6 坏高：3.1 底：5.6	ほぼ完形 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部一体部歪む。口縁部僅かに外反し体部内彎する。底部は上げ底。口縁部内面は強い輪縁目で内縁状に内彎する。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。歪みのため小底部に亀裂がある。
第65図 6 口版 54	口：(13.3) 坏高：4.1 底：7.9	ほぼ完形 床直	①粗 小礫・石英 ②還元焰 ③鈍黄褐色 ④須恵器	大型の坏。口縁部僅かに外反するが体部とほぼ一体化する。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。体部に弱い撫でを加える。
第65図 7 口版 54	口：(12.8) 坏高：4.1 底：(7.0)	約1/4 覆土	①細 片岩粒・石英 ②還元焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	口縁部一体部一体化する。底部はやや上げ底。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。体部に弱い撫でを加える。器面割落。
第65図 8 口版 54	口：16.4 坏高：— 底：(5.7)	約2/5 床直	①細 石英 ②還元焰 ③鈍赤褐色 ④須恵器	口縁部僅かに内彎し体部中位下半を強く彎曲する。右回転軸線整形。高台貼付時の横撫でが看取できる。底部器厚やや厚い。
第65図 9 口版 54	口：— 坏高：— 底：(6.3)	約1/3 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部上位やや外反。下半に強い彎曲を持たせ安定感のある器形を呈す。底部はやや突出し僅かに上げ底。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。体部器厚は薄手。
第65図 10 口版 54	口：— 坏高：— 底：(7.5)	約1/4 床直	①粗 白色粒・石英 ②還元焰気味 ③灰色 ④須恵器	体部下半に緩やかな彎曲を持たせる。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。底部器厚は体部に比して厚く量感に富む。
第65図 11 口版 54	口：— 坏高：— 底：(9.2)	約2/5 床直上	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③鈍黄褐色 ④須恵器	体部下半に僅かな彎曲を持たせ、やや開き気味の高台を付す。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。内底面に滑沢面が見られ、外底面・断面に墨痕が看取されることから顔片転写視か。
第65図 12 口版 54	口：— 坏高：— 底：(5.4)	底部 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部下半が彎曲し、小径の底部に直立気味の高台が付される。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第65図 13 口版 54	口：— 坏高：— 底：(8.8)	底部 床直上	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	体部中位に彎曲を持たせ、開き気味の高台を付す。体部器厚手。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁一底面撫でが及ぶ。
第65図 14 口版 54	口：(11.2) 坏高：3.3 底：(2.8)	約2/5 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	環状の溝みを付す。天井部は僅かに凹み、体部上半に彎曲を持たせ裾部に広がる。かえり部は丸みを持ち外傾する。右回転軸線整形。天井部回転後傾り後傾貼付。厚手の器形を呈ししっかりした作り。

第5節 奈良・平安時代の住居跡

図番号	法量 (cm) 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第65図 図版 15 54	口：(17.2) 蓋 高：— 差 高：— 挿：—	約2/5 覆土	①細 砂礫・石英 ②還元焰 ③明黄褐色 ④須恵器	筒状高。天井部は高く上半に彎曲を持たせる。肩部は僅かに外反し、かえり部はほぼ直立する。右回転轆轤整形。天井部回転彫り。
第65図 図版 16 54	口：(14.2) 蓋 高：— 差 高：— 挿：—	約1/5 覆土	①細 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部は低く、緩やかな彎曲を呈す。かえり部は強く屈曲し内傾する。右回転轆轤整形。器厚は薄手。
第65図 図版 17 54	口：(12.3) 蓋 高：— 差 高：— 挿：—	約1/3 床直上	①細 白色粒 ②還元焰やや軟質 ③灰黄色 ④須恵器	天井部は低く、緩やかな彎曲を呈す。かえり部はつよく屈曲し直立する。右回転轆轤整形。天井部回転彫り。
第65図 図版 18 54	口：— 蓋 高：— 差 高：(3.1) 挿：—	約1/6 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	円環状溝を付す。天井部は平坦。右回転轆轤整形。天井部回転彫り後横陥付。
第65図 図版 19 54	口：(17.8) 蓋 高：— 差 高：— 挿：—	破片 床直	①細 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部肥厚し外反する。体部境は緩やかな屈曲を呈し体部は強く外傾する。右回転轆轤整形。底部切り難し技法不明。高台陥付時に横溝で施す。
第65図 図版 20 54	口：— 蓋 高：— 差 高：— 挿：—	体部破片 床直上	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	大衆体部破片。外面平行叩き後焼で、内面青濁流状当て後焼で。外面自然輪付着。
第65図 図版 21 54	口：(19.0) 蓋 高：— 差 高：— 挿：—	口縁部破片 覆土	①細 雲母・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	コ字口縁蓋。口唇部直立し口縁部上半は強く外傾し下半は直立する。肩部は強く張る。口縁部横溝では上位と下端に顕著で凹線状をなす。肩部は横位・斜位の発削り。内面肩部は横位発削りで施す。
第65図 図版 22 54	口：20.2 蓋 高：— 差 高：— 挿：—	約1/2 口縁部 床直	①細 雲母・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	コ字口縁蓋。口唇部直立し口縁部上半は外傾し下半は直立する。肩部は強く張り体部上半に膨らみを持たせる。口縁部横溝では顕著で上位に指頭溝を残す。体部は横位・縦位の発削り。内面は横位発削りで施す。
第65図 図版 23 54	口：(19.0) 蓋 高：— 差 高：— 挿：—	口縁部一 割部1/5 覆土	①細 雲母・白色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	コ字口縁蓋。口唇部直立し口縁部上半は強く外傾し下半は直立する。肩部はやや緩やかに張る。口縁部横溝では上位と下端に顕著で凹線状をなす。肩部は縦位発削り、内面肩部は横位発削りで施す。
第65図 図版 24 54	口：20.0 蓋 高：— 差 高：— 挿：—	口縁部 覆土	①細 雲母・白色粒 ②還元焰 ③明赤褐色 ④土師器	コ字口縁蓋。口唇部直立し口縁部上半は強く外傾し下半は直立する。肩部はやや緩やかに張る。口縁部横溝では上位と下端に顕著で凹線状をなす。肩部は横位発削り。内面は横位発削りで施す。
第66図 図版 25 54	長：12.5 幅：9.0 厚：3.4	覆土	①牛伏砂岩 ②434.5g	表裏面とも磨面・磨削面が看取される。特に裏表面は凹みが著しく、頻繁な使用が想定される。
第66図 図版 26 55	長：5.1 土鏃 径：1.8 重：14.30g	完形 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ③黒色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き家上による成形。中位が膨らみ両端が小径の紡錘状の形態を主とするが形態的に4点とも統一性は見られない。胎土・色調も多様性を見る。外面は長軸方向の撫でを主に施す。
第66図 図版 27 55	長：3.6 土鏃 径：1.2 重：8.88g	一部欠損 床直上	①織質 ②還元焰 ③灰黄色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き家上による成形。中位が膨らみ両端が小径の紡錘状の形態を主とするが形態的に4点とも統一性は見られない。胎土・色調も多様性を見る。外面は長軸方向の撫でを主に施す。
第66図 図版 28 55	長：3.7 土鏃 径：1.5 重：7.66g	完形 床直上	①織質 ②還元焰 ③鈍黄褐色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き家上による成形。中位が膨らみ両端が小径の紡錘状の形態を主とするが形態的に4点とも統一性は見られない。胎土・色調も多様性を見る。外面は長軸方向の撫でを主に施す。
第66図 図版 29 55	長：3.5 土鏃 径：1.8 重：5.54g	1/2 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き家上による成形。中位が膨らみ両端が小径の紡錘状の形態を主とするが形態的に4点とも統一性は見られない。胎土・色調も多様性を見る。外面は長軸方向の撫でを主に施す。

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第66図 紡錘車 四版 55	径: 5.0 厚: 1.6 孔: 0.6	約2/3 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰 ③赤黒色 ④土製品 34.46g	断面形状は扁平な台形を呈す。中心に径8mm程度の孔を穿つ。全体に撫で調整が及ぶが下面はやや粗な調整。2次焼成を受けたのか断面は多孔質で煤が付着する。軽量。

第61表 29号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第67図 1 四版 55	口: (12.2) 坯高: 3.1 底: (9.9)	約1/4 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口唇端部は先鋭で口縁部一帯部一体化する。底部は平底。口縁部横溝で、体部弱い撫で、指痕良明瞭に残り凹凸著しい。底部は削削り。内面撫で
第67図 2 四版 55	口: - 坯高: - 底: 7.3	約1/2 底部 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	直線的な体部下平。内面見込み部は明瞭。左回転轆轤整形。底部回転盤切り後撫で調整。
第67図 3 蓋 四版 55	口: (15.0) 高: - 径: -	約1/5 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部に強い彎曲を持たせ、かえり部も強く屈曲する。右回転轆轤整形。天井部回転削削りか。
第67図 4 土罎 四版 55	長: 4.8 径: 1.9 重: 17.52g	一部欠損 床直	①細 片岩・石英・砂礫 ②酸化焰 ③黒色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。やや大型品で、中位が膨らみ周端が小径の紡錘状の形態。表面撫で調整ながら器面剥落著しい。

14号住居跡

調査区東側のC区東斜面に位置する。勾配の強い急傾斜地形に占地しており、そのためか、比較的周辺の遺構密度は低い。

周辺遺構としては、西側に15号住居跡と41号住居跡が近接するが、重複はせず単独で検出されている。

平面形は、約4.4×3.6mの隅丸長方形で南壁と北東壁に若干の乱れが認められる。この乱れは壁崩落のものと判断した。深さは遺存の良好な西壁付近で約60cmを測るものの、東への急斜面のため、東壁の遺存は僅か数cmと著しく低い。住居跡確認時は一部東側の床面が露出していた。

土層の堆積も傾斜に沿っており、均質土を主体とすることから自然堆積と捉え得た。

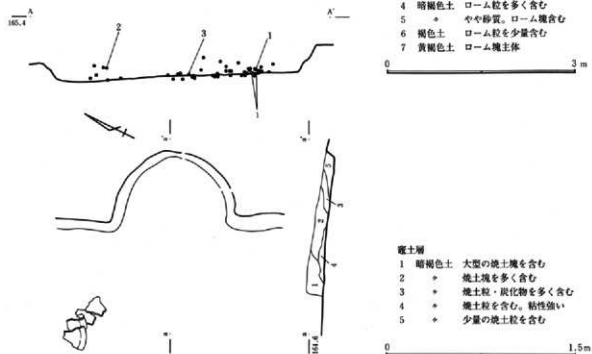
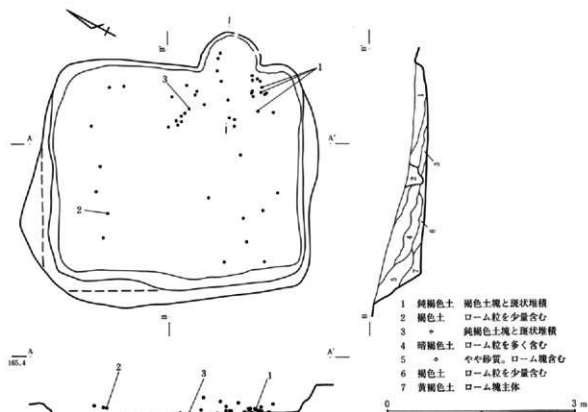
床面も緩やかに東側へ傾く。ローム層土の地床であり、硬化面は、床中央部～竈焚口部にかけて顕著だった。

周溝・柱穴・貯蔵穴・床下遺構は検出されなかった。

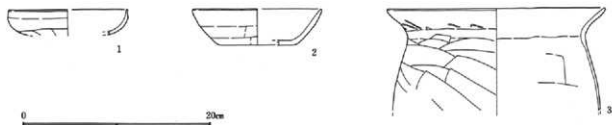
竈は東壁や南寄りに設けられる。煙道部は傾斜のため殆どを逸失しており、僅かな立ち上がりか認められたのみである。燃焼部・焚口部の掘り込みも認められず、構築材の散布も明瞭ではない。焚口部に少量の炭化物と焼土粒が見られた。

遺物の出土は、東側に若干の集中が見られたが、破片が多く、個体として図示し得たのは3個体である。1の土師器坯は覆土中より、2の坯は床直、3の罎は竈前の床直より出土している。2・3は本住居跡に伴う遺物として判断できよう。

本住居跡は床面上に施設を設けない住居である。この傾向は後述する15号住居跡にも見られ、興味を引く。



第68図 14号住居跡



第68図 14号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物

第62表 14号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竜方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Crs-24・25	隅丸長方形	437×362×55	N65°E	N66°E		坏2 壺1	

第63表 14号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第68図 図版 55	1口：(12.6) 坏高：—	約1/3 床直	①細 白色粒・黒色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	先鋭な口唇部、緩やかに外反する口縁部。体部は扁平で彎曲し、底部は丸底か。口縁部横溝で顯著で体部境に外縁をなす。体部は薄で、底部は艶潤り。器厚厚手。
第68図 図版 55	2口：(13.4) 坏高：3.8 底：(8.0)	約1/4 覆土	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口唇部は先鋭で、口縁部一体部は僅かな彎曲をもって一体化する。体部はやや身深で、底部は平底か。口縁部の横位溝で体部境に極僅かに屈曲する。体部は横位艶潤り。底面は艶潤り。
第68図 図版 55	3口：(22.8) 坏高：— 底：—	約1/2 床直	①細 白色粒・黒色粒 ②酸化焰 ③暗赤褐色 ④土師器	口縁部外傾し、頸部緩やかに彎曲する。肩部の張り弱い。口縁部横溝で、頸部は強い横溝で後肩部横位・斜位艶潤り。体部上平は斜位の艶潤り。体部内面横位艶潤り。

15号住居跡

14号住と同様に、調査区東側のC区東斜面に位置する。勾配の強い急傾斜地形であり、周辺遺構の密度も低く、重複遺構はない。単独の占地であり、前述の14号住が東に、41号住居跡や17号住居跡が西側に近接する程度だが、この傾斜地形は、本住居跡の西側で若干弱まり、それに従い17号住西側では住居跡が群在するようになる。いうなれば本住居跡は、住居群よりやや距離を置いた位置に占地した例と捉えられる。

平面形は、約4.2×3.7mの隅丸不整形を呈する。14号住と同様に南壁～西・北壁に乱れが見られるが壁の崩落と考えられよう。また、西壁がやや短く設定されており、これは斜面地形に影響されたものと捉えたい。

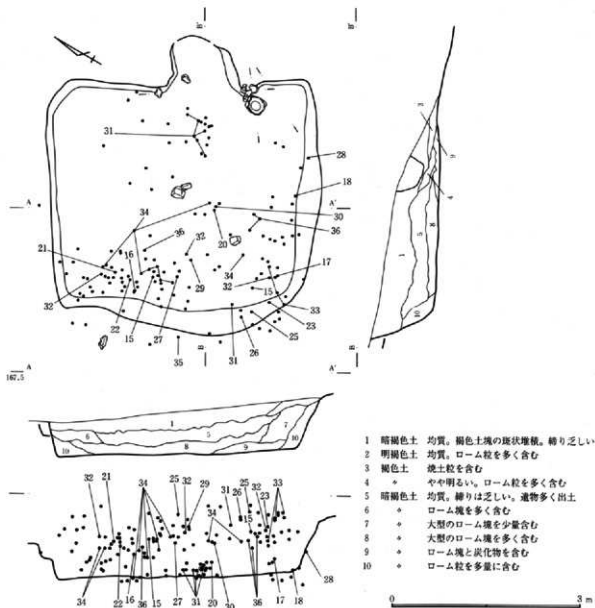
深さは、良好な遺存を誇る西壁付近で、約80cmを測り、遺存状態は良好といえよう。しかしながら、東壁は殆ど遺存しておらず、僅かな立ち上がりを用いて壁を確認した。竈に至っては煙道部の東端が逸失しており、側壁の彎曲と炭化物の散布状態から類推して、煙道部範囲を確定した調査である。

床面は、僅かな東方向への傾斜はあるものの、ほぼ平坦面を築く。ローム層土による地床で、硬化面は中央部分を中心に広い範囲で顕著だった。

柱穴・貯蔵穴等の施設は認められなかった。これも14号住に近似する。

竈は、東壁中央やや南寄りに設けられる。馬蹄状の煙道を強く壁外に突出し、やや主軸とずれる傾向を見せる。前述のように煙道部東端は傾斜地形のため逸失していた。然焼部～焚口部にかけてはほぼ平坦で、掘り込みは認められなかった。袖・構築材は検出されなかったが、竈南北の壁の彎曲を利用した構築造と考えられる。また、焚口部南側には、須恵器壺を中心とした遺物の集中があり、「置き台」等の施設が考えられよう。

出土遺物は多い。北西隅、南西隅、竈周辺に集中が見られる。北西～南西にかけての集中は、斜面上位よりの流れ込みも含まれよう。特筆すべきは、前にも述べた、竈焚口部南の遺物の集中である。口縁部を半周打ち欠いた須恵器壺(13)を正位に据え、土師器壺(12・13)や須恵器坏(1)、土師器坏(2～11)が重なり合うように置かれた状態で出土した。



- 1 暗褐色土 均質。褐色土塊の斑状堆積。締り乏しい
- 2 明褐色土 均質。ローム粒を多く含む
- 3 褐色土 焼土粒を含む
- 4 * やや明るい。ローム粒を多く含む
- 5 暗褐色土 均質。締りは乏しい。遺物多く出土
- 6 + ローム塊を多く含む
- 7 + 大型のローム塊を少量含む
- 8 + 大型のローム塊を多く含む
- 9 + ローム塊と炭化物を含む
- 10 + ローム粒を多量に含む

第69図 15号住居跡(1)

第64表 15号住居跡計測表

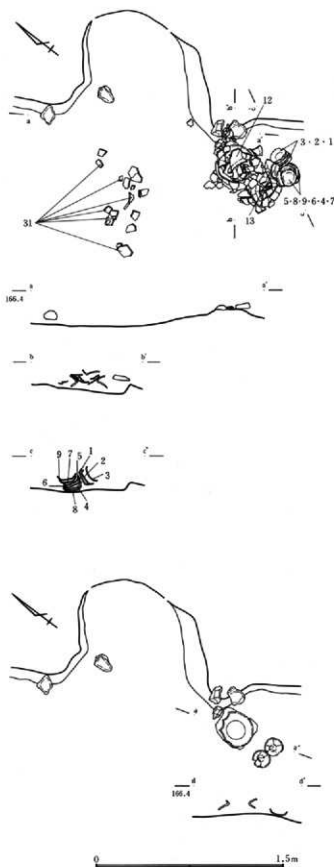
位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Ca-25・26	不整形	425×372×75	N61°E	N52°E		坏21 埴3 蓋1 高坏1 罌9 土埴1	

第71図にまとめたとおり、良好な一括出土と位置づけられよう。

以上のように、本住居跡は、先に述べた14号住と

同様、床面上に施設を持たない住居である。14号住との類似点を列挙すると

- 急傾斜地形に占地する
- 住居群からやや距離を置く



第70図 15号住居跡(2)

- 平面規模が4.0×3.5m前後の隅丸方形
- 床面上に施設を持たない

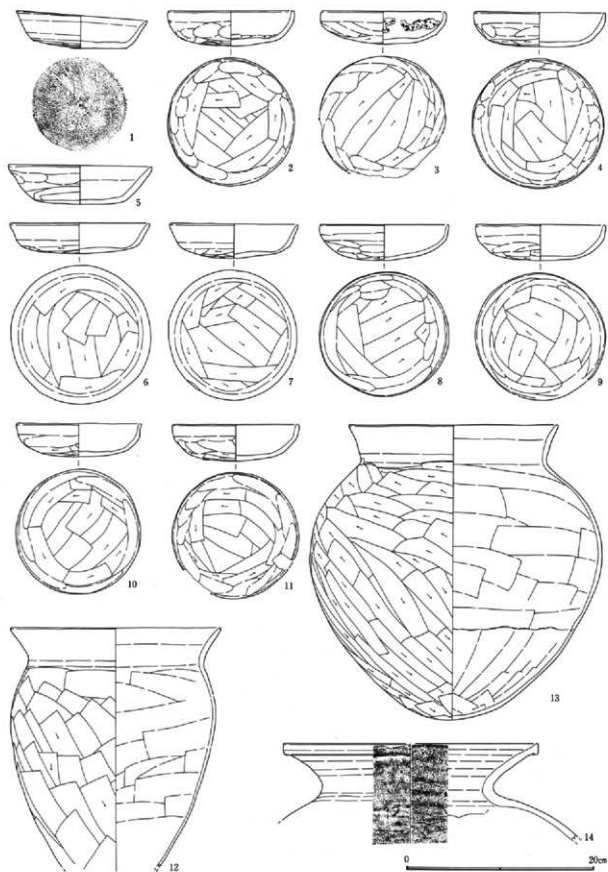
相違点としては

- 遺物量の差

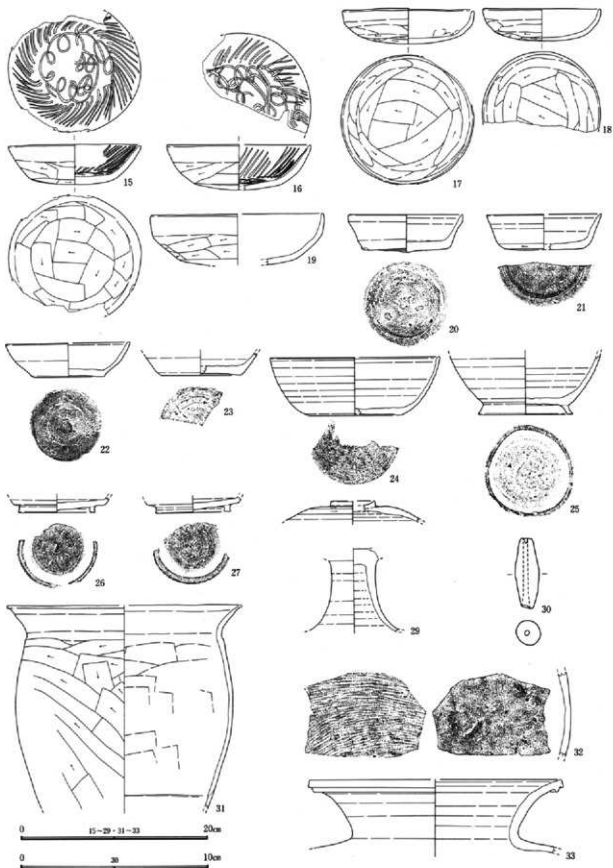
が認められよう。

類似点として挙げた、柱穴・貯蔵穴など居住に伴う施設が見られない状況は、本住居跡が日常の居住施設ではなく、小鍛冶など作業小屋・生業に関する施設とも考えられる。しかし、小鍛冶特有の遺物は出土しておらず、また轆轤ピットなどの施設も見られないことから、作業の性格まで特定できない。

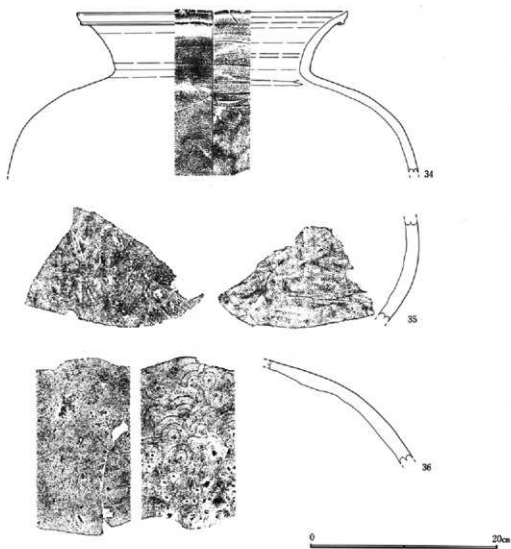
また、須恵器甕を置き台に使用する例を注意しておきたい。本住居跡以外には、例えば7号住に置き台を設けた例があるが、竈に須恵器甕を正位に置く事によって想起される作業は、特殊な煮沸行為が考えられる。該期における特殊煮沸は編者の力量では詳細まで不明ではあるが、住居群から離れた場所で行う煮沸・危険・臭気を伴う煮沸を行った可能性を指摘しておきたい。



第71図 15号住居跡出土遺物(1)



第72図 15号住居跡出土遺物(2)



第73図 15号住居跡出土遺物（3）

第三章 検出された遺構と遺物

第65表 15号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第71図 図版 55	口：13.8 坯高：3.4 底：10.0	ほぼ完形 甕内	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	口縁部一帯部に歪み、口縁部僅かに外反するが体部とは一体化する。腰部で彎曲し底部は若干突出する。右回転軸整形。底部回転蹴切り。外面に少量の自然釉が付着する。
第71図 図版 55	口：13.2 坯高：3.7	ほぼ完形 甕内	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部は内彎し体部と一体化する。体部は扁平で底部は丸底。口縁部横撫で体部は弱い撫でで指痕残る。底面は蹴割り。内面撫で。
第71図 図版 55	口：13.0 坯高：3.5	一部欠損 甕内	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	口縁部は内彎し体部と一体化する。体部は扁平で底部は丸底。口縁部横撫で体部は弱い撫でで指痕残る。底面は蹴割り。内面に算が少量付着する。
第71図 図版 55	口：13.6 坯高：3.6	完形 甕内	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部は内彎し体部と一体化する。体部はやや扁平で底部は丸底。口縁部横撫で体部は弱い撫でで指痕残る。底面は蹴割り。内面撫で。
第71図 図版 55	口：15.0 坯高：4.1 底：9.3	完形 甕内	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 軟質 ③褐色 ④土師器	口唇部内彎し口縁部強く外傾する。体部縦やかに彎曲し底部は平底。口縁部横撫で強く体部境目線をなす。体部一底部は蹴割り後撫でを施す。内面は撫で。赤色で軟質な感を受ける。
第71図 図版 55	口：14.7 坯高：3.2	ほぼ完形 甕内	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 ③軟質 ④褐色 ④土師器	口縁部外反し、体部は著しく扁平。底部は若干丸底。口縁部横撫で、体部は弱い撫で、底面は蹴割りを施す。内面撫で。
第71図 図版 55	口：13.5 坯高：3.6	ほぼ完形 甕内	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 やや軟質 ③褐色 ④土師器	口縁部僅かに外反し体部は扁平。底部は若干丸底。口縁部横撫で、体部は弱い撫で、底面は蹴割りを施す。内面撫で。
第71図 図版 55	口：13.5 坯高：3.8	ほぼ完形 甕内	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	口縁部僅かに内彎し、彎曲する体部と丸底底部と一体化する。やや身深の体部。口縁部横撫で、体部弱い撫で、指痕残る。底面は蹴割りを施す。内面撫で。
第71図 図版 55	口：13.5 坯高：3.7	ほぼ完形 甕内	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③鈍赤褐色 ④土師器	口縁部僅かに内彎し、彎曲する体部と丸底底部と一体化する。やや身深の体部。口縁部横撫で、体部弱い撫で、指痕残る。底面は蹴割りを施す。内面撫で。
第71図 図版 55	口：13.1 坯高：3.5	ほぼ完形 甕内	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	口縁部外反気味に直立。体部は彎曲し、底部は丸底。口縁部横撫で、体部は弱い撫で、指痕残る。底面は蹴割りを施す。内面撫で。
第71図 図版 55	口：13.2 坯高：3.8	ほぼ完形 甕内	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部外反気味に直立。体部彎曲し、底部は丸底。口縁部横撫で強く、体部境目に弱い外線をなす。体部は蹴割り後撫で、底面は蹴割りを施す。内面は撫で。
第71図 図版 55	口：40.0 高：— 底：—	底部欠損 甕内	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	口縁部外反し頸部縦やかに屈曲する。肩部の張りは強くなく、体部中位の膨らみも弱い。口縁部横撫で後肩部横位蹴割り、体部上半斜位、下半は縦位の蹴割りを施す。内面は横位蹴撫でを主とする。
第71図 図版 56	口：22.2 高：31.3	一部欠損 甕内	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	口縁部外反し頸部く字状に屈曲する。肩部は張り体部中位に膨らみを強く持つ。底部丸底。口縁部横撫で後体部上半横位・斜位蹴割り、体部下半縦位・斜位蹴割りを施す。内面体部上半横位蹴撫で、下半縦位蹴撫で。
第71図 図版 56	口：27.0 高：— 底：—	口縁部～ 肩部 甕内	①粗 石英・砂礫 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口唇部直立し、口縁部強く外反する。頸部の部曲も強く肩部は大きく張る。口縁部右回転軸整形で、体部外面平行引き、内面背流状当て目が残る。頸部の接合部は横撫で。口縁部内面と肩部外面に自然釉付着。

第5節 奈良・平安時代の住居跡

図番号 器種	法量 (cm) () 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第72図 図版 15 55	口：14.0 高：4.2 底：9.0	口縁部 一部欠損	①粗 白色粒・砂礫 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	暗紋土師器。口縁部一部僅かに内彎し一体化する。底部は丸底。口縁部横撫で、体部縦位旋削り後一部撫で、底面は旋削り。内面の暗紋は体部放射状、底面は螺旋状を呈す。器厚はやや厚手だが整った器形。
第72図 図版 16 56	口：(15.1) 高：4.8 底：(9.4)	約2/5 覆土	①粗 片岩・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	暗紋土師器。口縁部僅かに外反し体部は丸みを帯びる。底部は丸底。口縁部横撫でで体部縦に強い外縁をなす。体部～底面は旋削りか、内面の暗紋は体部放射状、底面螺旋状を呈す。内面平滑だが、外表面割漆。
第72図 図版 17 56	口：13.8 高：3.7	ほぼ完形 床直上	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部外反気味に直立し体部は扁平で彎曲はやや強い。底部は丸底。口縁部横撫で、体部は横位旋削り後強い撫で、指痕が残る。底面は旋削り。内面は口縁～体部の屈曲を持ち、撫でが及ぶよ凸が著しい。
第72図 図版 18 56	口：12.3 高：3.5	約1/2 床直	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 ③鈍黄褐色 ④土師器	やや小径で、口縁一部内彎し一体化する。体部は扁平で底部も丸底。口縁部横撫で、体部は横位旋削り後強い撫で、底面は旋削りを施す。内面撫で。器厚は比較的薄手。
第72図 図版 19 56	口：(18.0) 高：— 底：(12.4)	約1/4 覆土	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	大型の杯。口縁部は幅広く直立する。体部は直線的に落ちる。底面は若干の丸底。口縁部横撫で、体部は横位旋削り一部撫でが加わる。底面は旋削り。内面撫で。
第72図 図版 20 56	口：(12.0) 高：4.0 底：9.0	約3/5 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部内彎気味に直立。体部は緩やかな外反を呈す。右回転縦軸整形。底部回転旋削り後撫でを加える。腰部に準減痕が看取される。
第72図 図版 21 56	口：(12.1) 高：3.8 底：(8.3)	約1/4 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反するも体部とほぼ一体化する。体部下半で彎曲を持たせる。右回転縦軸整形。底部回転旋削り後無調整。旋削りは体部下半まで及ぶ。
第72図 図版 22 56	口：(13.0) 高：3.6 底：7.5	約1/3 覆土	①緻密 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一部縦横やかに内彎し一体化する。体部下半で僅かな彎曲を持たせる。右回転縦軸整形。底部回転旋削り後僅かな撫でを加える。内外面とも丁寧な仕上げ。
第72図 図版 23 56	口：— 高：— 底：(8.5)	底部破片 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	直線的な体部下半形態を呈す。右回転縦軸整形。底部回転旋削り後無調整。体部に比して底部器厚厚い。
第72図 図版 24 56	口：(17.9) 高：6.2 底：(9.6)	約1/4 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	無台の碗。大型品である。口唇部内面肥厚する。口縁一部縦横やかに内彎し一体化する。体部下半の丸み著しい。右回転縦軸整形。底部回転旋削り後無調整。
第72図 図版 25 56	口：— 高：— 底：9.8	約1/3 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大型品。体部強く彎曲し高台は開く。右回転縦軸整形。底部回転旋削り後高台貼付。貼付時の撫では底面にまで及ぶ。外面の一部に薄く付着。
第72図 図版 26 56	口：— 高：— 底：8.0	約1/4 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下端に強い屈曲を持たせ、内面見込み部も明確。右回転縦軸整形。底部回転旋削り後高台貼付。貼付前外底面中央に放射状の刻みを付ける。刻みの性格は不明。
第72図 図版 27 56	口：— 高：— 底：(7.9)	約1/5 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下端に強い屈曲を持たせ、内面見込み部も明確。右回転縦軸整形。底部回転旋削り後高台貼付。貼付時の撫でが底面にまで及ぶ。
第72図 図版 28 56	口：— 高：— 底：(4.6)	約1/8 覆土	①粗 石英・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	やや大型の環状碗を付す。天井部は平坦で体部は緩やかな彎曲を呈す。右回転縦軸整形。天井部回転旋削り後横貼付。
第72図 図版 29 56	口：— 高：— 底：—	脚部破片 覆土	①細 白色粒・針状物質 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	脚部。一体化した外反する脚部形態。右回転縦軸整形。丁寧な撫で調整は脚部内面上端にまで及ぶ。

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) () 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②地成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第72図 30 土種 図版 56	長: 3.7 径: 1.3 重: 5.61g	ほぼ完形 覆土	①粗 石英 ②酸化焰 ③明黄褐色 ④土製品	小型品。棒状の芯材に粘土を巻きまきによる成形。両端が小径で中位が膨らむ紡錘状の形態。外面は長軸方向の條でを主に施す。
第72図 31 器種 図版 56	口: (24.6) 高: - 底: -	口縁部~ 体部破片 床直上	①細 白色粒・黒色粒 ②酸化焰 ③橙褐色 ④土師器	口唇部丸みを帯び玉縁状をなす。口縁部外反し頸部緩やかに屈曲する。肩部の張りは弱く体部中位に膨らみを持たせる。口縁部横溝で体部上半横位・斜位施削り、下半は縦位施削り。内面体部は横位施削り。
第72図 32 器種 図版 57	口: - 高: - 底: -	体部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③灰オリーブ色 ④須恵器	外面平行明き目、内面は円環状当て目。内面は條でが及ぶ。断面中位色調は灰褐色を呈すサンドイッチ状。
第72図 33 器種 図版 57	口: (26.3) 高: - 底: -	約1/4 口縁部~ 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰オリーブ ④須恵器	口唇部に條を持ち、有段状の印象を得る。口縁部は強く外反し頸部の屈曲も強い。肩部も大きく張る。口縁部横溝整形で体部内面に青海波状当て目が残る。口縁部外面に自然軸付着。
第73図 34 器種 図版 56	口: (28.8) 高: - 底: -	口縁部~ 明部約1/2 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部外傾し、口縁部外反、頸部強く屈曲し、肩部一体部上半も大きく張る。口縁部横溝整形。体部外面平行明き目、内面青海波状当て目。
第73図 35 器種 図版 -	口: - 高: - 底: -	体部破片 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	彎曲する体部。外面平行明き目と條で、内面内念な條でを施す。
第73図 36 器種 図版 -	口: - 高: - 底: -	体部破片 覆土	①粗 石英・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	外面條で、自然軸付着。内面青海波状当て目残る。

17号住居跡

調査区東側のC区東斜面に位置する。斜面地形とはいえ、台地頂部の緩やかな斜面地形であり、本住居跡西側には、多数の住居跡が密集して検出された。第7図にその一部を図示したが、住居跡群はD区にまで伸び、本遺跡住居群の主体となる地点である。C-D区住居群として呼称したい。

本住居跡は34号住居跡・65号住居跡と重複する。西側には18号住居跡・38号住居跡が、また南西部には48・64号住居跡・36号住居跡が近接し、重複・近接する一群の住居群をなす。重複する34号住・65号住は浅く遺存度も低いため本住居跡を大きく破壊する状態ではない。土層による新旧も、本住居跡を最も新しく捉えた。

平面形は、約4.5×4.4mの比較的整った隅丸正方形を呈す。深さは、西壁付近で約70cmを測り、良好な遺存状態を見せる。掘り込みも、しっかりしていた。ただし、斜面地形のため北側から東側の壁高は

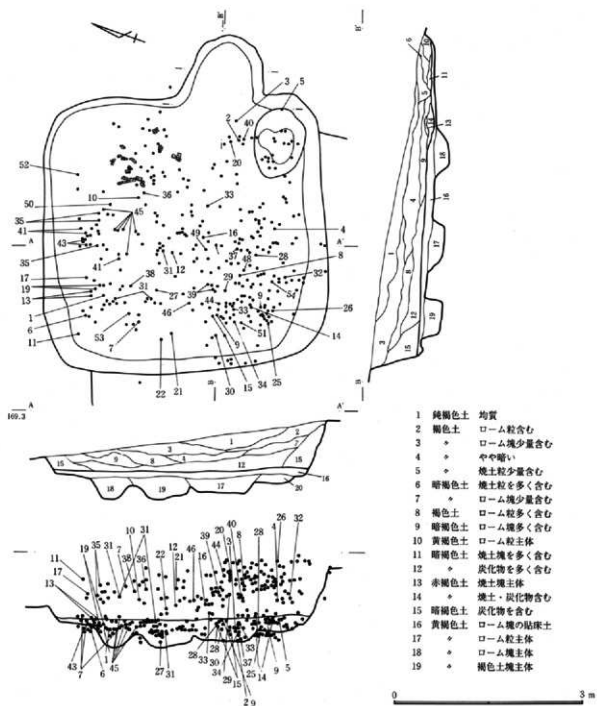
低く10数cmとやや遺存度は低い。

床面は、平坦面を築き、黄褐色ロームと鈍褐色土の混合土による貼床が床面全面になされていた。硬化面は、中央部分に広く顕著に認められ、竈~貯蔵穴周辺にも広がっていた。

周溝・柱穴は、認められなかった。床下調査で得られた小型の土坑を柱穴として可能性を求めたが、断面形状や配置から、その妥当性は低いものと判断した。

貯蔵穴は、東南隅で検出した。平面形は、不整形円状を呈し、約25cm程度の深さを測る。

竈は、東壁東南隅寄りに設けられる。半楕円状の煙道を壁外に突出し、燃焼部・焚口部には掘り込みは認められず、比較的平坦面を見せる。袖・天井部等の構築材の痕跡も明瞭ではなく、土層観察によって得られた5・12・14層が袖としての可能性を残す。土層には焼土塊・大型の炭化物が見られ、竈本体の意図的な崩壊を証左する。



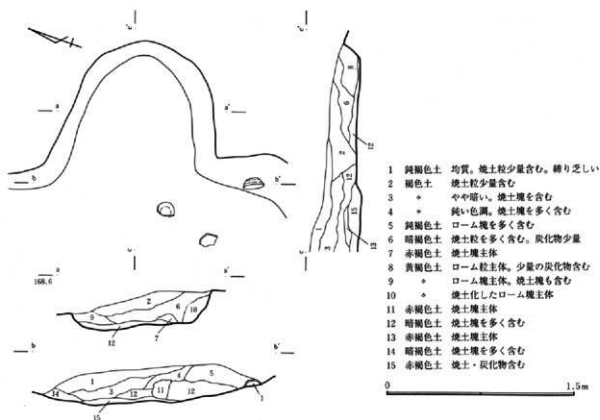
- 1 純褐色土 均質
- 2 褐色土 ローム粒含む
- 3 + ローム塊少量含む
- 4 + やや暗い
- 5 + 焼土粒少量含む
- 6 暗褐色土 焼土粒を多く含む
- 7 + ローム塊少量含む
- 8 褐色土 ローム粒多く含む
- 9 暗褐色土 ローム塊多く含む
- 10 黄褐色土 ローム粒主体
- 11 暗褐色土 焼土塊を多く含む
- 12 + 炭化物を多く含む
- 13 赤褐色土 焼土塊主体
- 14 + 焼土・炭化物含む
- 15 暗褐色土 炭化物を含む
- 16 黄褐色土 ローム塊の貼床土
- 17 + ローム粒主体
- 18 + ローム塊主体
- 19 + 褐色土塊主体

第74図 17号住居跡(1)

第66表 17号住居跡計測表

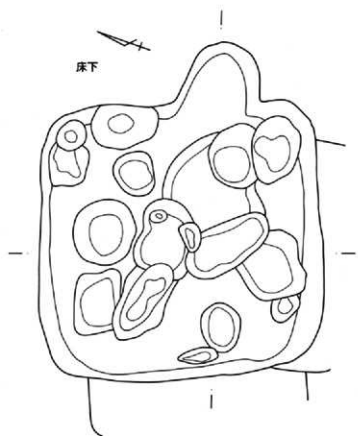
位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	羅方位	主な施設	主な遺物	重層遺構
Cu-w-26・27	隅丸正方形	453×436×70	N69°E	N78°E	貯蔵穴	坏24 壺3 甕4 高坏1 瓶1 壺12 甕1 金属器3 不明1	34・65住

第三章 検出された遺構と遺物



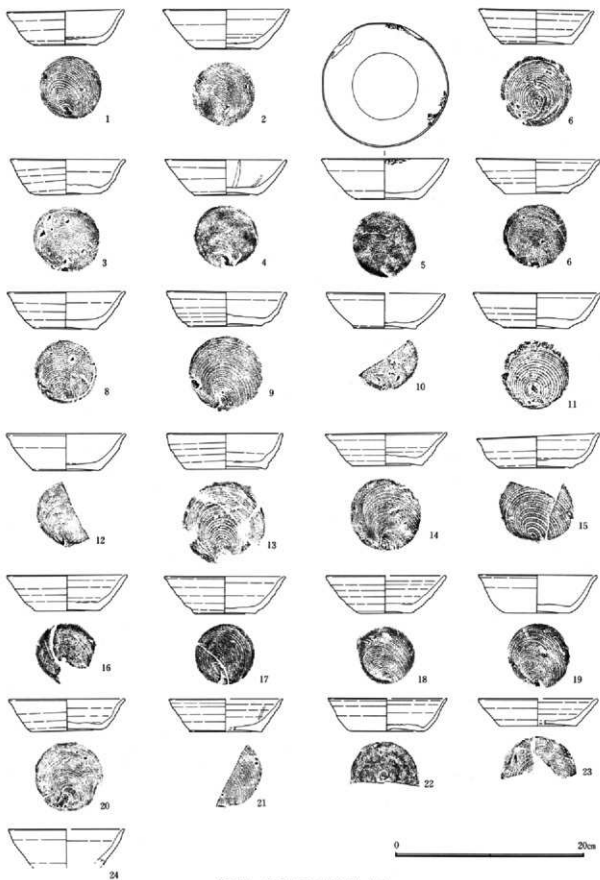
- 1 鈍褐色土 均質。焼土粒少量含む。締り乏しい
- 2 褐色土 焼土粒少量含む
- 3 * やや暗い。焼土塊を含む
- 4 * 鈍い色調。焼土塊を多く含む
- 5 鈍褐色土 ローム塊を多く含む
- 6 暗褐色土 焼土粒を多く含む。炭化物少量
- 7 赤褐色土 焼土塊主体
- 8 黄褐色土 ローム粒主体。少量の炭化物含む
- 9 * ローム塊主体。焼土塊も含む
- 10 * 焼土化したローム塊主体
- 11 赤褐色土 焼土塊主体
- 12 暗褐色土 焼土塊を多く含む
- 13 赤褐色土 焼土塊主体
- 14 暗褐色土 焼土塊を多く含む
- 15 赤褐色土 焼土・炭化物含む

0 1.5m



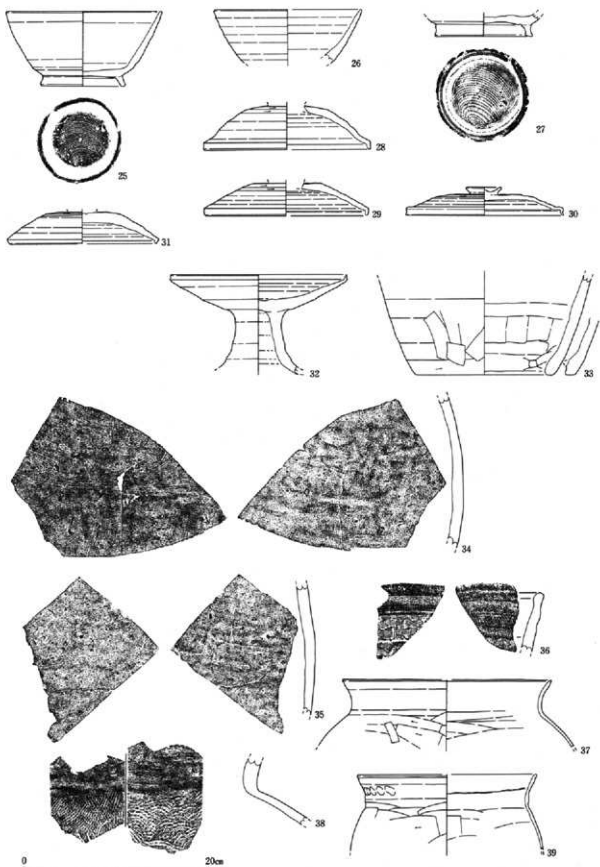
0 3m

第75図 17号住居跡(2)

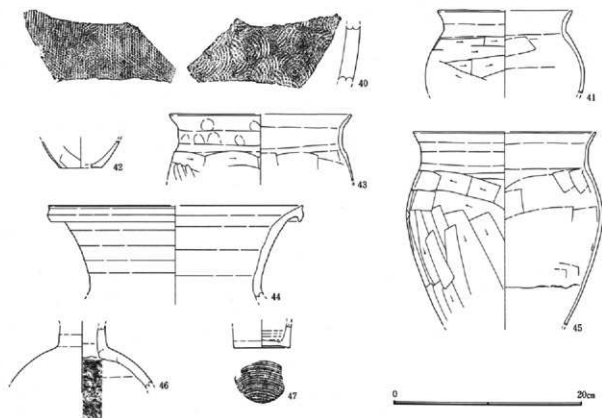


第76図 17号住居跡出土遺物(1)

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第77図 17号住居跡出土遺物(2)



第78図 17号住居跡出土遺物(3)

さて、本住居跡は焼失住居の可能性を秘める。床面中央やや北東寄りに少量ながら炭化材が出土している。遺存は悪く、塊状の出土であり、走行や部材の特定はできないが、焼失後の除去作業が想起され、興味深い炭化材出土状況である。

床下調査によって得られた施設は、中～大型の床下土坑が充てられよう。特に、中央部分に重複状態で確認されたが、新旧による用途の差は確定できなかった。黄褐色ローム塊を主体とした埋土である。また、北東隅に検出された数基の小土坑は、東南隅に対する北東隅の貯蔵穴としても考えられ、検討を要する。

遺物は、覆土中～床面にかけて多量に出土した。住居跡全域に散布する状況だが、竈周辺に完形土器の出土が目立った。また、断面分布からは、覆土上位と下位に無遺物層とも考えられる幅が見られる。あるいは、住居跡廃絶後、凹地への廃棄行為が存在したのであろうか。ただ覆土上位と床面では、大き

な時期差は認められないことから、焼失後の炭化材除去作業に伴う遺物廃棄行為も念頭に置きたい。

第三章 検出された遺構と遺物

第67表 17号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) () 部定積	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第76図 四版 57	口：12.3 坏高：3.6 底：6.7	完形 床直	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	整った器形を呈す。口縁部内彎し下部下に丸みを持たせる。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第76図 四版 57	口：13.2 坏高：4.2 底：6.6	完形 床直	①細 白色粒・雲母 ②還元焰 灰白色 ④須臾器	口唇部に僅かな歪み。体部中位に若干の彎曲を持たせるものほば一体化した口縁一体部形態。底径はやや小型。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第76図 四版 57	口：12.1 坏高：3.7 底：7.1	約4/5 床直	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部と一体化する。体部下下に強い彎曲を持たせる。底部はやや上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。内面見込み部やや明瞭。
第76図 四版 57	口：12.7 坏高：3.8 底：6.7	約4/5 覆土	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部一体部緩やかな内彎をもって一体化する。体部下下に強い彎曲を持たせ底部は僅かに突出する。底部は上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。内面に大導痕。
第76図 四版 57	口：13.3 坏高：4.3 底：6.7	ほぼ完形 床直	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須臾器	口縁一体部はほぼ一体化するも口縁下轆轤目強く線状に高。体部中位は僅かに丸みを帯る。底部はやや上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。外底面周縁摩滅。内面口唇部に油層付着する。
第76図 四版 57	口：12.0 坏高：3.7 底：7.5	ほぼ完形 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口唇部は尖り、口縁一体部緩やかな内彎をもって一体化する。底部はやや上げ底。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。外面口縁部重ね焼きの痕跡。
第76図 四版 57	口：13.0 坏高：3.7 底：6.7	約1/2 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁一体部上半に緩やかな彎曲で一体化するが、下半に強い彎曲を設ける。底部を僅かに突出させる。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。内外部面摩滅。
第76図 四版 57	口：12.3 坏高：3.9 底：6.7	約3/4 覆土	①粗 片岩・石英 ②還元焰気味 ③鈍黄褐色 ④須臾器	口縁部外反し体部中位に彎曲を持たせる。底部も僅かに突出させる。やや上げ底である。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第76図 四版 57	口：12.5 坏高：3.7 底：7.7	約3/4 床直	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部外反し体部中位～下半に彎曲を持たせる。底部も僅かに突出し、上げ底で底径はやや広い。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部轆轤目強く鋭利な印象を得る。
第76図 四版 57	口：(12.4) 坏高：3.7 底：6.6	約1/4 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰気味 ③灰黄色 ④須臾器	口縁部一体部緩やかに内彎し一体化する。底部は僅かに突出しやや上げ底。右回転轆轤整形後体部に撫でを加える。底部回転糸切り後無調整。
第76図 四版 57	口：(13.3) 坏高：3.7 底：6.9	約1/2 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口唇部は尖り、口縁一体部上半緩やかな内彎をもって一体化するが下半に強い彎曲を設ける。底部は僅かに突出し上げ底を呈す。内面見込み部は比較的明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。厚手。
第76図 四版 57	口：12.5 坏高：3.9 底：6.8	約1/2 覆土	①粗 片岩 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部強く外反し体部上半に丸みを持たせる。下半は緩やかな彎曲で落ちる。底部は僅かに上げ底。右回転轆轤整形。口縁部強い横撫で、体部下半丁寧な撫でが加わる。底部回転糸切り後無調整。
第76図 四版 57	口：(12.1) 坏高：3.8 底：8.5	約3/4 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ③鈍黄色 ④須臾器	口唇部は尖り口縁一体部上半僅かな内彎をもって一体化し下半に強い彎曲を設ける。底径広く上げ底を呈す。内面見込み部比較的明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。轆轤目強く鋭利な印象を得る。
第76図 四版 57	口：12.8 坏高：3.4 底：7.5	約1/2 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰気味 ③鈍黄褐色 ④須臾器	口唇部は尖り口縁部は外反する。体部は緩やかな彎曲を持たせる。底径は広くやや上げ底。内面見込み部明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部下半の轆轤目強く鋭利な印象を得る。

第5節 奈良・平安時代の住居跡

国番号 器種	法量 (cm) ()標定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第76国 図版	15 口：12.8 坯高：3.4 底：7.8	約3/4 床直	①細 白色粒 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部中位に丸みを持たせる。体部下半に強い彎曲を持たせ底部を僅かに突出させる。底径広い。内面見込み部比較的明瞭。右回転軸調整形。底部回転糸切り後無調整。体部に撫でが加わる。
第76国 図版	16 口：(12.6) 坯高：3.8 底：7.0	約3/5 覆土	①粗 白色粒・黒色粒・石英 ②還元焰気味 ③灰色 ④須恵器	口縁一体部緩やかな内彎をもつて一体化する。右回転軸調整形。底部回転糸切り後無調整。外器面摩滅著しい。
第76国 図版	17 口：(12.6) 坯高：4.0 底：6.5	約3/5 覆土	①細 白色粒・黒色粒 ②やや還元焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口唇部僅かに丸みを帯び玉縁状をなす。口縁一体部緩やかな内彎をもつて一体化し下半～底部に彎曲を持たせ底部突出する。右回転軸調整形。底部回転糸切り後無調整。内底面磨製剥落。
第76国 図版	18 口：(12.6) 坯高：5.0 底：6.0	約2/5 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁一体部緩やかな彎曲をもち一体化する。右回転軸調整形。底部回転糸切り後無調整。器部の一部に摩滅痕。
第76国 図版	19 口：12.3 坯高：6.8 底：4.0	約2/3 床直	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③暗灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位～下半に丸みを帯びる。底部は上げ底。内面見込み部は比較的明瞭。右回転軸調整形。底部回転糸切り後無調整。
第76国 図版	20 口：12.1 坯高：3.4 底：7.6	約3/4 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかに丸みを帯びる。底径広くやや上げ底。内面見込み部は比較的明瞭。右回転軸調整形。底部回転糸切り後無調整。体部の輪縁口強く鋭利な印象を受ける。
第76国 図版	21 口：(11.9) 坯高：(3.5) 底：(7.7)	約1/3 覆土	①緻密 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口唇部尖り口縁部僅かに外反する。体部上半～下半はより強く外反し、口縁部の彎曲を強調する。右回転軸調整形。底部回転糸切り後無調整。全体に鋭利な印象を受ける。内底面器厚薄い。内面に火傷痕
第76国 図版	22 口：(12.5) 坯高：3.5 底：7.4	約2/5 床直上	①緻密 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかに丸みを帯びる。底部上げ底。内面見込み部顕著。右回転軸調整形。底部回転糸切り後撫で調整。器厚薄く丁寧な作り
第76国 図版	23 口：(12.5) 坯高：(2.9) 底：(8.0)	約1/4 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁一体部一体化し大きく開く。底部やや上げ底。右回転軸調整形。体部撫でが加わる。底部回転糸切り後無調整。口縁部外面に重ね焼き痕。
第76国 図版	24 口：(12.1) 坯高：— 底：—	約1/4 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部は丸みを持たせる。右回転軸調整形。器厚厚手。
第77国 図版	25 口：16.4 坯高：7.9 底：8.7	約3/5 床直	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	大型品。口縁一体部緩やかな彎曲をもつて一体化する。体部下半に彎曲を設け高台は開く。内面見込み部比較的明瞭。右回転軸調整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時局線撫で。
第77国 図版	26 口：(15.4) 坯高：— 底：—	約1/3 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部僅かに外反。口縁一体部彎曲をもつて一体化する。右回転軸調整形。内面および断面色調は鈍灰色を呈す。あるいは還元焰気味の焼成か
第77国 図版	27 口：— 坯高：— 底：(10.2)	約1/4 床下	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下半の彎曲を延て高台が直立する。右回転軸調整形。底部回転糸切り後高台貼付。
第77国 図版	28 口：(17.5) 蓋高：— 柄：—	約1/4 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	欠損するが柄貼付。天井部高く体部丸みを帯び胴部彎曲する。かえり部は丸みを帯び直立する。右回転軸調整形。天井部回転糸切り後局線調整柄貼付。器厚厚く量感に富む。
第77国 図版	29 口：(15.4) 蓋高：— 柄：—	約1/5 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	剥落するが柄貼付。天井部は比較的平坦で体部一帯部一体化する。かえり部は短く内傾する。右回転軸調整形。天井部回転糸切り後局線調整柄貼付。器厚厚く量感に富む。

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) () 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第77図 図版 30 58	口: (16.6) 蓋 高: 3.0 皿 高: 3.6	約1/2 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	環状輪を貼付する。天井部低くやや凹む。体部丸みを帯び唇部広がる。かえり部は短く彎曲気味に直立する。右回転軸輪整形。天井部回転軸調整後横貼付。器厚薄い。
第77図 図版 31	口: (17.1) 蓋 高: - 皿 高: -	約1/4 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	欠損するが横貼付。天井部は比較的平坦で体部一帯部一体化する。かえり部は短く若干内傾する。右回転軸輪整形。天井部回転軸切り後横調整横貼付。
第77図 図版 32	口: (18.6) 高 環: - 高 底: -	約1/2 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部短く直立し体部一底部は緩やかな彎曲をもつて一体化する。脚部は外反するが唇部の広がり弱い。右回転軸輪整形。体部下半一底部回転調整後脚部貼付。脚部も右回転軸輪整形。接合部は丁寧。
第77図 図版 33	口: - 蓋 高: - 皿 高: - 底: (14.4)	底部破片 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	欠損するが残りを底部に付す。直線的に開く体部下半。底部端部は平直面を築く。輪軸整形で体部下半に接連。下端は横位旋削り。体部内面も横位旋削りで下端旋削り。接合部は入念な無で施す。
第77図 図版 34	口: - 蓋 高: - 皿 高: - 底: -	体部破片 床直	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	外面横撫で。平行叩き目残る。内面横撫で。円環状当て目残る。
第77図 図版 35	口: - 蓋 高: - 皿 高: - 底: -	体部破片 覆土	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	34と同一個体。外面横撫で。平行叩き目残る。内面横撫で。円環状当て目残る。
第77図 図版 36	口: - 蓋 高: - 皿 高: - 底: -	口縁部破片 覆土	①白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	器内多孔質。口縁部肥厚し外反する。以下横位旋削りが走り波状紋縁部が段段配される。輪軸整形。回転方向不詳。
第77図 図版 37	口: (22.0) 蓋 高: - 皿 高: - 底: -	口縁部破片 床下	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部外反し頸部緩やかに屈曲する。肩部の張りも強い。口縁部横撫で。肩部横位・斜位旋削り。体部内面横位旋削りで施す。
第77図 図版 38	口: - 蓋 高: - 皿 高: - 底: -	頸部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し頸部屈曲する。肩部は強く張る。口縁部輪軸整形。体部外面平行叩きによる格子目。内面青海波状当て目が著しく重複する。
第77図 図版 39	口: (18.8) 蓋 高: - 皿 高: - 底: -	約1/2 口縁部 覆土	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③赤褐色 ④土師器	コ字口縁変。口唇部丸みを持ち玉縁状をなす。口縁部上位はやや彎曲し中位一下位は直立する。肩部の張りは弱い。口縁部上・下位の横撫で強く中位は指痕が残る。肩部一帯部上半横位旋削り。内面横位へ撫で
第78図 図版 40	口: - 蓋 高: - 皿 高: - 底: -	体部破片 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	外面平行叩き。工具木口断面形残る。内面青海波状当て目。
第78図 図版 41	口: (14.0) 蓋 高: - 皿 高: - 底: -	口縁部一 部破片 覆土	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	コ字口縁変。口唇部尖り口縁部上位は強く外傾する。中位一下位は内傾気味に肩部と一体化し体部上半に膨らみを持たせる。口縁部横撫で。肩部横位旋削り。体部中位は斜位旋削り。内面横位旋削りで施す。
第78図 図版 42	口: - 蓋 高: - 皿 高: - 底: 4.5	底部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	底径は小さく体部は緩やかに開く。外面は横位旋削り。底面は撫で。内面は撫で。帯が付着する。
第78図 図版 43	口: (19.2) 蓋 高: - 皿 高: - 底: -	口縁部破片 床下	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	コ字口縁変。口縁上位外反し下位は直立する。肩部の張りは弱い。口縁部横撫で。中位に指痕が顕著。肩部は横位旋削り。体部上半に横位旋削り加わる。内面体部は横位旋削りで施す。
第78図 図版 44	口: (26.9) 蓋 高: - 皿 高: - 底: -	口縁部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④土師器	口唇部直立し端部鋭い。口縁部は強く外反する。右回転軸輪整形。

図 番 号 種	法 量 () 推 定 値	残 存 率 出 土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第78図 45 丸 版	口：(19.2) 高：— 底：—	約1/4 床下	①細 黒色粒・白色粒・ 石英 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	コ字口縁寛。口縁部上位外反し、下平直立する。肩部の張りは弱く、体部中位に膨らみを若干設ける。口縁部横断で体部上平横位・斜位の境あり、下平は横位境あり。体部内面は横位境線で施す。
第78図 46 長形 丸 版	口：— 高：— 底：—	頸部～ 肩部破片 覆土	①粗 石英・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	内傾気味の頸部。肩部は比較的強く張る。頸部は輪縁整形。接合部内面の境り目顕著。体部外面施で、内面横位・斜位の横で。
第78図 47 不明 丸 版	口：— 高：— 底：(6.0)	底部破片 覆土	①粗 石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	ほぼ直立する体部下平。右回輪縁整形。底部回転糸切り後無調整。底部器厚厚手。

18号住居跡

調査区東側のC区東斜面で検出された。緩やかな東斜面地形に立地し、C～D区住居群の北東部にあたる。周辺は住居跡が密集しており、北西隅に32号住居跡・北に38号住居跡・南に36号住居跡が重複するほか、前述の17号住や65号住が東に接する。また、33号土坑も床面中央を切る。

平面形は、重複住居の存在、かつ北辺と南辺の差が著しく、東壁の遺存も傾斜地形のため判然としなため、不確定要素が強いが、主軸長と残存部からの計測値で、約5.0×4.7mの不整隅丸方形を呈す。東南隅が大きく彎曲しており、全体の対称性を崩す要因ともなる。深さは、遺存の良好な西壁付近でも30～40cm前後にとどまる。東壁は、逸失しており、北壁は38号住に壊されている。また、試掘時の遺構確認トレンチが南北に走り南壁の一部を壊していた。遺存状態は不良といえよう。

床面は、東側へ緩やかに傾斜して検出された。おそらく平坦面は意識された構築と思われる。ローム層土を地床としており、硬化面は無く全体に軟弱な床面であった。

壁周溝は見られず、柱穴も床面上に3基の小ピットを確認したが、良好な配置・深さを呈する例は無い。貯蔵穴も無かった。

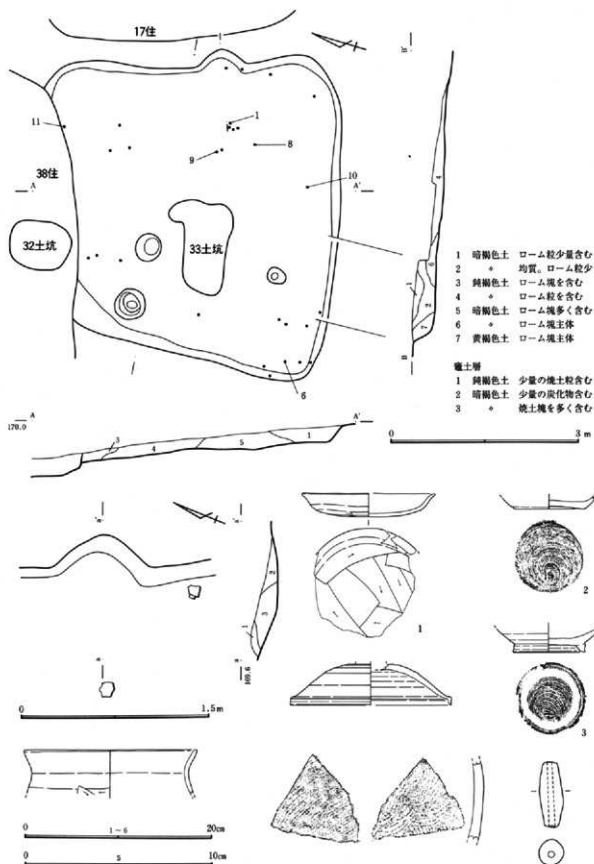
竈は、東壁中央やや南寄りに設けられる。東壁逸失のため、掘り込みは浅く残存状態は悪い。煙道は僅かに壁外に突出し、燃焼部は僅かに凹むものの、

煙道部の立ち上がり不明瞭のため、明確な焚口部～燃焼部は捉えられなかった。袖・天井材等の構築材も検出されなかった。

床下調査を行ったが相当する床下土坑等は検出されなかった。

遺物の出土も少なく、全体に散見する程度で集中する箇所も見られなかった。多くが床直上～床直の出土で、土師器坏(1)・須恵器蓋(4)は床直出土ではあるが、居住を想起させる出土状態ではない。土鍾(7)は覆土出土である。

第三章 検出された遺構と遺物



第79図 18号住居跡

第68表 18号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cw-a-26・27	不整形	905×470×35	N78°E	N78°E		坏2 罎1 蓋1 甕2 土埴1	32・36・38 住・33坑

第69表 18号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量(cm) ()指定値	残存率 出土状態	①胎土 ②地成 ③色調 ④その他	特 徴(形態・手法等)
第79図 1 坏 罎版 59	口: 13.8 高: 2.5	約2/5 床直	①粗 黒色粒・白色粒・ 石英 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部外反し、体部は著しく扁平。底部は丸底。口縁部横溝で、体部は 弱い溝で、底部は鋭削りを施す。
第79図 2 坏 罎版 59	口: - 高: - 底: 7.3	約1/3 覆土	①粗 黒色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	ほぼ直線状に立ち上がる体部下平。底部は上げ底。右回転軸轆轤形。底 部回転赤切り後無調整。
第79図 3 坏 罎版 59	口: - 高: - 底: (2.9)	約1/3 覆土	①粗 石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下平は緩やかな彎曲を呈し高台は若干開く。右回転軸轆轤形。底部 回転赤切り後高台貼付。貼付時周縁横溝で
第79図 4 蓋 罎版 59	口: (16.8) 高: - 柄: -	約1/5 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	柄欠損。天井部高く彎曲を帯びて腰部に広がる。かえり部の屈曲は強く 直立する。右回転軸轆轤形。天井部回転調整後後補貼付
第79図 5 罎 罎版 59	口: (18.2) 高: - 底: -	口縁部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部外反し頸部緩やかに彎曲する。肩部の張りはやや強い。口縁部横 溝で、肩部斜位蓋筒り。内面は横溝で施される
第79図 6 罎 罎版 59	口: - 高: - 底: -	体部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	外面平行印き後溝で。内面青濁液状当て目残る
第79図 7 土埴 罎版 59	長: 3.6 径: 1.3 重: 5.26g	完形 覆土	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰 ③浅黄色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径の紡 錘状の形態。外面縦位置で。

19号住居跡

調査区北東側のC区東斜面で検出された。緩やかな東斜面地形に立地し、C～D区住居群の北部にあたる。斜面地形は北側への傾斜も見られるが緩やかであり、丘陵性の台地鞍部の様相を見せる。

周辺は、住居跡が密集しており、北壁には20号住居跡が重複する。西側には22号住居跡が隣し、21号～23号住居跡等が群在する。南側には4m程距離を置いて38号住や17号住・18号住が密集している。北側は調査区域外になるため判然としなが、東側は住居跡が検出されず、空白部となる。あるいは、C～D区住居群の東端にあたる住居跡として位置づけ

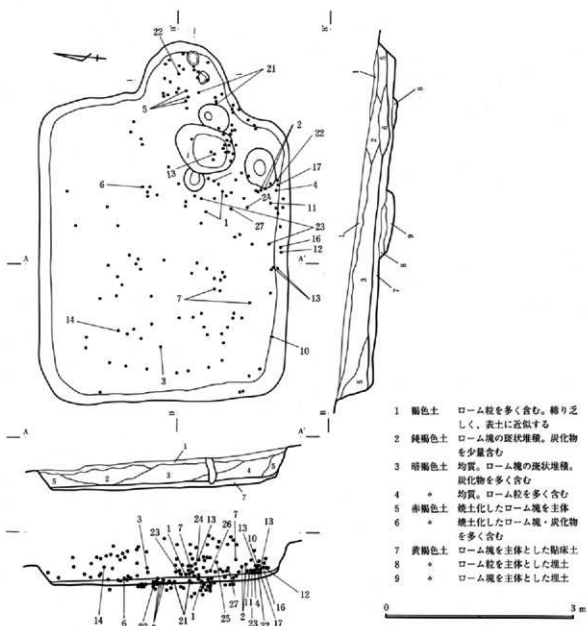
られる。

平面形は、主軸を長軸に持つ縦長長方形で、規模は約4.8×4.0mで中型の大きさといえよう。深さは約40cmを測る。

遺存状態は良好である。東側への傾斜のため、東壁・竈の遺存が懸念されたが、掘り込みもしっかりしていた。北側の20号住の重複も、本住居跡床面下の重複であり、影響は少ない。掘削も木の根等の範囲の狭い自然掘削のみである。

床面は、極僅かに東側へ傾斜するものはほぼ平坦面を築く。黄褐色ローム塊と暗褐色土塊の混合土による貼床がなされている。層厚は比較的高い。硬化

第三章 検出された遺構と遺物

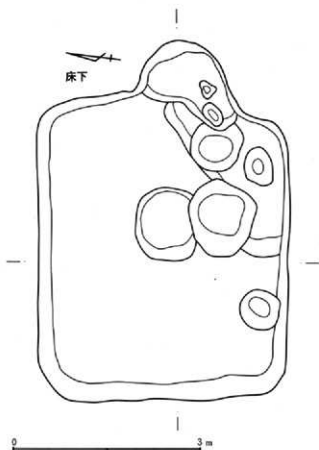
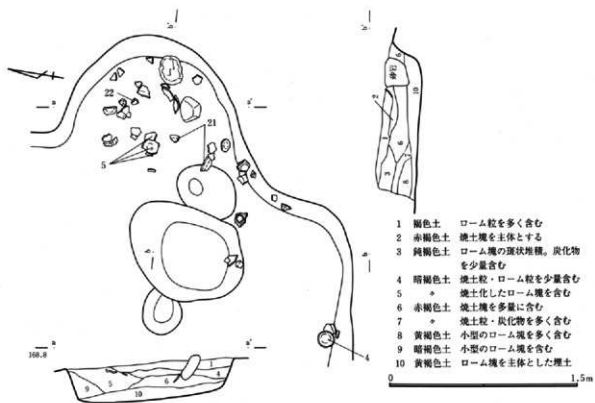


第80図 19号住居跡(1)

第70表 19号住居跡計測表

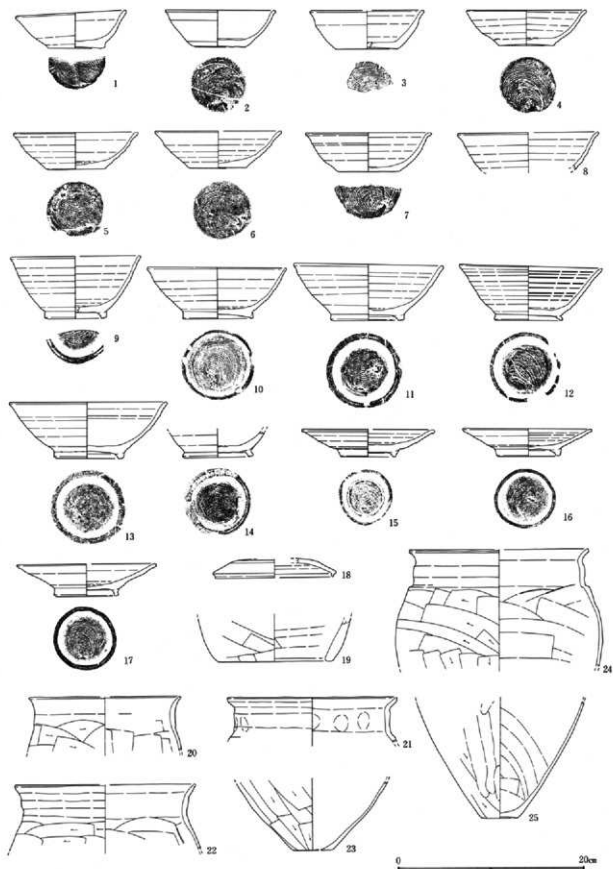
位置 (南東隅)	平面形	鬼樫(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竪方位	主な施設	主な遺物	重攷遺構
Cxy-24・25	長方形	489×400×43	N84°E	N88°E	貯蔵穴 床下土坑	埴9 埴7 埴3 埴1 甌1 炭6 土練1	20住

第5節 奈良・平安時代の住居跡

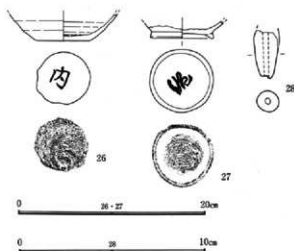


第81回 19号住居跡(2)

第三章 検出された遺構と遺物



第82図 19号住居跡出土遺物(1)



第83図 19号住居跡出土遺物(2)

面は、床面中央で顕著だった。竈周辺、北壁周辺にまで及び比較的広い範囲で確認された。南壁～西壁周辺はやや軟弱だった。

壁周溝は無く、柱穴も配置・深さ等妥当性を持つものは認められない。貯蔵穴は、東南隅に小型の楕円状の平面形を呈す小土坑を充てたい。深さ20cm程度で、褐色土を埋土としていた。

竈は東壁中央に設けられる。半円状で大型の煙道部を大きく壁外に伸ばす。燃焼部～笑口部は比較的平坦で凹みを設けない。ただ笑口部周辺に中～小型の土坑が検出されており、焼土粒・炭化物が散布していたことから、竈に伴う施設として考えられよう。袖は断面観察においても明瞭に認められなかった。住居跡東南隅の壁が竈北側の壁と段差があり、壁に袖と同等の用途が充てられたのであろう。天井材等の構築材は顕著なものは無かったが、燃焼部～煙道部奥にかけてやや大型の砂岩が出土している。燃焼部壁の補強材として位置づけた。

床下遺構は、床面中央とやや南側に中型の床下遺構を検出した。掘り込みはしっかりしており、黄褐色ローム塊を主体とした埋土であった。その他に竈～貯蔵穴周辺に浅い落込みが確認されたが、性格は不明である。竈堀形状と併せて考えるべきであろう。

遺物は多量に出土した。竈内及び周辺、床面中央

～南側にかけて集中が見られた。覆土上層より床直にまで満遍無く出土したが環・碗類は竈内、床直上、床直の出土が目立った。

20号住居跡

先に述べた19号住居跡の北壁で重複して検出された。調査区北端にあたり、C～D区住居群の北東部に位置する。19号住居跡調査時に確認され、重複層位の新旧関係では本住居跡が先行している。

平面形は、北辺と南辺長に差が見られ、台形状の不整形方を呈する。規模は約3.6×3.3で小型で、深さは、約40cmで遺存状態は比較的良好である。

床面は、東へ緩やかに傾斜し、黄褐色ロームによる地床である。硬化面は認められず、全体に軟弱な面が広がる。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴は検出されず、竈も確認できなかった。東壁中央下床面上に僅かな焼土の散布が認められ、竈として調査したが、煙道・掘り込みを持たず、竈施設の可能性は著しく低い。

床下遺構も確認されなかった。

遺物は覆土中より少量が出土し、7点を図示したが、本址に帰属し得る出土状況ではない。1・2の須恵器碗は19号住との関連が深く、19住床下層位出土の可能性が高い。

以上のように、本住居跡は住居としての施設～竈・柱穴等一が認められず、床面も硬化面が認められないことから、居住痕跡に乏しい遺構である。調査時の遺構名を優先して報告したが、住居跡とするよりも、小竈穴遺構として捉えておきたい。

第三章 検出された遺構と遺物

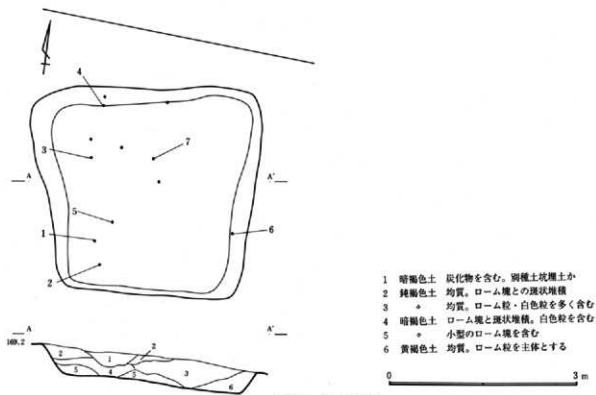
第71表 19号住居跡遺物観察表

図番号 器 種	法量 (cm) () 推定値	残 存 率 出土 状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第82図 図版 59	口：11.4 高：3.8 底：5.7	約1/2 床直	①緻密 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部中に丸みを持たせる。下半の彎曲は強く底部は突出する。右回転轆轤整形。底部回転余切り後無調整。体部下下に撫でが加わる。
第82図 図版 59	口：11.5 高：3.9 底：5.6	約3/5 床直上	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰気味 ③浅黄色 ④須臾器	口縁部玉縁状を呈す。口縁部僅かに外反し体部中に丸みを持つ。下半の彎曲は弱い。右回転轆轤整形。底部回転余切り後無調整。体部下下に撫でが加わる。
第82図 図版 59	口：(11.8) 高：(4.1) 底：(6.6)	約1/5 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部外反し体部緩やかに丸みを帯びる。底部はやや上げ底。右回転轆轤整形。底部回転余切り後無調整。体部下下に撫でが加わる。器厚厚い。
第82図 図版 59	口：12.5 高：3.8 底：5.6	完形 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部外反し体部は開き気味に丸みを帯びる。下半の彎曲はやや強い。底部は僅かに上げ底。右回転轆轤整形。底部回転余切り後無調整。体部下下に弱い撫でが加わる。
第82図 図版 59	口：13.0 高：3.9 底：5.7	約1/2 壺内	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部外反し体部は開き気味に丸みを帯びる。下半は直線状。右回転轆轤整形。底部回転余切り後無調整。体部下下に弱い撫でが加わる。外面体部中位の轆轤目強い。
第82図 図版 59	口：(13.2) 高：3.9 底：5.8	約2/5 床直上	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰気味 ③灰黄色 ④須臾器	口縁部外反し体部は開き気味に直線状に落ちる。右回転轆轤整形。底部回転余切り後無調整。器面平直。
第82図 図版 59	口：13.1 高：4.2 底：6.3	約1/2 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰気味 ③黒色 ④須臾器	口唇部玉縁状をなす。口縁部外反し体部は丸みを帯びる。右回転轆轤整形。底部回転余切り後無調整。体部に撫でが加わる。
第82図 図版 59	口：(14.8) 高：— 底：—	約1/4 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部外反し体部丸みを帯びる。右回転轆轤整形。器厚厚手。
第82図 図版 59	口：(13.5) 高：(6.6) 底：(5.7)	約1/4 覆土	①粗 片岩・白色粒 ②還元焰 ③暗灰色 ④須臾器	口縁部に歪み有り。口縁部僅かに外反し体部緩やかに丸みを帯びる。高台は直立気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転余切り後高台貼付。貼付時周縁横撫で。
第82図 図版 59	口：14.6 高：5.4 底：7.1	ほぼ完形 覆土	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部緩やかに丸みを帯びる。高台は直立気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転余切り後高台貼付。貼付時周縁横撫で。余切り時の底部突出し。高台は短く貼付される。
第82図 図版 59	口：15.5 高：5.0 底：7.0	完形 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯びる。高台はやや開き気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転余切り後高台貼付。貼付時周縁横撫で。
第82図 図版 59	口：15.0 高：5.8 底：6.3	約4/5 床直上	①細 片岩粒・石英 ②還元焰気味 ③黒褐色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部緩やかに丸みを帯びる。高台は直立気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転余切り後高台貼付。貼付時周縁横撫で。外面の轆轤目強い。
第82図 図版 59	口：16.5 高：6.0 底：6.6	ほぼ完形 床直	①細 白色粒 ②還元焰気味 ③灰白色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯びる。高台はやや開き気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転余切り後高台貼付。貼付時周縁横撫で。器面平直。
第82図 図版 59	口：— 高：— 底：(6.6)	底部 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	体部下下は彎曲し高台は開く。右回転轆轤整形。底部回転余切り後高台貼付。貼付時周縁横撫で。

第5節 奈良・平安時代の住居跡

図番号 器種	法量 (cm) () 推定値	残存率 出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第82図 皿 59	口：(13.7) 高：2.9 底：5.7	約2/5 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部上半は直線状下半は彎曲する。高台は外傾気味に付される。右回転軸線型。底部回転糸切り後高台貼付。器面磨滅。
第82図 皿 59	口：13.4 高：2.9 底：6.3	ほぼ完形 床直上	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部一帯部直線状にほぼ一体化する。高台はやや外傾気味に付される。右回転軸線型。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間破壊で。
第82図 皿 59	口：(14.4) 高：3.4 底：6.2	約2/5 床直	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部上半に僅かな丸みを帯びるが口縁一帯部はほぼ直線状に一体化する。高台はやや開き気味に付される。右回転軸線型。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間破壊で。
第82図 皿 59	口：(12.4) 高：— 底：— 柄：—	約1/5 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	小径の蓋。天井部低く平直。体部一帯部緩やかに彎曲し、かえり部は鋭く内傾する。右回転軸線型。天井部回転調整。
第82図 瓶 59	口：— 高：— 底：(12.0)	底部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	緩やかな彎曲をもって立ち上がる。体部下斜位貼り、下端は横位貼り。内面は横位貼り。
第82図 羹 59	口：(16.0) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口唇部丸みを持ち口縁部外反する。肩部の張りは弱い。口縁部横位、頸部一帯部強い横位貼り。内面は横位貼り。
第82図 羹 59	口：(17.8) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	コ字口縁型。口唇部僅かに直立し口縁部上位外傾する。下位は直立し肩部はやや張る。口唇部に細注輪が高る。口縁部横位で肩部は横位貼り。内面口縁部中位に指須痕残る。
第82図 羹 60	口：(19.0) 高：— 底：—	口縁部破片 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	コ字口縁型。口唇部丸みを持ち口縁部上位外傾する。下位はやや外傾気味に直立し、肩部はやや張る。口縁部上位と下位で強い横位。肩部は横位貼り。内面は横位貼り。
第82図 羹 60	口：— 高：— 底：(4.0)	底部破片 床直上	①細 白色粒 ②酸化焰 ③暗赤褐色 ④土師器	大きく開く体部下半。底径は小さい。外面は縦位貼りで指さる底面にまで及ぶ。内面は無で、底部に際して目が放射状に残る。底部器厚著しく薄い。
第82図 羹 60	口：(18.8) 高：— 底：—	口縁部一 帯部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	コ字口縁型。口縁部上位は強く外反し中位は内傾気味に直立する。肩部は強く張り、体部上半に膨らみを持たせる。口縁部上位と下位の横位で強く、体部は斜位・縦位の貼り、内面は横位・斜位の貼り。
第82図 羹 60	口：— 高：— 底：(3.6)	底部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍赤褐色 ④土師器	体部下半より緩やかに彎曲し小径の底部に至る。外面は縦位貼り後一帯部に無で加わる。底面も無でられる。内面は横位斜位の貼りで指される。
第83図 坏 60	口：— 高：— 底：5.6	底部 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器 墨書土器	外底面に墨書。「内」。体部下半は緩やかな丸みを帯びる。右回転軸線型。底部回転糸切り後無調整。
第83図 埴 60	口：— 高：— 底：6.2	底部 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器 墨書土器	外底面に墨書。判読不能。高台は開き気味に付される。右回転軸線型。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時間破壊で。
第83図 土埴 60	長：(2.6) 径：1.4 重：3.13g	約1/3 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰 ③鈍黄褐色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径の結錘状の形態。外面縦位貼り。

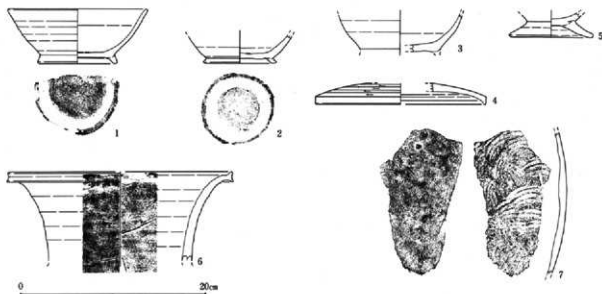
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第84図 20号住居跡

第72表 20号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Cxy-24	不整形	368×335×43	N4°W	—		竈3 付壺1 壺1 壺2	19住



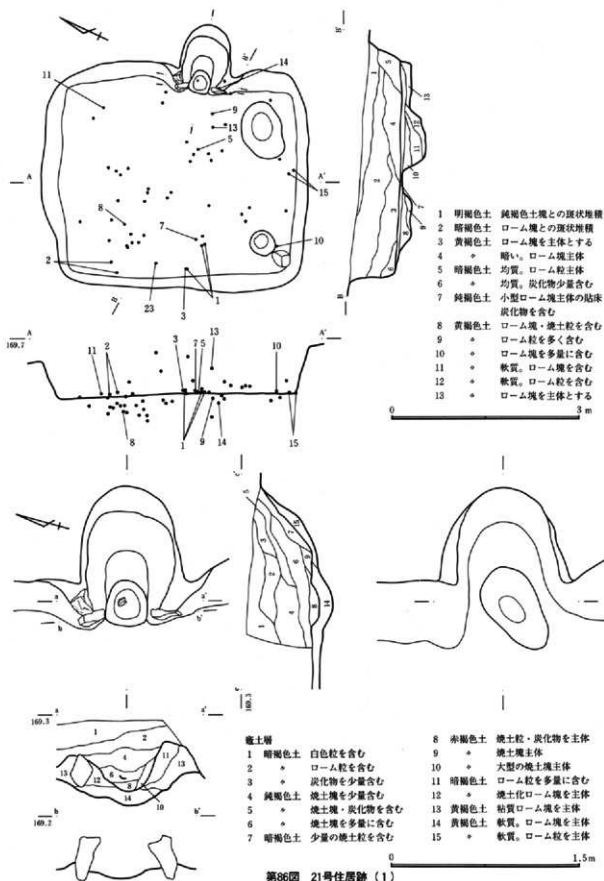
第85図 20号住居跡出土遺物

第5節 奈良・平安時代の住居跡

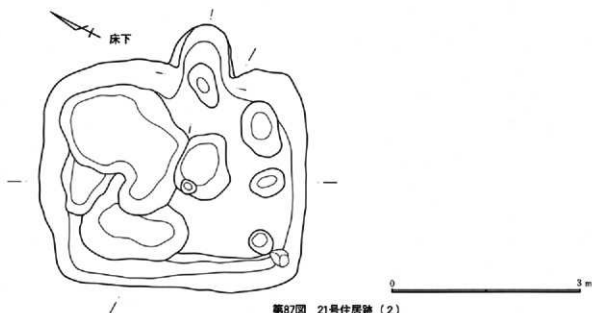
第73表 20号住居跡遺物観察表

図 器 番号 種	法量 (cm) () 推定値	残 存 率 出土 状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第85図 器 60	口： 12.6 高： 5.8 底： 8.1	約1/2 床直	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁一体部種やかな彎曲を持って一体化する。高台は開く。右回転轆轤雙形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時の撫では体部下半と底面全体に及ぶ。器面摩滅。
第85図 器 60	口： - 高： - 底： 3.8	約1/4 床直	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③浅黄色 ④須恵器	体部下半に種やかな彎曲を持たせ高台は開く。右回転轆轤雙形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時横撫で。体部下半に弱い撫でが加わる。
第85図 器 60	口： - 高： - 底： -	約1/5 覆土	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③灰オリーブ 色 ④須恵器	高台欠損。体部は緩やかに彎曲する。右回転轆轤雙形。底部回転赤切り後高台貼付。貼付時横撫で。体部下半にも弱い撫でが加わる。
第85図 器 60	口： (17.8) 高： -	約1/4 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部低く、体部一節部種やかな彎曲を呈す。かえり部屈曲は鋭く輪表に直立する。右回転轆轤雙形。天井部調整。
第85図 器 60	口： - 高： - 底： 8.8	約1/2 脚部 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	台付脚部。短く強く開く。体部外面は縦位削り。接合部～節部は横撫でを施す。内面底部・脚部とも撫で。
第85図 器 60	口： (23.6) 高： - 底： -	口縁部破片 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部やや内傾気味に直立し、口縁部は強く外反する。右回転轆轤雙形。接外面平行叩き加わる。内外面自然軸が付着する。
第85図 器 60	口： - 高： - 底： -	体部破片 床直上	①粗 砂礫・白色粒・石 英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	彎曲を持たせる体部中位破片。薄手の器厚。内面の青濁状当て目顯著に残る。外面自然軸が厚く付着する。

第三章 検出された遺構と遺物



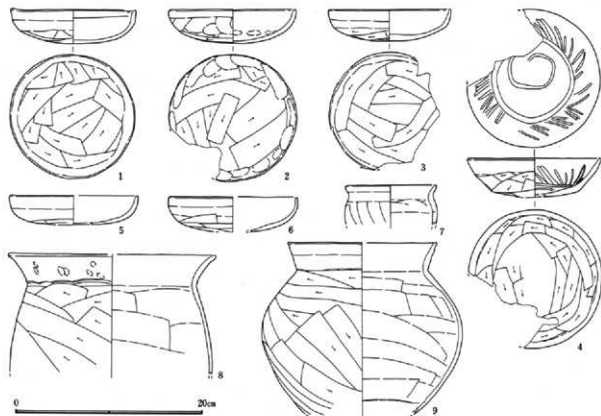
第86図 21号住居跡(1)



第87図 21号住居跡(2)

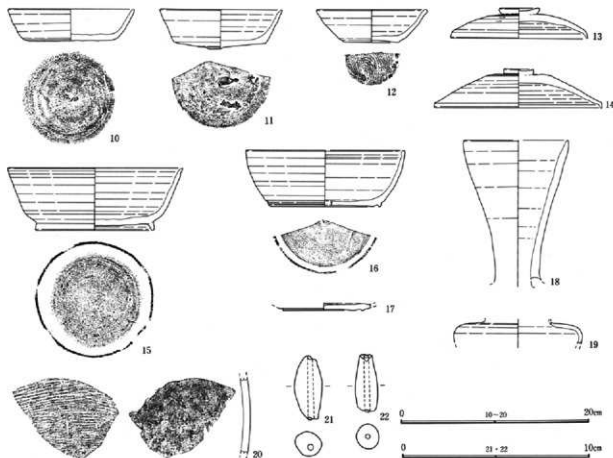
第74表 21号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	扉方位	主な施設	主な遺物	直線遺構
Dab-23・24	長方形	425×356×66	N65°E	N74°E	貯蔵穴 床下土坑	坏9 碗3 蓋2 瓶1 壺1 甕4 土師2 金属器1	



第88図 21号住居跡出土遺物(1)

第三章 検出された遺構と遺物



第89図 21号住居跡出土遺物(2)

21号住居跡

調査区中央北のD区台地鞍部に位置する。C-D区住居群の北端にあたり、緩やかな東・北斜面地形に占地する。重複する遺構はなく、単独の検出ではあるが、近接する住居跡は多く、東に19号住・20号住、南に22号住・23号・33号住、西に42号住居跡・24号住居跡が接する。近接する住居群にあって、本住居跡は主軸方位を、他の住居跡の主軸方位と異にしており、群在する住居群内で際立つ存在である。

平面形は、約4.3×3.6mの整った横長方形を呈す。深さは約70cmを測り、壁の掘り込みもしっかりしていた。非常に遺存状態の良い住居跡である。しかしながら、本住居跡調査着手時、平面形の誤認があり、土層軸の設定を著しく誤った。さらに壁確定のため住居跡周辺を数cm下げっており、実際の深さ・壁高は本報告の数値を超えるものである。調査の

反省として記す。

床面は、僅かな凹凸が見られるものの、ほぼ平坦面を築く。黄褐色ローム塊を主体とした貼床が全面になされ、全体に硬く叩き締められていた。特に中央部分一帯周辺は硬化面が顕著に認められた。

壁周溝は確認されず、柱穴も妥当なビットは見られない。南西隅で検出された小ビットは、ビット外に自然石が接しており、柱穴よりも出入口部の施設として捉えたい。

貯蔵穴は、東南隅壁際より若干離れて検出された不整形の土坑を充てる。深さ約36cm程で掘り込みもしっかりしていた。堀土は暗褐色土である。

竈は東壁中央僅かに南寄りに設けられる。楕円状の煙道部を壁外に突出し、燃焼部と焚口部の境界に円形の凹みを持つ。この凹みを挟み、自然石を配した袖が付される。袖は鈍褐色土塊・黄褐色ローム塊

第75表 21号住居跡遺物観察表

図 番 号	法 量 (cm)	残 存 率	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第88回 1 坏 図版 60	口：13.1 高：3.6	完形 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部直立し体部扁平で丸みを帯びる。底部丸底。口縁部横撫で、体部は弱い撫で型肌状の裏も見られる。底部は寛削り。内面撫では口縁～体部に顕著で底面は弱い
第88回 2 坏 図版 60	口：11.3 高：3.6	ほぼ完形 床直上	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰 ③明褐色 ④土師器	口縁部は短く体部は扁平。口縁～体部内彎気味に一体化する。底部は丸底。口縁部横撫で、体部弱い撫で、底部寛削りを施す。体部の撫では指撫でか。内面口縁～体部横撫で。見込み部に指痕が看取される。
第88回 3 坏 図版 60	口：(12.8) 高：3.3	約1/2 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部は短く体部は著しく扁平。口縁～体部内彎気味に一体化する。底部は丸底。口縁部横撫で、体部弱い撫で、底部寛削りを施す。内面口縁～体部横撫で。
第88回 4 坏 図版 60	口：14.4 高：4.1 底：9.0	約3/4 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	暗紋土師器。口縁部強く外傾し体部境に僅かな屈曲を設け体部直線状に外反する。底部は突出する。口縁部横撫で、体部横位寛削り、底部寛削り。内面の暗紋は体部斜位放射状に底部は螺旋状に施される。
第88回 5 坏 図版 60	口：(13.4) 高：(3.1)	約1/4 床直	①細 砂礫・白色粒 ②酸化焰 ③黄褐色 ④土師器	口縁～体部上半内彎する。体部下半の彎曲は著しい。体部扁平で底部は平底気味。口縁部横撫で、体部弱い撫で、底部は寛削り。内面口縁～体部横撫で。
第88回 6 坏 図版 60	口：(13.4) 高：—	約1/4 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部短く扁平な体部と内彎をもって一体化する。底部は丸底。口縁部横撫で、体部弱い撫で、底面は寛削り。内面横撫で
第88回 7 要 部 図版 60	口：(9.4) 高：— 底：—	約1/4 口縁部 床直上	①細 片岩粒・石英 ②酸化焰 ③赤褐色 ④土師器	口縁部僅かに内彎し頸部強く外反する。肩部の張り弱い。口縁部横撫で頸部～体部縦位寛削り後頸部のみ撫でを加える。体部内面横位寛削り、小型品ながら器厚はやや厚手。
第88回 8 要 部 図版 60	口：(22.0) 高：— 底：—	口縁部～ 体部破片 床下	①細 黒色粒・白色粒・ 石英 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口唇部丸みを持ち、口縁部は強く外反する。頸部はく字状に屈曲する。肩部の張りは弱く体部上半～中位に膨らみを持たせる。口縁部横撫で、肩部横位・体部上半斜位寛削り。体部内面は横位を主とした寛撫で。
第88回 9 要 部 図版 60	口：15.8 高：— 底：—	約1/4 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口唇部僅かに外反し、口縁部は長く外傾する。頸部はく字状に屈曲する。肩部の張りは弱く体部中位に大きく膨らみをつける。口縁部横撫で、体部上半は横位、下半は斜位寛削りを施す。体部内面は横位寛撫で。
第89回 10 坏 図版 61	口：13.4 高：3.4 底：9.5	約5/6 床直	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部直線状に一体化する。底径広く安定感のある器形。右回転軸彎整形。底部回転調整後換撫でを加える。
第89回 11 坏 図版 61	口：(12.8) 高：4.2 底：9.7	約1/2 床直	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁～体部直線状に一体化する。底部僅かに突出する。口縁部内面は外反し口唇部鋭い。右回転軸彎整形。底部回転調整後換撫でを加える。
第89回 12 坏 図版 61	口：(11.6) 高：3.5 底：5.8	約1/5 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口唇部僅かに内彎し、口縁～体部縦やかな内彎をもって一体化する。底部は僅かに上げ底。右回転軸彎整形。底部回転糸切り後換調整。器厚はやや厚手。
第89回 13 要 部 図版 61	口：14.4 高：3.3 柄：4.2	約4/5 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③鈍黄色 ④須恵器	円環状換貼付。柄中央を凹む。天井部やや低く、体部～頸部縦やかな彎曲を持つ。かえり部屈曲は弱いが頸部は鋭い。右回転軸彎整形。天井部回転調整後換貼付。
第89回 14 要 部 図版 61	口：17.8 高：4.1 柄：3.0	ほぼ完形 壺内	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	小型の円環状換貼付。柄中央僅かに凹む。天井部高く平坦面を築く。体部～頸部直線状に一体化する。かえり部は短く鋭い。右回転軸彎整形。天井部回転調整後換貼付。内面の磨痕著しく、外面にも及ぶ。

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) () 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第89図 陶版	15 口: 18.6 高: 6.5 61 底: 12.4	ほぼ定形 床直	①胎土 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大型品。底径広く安定感ある器形。口縁一部部上半直線状に一体化し下半で彎曲する。高台は聞き気味に付される。右回転轆轤整形後底部回転調整後高台貼付。外面に自然釉が付着する。
第89図 陶版	16 口: (16.7) 高: (6.0) 61 底: (11.6)	約1/4 覆土	①胎土 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一部部緩やかな内彎をもって一体化する。高台は短く腰部に設けられ、底径広く安定感ある器形。口縁部内面及び高台内外縁に凹線が高る。右回転轆轤整形。底部回転調整時に高台側出。内底面研磨され滑沢。
第89図 陶版	17 口: - 高: - 61 底: (8.5)	底部破片 覆土	①胎土 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	底部破片。極小の高台が腰部に設けられる。右回転轆轤整形。底部回転調整時に高台側出。内底面滑沢。
第89図 陶版	18 口: 10.8 高: - 61 底: -	口縁部一 部 覆土	①胎土 白色粒・石英 ②やや酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口唇部は実る。口縁部僅かに内彎し緩やかに頸部と一体化する。腰面部形状は不明。右回転轆轤整形。
第89図 陶版	19 口: - 高: - 61 底: -	頸部一 部破片 覆土	①胎土 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	頸部著しく張る。右回転轆轤整形。頸部厚は著しく薄くあるいは短頸蓋の可能性もある。
第89図 陶版	20 口: - 高: - 61 底: -	腰部破片 覆土	①胎土 白色粒 ②還元焰 ③灰オリーブ 色 ④須恵器	外面平行叩きめ。内面無で、円環状当て目僅かに残る
第89図 陶版	21 長: 3.4 土径: 1.5 61 重: 5.15g	ほぼ定形 覆土	①胎土 白色粒・石英 ②還元焰 ③黄褐色 ④土製品	2個体とも、棒状の芯材に粘土を巻き巻上上の成形。中位が膨らみ両端が小径の紡錘状の形態。外面縦位無で。
第89図 陶版	22 長: (3.1) 土径: 1.2 61 重: 4.89g	約2/3 覆土	①胎土 片岩粒・白色粒 ②還元焰気味 ③褐色 ④土製品	2個体とも、棒状の芯材に粘土を巻き巻上上の成形。中位が膨らみ両端が小径の紡錘状の形態。外面縦位無で。

の混合土で構成されている。軸石は立位でしっかりと内傾しており、北軸上位にはさらに自然石が組まれていた。天井は残存していなかったが、礫土層の6～10層が崩落土として捉えられた。土器・石等による補強材は見られなかった。

床下遺構は、中央にやや小型の土坑、中央～北側へ不整形の連続する大型土坑が検出された。床下土坑として捉えたが、中央と北側の土坑は性格の差が想起されよう。また、西壁際には壁周溝状の段差が認められ、北側の不整形土坑とともに住居構築時の掘削痕跡と考えた。

遺物は、良好な遺存状態の割には、22個体と少ない図示だが、調査時の所見では、覆土中よりも多くの破片が出土していた。しかし、細片のため出土レベルを記録しておらず、断面図示には反映されていない。

ない。ただ、復元され得た個体は覆土下位～床直のものが主体であり、本住居跡に帰属し得る遺物も、この層位の遺物として認知できよう。

22号住居跡

調査区中央北のC～D区台地鞍部に位置する。C～D区住居群の北側にあたり、緩やかな東・北斜面地形に占地する。南西隅に23号住居跡が重複し、東側には19号住・20号住、北側には21号住、西側にはやや距離をおいて42号住が近接する。また南側には36号土坑が重なり、東側にかけて52～54号土坑・63号土坑が見られる。

平面形は、北壁～西壁が整っておらず、そのため約5.0×4.5mの不整形を呈す。規模としては大型の類といえよう。深さは、約30cm程度で、北側と東側が斜面地形のため、やや浅く検出された。

壁周溝・柱穴は確認されなかった。床下調査において数基の小ピットが検出されたが、いずれも床下を切込み面としており、規模・配置からも柱穴としては認定できなかった。

貯蔵穴は、東南隅の小土坑を充てる。小型の不整形を平面形とし、深さは約20cmと浅かった。暗褐色土を主体とした埋土である。尚、床下調査で得られた、北東隅の楕円状土坑も可能性は指摘されよう。

竈は、東壁ほぼ中央に設けられる。煙道部を壁外に突出し、燃焼部は緩やかに凹む。また、焚口部にかけても土坑が設けられるが、使用面下の施設と思われる。袖は、明瞭には検出できなかったが、土層8・9が相当し、竈南側壁には自然石が立位で出土しており、自然石及び上位の須恵器甕底部破片は袖基部の補強材として捉えられる。補強材はこの他にも、燃焼部で出土した須恵器甕口縁部破片や須恵器甕破片が使用されていたものと考えられる。支脚は、出土していないが、土層観察において、燃焼部～焚口部にかけて抜取り痕が看取された。第90図に破線でその範囲を示した。

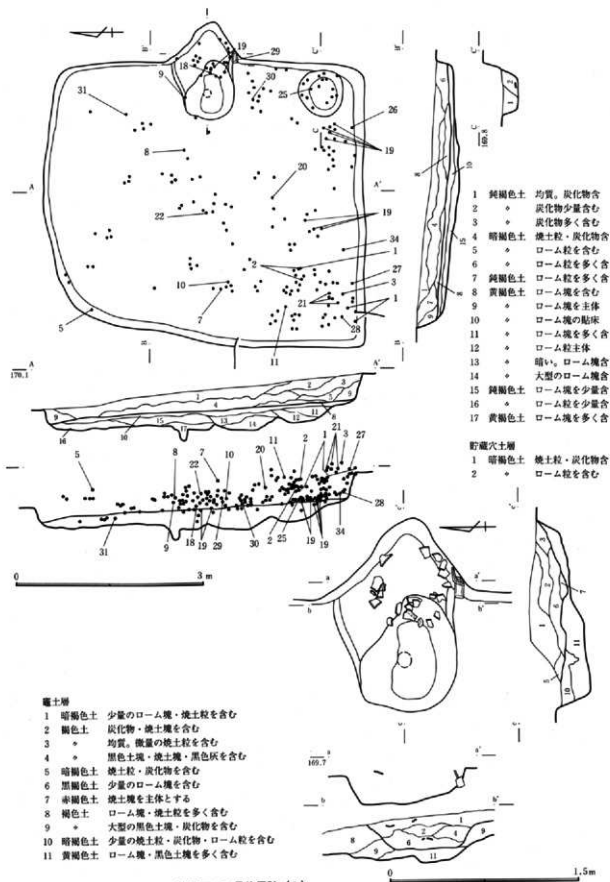
竈補強材の散乱・支脚抜取り痕から本住居跡の竈は廃棄時の破壊行為が伴ったと判断できよう。

床下遺構は、中央やや南寄りに不整形の床下土坑を数基重複状態で検出した。新旧が認められるものの、居住時間内での新旧と思われる。埋土は黄褐色ローム塊を主体としていた。また、貯蔵穴周辺に

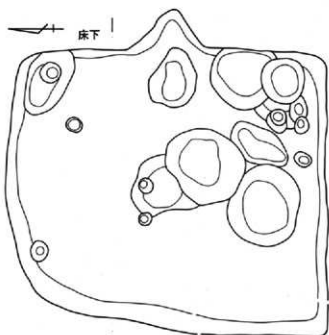
も土坑が検出された。貯蔵穴の再設置であろうか、北東隅の土坑と共に検討を要する。

遺物は、遺存度の割には多く出土している。覆土上層より床面に至るまで土器類をはじめ、硯・土錘・砥石の出土が見られた。特に、竈内及び周辺と中央～南側にかけて集中していた。

覆土上層ながら、本住居跡からは、完形の須恵器風字硯が出土している。南壁際出土でおそらく廃棄されたものと考えられるが、完形であることなど問題は残る。



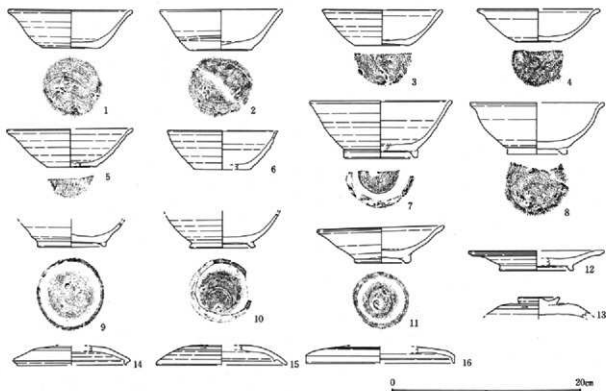
第90図 22号住居跡(1)



第91図 22号住居跡(2)

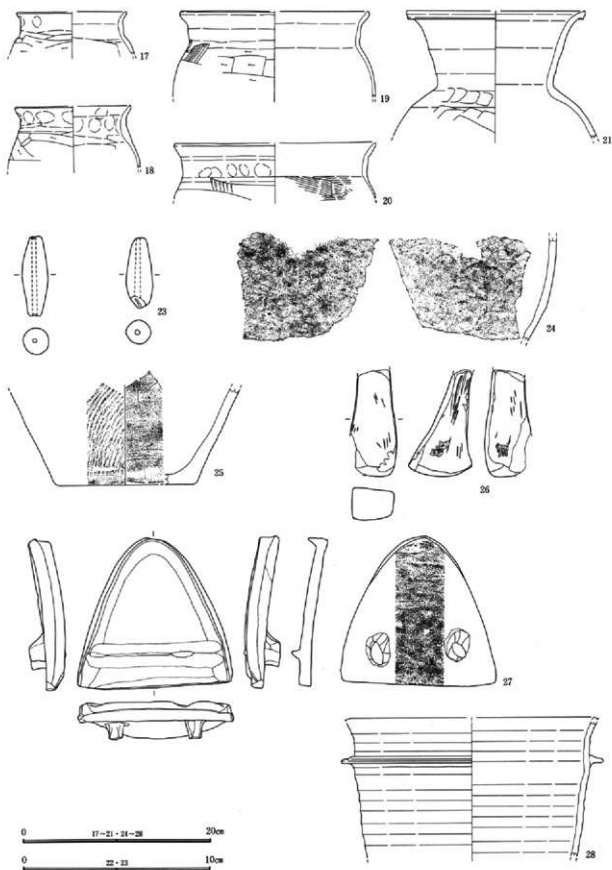
第76表 22号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
CyDa-24・25	不整形	509×450×30	N90°E	N89°E	貯蔵穴	坏6 埴5 皿1 蓋4 風字瓦1 斐7 羽釜1 砥石1 土埴2 瓦 3 金属器2	23住 56坑



第92図 22号住居跡出土遺物(1)

第三章 検出された遺構と遺物



第93図 22号住居跡出土遺物(2)

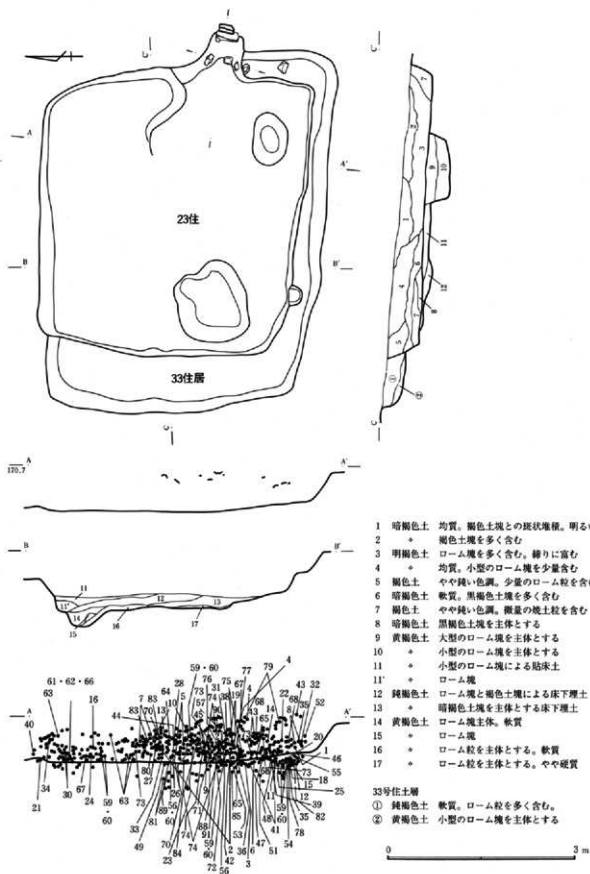
第5節 奈良・平安時代の住居跡

第77表 22号住居跡遺物観察表

図 番 号 種	法 量 () 推 定 値	残 存 率 出 土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第92図 1 環 版 61	口：12.9 高：4.1 底：6.0	完形 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄棕色 ④須臾器	口縁部外反し体部緩やかに丸みを帯びる。底部は僅かに上げ底。右回転軸離整形。底部回転糸切り後無調整。体部に強い撫でが加わる。
第92図 2 環 版 61	口：13.0 高：4.4 底：6.3	約3/5 覆土	①粗 片岩・ ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部外反し体部下手に緩やかな丸みを持つ。内面見込み部不明瞭。右回転軸離整形。底部回転糸切り後無調整。体部中位に凹線が高る。
第92図 3 環 版 61	口：(12.6) 高：3.8 底：5.9	約1/4 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁～体部僅かな彎曲をもって一体化する。右回転軸離整形。底部回転糸切り後無調整。
第92図 4 環 版 61	口：(12.6) 高：3.5 底：5.0	約1/4 覆土	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部強く外反し体部丸みを帯びる。器高は若干低く開き気味の器形。底部はやや上げ底。右回転軸離整形。底部回転糸切り後無調整。
第92図 5 環 版 61	口：(13.2) 高：(4.0) 底：(5.2)	約1/4 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部強く外反し体部僅かな丸みを帯びる。やや開き気味の器形。右回転軸離整形。底部回転糸切り後無調整。
第92図 6 環 版 61	口：(11.6) 高：(4.1) 底：(6.0)	約1/4 覆土	①粗 片岩・石英 ②酸化焰気味 ③鈍棕色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部上半に丸みを帯びる。口唇部器厚は著しく薄い。右回転軸離整形。底部回転糸切り後無調整。
第92図 7 環 版 61	口：(15.0) 高：(6.1) 底：(7.4)	約1/4 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部中位に丸みを帯びる。高台は短く直立する。右回転軸離整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第92図 8 環 版 61	口：(14.0) 高：— 底：—	約2/5 覆土	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須臾器	高台剥落。口縁部は強く外反し体部中位に丸みを帯びる。右回転軸離整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時の撫では外表面にまで及ぶ。
第92図 9 環 版 61	口：— 高：(2.1) 底：7.1	約1/3 床直上	①粗 片岩・白色粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須臾器	体部下手に強い彎曲を持たせ直立気味の高台を付す。右回転軸離整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時の撫では外面にまで及ぶ。
第92図 10 環 版 61	口：— 高：— 底：6.5	約1/4 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	体部に緩やかな丸みを持たせ高台は短く開き気味に付される。右回転軸離整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第92図 11 環 版 61	口：13.2 高：3.8 底：5.4	ほぼ完形 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部肥厚し緩やかに外反する。体部中位に丸みを持たせ高台は短くやや開き気味に付される。右回転軸離整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第92図 12 環 版 61	口：(14.2) 高：(2.1) 底：(7.7)	約1/3 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須臾器	口縁部強く外反し扁平な体部と一体化する。下半に丸みを持たせ高台は短く。内面の見込み部も不明瞭で内面形態も一体化する。右回転軸離整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第92図 13 環 版 61	口：— 高：— 底：(4.2)	約1/5 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍黄棕色 ④須臾器	やや大型の円環状高台貼付。天井部は平坦面を築き体部は緩やかに彎曲する。やや厚手の器厚を呈す。右回転軸離整形。天井部回転調整後高台貼付。
第92図 14 環 版 61	口：(11.6) 高：—	約1/5 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	体部緩やかな彎曲を呈しかうり部屈曲は内傾し端部は鋭く突出する。右回転軸離整形。外面に自然粘付着する。

第三章 検出された遺構と遺物

図 番 号 器 種	法 量 () 推 定 値	残 存 率 出 土 状 態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第92図 15 蓋 高： - 図版 61	口：(14.0) 高： -	約1/5 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部一帯部横やかな彎曲で一体化する。かえり部は内面に設けられ、端部は鋭い。右回転轆轤形。天井部回転調整。
第92図 16 蓋 高： - 図版 61	口：(15.8) 高： -	約1/8 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	天井部低く扁平な印象を得る。胴部下位は九みを帯びるが、かえり部は外反気味に直立する。右回転轆轤形。天井部回転調整。
第93図 17 蓋 高： - 底： - 図版 62	口：(11.6) 高： - 底： -	口縁部破片 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	コ字口縁裏。口縁部上半外傾下半は直立する。肩部の張り弱い。口縁部横撫では下端で強く凹縁状となる。肩部は横位差削り。内面は横位差撫でを施す。
第93図 18 蓋 高： - 底： - 図版 62	口：(12.0) 高： - 底： -	口縁部破片 壺内	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	コ字口縁裏。口縁部上半は外傾し下半は横やかに彎曲する。コ字形態は内面に顕著。肩部の張り弱い。口縁部横撫で、上半に指痕残る。肩部横位・斜位差削り。内面口縁部下半指痕強。肩部横撫で。
第93図 19 蓋 高： - 底： - 図版 62	口：19.8 高： - 底： -	口縁部 壺内	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④土師器	コ字口縁裏。口縁部上半は外傾し下半は直立する。コ字形態は内面に顕著。肩部は張り体部上半に膨らみを設ける。口縁部横撫で中位と下端で強く凹縁状となる。体部上半は横位・斜位差削り。内面は横位差撫で。
第93図 20 蓋 高： - 底： - 図版 62	口：(21.3) 高： - 底： -	約1/4 口縁部 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③明褐色 ④土師器	コ字口縁裏。口縁部上半強く外傾し下半は直立する。肩部は張る。口縁部横撫で上半で強く凹縁状となる。肩部は横位差削り一部にノッキングが見られる。内面頸部屈曲顕著で肩部は斜位差撫で。
第93図 21 蓋 高： - 底： - 図版 62	口：(19.0) 高： - 底： -	口縁部一 肩部約1/3 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰気味 ③淡黄色 ④須恵器	口唇部最先端で、口縁部僅かに外傾。頸部は緩やかに外傾し、下端でく字状に屈曲する。肩部は強く張る。口縁部右回転轆轤形。肩部外面は横位差撫で。内面は横撫で。内外器面摩滅する。
第93図 22 土 師 蓋 高： 4.2 径： 1.4 重： 6.75g 図版 62	長： 4.2 土 師 蓋 高： 1.4 径： 1.4 重： 6.75g	定形 覆土	①細 片岩粒・石英 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径の整った紡錘状の形態。外面縦位差撫で。
第93図 23 土 師 蓋 高： 3.8 径： 1.4 重： 6.18g 図版 62	長： 3.8 土 師 蓋 高： 1.4 径： 1.4 重： 6.18g	一部欠損 覆土	①細 片岩粒・石英 ②還元焰 ③褐色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径の整った紡錘状の形態。外面縦位差撫で。
第93図 24 蓋 高： - 底： - 図版 62	口： - 高： - 底： -	体部破片 覆土	①細 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	外面入念な撫で、一部に差撫でが看取される。内面横位差撫でが弱く加わり、円環状当て目が残る。
第93図 25 蓋 高： - 底： (15.0) 図版 62	口： - 高： - 底： (15.0)	底部破片 覆土	①細 石英・白色粒 ②還元焰 ③灰黄褐色 ④須恵器	平底で体部つよく開く安定した器形。外面平行叩き目強く残る。内面横位差撫で。
第93図 26 底石 高： 11.3 幅： 5.0 厚： 6.8 図版 62	長： 11.3 底石 高： 5.0 幅： 5.0 厚： 6.8	一部欠損 覆土	①凝灰石 ④299.4g	西面に磨痕・擦痕が看取される。特に西正面上端部の溝状磨痕は材料物の特定が窺われよう。
第93図 27 風字 編 高： 15.9 幅： 16.5 厚： 4.0 図版 62	長： 15.9 風字編 高： 16.5 幅： 16.5 厚： 4.0	定形 覆土	①細 白色粒 ②還元焰気味 ③明黄褐色 ④須恵器	定形の産品である。視度に向かって両側縁が大きく開く風字型。裏面後方に足跡を2箇所付前方部へ傾斜させる。表面後方に足を流し更に筆書き状の凹みを設ける。周縁及び裏面は面取り状に調整されている。表面海部は滑沢面を持ち墨痕が付着する。
第93図 28 蓋 高： - 底： - 図版 64	口： - 高： - 底： -	体部破片 覆土	①細 片岩・白色粒 ②還元焰気味 ③褐色 ④須恵器	口縁部緩やかに外反し頸は水平に貼付される。体部は直線状に一体化する。右回転轆轤形。磨付時に周縁撫で。内外面の轆轤目強い。



- 1 暗褐色土 均質。褐色土塊との塊状堆積。明るい褐色土塊を多く含む
- 2 *
- 3 明褐色土 ローム塊を多く含む。練りに富む
- 4 *
- 5 褐色土 やや鈍い色調。少量のローム粒を含む
- 6 暗褐色土 軟質。黒褐色土塊を多く含む
- 7 褐色土 やや鈍い色調。微量の焼土粒を含む
- 8 暗褐色土 黒褐色土塊を主体とする
- 9 黄褐色土 大型のローム塊を主体とする
- 10 *
- 11 小型のローム塊を主体とする
- 11' *
- 12 純褐色土 ローム塊と褐色土塊による床下埋土
- 13 *
- 14 暗褐色土塊を主体とする床下埋土
- 15 黄褐色土 ローム塊主体。軟質
- 15 *
- 16 *
- 17 *

- 33号住居
- ① 純褐色土 軟質。ローム粒を多く含む。
 - ② 黄褐色土 小型のローム塊を主体とする

0 3 m

第94図 23・33号住居跡 (1)

第III章 検出された遺構と遺物

第78表 23号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dab-25・26	不整形正方形	458×427×37	N93°E	N97°E	貯蔵穴 床下土坑	坏13 埴26 皿14 蓋1 瓶2 罌22 砥石1 土鍬4 瓦4	22・33住

第79表 33号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(m) 長軸×短軸×深さ	住居方位	方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Da-c-25・26	不整形長方形	552×406×30	N93°E	—		坏1 埴1 蓋1	23住

23号住居跡

調査区中央北のC-D区台地鞍部に位置する。C-D区住居群の北側にあたり、緩やかな東-北斜面地形に占地する。西壁-南壁にかけて33号住居跡が、前述の22号住が北東部に重複する。調査着手時は、33号住を本住居跡と同一と考え、同時に調査を行った。両住居跡は、土層断面観察、床面の観察によって分別されたが、33号住の全容は判然とせず、本報告では、本住居跡と同項で扱った。ただし、両住居跡は、時期差も認められ、密接な関係は無い。

(23号住)

23号住の平面形は、約4.5×4.2m 主軸に長軸を持たせる不整形正方形を呈す。深さは、約40cmを測り、遺存状態は良好といえよう。

床面は、僅かな凹凸を持ち、緩やかに東-北側へ傾斜する。黄褐色ローム塊を主体とした貼床がなされるが、床面東側ではやや薄い層厚だった。

壁周溝は確認されなかった。

柱穴は床面上では検出されなかったが、床下調査において、南壁際において対になる2基の小ピットを柱穴として捉えた。また北東隅-西壁際にも小ピットが見られ、柱穴あるいは補助柱穴の可能性がある。

貯蔵穴として、東南隅にやや距離を置いて小型の不整形円状の土坑を検出した。深さ約18cmと浅く、掘り込みも緩やかだが、貯蔵穴としての配置に蓋然性がある。

その他に、南西隅に不整形の土坑を検出したが、本住居跡の帰属も不明であり、重複土坑の可能性もある。

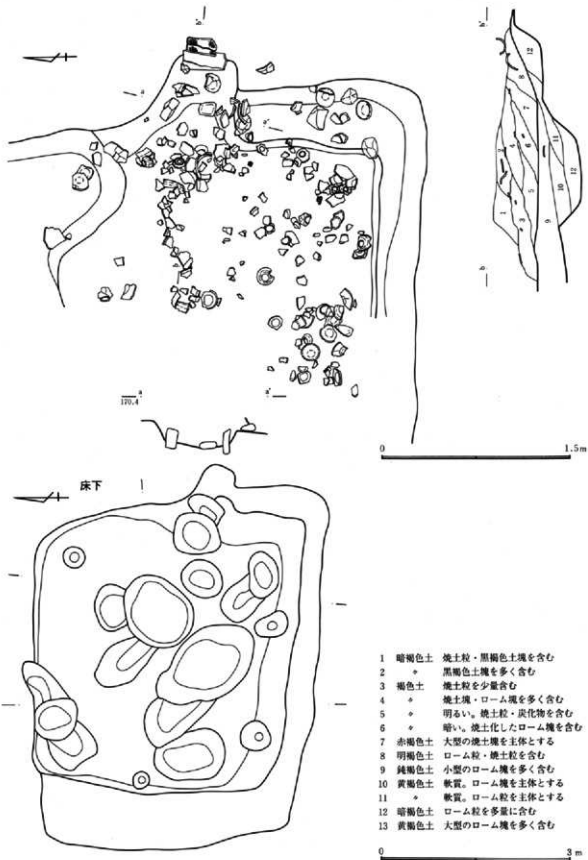
竈は、東壁中央南寄りに設けられている。馬蹄状の煙道部を突出し、端部に軒丸瓦を置く。軒丸瓦は、煙道主軸と直交しており、煙道を塞ぐ位置にある。おそらく、軒丸瓦原位置は、煙道端部において主軸に沿う位置にあり、2枚の軒丸瓦を組み合わせた煙り出しと考えられよう。後世の耕作あるいは竈廃棄に伴う煙道端部瓦の移動を想起したい。

竈燃焼部-笑口部は緩やかに凹むものの、ほぼ平坦に近い。焼土粒・黒色灰の堆積が認められた。燃焼部-煙道部は弱い立ち上がりを示す。

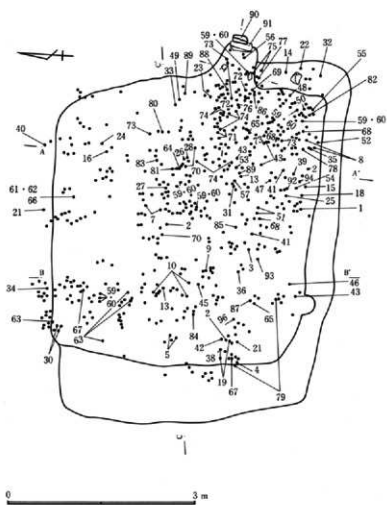
袖の突出は見られないが、両側の竈壁に自然石を立位に配す(a-a')。袖基部の芯材と思われる。構築材・補強材は、明瞭に残存していなかったが、袖芯材周辺や燃焼部に自然石や須恵器破片が散乱していた。前述の軒丸瓦とともに竈構築材の一部と思われる。

床下遺構は、床面中央に不整形の床下土坑の群を確認した。鈍褐色土塊・黄褐色ローム塊を主体とした埋土である。また、竈使用面したの土坑も検出された。焼土塊が埋土として確認されたことから、数回の竈構築も念頭におきたい。

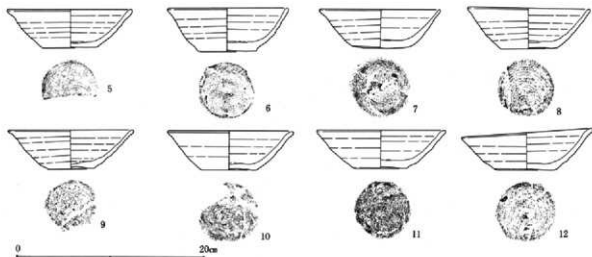
遺物は多量に出土している。特に竈周辺に濃密な分布を見せるが、覆土上層より床直に至るまで住居跡全域より出土している。また、33号住東壁付近に



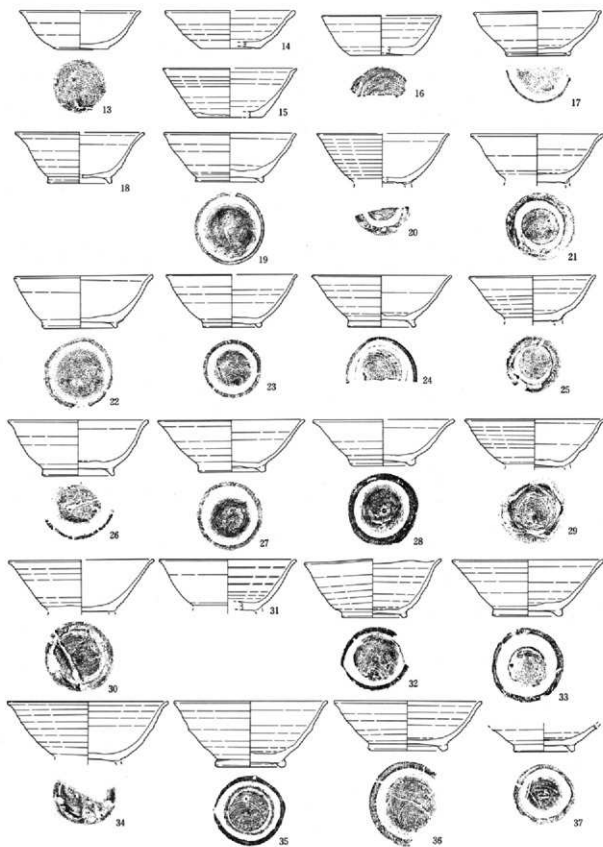
第95図 23・33号住居跡(2)



第96図 23・33号住居跡 (3)

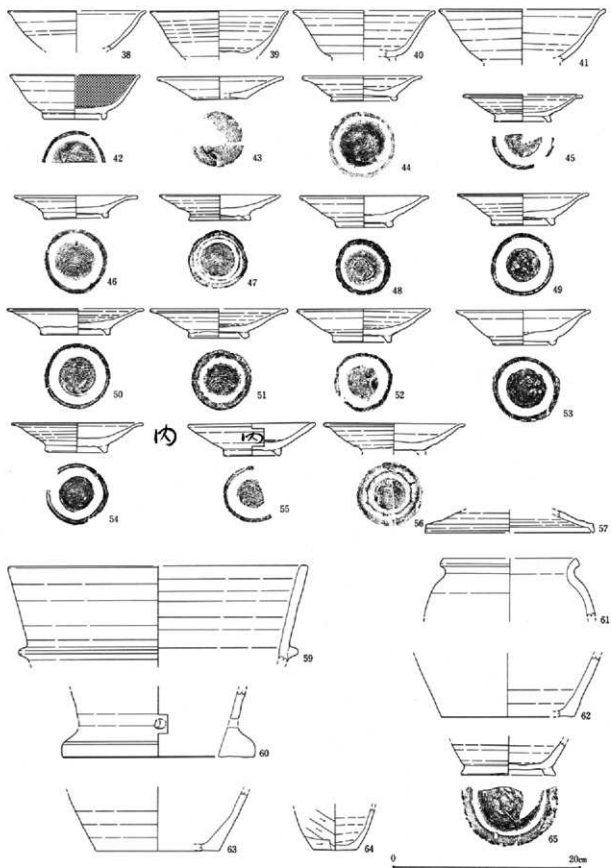


第97図 23号住居跡出土遺物 (1)



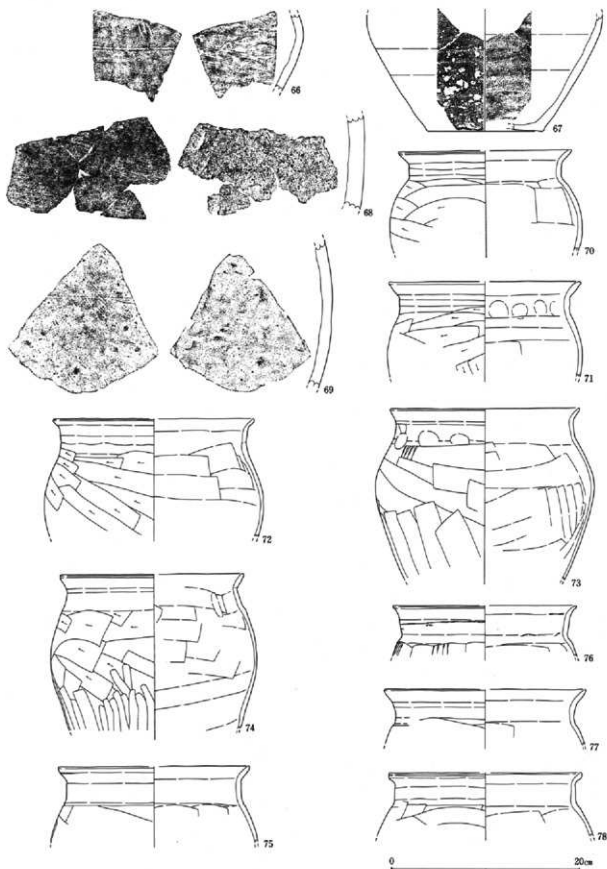
第98図 23号住居跡出土遺物(2)

第三章 検出された遺構と遺物



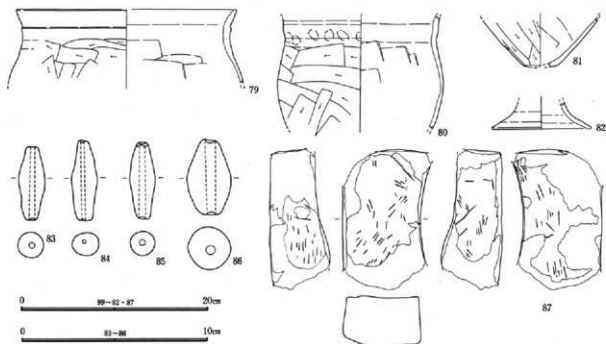
第99図 23号住居跡出土遺物(3)

第5節 奈良・平安時代の住居跡

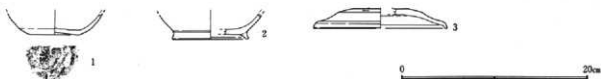


第100図 23号住居跡出土遺物(4)

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物



第101図 23号住居跡出土遺物(5)



第102図 33号住居跡出土遺物

も本住居跡に帰属し得る遺物が見られた。遺物の組成は、須恵器坏・碗・皿類が多く、57個体を図示した。土師器坏類は見られないが、甕13個体が図示し得た。また土錘・砥石も出土している。

(33号住)

23号住に重複して検出された。前述のように、調査当初は1軒の住居跡として調査された。主軸・東壁方向がほぼ一致し、遺物の散布も広範囲に及んだ為である。分別した要素としては、土層による重複、床面の段差、北壁に見られる僅かながらの差である。

平面規模は、残存部で約5.5×4.0mの不整形長方形を呈す。深さは約30cmを測る。

床面・壁周溝・柱穴・貯蔵穴の様相は判然としな。遺物は、3点を図示したが本住居跡への帰属ではなく、23号住の流入の可能性がある。

第5節 奈良・平安時代の住居跡

第80表 23号住居跡遺物観察表

図 番 号 種	法量 (cm) () 量定値	残 存 率 出 土 状 態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第97図 図版 62	1 口： 12.9 坏 高： 3.6 底： 5.5	約4/5 床直上	①粗 砂礫・片岩 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部閉き気味で緩やかに丸みを帯びる。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部下半に弱い撫でが加わる。口器部内面に油煙が付着する。
第97図 図版 62	2 口： (12.3) 坏 高： 3.4 底： 5.4	約3/5 覆土	①粗 砂礫 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部閉き気味で緩やかに丸みを帯びる。底部僅かに上げ底。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部下半に弱い撫でが加わる。
第97図 図版 62	3 口： 12.5 坏 高： 3.8 底： 5.6	約3/5 床直	①粗 片岩・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部閉き気味で緩やかに丸みを帯びる。左回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部下半に弱い撫でが加わる。
第97図 図版 62	4 口： 13.0 坏 高： 3.8 底： 5.7	完形 覆土	①粗 片岩・石英 ②酸化焰気味 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部閉き気味で緩やかに丸みを帯びる。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部下半に弱い撫でが加わる。
第97図 図版 62	5 口： 13.1 坏 高： 4.1 底： 5.8	約3/5 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口器部肥厚し口縁部僅かに外反する。体部はやや閉き気味で緩やかに丸みを帯びる。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部下半に弱い撫でが加わる。
第97図 図版 62	6 口： 12.6 坏 高： 4.6 底： 4.3	約7/8 床直	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁一部歪む。口器部肥厚し口縁部僅かに外反する。体部下半に緩やかな丸みを持ち底部僅かに突出する。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部下半に弱い撫でが加わる。
第97図 図版 62	7 口： 12.7 坏 高： 4.1 底： 6.1	約4/5 覆土	①粗 砂礫・片岩 ②酸化焰気味 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかな丸みを帯びる。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後撫でが加わるか。器面は摩滅する。体部下半に弱い撫でが加わる。
第97図 図版 62	8 口： 12.8 坏 高： 4.8 底： 5.9	約7/8 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁一部緩やかな丸みを持って一体化する。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部に弱い撫でが加わる。内外器面摩滅。
第97図 図版 62	9 口： 13.1 坏 高： 4.1 底： 4.8	約4/5 覆土	①粗 片岩・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	口縁部僅かに外反するが体部とはほぼ一体化する。底部上げ底。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器面摩滅。
第97図 図版 62	10 口： 13.2 坏 高： 4.2 底： 5.9	約3/4 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかな丸みを帯びる。底部僅かに上げ底。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部下半に弱い撫でが加わる。
第97図 図版 62	11 口： (13.5) 坏 高： 4.1 底： 5.6	約1/2 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯びる。底部は僅かに上げ底。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。体部下半に弱い撫でが加わる。
第97図 図版 62	12 口： 13.6 坏 高： 4.1 底： 6.0	ほぼ完形 床直	①粗 片岩・白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反するが体部とはほぼ一体化する。底部は僅かに上げ底。左回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。内外器面摩滅。
第98図 図版 63	13 口： (12.6) 坏 高： 4.1 底： 5.4	約2/5 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部丸みを帯びる。底部は僅かに突出し上げ底を呈する。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。下半に弱い撫でが加わる。
第98図 図版 63	14 口： (13.5) 坏 高： (4.0) 底： (6.2)	約1/4 覆土	①粗 砂礫・石英 ②酸化焰気味 ③鈍黄褐色 ④須恵器	口器部僅かに肥厚。口縁部外反し体部緩やかに丸みを帯びる。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器面薄手。

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) () 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第98図 Ⅳ版	15 口：(14.2) 坯高：(5.2) 底：(6.6)	約1/4 床直	①粗 白色粒・石英 ②酸化焰気味 ③灰白色 ④須恵器	口縁一部はほぼ直線状に一体化する。右回転轆轤整形。器厚薄手。器面摩滅。
第98図 Ⅳ版	16 口：(12.5) 坯高：(4.2) 底：(6.8)	約1/4 覆土	①粗 砂粒・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁一部縁やかな丸みを帯び一体化する。下部下層で僅かな彎曲を持たせる。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁及び底面撫で。
第98図 Ⅳ版	17 口：(13.4) 坯高：(4.7) 底：(6.4)	約1/4 覆土	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③オリーブ灰色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部上半に丸みを持たせる。高台は短く開き気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁及び底面撫で。
第98図 Ⅳ版	18 口：(13.4) 坯高：(5.4) 底：(6.4)	約1/4 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部中に丸みを持たせる。高台は開き気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁及び底面撫で。
第98図 Ⅳ版	19 口：(14.0) 坯高：5.2 底：7.2	約2/3 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰オリーブ色 ④須恵器	口縁部に歪み有り。口縁部僅かに外反し、体部上位と下位に丸みを持たせる。高台は開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁及び底面撫で。
第98図 Ⅳ版	20 口：(13.8) 坯高：— 底：—	約1/5 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部は緩やかに丸みを帯びる。高台は割落する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。器厚薄く轆轤目強い。
第98図 Ⅳ版	21 口：(13.8) 坯高：— 底：—	約1/3 住居外	①細 白色粒・黒色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部下半に丸みを帯びる。高台は割落する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。器厚薄手。
第98図 Ⅳ版	22 口：14.2 坯高：5.5 底：7.6	完形 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部縁やかな丸みを持つ。高台はやや開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第98図 Ⅳ版	23 口：(13.8) 坯高：5.6 底：6.1	約1/3 覆土	①粗 片岩・白色粒 ②還元焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部縁やかな丸みを持つ。高台は短く直立する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第98図 Ⅳ版	24 口：(14.6) 坯高：5.5 底：6.7	床直上	①粗 片岩・白色粒 ②還元焰気味 ③褐色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部縁やかな丸みを帯びる。高台は開き気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第98図 Ⅳ版	25 口：13.3 坯高：— 底：—	高台部欠損 床直	①粗 黒色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	高台割落。口縁部僅かに外反し体部縁やかな丸みを帯びる。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第98図 Ⅳ版	26 口：14.6 坯高：5.9 底：(7.2)	約2/5 床直上	①粗 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部中位～下半に丸みを持たせる。高台は僅かに開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第98図 Ⅳ版	27 口：(15.6) 坯高：5.5 底：6.8	約1/3 覆土	①粗 片岩・石英 ②還元焰気味 ③黒褐色 ④須恵器	口縁部外反し体部縁やかな丸みを帯びる。やや開き気味の体部器形。高台は直立気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第98図 Ⅳ版	28 口：(14.8) 坯高：4.9 底：6.0	約2/5 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部下半に丸みを持たせる。高台は僅かに開き気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁及び底面に撫で。
第98図 Ⅳ版	29 口：16.6 坯高：— 底：—	約4/5 高台部欠損 覆土	①粗 片岩粒・石英 ②還元焰気味 ③鈍褐色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部縁やかに丸みを帯びる。高台は割落する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部上半の轆轤目強い。

第5節 奈良・平安時代の住居跡

図番号 器種	法量 (cm) () 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第98図 四版	30 口：(15.2) 埴高：— 63 底：—	約1/3 覆土	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部直線状に落ちる。高台は欠損するが欠損部準減する。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第98図 四版	31 口：14.4 埴高：— 63 底：—	約2/5 高台部欠損 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかに丸みを帯びる。高台は欠損するが欠損部準減する。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部外面にも弱い撫でが加わる。内面輪線目強い。
第98図 四版	32 口：14.4 埴高：— 63 底：6.4	ほぼ完形 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部に重み有り。口縁部外反し体部中位一下半丸みを帯びる。高台は短く開く。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第98図 四版	33 口：(15.8) 埴高：6.0 63 底：6.8	約3/5 床直上	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部僅かに肥厚。ほぼ一体化した体部器形。高台は開く。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部器形は薄手。
第98図 四版	34 口：16.9 埴高：— 63 底：—	約1/2 高台部欠損 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかに丸みを帯びる。高台は割落する。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第98図 四版	35 口：(16.2) 埴高：7.0 63 底：6.8	約1/2 床直	①粗 砂礫 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部一体部中位外反し一体化する。体部下半は緩やかな丸みを帯びる。高台は開く。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部外面の輪線目強い。
第98図 四版	36 口：15.5 埴高：5.3 63 底：7.7	約2/3 床直	①粗 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反し体部緩やかな丸みを帯びる。高台は短く開く。やや口徑・底径広く、器高も低いため安定感ある印象。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第98図 四版	37 口：— 埴高：— 63 底：6.0	底部 覆土	①粗 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	やや開き気味の体部下平。高台は直立する。器厚はやや厚手。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第99図 四版	38 口：(14.6) 埴高：— 63 底：—	約1/3 高台部欠損 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部丸みを帯びる。右回転軸線整形。
第99図 四版	39 口：14.5 埴高：— 63 底：—	約3/4 高台部欠損 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰白色 ④須恵器	口縁部外反し体部緩やかな丸みを帯びる。体部下平～高台部大きく割落。右回転軸線整形。
第99図 四版	40 口：(14.6) 埴高：— 63 底：—	約1/3 住居外	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部下平に丸みを持たせる。右回転軸線整形。高台貼付。高台割落。
第99図 四版	41 口：17.2 埴高：— 64 底：—	約1/3 高台部欠損 床直	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部強く外反し体部下平に丸みを持たせる。右回転軸線整形。
第99図 四版	42 口：(13.6) 埴高：4.8 64 底：6.0	約2/5 覆土	①緻密 ②還元焰 ③灰白色 ④灰粘陶器	口縁部僅かに外反し体部緩やかに丸みを持つ。高台は三日月状に内湾する。輪線は内面のみで羽毛掛け。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。袋投黒塗14号溜式か。
第99図 四版	43 口：12.7 埴高：2.4 64 底：5.6	約3/4 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④須恵器	口縁部外反し体部直線状に落ちる。無台の底部で底部上げ底。右回転軸線整形。底部回転糸切り後無調整。
第99図 四版	44 口：12.3 埴高：2.7 64 底：6.5	ほぼ完形 覆土	①粗 片岩・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部下平に丸みを持たせる。高台は短く開く。右回転軸線整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁及び底面撫で。

第Ⅷ章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) () 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第99図 図版 64	口: (12.4) 皿高: 2.9 底: 5.8	約1/4 覆土	①細 白色粒 ②還元焰気味 ③鈍黄褐色 ④須臾器	口縁部外反し体部は直線状に一体化する。高台は短く開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。体部に補修粘土の痕跡あり。
第99図 図版 64	口: 12.2 皿高: 2.4 底: 6.4	ほぼ定形 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部強く外反し体部直線状に一体化する。高台は直立する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第99図 図版 64	口: (12.6) 皿高: 2.7 底: 6.3	約3/5 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰気味 ③鈍黄褐色 ④須臾器	口唇部は尖り、直線状に開く体部器形だが強い轆轤目により体部中位に外枝状の段を持つ。高台は開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第99図 図版 64	口: (13.1) 皿高: 3.4 底: 5.5	約3/5 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰気味 ③灰色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部中位に緩やかな丸みを持たせる。高台は直立する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁及び底面撫で。内外器面滑減。
第99図 図版 64	口: 13.7 皿高: 3.3 底: 6.1	約3/5 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰気味 ③灰黄色 ④須臾器	口縁部外反し体部中位に丸みを持たせる。高台は開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁及び底面撫で。
第99図 図版 64	口: (13.6) 皿高: 2.8 底: 6.0	約1/3 覆土	①粗 片岩・白色粒 ②還元焰気味 ③黄褐色 ④須臾器	口縁部外反し体部直線状に開く。高台は僅かに彎曲を帯び直立する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。器厚厚手。
第99図 図版 64	口: (14.4) 皿高: 3.1 底: 6.2	約1/3 床下	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部僅かに外反するが直線状に開く体部と一体化する。高台は僅かに彎曲気味に直立する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第99図 図版 64	口: 13.9 皿高: 3.5 底: 5.7	約4/5 覆土	①粗 砂礫・片岩 ②還元焰気味 ③黄灰色 ④須臾器	口縁部一体系上半緩やかな彎曲を帯び一体化する。下半に丸みを持つ。高台は開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁及び底面撫で。
第99図 図版 64	口: 14.0 皿高: 3.7 底: 6.1	約4/5 覆土	①粗 片岩粒・石英 ②還元焰気味 ③灰黄色 ④須臾器	口縁部外反し体部中位に丸みを持たせる。高台は短く直立する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁及び底面撫で。内底面中央凹む。器厚厚く量感に富む。外器面剥落。
第99図 図版 64	口: 13.7 皿高: 3.1 底: 5.9	ほぼ定形 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰気味 ③黒色 ④須臾器	口縁部強く外反し体部中位に僅かな丸みを持たせる。高台は彎曲を帯びて開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。底部器厚やや厚手ながら比較的端正な作り。
第99図 図版 64	口: (13.0) 皿高: 3.4 底: 5.4	約1/4 床直	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰気味 ③灰白色 ④須臾器	黒書土器。「内」か。口縁一体系一体化し短く開く。高台は直立気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。黒書は体部外面中位に施される。
第99図 図版 64	口: 14.3 皿高: - 底: -	約4/5 高台部欠損	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部は強く外反し、体部は緩やかな丸みを持たせる。高台は剥落。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第99図 図版 64	口: (17.8) 皿高: - 底: -	破片 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③黄褐色 ④須臾器	天井部高い。体部は彎曲を帯び、裾部で変換する。かえり部は丸みを持ち外挿する。右回転轆轤整形。天井部回転地調整か。
第99図 図版 64	口: (31.6) 皿高: - 底: -	口縁部破片 覆土	①細 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部は幅広く直線状に開く。踵は短く水平に付される。轆轤整形後周縁貼付。貼付時横位撫で。轆轤回転方向不詳。
第99図 図版 64	口: - 皿高: - 底: (20.1)	底部破片 床直上	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	59と同一個体か。裾部短く厚手する。体部下半は厚手で比較的直線状に開く。体部と裾部境に孔を穿つ。轆轤整形。回転方向不詳。

第5節 奈良・平安時代の住居跡

図 器 種	法量 (cm) ()推定値	残 存 率 出土 状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第99回 図版 61 64	口：(14.0) 高：— 底：—	口縁部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③黄灰色 ④須恵器	口唇部内傾し口縁部は外反する。肩部の張りは弱い。小型種で轆轤整形。回転方向不詳。
第99回 図版 62 64	口：— 高：— 底：(13.9)	底部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③黄灰色 ④須恵器	縁やかに立ち上がり直線状に開く体部下平。右回転轆轤整形後外面横撫でを加えるが工具や単位は不明。61・62とも内面鈍赤褐色を呈し、あるいは同一個体か。
第99回 図版 63 64	口：— 高：— 底：(13.0)	底部破片 覆土	①粗 砂礫 白色粒 ②還元焰 ③灰色	比較的強く開く立ち上りを呈す。轆轤整形後外面横撫で、内面斜位撫でを施す。
第99回 図版 64 64	口：— 高：— 底：(4.6)	底部破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍黄褐色 ④土師器	轆轤整形酸化焰焼成の小型甕。縁やかな彎曲を帯びて立ち上がる。左回転轆轤整形後外面斜位・横位磨削りを実施す。
第99回 図版 65 64	口：— 高：— 底：9.8	約2/5 覆土	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	縁やかな彎曲を帯びる体部下平。高台は開き足付は平皿。右回転轆轤整形。底部切り離し技法不明。高台貼付時局縁撫で。高台一部に泥片が付着する。
第100回 図版 66 64	口：— 高：— 底：—	体部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③黄灰色 ④須恵器	内彎する肩部。縁やかな彎曲を呈し張りは弱い。轆轤整形。回転方向不詳。体部外面平行明き後撫で、内面撫で、円縁状が目残る。あるいは61・62と同一個体か。
第100回 図版 67 65	口：— 高：— 底：(12.0)	約1/5 底部 床直上	①細 片岩・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部中に丸みを持たせ縁やかな彎曲で開き気味に立ち上がる。底部器厚はやや薄手。右回転轆轤整形。
第100回 図版 68 65	口：— 高：— 底：—	体部破片 覆土	①粗 砂礫・片岩 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平行明き後撫で。自然粘厚く付着。内面円環状が目残る。
第100回 図版 69 65	口：— 高：— 底：—	体部破片 覆土	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	大甕体部破片。外面平行明き後撫で。自然粘厚く付着。内面円環状が目残る。
第100回 図版 70 75	口：(18.0) 高：— 底：—	口縁部一 明部破片 覆土	①細 片岩粒・黒色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	コ字口縁甕。口縁部上位強く外傾し下位は直立する。肩部は張り体部上平に膨らみを持たせる。口縁部強い横撫で。体部外面横位磨削り。内面横位磨削りを実施す。
第100回 図版 71 75	口：(20.2) 高：— 底：—	口縁部一 明部破片 床直上	①細 片岩粒・黒色粒 ②酸化焰 ③赤褐色 ④土師器	コ字口縁甕。口縁部上位は強く外傾し下位は直立する。体部上平に膨らみを持たせる。口縁部強い横撫で。内面に指痕残る。体部外面斜位・横位磨削り。内面横位磨削りを実施す。
第100回 図版 72 75	口：21.0 高：— 底：—	約1/6 覆土	①細 片岩粒・黒色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	コ字口縁甕。口縁部上位は強く外傾し下位は縁やかに直立する。肩部の張りはやや弱く体部中に膨らみを持たせる。口縁部強い横撫で。体部外面は横位・斜位の磨削り。内面は横位磨削りを実施す。
第100回 図版 73 75	口：20.0 高：— 底：—	約1/2 覆土	①細 片岩粒・黒色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	コ字口縁甕。口縁部上位は強く外傾し下位は直立する。肩部の張りは強く、体部上平に膨らみを持たせる。口縁部横撫で強く凹線状となす。体部上平は横位磨削り下平は縦位磨削り。内面横位磨削り。
第100回 図版 74 75	口：18.6 高：— 底：—	約1/4 床直上	①細 片岩粒・黒色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	コ字口縁甕。口縁部やや短い印象を得る。上位外傾下位は内傾する。肩部は張り体部上平に膨らみを持つ。口縁部横撫で強く凹線状となす。体部上平は横位、下平は斜位磨削り後横撫で。内面は横位磨削りを実施す。
第100回 図版 75 75	口：20.1 高：— 底：—	約1/3 口縁部 覆土	①細 片岩粒・黒色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	コ字口縁甕。口縁部上位強く外傾下位は直立する。肩部は張る。口縁部横撫で強く前部境で種状となす。外面肩部は横位磨削り。内面は横位磨削り。

第三章 検出された遺構と遺物

図 番 号 器 種	法 量 () 推 定 値	残 存 率 出 土 状 態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形 態 ・ 手 法 等)
第100図 76 甕 高：— 底：— 図版 65	口：19.0	約1/2	①細 片岩粒・黒色粒 ②燻化治 ③明褐色 ④土師器	コ字口縁甕。口縁部上位強く外傾し下位は直立する。肩部の張りはやや弱い。口縁部横撫で強く肩部境で屈曲する。外面肩部横位磨削り、内面横位磨削で。
第100図 77 甕 高：— 底：— 図版 65	口：(21.0)	口縁部破片 覆土	①細 片岩粒・黒色粒 ②燻化治 ③褐色 ④土師器	コ字口縁甕。口縁部上位強く外傾し下位は直立する。肩部の張りはやや弱い。口縁部は強い横撫で、肩部は横位磨削り。内面は横位磨削で、器面摩滅。
第100図 78 甕 高：— 底：— 図版 65	口：(20.0)	口縁部破片 床直	①細 片岩粒・黒色粒 ②燻化治 ③明赤褐色 ④土師器	コ字口縁甕。口縁部上位外傾し下位は直立する。肩部は弱い張りを呈す。口縁部横撫で強く凹線状となす。肩部は横位磨削り。内面横位磨削で。
第101図 79 甕 高：— 底：— 図版 65	口：(23.1)	口縁部破片 覆土	①細 片岩粒・黒色粒 ②燻化治 ③鈍褐色 ④土師器	コ字口縁甕。口縁部上位外傾し下位は彎曲気味に直立する。肩部の張りは弱い。口縁部横撫で強く中位で横状となす。肩部横位磨削り。下位に縦位磨削り。内面横位磨削で、器厚やや厚手。
第101図 80 甕 高：— 底：— 図版 65	口：—	頸部一 割部破片 覆土	①細 片岩粒・黒色粒 ②燻化治 ③褐色 ④土師器	コ字口縁甕。口縁部上位欠損。口縁部下位直立する。肩部の張りは弱く体部中位に僅かな膨らみを持たせる。口縁部横撫で、体部横位・斜位磨削り。内面横位磨削で。
第101図 81 甕 高：— 底：(3.6) 図版 65	口：—	底部破片 床直	①細 片岩粒・黒色粒 ②燻化治 ③褐色 ④土師器	小径の底部。体部下半は強く開く。外面縦位磨削り、内面磨削で。
第101図 82 台付甕 高：— 底：10.4 図版 65	口：—	脚部 床直	①細 片岩粒・黒色粒 ②燻化治 ③鈍褐色 ④土師器	台付甕脚部。頸部は強く開く。内外面とも横位撫でを丁寧に施す。器形も整然とした丁寧な造り。
第101図 83 土鍾 長：3.9 径：1.4 重：6.03g 図版 65	定形 覆土		①細 白色粒・石英 ②燻化治 ③鈍褐色 ④土師器	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径の紡錘状の形態。外面縦位撫で。
第101図 84 土鍾 長：4.3 径：1.4 重：6.48g 図版 65	定形 覆土		①粗 片岩・石英 ②燻化治 ③灰色 ④土師器	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径の紡錘状の形態。外器面摩滅。
第101図 85 土鍾 長：4.1 径：1.4 重：6.11g 図版 65	ほぼ定形 床直		①細 白色粒・石英 ②燻化治 ③明褐色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径の紡錘状の形態。外面縦位撫で。
第101図 86 土鍾 長：4.0 径：2.4 重：17.85g 図版 65	定形 覆土		①細 白色粒・石英 ②燻化治 ③鈍赤褐色 ④土製品	棒状の芯材に粘土を巻き掌上による成形。中位が膨らみ両端が小径で紡錘状の形態ではあるが前3者に比しずんぐりした器形。外面縦位撫で。
第101図 87 砥石 長：14.9 幅：9.4 厚：6.5 図版 65	一部欠損 覆土		①砥沢石 ②1210.6g	大型品。4面とも使用され研磨痕・磨痕が奪取される。図正面の使用が著しく凹面を持つ。

第81表 33号住居跡遺物観察表

図 器 種	番号 ()	法量 (cm) ()	残存 出土 状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第102図 1 環 版	66	口：— 高：— 底：(5.0)	底部破片 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③色調 ④その他	遺存不良。体部下半は丸みを帯び底部は上げ底。右回転軸線整形。底部 回転軸切り後無調整ながら器面厚減のため自然としなない。
第102図 2 塊 版	66	口：— 高：— 底：(7.9)	底部破片 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰気味 ③鈍褐色 ④須恵器	遺存不良。体部下半は緩やかな丸みを帯び高台は開く。右回転軸線整形。 底部回転軸切り後高台貼付。貼付時周縁無調整。
第102図 3 蓋 桶 版	66	口：(14.0) 高：— 桶： —	破片 覆土	①粗 砂粒・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	遺存不良。天井部やや弱く断面緩やかに彎曲する。かえり部は開き気味。 右回転軸線整形。天井部回転軸調整。

24号住居跡

調査区中央北のD区台区較部に位置する。C～D区住居群の北端にあたり、緩やかな東・北斜面地形に占地する。

重複する住居跡はなく単独の検出だが、北壁の一部に現代の攪乱坑、東壁北側に試掘坑が重なる。近接する住居跡は、東側に42号住居跡、南西側に5m程距離をおいて40号住居跡が見られる。南側・西側は近接する住居跡がなく、住居群の西端ともいえよう。北側は調査区域外にあたるため、あるいは住居群の北側への延長も考えなければならない。

平面形は、北東隅と西側壁に乱れが見られるものの、約3.9×3.8mの比較的整った隅丸正方形を呈す。深さは、約25cmを測る。緩やかな傾斜地形のためか壁の遺存も良く、しっかりした掘り込みである。

床面は、平坦面を築き黄褐色ローム塊と褐色土塊による貼床である。硬化面は床面中央に範囲を狭くして確認された。

壁周溝は見られない。柱穴は、配置に妥当性のある小ピットが床面中央北側に4基確認されたが、何れも浅く、柱痕が認められなかった。切込み面も床下であり、床下土坑の可能性もある。

貯蔵穴は2基検出された。南東隅と南西隅の小土坑で、南西隅の貯蔵穴がやや大型で掘り込みもしっかりしていた。2基の共存は不明である。

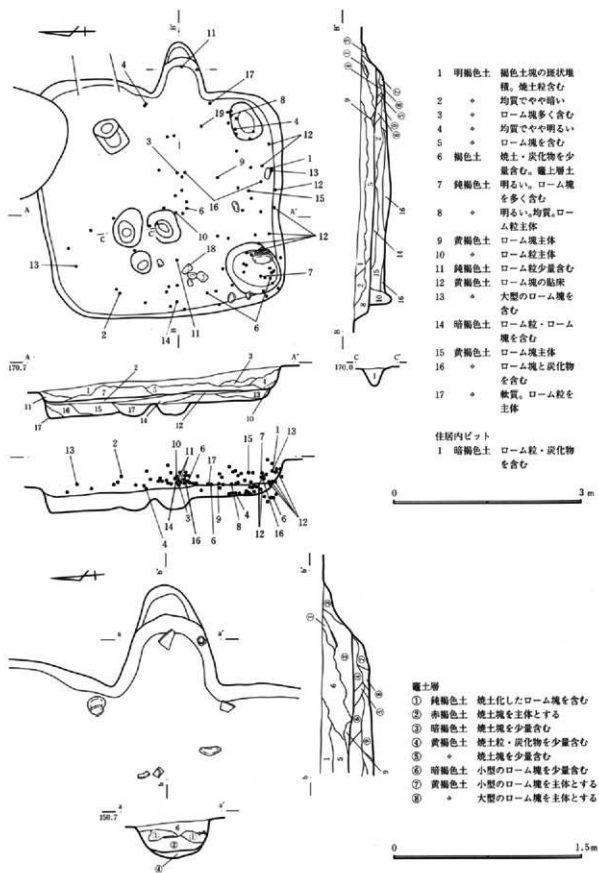
竈は、東壁中央に設けられる。馬蹄状の煙道を壁外に突出し、燃焼部～笑口部は極僅かに凹む。袖は

明瞭に突出していないが、相応部に自然石と土器片の出土がみられ、僅かな壁の突出をもって袖の機能を有していたのであろう。その他の明瞭な構築材の散布は認められず、焼土化した粘性土塊が埋土に確認された。構築材崩落土と捉えた。燃焼部に焼土粒と黒色灰が確認されたが、薄い堆積である。

床下遺構は、前述の床面中央北側の小ピットを床下土坑として捉えたい。特に集中する3基の小ピットは、床下の遺構であり、黄褐色ローム塊を主体とした埋土だった。

遺物は、住居跡全域に見られたが、特に南半分に集中する傾向を見せる。竈周辺はやや少ない。東南隅の貯蔵穴に比して西南隅の貯蔵穴がやや遺物が多く見られた。出土層位は、覆土下位より床直上にまとまった出土が見られた。床直のものは比較的少なく、完形土器の出土も須恵器環(1)1点のみのことから、居住に伴う出土状態とは捉え難い。おそらく東・北側への緩やかな傾斜に沿う遺物流入と考えられよう。

第三章 検出された遺構と遺物

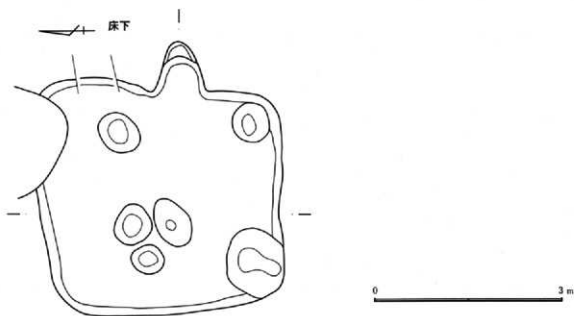


- | | | |
|----|------|------------------------|
| 1 | 明褐色土 | 褐色土塊の斑状堆積、焼土粒含む均質でやや暗い |
| 2 | * | ローム塊多く含む均質でやや明るい |
| 3 | * | ローム塊を少量含む |
| 4 | * | 均質でやや明るい |
| 5 | * | ローム塊を含む |
| 6 | 褐色土 | 焼土・炭化物を少量含む。礫土層土 |
| 7 | 暗褐色土 | 明るい。ローム塊を多く含む |
| 8 | * | 明るい均質。ローム粒主体 |
| 9 | 黄褐色土 | ローム塊主体 |
| 10 | * | ローム粒主体 |
| 11 | 暗褐色土 | ローム粒少量含む |
| 12 | 黄褐色土 | ローム塊の粘床 |
| 13 | * | 大型のローム塊を含む |
| 14 | 暗褐色土 | ローム粒・ローム塊を含む |
| 15 | 黄褐色土 | ローム塊主体 |
| 16 | * | ローム塊と炭化物を含む |
| 17 | * | 軟質。ローム粒を主体 |

住居内ピット
1 暗褐色土 ローム粒・炭化物を含む

- 礫土層
- | | | |
|---|------|---------------|
| ① | 暗褐色土 | 焼土化したローム塊を含む |
| ② | 赤褐色土 | 焼土塊を主体とする |
| ③ | 暗褐色土 | 焼土塊を少量含む |
| ④ | 黄褐色土 | 焼土粒・炭化物を少量含む |
| ⑤ | * | 焼土塊を少量含む |
| ⑥ | 暗褐色土 | 小型のローム塊を少量含む |
| ⑦ | 黄褐色土 | 小型のローム塊を主体とする |
| ⑧ | * | 大型のローム塊を主体とする |

第103図 24号住居跡出土遺物 (1)

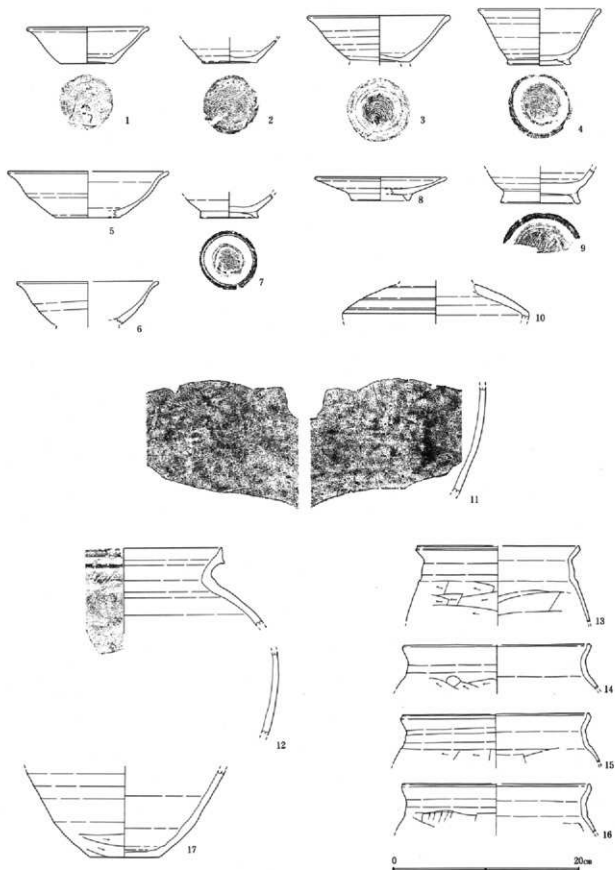


第104図 24号住居跡(2)

第82表 24号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Ded-24	隅丸正方形	390×380×23	N86°E	N90°E	貯蔵穴	坏3 埴5 皿1 壺1 墨7	

第三章 検出された遺構と遺物



第105図 24号住居跡出土遺物

第83表 24号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第105図1 坏 図版 66	口: 12.7 高: 3.9 底: 5.7	ほぼ完形 覆土	①粗 片岩・白色粒 ②酸化鉛気味 ③浅黄色 ④須臾器	口縁部外反し体部直線状に一体化する。体部下半は強く開く。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器面薄減。
第105図2 坏 図版 66	口: - 高: - 底: 5.6	約1/3 覆土	①細 片岩粒 ②酸化鉛気味 ③黄灰色 ④須臾器	体部は緩やかな彎曲をもって強く開く。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器厚薄手。
第105図3 埴 図版 66	口: 15.2 高: - 底: -	約4/5 高台部欠損 床直	①粗 砂礫・片岩粒 ②酸化鉛気味 黒褐色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部緩やかに丸みを帯びる。高台剥落。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁強で。体部下半にも強でが及ぶ。
第105図4 埴 図版 66	口: (12.7) 高: 6.0 底: 6.3	約1/3 野穴内	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	器形全体に至み有り。口縁部外反し体部は著しく歪む。高台は短く開く。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁強で。器厚薄手。
第105図5 埴 図版 66	口: (16.9) 高: (4.8) 底: (6.6)	約1/3 覆土	①粗 小礫・石英 ②酸化鉛気味 ③灰黄褐色 ④須臾器	口徑広くやや大振り。口縁部外反し体部中に丸みを持つ。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後強で。
第105図6 埴 図版 66	口: (14.8) 高: - 底: -	約1/4 高台部損部 床直上	①粗 砂礫・石英 ②酸化鉛気味 ③鈍褐色 ④須臾器	口徑広くやや大振り。あるいは輪か。口縁部外反し体部中に丸みを持つ。右回転軸轆轤整形。器面薄減。
第105図7 埴 図版 66	口: - 高: - 底: 6.2	約1/3 覆土	①粗 砂礫・石英 ②酸化鉛気味 ③浅黄色 ④須臾器	比較的強く開く体部下半。高台は短く開く。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁強で。
第105図8 皿 図版 66	口: (13.8) 高: (2.5) 底: (6.0)	約1/2 床直上	①細 片岩粒・白色粒 ②浅黄色 ④須臾器	口縁部一体部緩やかな彎曲をもって一体化する。開き気味の体部形態。高台は短く直立する。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁強で。
第105図9 埴 図版 66	口: - 高: - 底: (8.0)	約1/5 床直	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	丸みを帯びる体部下半。高台は開く。内面見込み部の屈曲やや明瞭。右回転軸轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁強で。器厚厚く量感に富む。
第105図10 長頸壺 図版 66	口: - 高: - 底: -	肩部破片 覆土	①細 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	肩部破片。下端で緩やかに屈曲する。左回転軸轆轤整形。外面に3条の横位沈線が看取される。
第105図11 甕 図版 66	口: - 高: - 底: -	体部破片 壺内	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③オリーブ黒色 ④須臾器	大甕体部破片。内外面とも横位強でを入念に施す。器厚薄手。
第105図12 甕 図版 66	口: (20.6) 高: - 底: -	口縁部破片 体部破片 床直上	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須臾器	口縁部内傾し端部尖る。頸部は強く屈曲し肩部は張る。右回転軸轆轤整形。
第105図13 甕 図版 66	口: (17.0) 高: - 底: -	口縁部破片 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	コ字口縁。口縁部上位は強く外傾し下位は直立する。肩部の張りは弱い。口縁部横強で強く頸部境で凹線状となす。体部上半は横位強弱で。内面横位強弱で。
第105図14 甕 図版 66	口: (19.4) 高: - 底: -	口縁部破片 床直上	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③明赤褐色 ④土師器	コ字口縁。口縁部内面に丸みを持たせ口縁部上位は外傾。下位一頸部は外反する。肩部は張る。口縁部横強で強く凹線状となす。体部上半は横位強弱で。内面横位強弱で。

第三章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量(m) ()推定値	残存率 出土状態	①動土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴(形態・手法等)
第105図 15 陶版 66	口:(19.6) 高: - 底: -	口縁部破片 覆土	①細片岩粒・白色粒 ②燻化痕 ③明赤褐色 ④土師器	コ字口縁裏。口縁部上位外傾。下位-頸部は外反する。肩部は張る。口縁部横溝で強く凹線状となす。体部上半は横位寛削り。内面横位寛溝で。
第105図 16 陶版 66	口:(19.6) 高: - 底: -	口縁部破片 覆土	①細片岩粒・白色粒 ②燻化痕 ③明褐色 ④土師器	コ字口縁裏。口縁部上位外傾。下位-頸部は外反する。肩部は張る。口縁部横溝で強く凹線状となす。体部上半は横位寛削り。一部ノッキング。内面横位寛溝で。
第105図 17 羽釜 陶版 66	口: - 高: - 底:(7.3)	底部破片 床直上	①粗砂礫・石英 ②燻化痕 ③褐色 ④須恵器	轆轤整形燻化痕焼成。底径広く体部下半は緩やかに立ち上がる。回転方向不詳。体部下半に横位・斜位の寛削りを施す。器厚薄手。

25号住居跡

調査区中央北のD区台地較部に位置する。C~D区住居群の北端にあたり、緩やかな東・北斜面地形で比較的平坦面に占地する。

周辺の住居跡は多く、本住居跡南側にも26号住居跡・44号住居跡が重複する。さらに、土層のみの確認であるが、本住居跡東側には土坑状の落込みが重なる。また、北側には23号・33号住が近接し、西側には距離を置いて27号住居跡や43号住居跡・44号住居跡、東側には31号・47号・79号住がやはり距離を置いて検出されている。

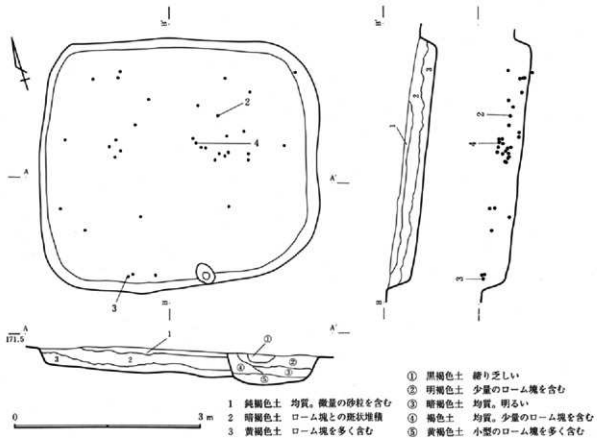
本住居跡は、居住施設としては疑わしい。平面形は、約4.4×4.0m程の隅丸長方形を呈し、深さは、30cmを超える、遺存状態の良好な遺構だが、竈等の住居跡本来の施設を持たない。調査手順より住居跡として調査され本書でも住居として報告するが、方形の小竪穴遺構としての位置づけが妥当であろう。

底面は、緩やかに北側へ傾斜する。貼床・硬化面は認められなかった。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴も検出されなかった。南側壁上端に小ピットが重なるが、本址に伴うピットとしては確定できない。

竈も確認できなかった。東側に重複する土坑状の落込みによって破壊されたとも考えられるが、焼土粒や炭化物の散布も見られなかった。

遺物は、全域より出土している。覆土上層のものが多く、本址に伴う出土状態ではない。4点を図示した。



第106図 25号住居跡

第84表 25号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dbc-26・27	隅丸長方形	443×401×36	N103°E	—		坏2 埴1 皿1	26住



第107図 25号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

第85表 25号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特徴 (形態・手法等)
第107図 1 陶版 66	口：(12.0) 坯高：—	破片 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焙 ③褐色 ④土師器	小破片。口縁部直立し体部は扁平。口縁部横溝で、体部は匙削りを施す内面撫で。
第107図 2 陶版 66	口：(9.5) 坯高：(3.4) 底：(6.0)	約1/3 覆土	①細 白色粒 ②還元焙 ③灰色 ④須恵器	小型の坏。口料部は尖り、口縁一体部直線状に一体化する。腰部で彎曲する。右回転轆轤整形。底部回転調整後撫でを加える。匙調整は腰部に及ぶ。外面自然粘付着。
第107図 3 陶版 66	口：— 塊高：— 底：(6.8)	約1/6 覆土	①細 白色粒 ②還元焙 ③灰白色 ④須恵器	やや軟質な焼成。体部下半は比較的強く開く。高台は短く直立する。右回転轆轤整形。底部回転承切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第107図 4 陶版 66	口：— 皿高：— 底：(6.5)	約1/6 覆土	①緻密 白色粒 ②還元焙 ③灰白色 ④灰釉陶器	直線状に強く開く体部下半。高台は若干内彎する。右回転轆轤整形。底部回転調整後高台貼付。貼付時周縁及び底面撫で。

26号住居跡

本住居跡も25号住と同様に、居住施設として疑問が残る遺構である。

調査区中央北のD区台地鞍部に位置する。C-D区住居群の北端にあたり、緩やかな東・北斜面地形で比較的平坦面に占地する。

周辺の住居跡は多く、前述の25号住が北に接し、西側には44号住居跡が重複する。東側には47号住居跡や79号住居跡が近接する。

平面形は、約3.9×3.2m程の比較的整った隅丸長方形で、長軸を東西に設ける。深さは、約30cmを測り遺存度は良好といえよう。掘り込みもしっかりしていた。

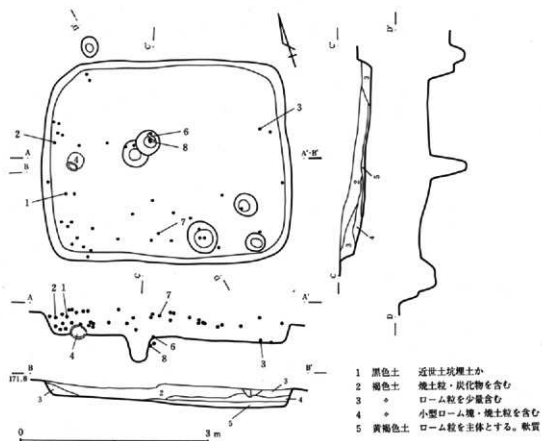
底面は、緩やかに北東側へ傾斜し、黄褐色ロームを基盤とする。尚、貼床・硬化面は見られない。

壁周溝は見られないが、底面には5基の小ピットが見られた。特に中央部の重複するピットは、平面規模・深さともに柱穴として妥当性はある。また、東南隅の3基のピットは貯蔵穴の可能性を持つ配置である。

竈は、確認されなかった。東壁周辺にも焼土粒や構架材の散布は見られず、掘り込みもないことから、本住居跡は、竈を持たない小型穴遺構として位置付けられよう。

遺物は、覆土上層より底面にかけて少量が出土した。上層の出土が多く、西側から北東側への遺物流入と考えられた。

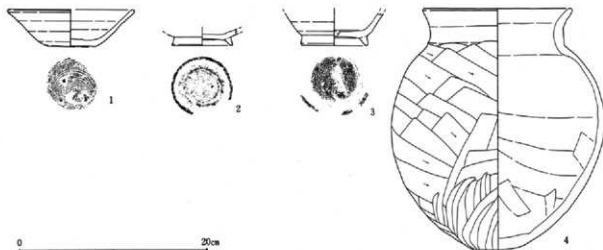
4点を図示したが、4の土師器甕のみが、底面に密着して出土しており、本址に伴う出土遺物として捉えられよう。



第108図 26号住居跡

第96表 17号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	庵方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dbe-27・28	隅丸長方形	395×322×30	N103°E	—		坏1 埴2 甕1 金属器1	25住 44ABE



第109図 26号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

第87表 26号住居跡遺物観察表

図 番 号 器 種	法 量 ()推定値	残 存 率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第109図 1 環 版 66	口：(13.3) 高：3.9 底：5.1	約1/4 覆土	①粗 糠・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	口縁部僅かに外反し体部直線状に強く開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第109図 2 埴 版 66	口：— 高：— 底：6.4	底部 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	底部のみ残存。高台は強く開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第109図 3 埴 版 66	口：— 高：— 底：(6.9)	約2/5 床直上	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須臾器	体部下半に緩やかな彎曲を持つ。高台は開く。内面見込み部は比較的明瞭。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第109図 4 甕 版 66	口：15.5 高：25.4 底：5.4	約4/5 床直	①粗 片岩・石英 ②還元焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁一部僅かに外反する。肩部の張りは弱く体部中位に膨らみを持たせる。底部小径。口縁部撫で、体部は斜位置削り後下手縦撫でを加える。体部内面は横位・斜位撫で。

27号住居跡

調査区中央北のD区台地鞍部に位置する。C-D区住居群の北端にあたり、緩やかな東・北斜面地形で比較的平坦面に占地する。

周辺の住居跡は密集するものの、重複する住居跡は無い。北側に43号住居跡が近接し、西側には46号住居跡がやや距離をおいて主軸を一致して占地する。また、土坑群も群在し、北西隅に43号土坑が重複する他、南側には37-39号土坑、北側は36・40・41号土坑、東側には44・45号土坑が近接する。

平面形は、約3.0×2.7mの小型の不整正方形を呈し、深さは約20cmとやや遺存状態は悪い。斜面地形による、壁の流失は認められないものの、掘り込みもやや緩やかである。

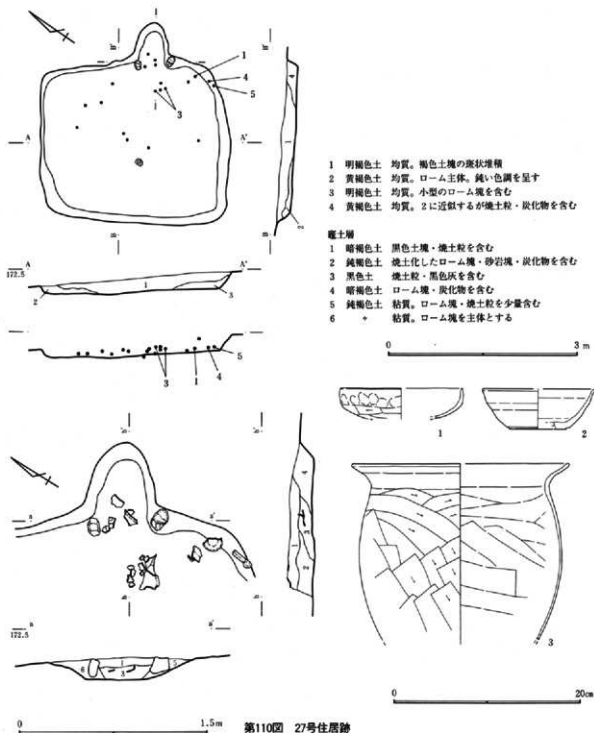
床面は、北東側へ傾斜し、黄褐色ロームを基盤とする地床である。硬化面は、中央部で比較的狭い範囲で確認された。

壁周溝・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

竈は東壁南よりに設けられる。馬蹄状の煙道部を強く突出し、極僅かな凹みが燃焼部に認められた。袖は、両側とも壁を弱く突出し、直下に自然石を置き芯材として補強し、鈍褐色～黄褐色土塊を充てていた。

遺物は少量であり、覆土下位～床直上に散布して

いた。竈周辺に集中が見られ、土師器環(1)・土師器甕(3)が出土している。



第110図 27号住居跡

第88表 27号住居跡計画表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×高さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
Dde-28	不整正方形	300×285×23	N55°E	N60°E		坏2 甕1	44坑

第三章 検出された遺構と遺物

第89表 27号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) () 測定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第110図 Ⅰ 国版 67	口：(12.8) 坯高：—	約1/4 床直上	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部内彎し体部はやや扁平で丸底。口縁部横溝で、体部に指頭痕残る。底部は焼削り。
第110図 Ⅱ 国版 67	口：(11.8) 坯高：(4.2) 底：(8.0)	破片 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④土師器	口縁一部部縁やかな彎曲をもって一体化する。底部僅かに突出する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。
第110図 Ⅲ 国版 67	口：22.6 葉高：— 底：—	約1/4 床直上	①細 白色粒・石英 ②酸化焰 ③鈍黄褐色 ④土師器	口縁部強く開き頸部部曲も著しい。肩部は張らず体部上半に影りを持たせる。口縁部横溝で、体部上半—中位横位・斜位焼削り、下半縦位焼削りを施す。体部内面は上半は斜位焼削で、下半横位焼削で。

30号住居跡

調査区中央北のC区台地鞍部に位置する。C—D区住居群のほぼ中央にあたり、緩やかな東・北斜面地形に占地する。

周辺は住居跡が密集し、重複住居が存在する。本住居跡も、45号住居跡と54号住居跡が重複する。また、南東には35号住居跡が、北東には36号住居跡、北西には31号住居跡・78号住居跡が近接する。

平面形は、約4.5×3.8mの不整形長方形を呈す。北側の壁に若干の乱れが見られる。深さは約50cmを測り、斜面地形の影響も少なく、良好な遺存状態を誇る。

床面は、ほぼ平坦面を築き、鈍褐色土塊と暗褐色土塊による貼床がなされていた。貼床はやや薄く、床面中央で顕著である。硬化面も中央—竈周辺にかけて顕著に認められた。

壁周溝はなく、柱穴も配置の良好なものはない。竈突口部北西の小ピットと中央西側のピットに可能性が求められるが、浅く積極的な根拠は持たない。尚、北西隅の小ピット群も考慮したが、柱穴以外の他施設の可能性が高い。

第90表 30号住居跡計測表

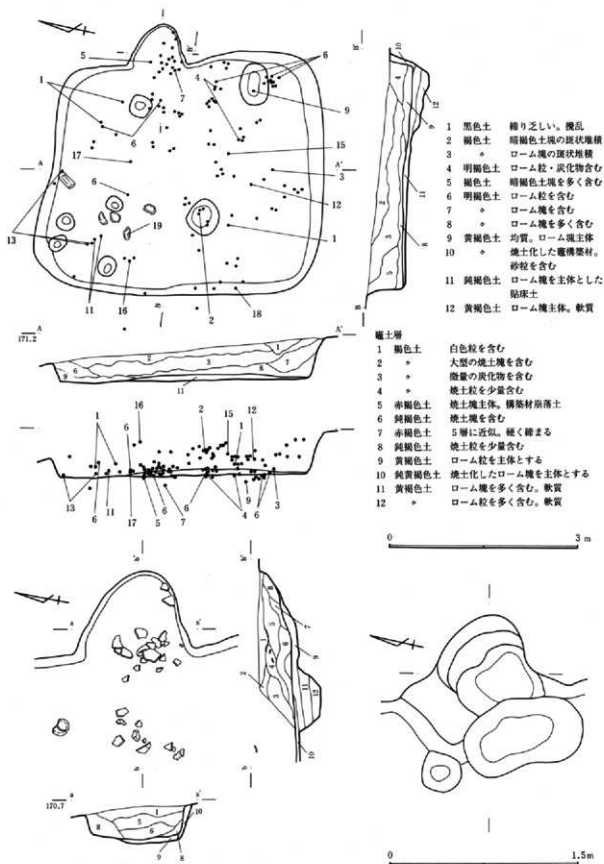
位 置 (南東隅)	平 面 形	規 模 (cm) 長軸×短軸×深さ	住居方位	竈 方 位	主 な 施 設	主 な 遺 物	重複遺構
Cxy-28・29	不整形長方形	452×382×47	N85°E	N86°E	貯蔵穴	坯8 埴1 蓋1 鉢1 短頸 壺1 壺1 瓶1 横敷1 土師1 金属器1	45・54住

貯蔵穴は、南東隅の小型の楕円状の土坑を充てた。褐色土を埋土としており、浅く掘り込みも緩やかである。

竈は、東壁北寄りに設けられる。他の住居跡とは配置を異にする。馬蹄状の煙道部を壁外に突出し、燃焼部に緩やかな凹みを持たせる。焚口部はほぼ平坦で床面と一体化する。袖は、明瞭ではないが、相応する壁が僅かに住居内に彎曲し、壁の利用と考えられる。構築材は明瞭な残存状態を見えていない。土層で確認された焼土化した黄褐色粘質土が相当するのであろうか。

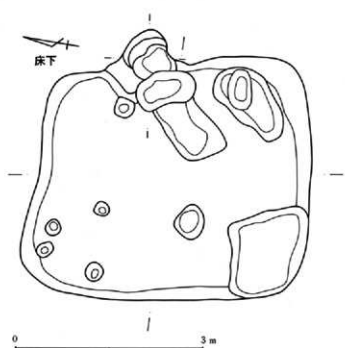
床下遺構は、竈使用面下に顕著な掘り込みが見られた。土坑状の落込みで黄褐色ローム塊を主体とした埋土である。また、西南隅に大型の土坑を検出したが、床下遺構の可能性は低いものと考え、住居掘削時の土坑と捉えた。

遺物は、比較的多く出土している。覆土上層より床直まで、住居跡全域より出土したが、竈周辺に集が見られた。

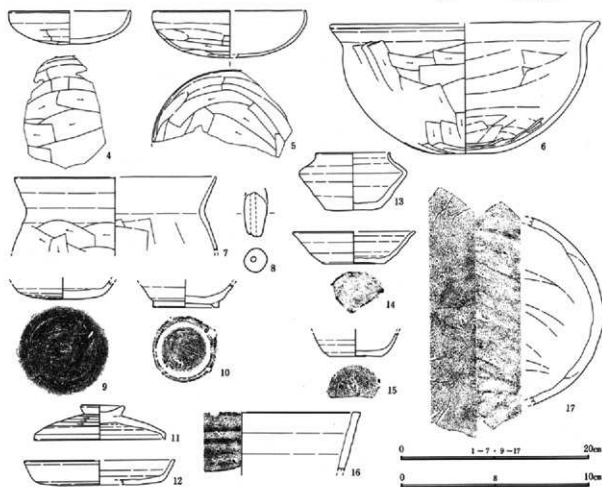
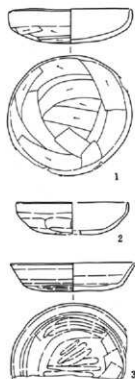


第1111図 30号住居跡(1)

第三章 検出された遺構と遺物



第112図 30号住居跡出土遺物 (2)



第113図 30号住居跡出土遺物

第5節 奈良・平安時代の住居跡

第91表 30号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (m) ()要定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第113図 1 罎版 67	口：12.9 高：3.7	一部欠損 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部内彎気味に直立する。体部は扁平で底部は丸底。口縁部横撫で。底部は丸削り。
第113図 2 罎版 67	口：(11.8) 高：(3.4)	約1/4 覆土	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③鈍褐色 ④土師器	口縁部短く直立する。体部は丸みを帯び底部は平底。口縁部横撫で。体部は弱い撫でてで筋痕が残る。底面は丸削り。
第113図 3 罎版 67	口：(13.2) 高：3.0	約1/2 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③明赤褐色 ④土師器	口縁部はやや幅広で外傾する。体部は扁平で底部は平底。口縁部横撫で強く、体部境に比喩が高まる。底面は丸削り後撫でを加え、棒状工具による磨きを一部に施す。内面見込み部の横撫で強い。
第113図 4 罎版 67	口：(13.0) 高：3.5	約1/3 床直	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部短く体部と一体化する。体部は扁平で丸みを帯びる。底部は丸底。口縁部横撫で、体部は丸削り後弱い撫で、底面は丸削り。
第113図 5 罎版 67	口：(16.0) 高：(5.0)	約1/3 甕内	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口径広く、器高もあるやや大型品。口縁部短く、丸みを帯びる体部～底部と一体化する。底部は丸底。口縁部横撫で、体部丸削り後弱い撫で、底面は丸削り。
第113図 6 罎版 67	口：(28.2) 高：(13.8) 底：(6.7)	口縁部一 底部破片 残	①粗 片岩・白色粒 ②酸化焰 ③鈍黄褐色 ④土師器	大型鉢。口縁部外傾し頸部で活れ体部上半に膨らみを持たせる。口縁部横撫で。体部上半は横位・縦位丸削り、下半は縦位丸削り後一部撫で。体部内面は上半横位丸削り、下半は不定方向の丸削り。
第113図 7 罎版 67	口：(21.0) 高：— 底：—	口縁部破片 甕内	①細 黒色粒・白色粒 ②酸化焰 ③褐色 ④土師器	口縁部直線状に外傾し頸部で緩やかに屈曲する。肩部の張り強い。口縁部横撫で後肩部横位丸削り。体部内面は横位丸削り。
第113図 8 土師 罎版 67	長：(2.4) 径：1.2 重：3.27g	約1/3 覆土	①細 白色粒・石英 ②酸化焰 ③褐色 ④土製品	平欠。棒状の芯材に粘土を巻き草上による成形。中位が膨らみ罎版が小径の紡錘状の形態であろう。外面縦位丸削り。
第113図 9 罎版 67	口：— 高：— 底：9.0	約1/3 貯穴内	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	あるいは蓋か、丸底で彎曲をもって立ち上がる。右回転軸撫で。底部静止丸調整後回転撫でを加える。
第113図 10 罎版 67	口：— 高：— 底：6.8	約1/3 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	体部下半に丸みを持たせ高台はやや開く。右回転軸撫で。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁撫で。
第113図 11 罎版 67	口：13.9 高：3.6 底：4.4	完形 床直上	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③淡黄色 ④須恵器	天井部比較的高く環状溝を付す。筒中央は凹む。体部は緩やかに彎曲しかえり部端部は尖る。右回転軸撫で。天井部一体部上半回転丸調整後貼付。
第113図 12 罎版 67	口：(15.9) 高：(2.6) 底：(13.5)	破片 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口径広く体部器高低い。底部は平底。あるいは盤か。右回転軸撫で。底部回転丸調整後撫でを加える。焼成やや弱く軟質な感。
第113図 13 短筒 罎版 67	口：7.7 高：6.1 底：4.3	約3/4 床直上	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部短く直立する。頸部屈曲は緩やかで体部上半で強く屈曲する。左回転軸撫で。底部静止丸調整。内外面に自然輪が付着する。
第113図 14 罎版 67	口：(12.9) 高：3.4 底：(6.5)	約1/4 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③褐色 ④須恵器	口縁部体部僅かな丸みを帯び一体化する。底部は僅かに突出し僅かに上げ底。右回転軸撫で。底部回転糸切り後無調整。

第10章 検出された遺構と遺物

図番号 器種	法量 (cm) () 推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形態・手法等)
第113図 15 国版 67	口： - 坯高： - 底： 5.8	約1/4 覆土	①胎 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部下半丸みを帯びる。底部僅かに上げ底。右回転轆轤整形。底部回転調整。内外器面に自然釉が付着する。
第113図 16 国版 67	口： (24.8) 高： - 底： -	口縁部破片 覆土	①胎 片岩・白色粒 ②還元焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	あるいは瓶口縁部か。角状の口唇部で口縁部は直立する。轆轤整形。回転方向不詳。
第113図 17 国版 67	口： - 横版高： - 底： -	体部破片 床直上	①胎 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	あるいは蓋底部か。外面丁寧な態で調整で自然釉が付着する。内面全面的横撫でを施す。

31号住居跡

調査区中央北のC区台地鞍部に位置する。C-D区住居群のほぼ中央にあたり、緩やかな東・北斜面地形に占地する。

周辺は住居跡が密集し、重複住居が群在する。本住居跡は、49号住居跡・78号・79号住居跡と重複する。近接する住居跡として、前述の30号住居跡と54号住居跡が東に接する。

平面形は、主軸を東西に持ち、西辺と南辺にやや乱れがある不整正方形を呈し、規模は約3.3×3.1mとやや小型である。深さは約40cmを超え良好な遺存状態を誇る。

床面は、僅かに北側へ傾斜するもののほぼ平坦面を築く。貼床が全域になされ、黄褐色ローム塊と暗褐色土塊の混合土からなる。硬化面は、床面中央に特に顕著で、南西方向と東側へ比較的広く確認された。これは後述する床下の状態と合致する。

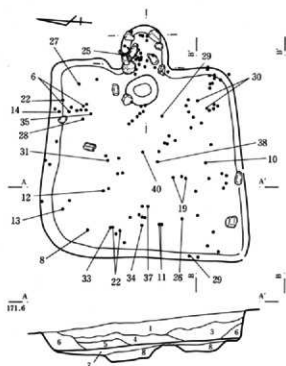
壁周溝は見られず、柱穴も床面上では確認できなかった。床下調査で得られた小ピット—すなわち北壁際の2基と中央の1基、南壁にかかる小ピットが配置、深さから可能性が求められよう。貯蔵穴も見られなかった。

竈は、東壁ほぼ中央に設けられる。馬蹄状の煙道部を突出し、壁を利用した袖が僅かに突出する。袖石が両側とも置かれ、焼土化したローム塊を主体とした構茶材（5・6層）からなる。燃焼部壁にかけても自然石や須恵器壺破片や瓦が出土しており、補強材として捉えられよう。焚口部には、小型の土坑

状の落込みが見られた。使用面下の施設であり、北側で検出された小ピットと併せて、竈周辺の施設として捉えたい。

床下遺構は、3基の大型の床下土坑を確認した。中央の楕円状の土坑・北側壁の小ピットと重複する土坑、南西隅の不整形の土坑を充てる。黄褐色ローム塊を主体とした埋土である。また、住居跡周辺が大きく凹み、中央が壇状に上がる形態を見せる。住居掘削時の所産であろう。床面の硬化面もこの床下の状態に沿う。

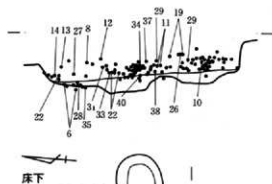
遺物は、比較的多く出土した。住居跡ほぼ全域に見られるが、竈周辺の集中が強い。補強材の遺存を要因とする。覆土上層から床直にかけて分布するが、床直上のものが多い。日常什器類も器種が揃い、本住居跡に帰属し得るものと考えられる。



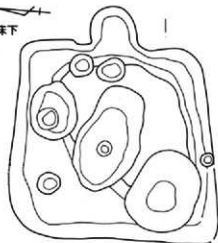
- | | | |
|---|------|----------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 均質。鈍褐色土層の斑状堆積。炭化物を含む |
| 2 | + | 均質。塊状の堆積。硬く締まる |
| 3 | + | 均質。大型の褐色土塊を含む |
| 4 | + | 均質。焼土粒・炭化物を含む |
| 5 | 鈍褐色土 | 均質でやや明るい。ローム粒を少量含む |
| 6 | + | 均質で明るい。ローム塊を多く含む |
| 7 | 黄褐色土 | ローム塊と褐色土塊の粘床土 |
| 8 | + | 大型のローム塊を主体とする。床下土埋埋土 |

覆土層

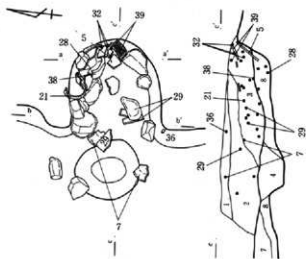
- | | | |
|---|------|----------------------|
| 1 | 鈍褐色土 | 均質。ローム粒を含む |
| 2 | + | 焼土化したローム塊を多く含む。炭化物微量 |
| 3 | 暗褐色土 | 焼土塊・炭化物を含む。下面黒色灰が堆積 |
| 4 | 鈍褐色土 | 黒色灰・焼土粒を少量含む |
| 5 | 黄褐色土 | やや鈍い色調。ローム塊を主体とする粘質土 |
| 6 | + | 大型のローム塊からなる複芯材 |
| 7 | 黄褐色土 | ローム塊と褐色土塊を含む |
| 8 | + | 小型のローム塊を主体とする |



床下



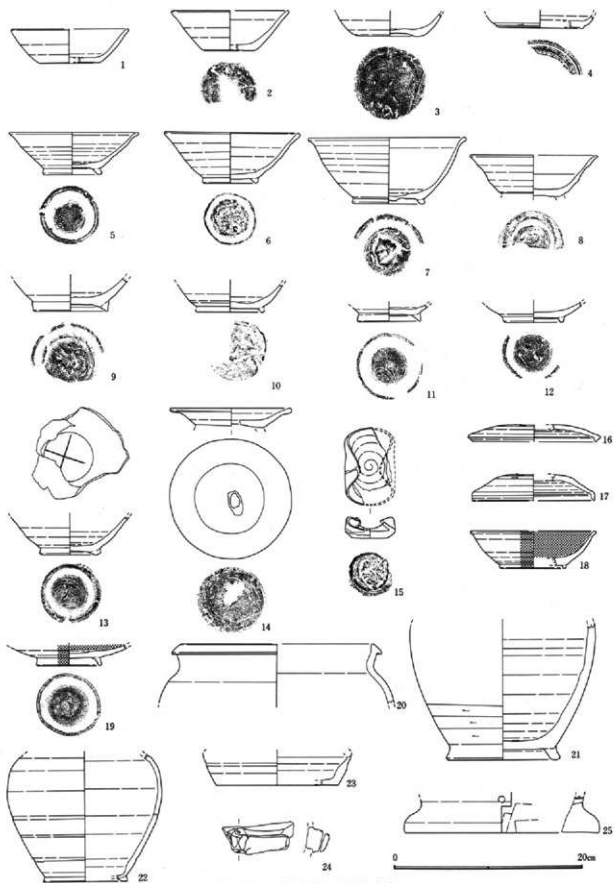
0 3 m



0 1.5 m

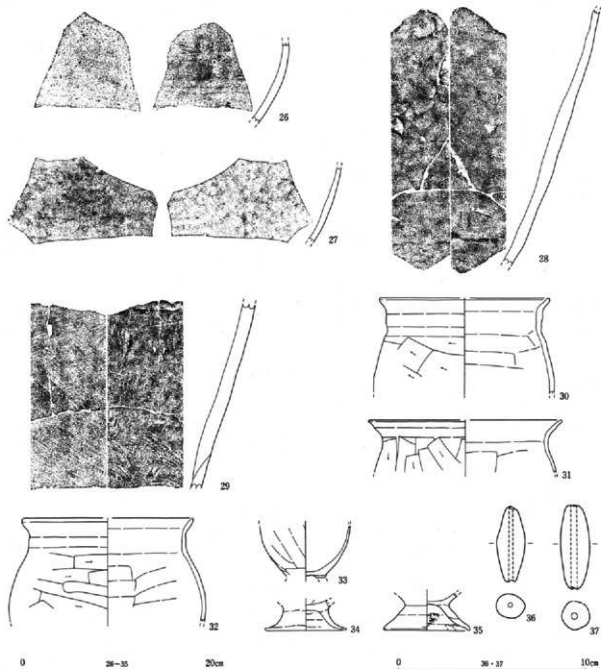
第114図 31号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物



第115図 31号住居跡出土遺物(1)

第5節 奈良・平安時代の住居跡



第116図 31号住居跡出土遺物(2)

第92表 31号住居跡計測表

位置 (南東隅)	平面形	規模(cm) 長軸×短軸×高さ	住居方位	竈方位	主な施設	主な遺物	重複遺構
CyDa-28・29	不整正方形	330×305×44	N87°E	N83°E	床下土坑	坏3 輪11 皿3 蓋2 甑2 平 板1 斐11 瓶1 羽釜1 土鋪2 瓦5	78・79住

第三章 検出された遺構と遺物

第93表 31号住居跡遺物観察表

図番号 器種	法量 (cm) ()推定値	残存率 出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④その他	特 徴 (形状・手法等)
第115図1 1 環 図版 67	口：(12.2) 高：(3.6) 底：(6.2)	約1/6 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部中位に緩やかな丸みを持たせ口縁一体部一体化し強く開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器厚薄手。
第115図2 2 環 図版 67	口：(12.2) 高：(4.2) 底：(5.3)	約1/3 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	口縁部僅かに外反するが、直線状に体部と一体化する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後無調整。器面厚減。
第115図3 3 環 図版 67	口：－ 高：－ 底：6.1	約2/3 覆土	①細 片岩粒・白色粒 ②酸化焰気味 ③灰黄色 ④須恵器	体部下手に丸みを持たせる。底部は上げ底で底面に凹凸を持つ。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後底面外縁線を加える。
第115図4 4 環 図版 67	口：－ 高：－ 底：(9.2)	底部破片 覆土	①粗 白色粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	底径広く短い高台を出す。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台削出。器側には機部に及ぶ。
第115図5 5 埴 図版 68	口：13.6 高：4.5 底：5.9	約2/3 壺内	①粗 砂礫・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部強く開く。底部は小径で高台は開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。器厚薄手。
第115図6 6 埴 図版 68	口：14.2 高：5.4 底：5.5	約2/3 床直	①粗 砂礫・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	口縁部外反し体部強く開く。底部は小径で高台は開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。器厚薄手。
第115図7 7 埴 図版 68	口：16.5 高：7.0 底：(7.2)	約4/5 壺内	①細 片岩粒・白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	身深の碗。口縁部強く外反し体部中位に丸みを持たせる。高台は短く開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。器厚薄手。
第115図8 8 埴 図版 68	口：(13.1) 高：－ 底：－	約1/3 覆土	①粗 小礫・石英 ②還元焰 ③灰黄色 ④須恵器	口縁部外反し体部下手に緩やかな丸みを持たせる。高台割落。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。外面轆轤目強い。
第115図9 9 埴 図版 68	口：－ 高：－ 底：(7.7)	約2/5 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	やや軟質。体部下手に緩やかな丸みを持つ。高台は断面三角で直立する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。器面厚減。
第115図10 10 埴 図版 68	口：－ 高：－ 底：7.2	約2/5 覆土	①粗 砂礫・片岩 ②還元焰 ③灰白色 ④須恵器	高台は僅かに残存。体部下半は緩やかな丸みを持つ。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。器厚薄手。器面厚減。
第115図11 11 埴 図版 68	口：－ 高：－ 底：(6.6)	高台部 覆土	①細 白色粒 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	高台はやや開き気味に付される。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。
第115図12 12 埴 図版 68	口：－ 高：－ 底：5.8	約1/3 覆土	①細 片岩粒・石英 ②還元焰 ③灰色 ④須恵器	体部は強く開く。高台は短く直立する。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。
第115図13 13 埴 図版 68	口：－ 高：－ 底：(5.6)	約1/3 覆土	①細 白色粒 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	体部は緩やかな丸みを持つ。高台は短く開く。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付。貼付時周縁線で。内底面に焼成後残書き「×」を刻む。
第115図14 14 埴 図版 68	口：12.5 高：－ 底：－	約4/5 床直上	①粗 白色粒・石英 ②酸化焰気味 ③浅黄色 ④須恵器	口唇部肥厚し、口縁一体部直線状に一体化し強く開く。高台割落。右回転轆轤整形。底部回転糸切り後高台貼付貼付時周縁線で。内底面に滑痕。底面中央に焼成後不整形の穿孔。